

# 人文・自然・人間科学研究

第 41 号

2019 年 3 月

## 論文

- ヘルダーリンにおける自然の合目的性  
 — カントとの関連から …………… 田野 武夫 ( 1 )
- 東アジアの教育近代化に寄与した日本人  
 — 永江正直を辿って — …………… 永江 貴子 ( 12 )
- 沈黙の言語 — トニ・モリスンの『ラヴ』の語り …………… 三井 美穂 ( 32 )
- ジョゼフ・コンラッド『西欧人の眼に』における語りの構造について …… 村瀬 暁生 ( 46 )
- チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作  
 — 一八九〇年代から一九一〇年代を中心に — (二・完) …………… 澤田 次郎 ( 1 )
- 新渡戸稲造のアメリカ観  
 — 心理的葛藤とその克服の試み — …………… 澤田 次郎 ( 25 )

## 調査報告

- 1870 年に実施された米国国勢調査 (Census)  
 — 日本人留学生情報の分析 — …………… 塩崎 智 ( 60 )

## 討論

- 京都の番組小学校の英語教育に関する一考察  
 — 田畑 (2017) の分析を中心として — …………… 保坂 芳男 ( 94 )

- 退職教員の略歴・業績 …………… 音在 謙介 (104)
- 退職教員の略歴・業績 …………… 山下 万里 (108)
- 拓殖大学研究所紀要投稿規則 …………… (112)
- 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領 …………… (114)

# ヘルダーリンにおける自然の合目的性

— カントとの関連から

田 野 武 夫

## Die Zweckmäßigkeit der Natur bei Hölderlin

— Im Zusammenhang mit Kant

Takeo TANO

### 要 旨

ヘルダーリンとのカントとの関係は、シラーの美学論構想に倣った「カントからの踏み出し」、すなわち『判断力批判』の実践部門としての美的教育論構想という側面を持っている。弟宛の書簡において、ヘルダーリンがカント的「思弁的哲学」の重要性を指摘しながらも、さらにその高次の段階として「詩文」(ポエジー)の重要性を説いている点にもその傾向を見ることができる。しかしヘルダーリンにおけるカント哲学の意義をポエジーの前段階のみに位置づけることはできない。彼は1795年のヘーゲル宛ての書簡において「カントが自然の仕組を(従ってまた運命の仕組を)、自然の合目的性と結合するしかたには、真に、彼の体系の全精神が含まれている」と述べており、自然の合目的性にカント哲学の本質を見ていた。これがヘルダーリンの後期詩作にも反映されている。例えば、カントの『永遠平和論』等に見られる自然の目的論的進行、すなわち戦争や闘争を経ての高次の平和的段階への移行は、『宥和するものよ…』や『平和の祝い』等のヘルダーリンの後期の詩作に描かれる平和への行程と本質的に一致している。また共和制への共鳴という点にも、両者の類似性を見ることができる。これらの点から、ヘルダーリンにおけるカント哲学の存在は、自然の合目的性という点において、彼の後期詩作の世界像の一端を担う重要要素であったといえる。

キーワード：ヘルダーリン、カント、自然思想

## 1. 序

ヘルダーリンとドイツ観念論との関係については、ヘーゲル、シェリングとの交友関係から論じられることが多いものの<sup>①</sup>、カントとの関係については限定的である。ヘルダーリンの書簡における関係性を紐解いてみると、ヘーゲル、シェリングとの直接的な思想的交流は実は少ない。ヘルダーリンの重要な思想や作品に関する言及については、そのほとんどが弟と友人ノイファーとごく少数の友人に対してのみなされており、シラー、

ヘーゲル、シュリングとは文学および哲学の議論は頻繁にはなされていない。これとは対照的にカントへの取り組みは、詩作の初期段階であるチュービンゲン大学神学寮時代から『ヒュペリオン』最終稿執筆期のフランクフルト時代、後期詩作期に位置するホンブルク期に至るまで継続的になされ、恒常的にヘルダーリンにとって関心の対象であった<sup>(2)</sup>。この点を踏まえ本論では、ヘルダーリンがカントの哲学のどの点に着目し、それがどのような形で詩作に反映されているかについて、その概要を提示することを目的とする。

## 2. ヘルダーリンのカントへの取り組み

チュービンゲン大学神学寮時代の1790年8月中頃に書かれた母親宛の手紙において、ヘルダーリンが本格的に哲学の勉強を開始した事実が記されている<sup>(3)</sup>。このチュービンゲン時代の讃歌群の一つ『美に寄せる讃歌』では、その冒頭部に「自然は美しい形式において具象として我々に語りかける。この符号の書を解読する能力は道徳的感情の内に付与されている」<sup>(4)</sup>という文言が掲げられている。これはカントの『判断力批判』第四十二節からヘルダーリンが独自に要約、引用したものである。この十音詩節からなるトロカイオス調の詩は1791年に書かれ、1793年にシュトイドリンが発行した『1793年版詩歌選』において発表された。

ヘルダーリンは、ここで美を仮象としてではなく、「原形態」Urgestaltとして捉えている<sup>(5)</sup>。この美の根源的存在様式はギリシアの様相を帯びており、女神ウラーニアとして語りかけられている。しかしそれは九人のミューズの女神の一人としてではなく、調和、真実、美を体現する統合的の女神として描かれている点が特徴として挙げられる。この統合的存在者は<sup>(6)</sup>、「アルカディアの姿がどこまでも自分についてきた」<sup>(7)</sup>ということばが示す通り、調和的美の楽園アルカディアのイメージを伴っており、やはり美とギリシア的空間の結びつきを見出すことができる。

同時にこの讃歌においては、「原形態」としての「美」に近づこうとする「大胆な軌道」die kühne Bahn や「大胆な目的に選ばれた群れ」Schaar zum künem Ziel erkoren(sic!) など、目的論の様相も帯びている。シュトラックは、美的判断に目的論を分け与えているこの詩を例として、ヘルダーリンの作品を詩作された目的論とも主張している<sup>(8)</sup>。

『美に寄せる讃歌』は1791年頃の作と推定される。『判断力批判』の刊行は1790年3月頃であり、ヘルダーリンの哲学への本格的な取り組みは1790年8月であるので、カント受容および哲学全般への取り組みの初期段階の作品といえよう。同詩の第一稿ではカントからの引用はなされていないことから、作品の形成過程においてカントへの取り

組みも同時に行われていたと考えられる。そのため『美に寄せる讃歌』の執筆時に、ヘルダーリンのカント受容が相当程度進んでいたと断じるのは困難であろう。例えば、『判断力批判』の第二部「目的論的判断力の批判」を彼がどの程度吸収し、同詩に反映したのかは判断しがたい。ヘルダーリンは、後のフランクフルト時代の1797年1月2日に弟に宛てた書簡において、外的要因によってもたらされる心の窮乏を防ぐ手段として、「ただ活動的であること」、「何かの材料で自分を疲れさせる」ことによって慰めを見出している旨を伝えている。彼はその慰めを見出す手段としてカントに取り組んだ事実を挙げ、「こういう気分で、僕はかつてカントを読んだ。彼の精神は、僕にはまだ遠いものだった」と述べている<sup>(9)</sup>。このことから、カントへの取り組みの初期段階は、彼にとって十分なものではなかったと推察される。『美に寄せる讃歌』における『判断力批判』からの引用は、フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービの小説『アルヴィル』が掲げていた引用と同じ箇所である<sup>(10)</sup>。ヘルダーリンがチュービンゲン・シュティフト時代にヘーゲルらとともにヤコービの『スピノザ書簡』に熱心に取り組んでおり、むしろこのヤコービによる引用がヘルダーリンのこの詩に強い影響を与えたとも考えられよう。

ヘルダーリンがチュービンゲン時代の讃歌群以降も継続的にカントに取り組んでいる事実を書簡から知ることができる。彼はチュービンゲン大学卒業後の1794年に義弟のプロイリンにあてた書簡において「現在はカントの哲学とギリシアのものだけを勉強している」と報告し<sup>(11)</sup>、同年7月10日付のヘーゲル宛ての書簡でも「カントとギリシアのものが、ほとんど僕の唯一の読書だ」と述べている<sup>(12)</sup>。具体的にカントのどの著作に取り組んだのかは明確ではないものの、この取り組みの過程で自らの詩学とカントの位置づけが徐々に明確になってくる。

### 3. 美学論構想におけるカントの位置づけ

美的領域でのカントへの関心は、カント哲学への直接的な取り組みと同時に、同郷の師匠的存在であったシラーの影響という側面が大きい。ヘルダーリンのカントへの取り組みは、シラーがカント哲学に取り組みながら独自の美学論を構想していた時期とほぼ同時進行で行われていたといえる。

1794年に最初の家庭教師の赴任地であるヴァルターズハウゼンから弟に宛てた書簡の中で、ヘルダーリンは目下美的理念についての論文に取りかかっている旨の報告を行っている。この美的理念に関する論文は現存しておらず、内容の詳細を知ることはいないものの、その概要について彼は言及している。彼はこの美学論文をプラトンの『パイドロス』の注釈とみなしうるものとし、美と崇高の分析を主たる内容とすると述べてい

る。またこれによって「カントの分析が簡素化されるのと同時に、他の面では多面化される」とも主張する。彼はさらに、このカントの分析の簡素化と多面化をシラーがすでに優美と品位についての論文において部分的に試みているものの、「カントの限界からの踏み出し方が足りない」との見解を述べる<sup>(13)</sup>。このことばからも解る通り、ヘルダーリンのカント受容は、シラーの美学論文への取り組みを通して行われている。

ヘルダーリンは、1795年9月4日にシラーに宛てた書簡において、絶対的自我における主観と客観の統一は、美学的かつ知的直観において可能であり、理論的には無限の近似によって可能なものという内容を趣旨とする哲学論文の構想を述べている。さらに「またこの思惟の体系を現実化するには、行動の体系 (ein System des Handelns) と同様に不滅性 (Unsterblichkeit) が必要になる」とも述べている<sup>(14)</sup>。

このシラーを経由しての美学論への取り組みは、その後イエーナにおけるフィヒテ哲学の圧倒的な影響を経由した後も維持される。1796年の2月24日にフランクフルトから友人ニートハンマーに宛てた書簡において、「実践的理性」praktische Vernunftの助けを借りずに理論的に、かつ知的直観において主観と客観の抗争解消を可能なものとする原理を探求する哲学書簡の構想について言及している。ヘルダーリンはこの構想中の論考を、シラーの哲学書簡のタイトルである『人間の美的教育について』と近似した『人間の美的教育についての新書簡』と名付けている<sup>(15)</sup>。

ヘルダーリンはこのニートハンマー宛の書簡において、主観と客観という二項対立を「自分自身と世界」Selbst und die Welt、「理性と啓示」Vernunft und Offenbarungと呼んでいる。すなわち「主観」das Subjektとは理性的存在の自己であり、「客観」das Objektは啓示という宗教性を帯びた世界として捉えられている。事実ヘルダーリンは、この哲学書簡において哲学からポエジーと宗教への論の展開を示唆している。実践的理性の助けを借りない美的教育の哲学書簡を構想していることから、カントの『実践理性批判』の代わりに「美的感覚」ästhetischer Sinnを論の主軸においたシラー的な「カントの限界からの踏み出し」をヘルダーリンなりに模索していた事実がうかがえよう<sup>(16)</sup>。

ヘルダーリンのヘーゲル宛ての書簡で示されたカント理解、および美的ポエジーの優位性への形而上学的取り組みは、1795年の書簡において顕著に見出されるが、小説『ヒュペリオン』を経て、エムペドクレス悲劇、後期詩作へ移行する段階に当たる1799年1月1日の弟宛書簡にも同様の姿勢を見出すことができる。ヘルダーリンはこの書簡において「ドイツの民族的性格」について言及し、「ドイツ人の最も一般的な美德と欠点」は「非常に偏狭なやりくり」に集約されると批判する。近代の諸国民に一般的に見られる現象、すなわち「公共の名誉や公共の財産」に対する無関心は、とりわけドイツにおいて甚だしいとも述べている。

ここでヘルダーリンは、「ドイツ人の目を開かねばならない」と主張し、三つの手段を段階的に指摘する。その第一は「思弁の哲学」であり、「カントは、ドイツ人をエジプト的弛緩から、自分の思弁の自由で孤独な荒野に導き、神聖な山から強力な法則をもたらす、わが国のモーゼ」と主張する。ヘルダーリンはこれに加えて、「政治的な読書」の必要性を説くが、「ドイツ民族の教化」においてはこれだけでは十分ではなく、最重要要素として芸術、とりわけ「詩文」(ポエジー)の必要性を説く。なぜなら「詩文」は、人々を「ひとつの生きた、幾千もの枝を持った親密な全体へと統一させる」ことができるからというのが彼の主張である<sup>(17)</sup>。

ヘルダーリンは、哲学的政治学的教養をドイツ人の教化には必要不可欠なものとしながらもさらに高次の段階として「詩文」を強調している点は、カント哲学の乗り越えとしてのシラーの美学論を踏襲した、詩文芸至上主義の姿勢を保持しているといえよう。しかしながら、ヘルダーリンの特に後期詩作においては、「詩文」の前段階としての哲学という枠には収まらない、詩に投影される世界像の基本的枠組みを規定する重要要素もまた見出すことができる。それを以下に論じる。

#### 4. 自然の合目的性

ヘルダーリンは、1795年1月26日の日付を持つ、ヘーゲルに宛てた書簡の中で、次のように述べている。

摂理の概念を、君は、カントの目的論と全く平行してとり扱っている。カントが自然の仕組みを(従ってまた運命の仕組みを)、自然の合目的性(Zwekmäßigkeit)と結合するしかたには、真に、彼の体系の全精神が含まれていると、ぼくは思う。それは、もちろん、彼があらゆる二律背反を調停するしかたと同じものだ。フィヒテは、二律背反に関しては、非常に注目すべき思想を抱いている。しかし、それについては、別の機会に書きたい<sup>(18)</sup>。

ヘルダーリンがここで「自然の仕組み」を「運命の仕組み」と同義として捉え、それを「自然の合目的性」と結合させているところに、カントの体系の全精神が含まれていると述べている。このことからヘルダーリンがカントの哲学の本質を自然の合目的性に見ていた事実が伺える。

先に述べたように、ヘルダーリンは1799年元日の弟へ宛てた書簡において「ドイツの民族的性格」について言及し、ドイツ人教化の手段として「思弁の哲学」、「政治的な読書」、「詩文(ポエジー)」の三つを取り上げ、「詩文」を究極の段階に位置づけた。同

時に、「詩文」の機能として提示されていた「親密な関連」の中へ暴力をもって侵入する「暗黒の世界」に対しては、「ペンを投げ捨て」、「神の名のもとに進軍するのだ」という過激な表現で書簡を締めくくっている。

ヘルダーリンはポエジーを民衆の教化の最終段階としていたのにもかかわらず、それを遺棄し、直接行動をも厭わない急進的姿勢には、彼の強い革命志向が反映されているといえよう。同時期に構想、執筆されたエムペドクレス悲劇の「王の時代は終わった」という言説が示す通り、エムペドクレスの死には、ドイツ封建体制の終焉とフランス革命に倣ったシュヴァーベン共和国設立への渴望という政治的要素が背景にあった。この悲劇では詩人エムペドクレスの自然との合一性が、詩文芸と共同体の融和としてではなく、主人公のエトナ山投身自殺によって体现されることによって示される。この一つの解体は、ヘルダーリンにおいて再生と一体化したものとして構想される。論文『滅びにおける生成』では解体は、創造性と結びつくものとして把握され、小説『ヒュペーリオン』においてもディオティーマによる永遠の生を得るための死が扱われている。

この解体と再生の構想は、作品や論文のみならず、日常レヴェルでも意識されていた。1797年1月10日に書かれたエーベル宛の書簡において、彼よりフランス革命における残虐行為の報告を得たうえで、解体からは死滅ではなく、新しい形成が導き出されるとし、矛盾と対立が支配する現在の混とんとした世界から「今までのいっさいを恥じ入らせるような信念や考え方の革命」が生じると述べ、またこれにドイツは大きく貢献できるとも主張する。その際「破廉恥な摸倣癖はドイツ人に多くの災いをもたらした」ものの「ドイツ人は哲学的になるにしたがって、自立的になっていく」とも主張し<sup>(49)</sup>、カントを想起させる哲学の機能が、解体と再生の促進的要素ととらえられていることが判る。

この革命志向はヘルダーリンの作品や書簡の様々な箇所において自然の機能として把握される。ここでは自然の持つ二つの要素を見出すことができる。一つはフランス革命と自然との親和性であり、またドイツにおける革命の挫折とその後の文化的再生のプロセスとしての自然の機能である。

ヘルダーリンは、革命や抗争を経ての平和へ至るプロセスを自然の目的論的機能として把握している。これは思念上の構想ではなく、自然との実体的経験からも導き出されている。彼は、詩作の晩年期に当たる1801年2月にハウプトヴィルにおいて、ボルドーの家庭教師の職を仲介した友人クリスティアーン・ランダウエルに宛てて書簡を送っている。これはホーエンリンデンにおけるオーストリアとフランス革命軍との戦いでフランス側が勝利した後、リュネヴィルの和議が締結されるのとほぼ同時期に書かれた書簡であるが、そこでヘルダーリンは、「強制法やその執行者を持つことは、いたるところで必要悪である」とし、「戦争と革命とともに道徳的北風すなわち妬みの精神もまた収

まるのだ」と述べる<sup>(20)</sup>。ヘルダーリンが、闘争の原因となる強制社会を安寧への必然的要素とみなしている点は注目に値しよう。

また同年の3月に同じくランダウエルに宛てた手紙では、スイスのハウプトヴィルにおけるアルプスの光景を背景に自らの自然と平和へのまなざしに言及し、喜ばしき出来事として再びリュネヴィルの和議について言及している。そこでヘルダーリンは戦争後の平和の本質について、「エゴイズムのどんな形態も、愛と善の聖なる支配に屈し」、「共同の霊がいきいの上に、いきいの中に行き渡る」と述べ、「ドイツのころはそのような気候の中で、すなわちこの新しい平和の祝福の下でよりいっそう高揚し、成長する自然のようになりに、ひそかな幅広い力を展開させるであろう」と述べる<sup>(21)</sup>。

この言説から、ヘルダーリンが述べる平和のあり方が、戦争という経緯を経て平和に至る「成長する自然」というプロセスとして、すなわち自然の目的論的展開と同質のものとして把握されていることが判る。「共同の霊」Gemeingeistは「ドイツのころ」das deutsche Herzと同質のものとして捉えられているが、これはチュービンゲン・シュティフト時代の『ギリシアの精霊に寄せる讃歌』等から頻繁にみられる「精霊」、「守護神」Geniusと同じ用法であり、それは一民族・共同体が有する共通精神であり、「自然」の同義語として用いられている。この共通精神は竖琴と歌によるオルフェウスやホメロスといった形象、すなわち詩人によって言語化される<sup>(22)</sup>。

『ギリシアの精霊に寄せる讃歌』で描かれる理想の国家は「愛」の上に建てられる。ベックも述べているように、この場合の「愛」は、ギリシアの精霊、ゲーニウスとして、革命的「兄弟愛」Brüderlichkeitと理解される<sup>(23)</sup>。チュービンゲン讃歌群が詩作された1790年以降のヘルダーリンの詩作ではギリシアとフランス革命という二つの潮流が融合する。これが、後期詩作においてますます自然の目的論的性格を帯びてくることになる。『平和の祝い』、『唯一者』、『パトモス』といった詩作後期のいわゆる「キリスト讃歌群」<sup>(24)</sup>では、歴史は直線的目的論的（teleologisch）に進行する<sup>(25)</sup>。

ヘルダーリンの書簡や作品に見られる自然と革命、平和といった要素は、カントの自然の目的論の一要素に一致点を見出すことができる。ポルトは、ヘルダーリンの書簡や後期作品にみられるように祖国ドイツが、国家主義的、あるいは辺境的な一地域を指すものではなく、宇宙論的普遍主義の領域に発展しているのは、特にカントの『永遠平和論』の影響を受けたのではないかと推察しているのは、興味深い指摘である<sup>(26)</sup>。

カントの恒久平和論とヘルダーリンの後期詩作の類似性は、自然の目的論的性質と戦争及び闘争、また共和制への共鳴に見ることができる。カントの『永遠平和論』における一つの論理的支柱は「自然」の合目的機能といえる。カントはこれを「不和を通じて人間の意志に逆らっても融和を回復させる合目的性」とし、この合目的性を「運命」や「摂理」とも呼んでいる<sup>(27)</sup>。カントが自然の合目的性の中に「不和」という要素を加味

しているという点は、注目に値する。カントは、「自然」による平和の保証は戦争という過程を経てなされるものと説き、「人間が生活すべきという義務要請」を達成するために「自然」は「戦争」を選んだと主張する<sup>(28)</sup>。またカントは専制主義を否定しつつ<sup>(29)</sup>、「国家における市民的体制は共和的でなければならない」<sup>(30)</sup>とし、「人間の法に完全に適合している唯一の体制は、共和的体制であるが、しかしこの体制はまた、樹立することが、さらにはそれを維持することが、もっとも困難な体制である」とも述べている<sup>(31)</sup>。この共和国志向もヘルダーリンと一致し、さらにそれが困難な体制という主張も、ヘルダーリンの強い共和国志向とそれに併存する諦観というあり方と一致している。戦争や革命を経ての普遍的な世界公民の状態に至る過程は自然の意図としての世界歴史であり、公民的体制は「共和的体制」以外のものではありえないというのが、カントの主張である<sup>(32)</sup>。

ヘルダーリンは1798年から1799年のラシュタット会議に強い関心を示していた。その後まもなく王政を否定するエムペドクレス悲劇が執筆され、またカントを「民衆を導くモーゼ」と書簡で述べることになる。1800年終わりに書かれたと推察される詩『あたかも祝いの日の明けゆくとき…』*Wie wenn am Feiertage...*では、まどろみから目覚める「自然」の姿が描かれている。この「自然」は、汎神論的に「万物に遍在する」性質を帯びているのと同時に、人類の文化形成の原理としての側面も持ち合わせている。「西洋と東洋の神々のさらに上に立つ」「力強くも神々しい自然」が眠りから目覚める情景において、フランス革命とその戦乱を想起させる「新しい徴」、 「高貴な事業」を経て「歌」が生じ、自然の精神化もしくは詩人的記憶の内面化<sup>(33)</sup>、すなわち平和への目的論的軌道における詩人の存在形式が描かれる。また西洋と東洋を融合させる自然とはヘルダーリンが後期賛歌群で、しばしば展開している東方志向とも関連している。すなわち、西洋の根源である東方から下流を伝ってその文化的根源が西洋へと至る文化移動的視点であり、『ドナウの源で』等においてそれは描かれている<sup>(34)</sup>。ここではヘルダーの人類史哲学とヘルダーリンがヘーゲル宛ての書簡で示したカントの哲学の根幹である自然の合目的性が融和的に共存している。

1801年2月のリュネヴィルの和議を契機として起草されたと推察される未完の三つの稿から成る詩『宥和する者よ…』*Versöhnender...*では、「かつて信じられることがなかった」「至高の平和」*seeliger Friede*<sup>(35)</sup>の現前が詠われている。この「平和」は、「神」や「自然」、 「天上の父」とも呼ばれ、その神性が人間に触れると人間からの反逆が起こり、この反逆を経て人間に神性が所有される行程が繰り返し描かれる。この人間の抵抗を神は「微笑んで」見ていることから<sup>(36)</sup>、人間による騒乱は自然がもたらす平和への行程の中に前提として内包されている事実が伺える。

『宥和するものよ…』は未完の草稿であり、その完成版として1801年もしくは2年に

成立したと推定される『平和の祝い』である。この詩においても、祝祭の場を展開する主体が冒頭部において「自然」とされている。この「母なる自然」は、最終連において再び顔を出し、その子供らを自然の「敵が奪い」去ったものの、同時に「自然」自身もその敵を受け入れつつ、「様々なものを育て、様々なものを葬り去った」と述べる。これは平和的「自然」に反逆する人間の精神的・物理的営為と解することができるが、「自然」が「それを熟知しながら放任している」としているところに、自然がもたらす世界の行程に闘争や戦争などの騒乱が内包されている事実が伺える<sup>(37)</sup>。これらリュネヴィルの和議を巡る一連の詩には、封建的国家の集合体である神聖ローマ帝国の終焉と革命軍との抗争の終止符、そして新たな歴史的展開を自然の合目的性ととらえる詩人のまなざしをみるのが可能であろう。

## 5. 結 語

ヘルダーリンは、哲学のより高次の段階に美的ポエジーを見ていたが、カントの存在は決してポエジーの前段階としてではなく、彼の世界観の基本構図を規定する重要要素として存在した。そのことはこれまで見てきたように彼の多くの書簡や作品において確認することができる。

ヘルダーリンの後期詩作は、60年代にベルトーの研究によって明らかとなったように、共和的国家形態への強い志向が内包されている<sup>(38)</sup>。本論でも言及したようにカントも自然の合目的性における国家形態の一つとして共和制を挙げている。ヘルダーリンは、ドイツにおける共和制樹立への可能性が失われたのち、後進的なドイツの国民性へ批判的なまなざしを向け、その教化へのプロセスとして「政治的読書」、「哲学的読書」、「ポエジー」の三つの段階を想定した。その際彼は、ポエジーによる教化を究極の段階として設定している。これは彼がシラーに倣った「カントからの踏み出し」、すなわち『判断力批判』の実践部門としての美的教育論構想と一致する。

しかしながら、彼の後期の詩作にはカントの自然思想が色濃く反映しており、その哲学をポエジーの前段階のみに位置づけることはできない。ヘルダーリンが、例えばカント『普遍史の理念』における人類の自然素質の完全な発展から『永遠平和論』における道徳実践理性による法義務の遂行への歴史記述の変化<sup>(39)</sup>を厳密に分析した痕跡を見出すのは困難にしても、戦争や闘争を経て高次の平和的段階へと進む目的論的進行為、『宥和するものよ…』や『平和の祝い』等の後期の詩作において、自然がもたらす行程として投影されている点に、カントの平和論との同質性を顕著に認めることができる。

より広い視座から見れば、ヘルダーリンとカントが18世紀のドイツ文学の敬虔主義(Pietismus)を文化的の共通基盤していることも両者の類似性の一因として挙げられよ

う。ヘルダーリンも入手、熟読したと推察されるカントの『たんなる理性の限界内の宗教』において、カントは「哲学的千年至福説というのは、世界共和国としての国際連邦にもとづく永遠平和の状態を願うもの」と述べている<sup>(40)</sup>。「千年至福説」は言うまでもなく敬虔主義の主要概念であり、シュヴァーベン・ピエティスムスの創始者ベンゲルやその弟子エーティンガーは、「千年至福説」(ヒリアスムス)を中心に終末論を展開し、黙示録を聖書解釈の中心に置いていた。福音史家ヨハネがネロ帝の迫害を逃れて逗留し、黙示録を書いたとされる島を表題とする『パトモス』(1803年)においても同様に「終末」、「終わり」das Endeへの指向性が詩の基底となっている。敬虔主義のヒリアスムスは、地上で理想郷は実現しないと考える古典的ユートピア思想とは異なり、時代の終わりに実際に理想郷が実現すると考える終末思想であり、その理想郷は「平和の国」Reich des Friedensという形態を取る<sup>(41)</sup>。『平和の祝い』もこの特徴が強く打ち出されているといえよう。カントの終末論と敬虔主義の主要人物の一人シュペーターの終末論との近似性を指摘する研究などからも<sup>(42)</sup>、ヘルダーリンとカントの文化的基盤の共通性を指摘することはできよう。しかしこの点についてはより詳細な考察が必要であり、別稿を待ちたい。

#### 《追記》

本論文は、平成29年度拓殖大学人文研究所研究助成の成果発表として執筆したものである。

#### 《注》

- (1) ヤメ他『ヘーゲル、ヘルダーリンとその仲間 ドイツ精神史におけるホンブルク』、久保陽一訳、公論社、1985年参照。
- (2) 拙論『ヘルダーリンの書簡分析——作品と交流範囲の関係性について』(「拓殖大学論集人文・自然・人間科学研究」第35号、1-20頁)参照。
- (3) Vgl. Hölderlin. Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Hrsg. v. Friedrich Beißner, Stuttgart 1946ff. (略記 StA) Bd. 6, S. 470. (引用部の翻訳については、『ヘルダーリン全集』(手塚富雄他訳、河出書房新社、1969年)を主に用い、適宜改訳を行っている。)
- (4) StA1, S. 152.
- (5) Ebd.
- (6) Ebd., S. 457.
- (7) Ebd., S. 153.
- (8) Vgl. Strack, Friedrich: Ästhetik und Freiheit Hölderlins Idee von Schönheit, Sittlichkeit und Geschichte in der Frühzeit, Tübingen 1976, S. 14.
- (9) Vgl. StA6, S. 254.
- (10) Vgl. Strack, a.a.O., S. 3. シュトラックは、バックマンがすでに1930年にこの事実を指摘している旨を報告している。
- (11) Vgl. StA6, S. 120.
- (12) Vgl. ebd., S. 128.
- (13) Vgl. ebd., S. 137.

- (14) Vgl. ebd., S. 181.
- (15) Vgl. Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. v. Jochen Schmidt, 3 Bde., Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a.M. 1992ff. (略記 SWB) Bd. 3, S. 841. シラーはこの書簡の一年前の 1795 年に自らが主宰する雑誌「ホーレン」の第一巻および第二巻で発表している。
- (16) Ebd., S. 842.
- (17) Vgl. StA6, S. 302ff.
- (18) Ebd., S. 156. Zweckmäßigkeit の綴りは、全集における表記の通りである。またフィヒテとの関係の詳細については、瀬戸一夫『カントからヘルダーリンへ——ドイツ近代思想の輝きと翳り』（東北大学出版会，2014 年）125-192 頁を参照。
- (19) Vgl. ebd., S. 229f.
- (20) Vgl. ebd., S. 417.
- (21) Vgl. ebd., S. 407.
- (22) Vgl. StA1, S. 126.
- (23) Vgl. Beck, Adolf: Hölderlins Weg zu Deutschland. Stuttgart 1982, S. 24.
- (24) Stoll, Robert Thomas: Hölderlin Christushymnen. Basel 1952.
- (25) SWB1, S. 498.
- (26) Vgl. Port, Ulrich: „Die Schönheit der Natur erbeuten“: Problemgeschichtliche Untersuchungen zum ästhetischen Modell von Hölderlins „Hyperion“, Würzburg Königshausen und Neumann 1996, S. 174.
- (27) カント『永遠平和のために』宇都宮芳明訳，岩波文庫，1990 年，54 頁。
- (28) 同 62 頁。
- (29) 同 69 頁。
- (30) 同 29 頁。
- (31) 同 66 頁。
- (32) 山本達「カントの『自然の合目的性』」（『福井医科大学一般教育紀要』第 10 号，1990 年）29-30 頁。
- (33) Vgl. Schmidt, Jochen: Hölderlins idealistischer Dichtungsbegriff in der poetologischen Tradition des 18. Jahrhunderts. In: HJb 22, 1980/1981, S. 120.
- (34) 拙論「自然としてのアジア——ヘルダーリンの後期詩作における根源志向の変遷」（長崎県立大学論集）第 37 巻第 4 号，2004 年，35-61 頁）参照。
- (35) StA2, S. 130.
- (36) Ebd., S. 135.
- (37) SWB1, S. 343.
- (38) Vgl. Bertaux, Pierre: Hölderlin und Französische Revolution. Frankfurt 1969.
- (39) 犬竹正幸「カントの歴史哲学の批判哲学的意義」（『人文・自然・人間科学研究』(23)，2010 年）54 頁。
- (40) カント『たんなる理性の限界内の宗教』（北岡武司訳『カント全集 10』，岩波書店，2000 年）45 頁。
- (41) Vgl. Schmidt, Jochen: Hölderlins geschichtsphilosophische Hymnen »Friedensfeier« — »Der Einzige« — »Patmos«. Darmstadt 1990, S. 87.
- (42) 山下和也『カントと敬虔主義——カント哲学とシュペーナー神学の比較——』，晃洋書房，2016 年，209 頁。

(原稿受付 2018 年 10 月 30 日)

# 東アジアの教育近代化に寄与した日本人

— 永江正直を辿って —

永江 貴子

Japanese modernizers of East Asian education:

Following Masanao NAGAE

Takako NAGAE

## 要 旨

20世紀初頭、多くの日本人が中国大陸にて、学校教育等の分野で盛んに活動していたという。では、このように招聘された日本人は、どのような経歴のある人物が如何なる経緯で中国大陸に渡ったのであろうか。本稿では、中国近代教育の視点から永江正直に焦点を当て、如何なる経緯により中国大陸に渡り、大陸での活動及びその後の人生ついて調査した。その結果、東京師範学校初等中学師範学科卒業後、師範学校教員として各地を転々とし、その間に『女子教育論』を著した。兵庫県高等女学校校長時代に、教科書疑獄事件により退職を余儀なくされ、中国大陸に渡り、明德学堂や南京の師範学堂で教授した。その後、日本に帰国し、旧制の私立中学校を転々とし主に理化学（物理化学）を教授したことがわかった。永江正直は『女子教育論』を著した点、孫文と並び辛亥革命の領袖として知られる黄興と同時期に清国の明德学堂で教授した点で、女子教育や中国近代教育などの研究者によって取り上げられてきた。その足跡を辿った本研究により、清国に雇用されたいわゆる日本人教習の一端が明らかになる。

キーワード：日本人教習、明德学堂、中国近代教育、教科書疑獄事件

## 0. はじめに

湖南省長沙に明德学堂という学校がある。孫文と並ぶ辛亥革命の領袖と知られた黄興が教員をしていたことで有名である。1904年、当該学校にて日本人から永江正直と堀井覚太郎という教員を招聘し理科博物専科を開設したことが、『明德学堂文牘彙存』に記されている。

その永江正直は、1892年、東京府高等女学校教諭時代に『女子教育論』を著している。本書は銭单士厘により中国語に訳され、当時、『教育世界』に1902年12月から

1903年1月に連載され、中国の近代教育に影響を与えたともいえる。それが故、女子教育の研究者だけではなく、特に中国人研究者でこの永江正直を取り上げる例が散見される。

阿部・蔭山・稲葉（1982）によると、20世紀初頭は中国大陸から1万人近い留学生が来日し日本で学んでいたが、一方で多くの日本人が学務顧問あるいは教師として大陸に招かれ、教育行政や学校教育の各分野で盛んに活動していたそうだ。彼らは「日本教習」あるいは「日本人教習」と呼ばれ、最盛期に招かれた者だけでも数百人に達し、中国教育史上「日本教習時代」とさえ呼ばれる一時期を画したそうだ。では一体、日本人教習と呼ばれ中国大陸に招かれた日本人は、どのような経歴を持ち、如何なる経緯で大陸に渡ったのであろうか。

本稿では永江正直について氏の残した資料<sup>①</sup>を元に、清国に招聘された教員の足跡を明らかにすることを目的とする。

## 1. 研究の背景

### 1-1. 先行研究

永江正直について言及がある先行研究について、中国の近代教育の視点から書かれた研究について取り上げると、まず韓韡（2014）では、成瀬仁蔵著『女子教育』と永江正直著『女子教育論』の中国語翻訳版を取り上げ、中国の女子教育に「徳育・知育・体育・美育」の概念が導入されたことについて考察している。日本女子大学（日本女子大学校）の創設者でもある成瀬仁蔵についての生まれ、経歴について数ページを割いて詳細に述べている。一方、永江正直については東京府高等女学校時代に『女子教育論』が著されたと触れ、「永江正直の人物像やその著作に言及する資料は極めて少ない。『女子教育論』を著した当時、東京府立第一高等女学校の校長となっていること、また1904年に中国湖南省の明德学校長胡元倓の招請で同校の博物科目の教員を務めたことなどわずかな経歴が知られるだけである」との記述にのみ止まる。

また、清末に中国語に訳された日本の「女子教育」について書かれた書を取り上げた黄（2007）は、女子教育について著作がある成瀬仁蔵と比較しながら永江正直に関して次のように触れている。

永江正直《女子教育論》之出版发行，在明治二十五年（1892），早于成瀬仁蔵同名著作。但永江正直不如成瀬声明显著，据目前笔者所找到的资料，明治三十四年（1901）二月十五日，兵库县第一神戸高等女学校开校时，永江正直为首任校长。又1904年，他曾应长沙明德学校校长胡元倓之聘，担任该校博物课教员<sup>②</sup>。

(永江正直による『女子教育論』の出版は明治25年(1892)、成瀬仁蔵による同名の著作物よりも早い。しかし永江正直の名は成瀬ほど有名ではない。現在筆者が発見した資料によると、明治34年(1901)2月15日、兵庫県第一高等女学校開設時に永江正直は初代校長に任命された。また1904年、かつて長沙・明德学校校長である胡元倓の招聘により、当校の博物学の教員として担当した)

以上より、永江正直はその著した『女子教育論』の研究で触れられることが多いが、共に取り上げられる成瀬仁蔵ほど経歴が明らかではない。また、黄(2007)では永江正直が博物学の教員であると述べているが、その典拠とする饒(1987)の記述では“1904年春、又因开设理化和博物课的需要，他设法聘请日本人掘井觉太郎和永江正直分别担任这两门课程教员。”(1904年春、また理化学と博物学を開設する必要のため、日本人の掘井覚太郎と永江正直の招聘策を講じ、それぞれこの二つの課程の教員として担当した)とある。つまり、永江正直が理化学ではなく博物学を担当したと断定できない。

更に明德学堂時代について、雷(2009)では、明德学堂の辛亥革命への貢献という点から、次のように取り上げている。

1904年春初、黄兴和刘揆一雪夜步行，在湘潭一擘处山洞与哥老会著名首领马福益会晤，商讨起义大计。黄兴亲自在明德学堂理化实验室请日本教师永江正直，掘井觉太郎协助试制炸弹，准备起义。但是，这次酝酿数月的长沙起义，不慎事机泄密而失败，黄兴及一批革命志士得胡元倓，龙绶瑞等帮助而脱逃<sup>3)</sup>。

(1904年春の初め、黄興と劉揆はある雪の夜に徒歩で行き、湘潭のある洞窟で哥老会の著名な首領である馬福益と会談し、武装蜂起の大計を協議した。黄興は自ら明德学堂の理科実験室で日本から招いた教師である永江正直と掘井覚太郎の協力のもと、爆弾を試作し武装蜂起に備えた。しかし構想数ヶ月の長沙における武装蜂起は、不注意にも機密事項が漏れて失敗し、黄興及び一部の革命志士は胡元倓や龍絨の援助により逃げ出した)

## 1-2. 先行研究のまとめと本稿の構成

中国の近代教育の研究者から、永江正直について取り上げられることが多い。その言及がある先行研究を整理すると、近代の女子教育研究者から共に研究対象として挙げられる成瀬仁蔵と比較すると経歴は不明であり、更に女子教育の本を書きながらも、湖南省長沙へ渡り明德学堂で教員になったようだ。そこで、孫文と共に辛亥革命でその名が挙がる黄興を手助けし、爆弾の試作をしたという記述までもあるが、その後について「資料が乏しく不明である」と言及されている。

なお、次の資料1は永江正直自筆の履歴書<sup>(4)</sup>である。



資料1 自筆の履歴書

その職歴には、先行研究で取り上げられた「東京府高等女学校」、「兵庫県第一高等女学校」等が見られる。更に、ここには「明治37年8月 清国湖南省明德学堂ノ聘ニ應ジ物理化学を教授ス」と記述がある。明治37年（1904）に湖南省の明德学堂に招聘されたというのは確かであるが、物理化学を教授していたと読める。

履歴書を辿ることで、先行研究では不明とされていた永江正直の経歴を追うことは可能だ。ただ、この履歴書は大正九年の後ろに大正五年があるといった誤記が見られる。更に、師範学校の教員をしながら時には著作物を出版していた者が、急に休職し、如何なる理由で当時の清国に渡ったのであるか。また清国で教授していた科目は、博物学か理化学かについて異同が見られるため、詳しく調査する必要がある。

本稿では資料で挙げた履歴書と現存する他の資料と対照させながら、永江正直について、その不明とされた経歴を述べ、どのような教員が清国に招聘されたのか明らかにする。その手順としては、永江正直の学生時代、師範学校・高等学校教諭時代、教諭退職、清国に招聘された教員時代、日本での私立中学校教員時代といった5つの時期に分けて記述する。

## 2. 学生時代

永江正直は文久2年（1862）11月12日、伊予松山藩（愛媛県松山市）に生まれた。その足跡は、小学校時代から確認される。永江正直と共に学んだと推測される永江為正

による『四十年前之恩師草間先生』（1922年発行）において、図1、図2に挙げた写真等、詳細な記述がある。以下、同書にしたがって述べる。

伊予松山藩の藩校は、1828年設立の明教館で知られている。明治5年（1872）頒布の「学制」により、松山は市内を六小学区に分け、一区に一小学校を設置した。その第一小学校（勝山学校）では、二番町の稲川氏邸と旧藩学校（明教館）の跡を校舎とした。明治7年（1874）、小学教則による伝習所が設けられた。この伝習所は大阪師範学校卒業の安岡珍麿が指導に当たった。それに伴い勝山学校も伝習所の附属小学校とされ、年齢14歳以下の児童は第1席から第5席の5級に分かれ、その1席<sup>⑤</sup>は安岡が教鞭を執ったという。この第1席は男女合わせて32名で、ここに永江正直が名を連ねている<sup>⑥</sup>。この勝山学校に入った者は、時期の異なりがあるが明教館の英学校に転入したという。

明治8年（1875）、慶應義塾を卒業した草間時福が招聘され、愛媛県英学所<sup>⑦</sup>を新設した。明治9年（1876）12月に愛媛県変則中学校で実施された等級試験により少年科の第五級に永江正直の名がある（14歳）<sup>⑧</sup>。また図1は明治11年（1878）に草間宅で撮影された写真であるという（16歳前後）。明治12年（1879）の前季の試験表によると、全学生を甲科、乙科、英書専修科の三科に分け、甲科は英読、英問、漢読、漢問、数学、文章の六課目としたという。この甲科第六級に永江正直の名がある（17歳前後）。草間を慕う教え子が多く、明治12年（1879）当時の学生は総計230名であったが、草間離任後の明治14年（1881）の試験表を見ると、総計が102人に減少している<sup>⑨</sup>。草間が松山を去る時、上級生の大部分は先生を慕い東京を目指したという。三田慶應義塾、



図1 草間先生御家庭（左）



図2 同窓生と共に（後列・左より2番目）

三菱商業学校、司法省法律学校、東京府商法講習所、陸軍教導団（後の陸軍士官学校）、私立済生学舎、神田共立学校、東京高等師範学校等に入学したという。永江正直は、明治17年（1884）7月東京師範学校初等中学師範学科卒業<sup>(10)</sup>したことが確認される（21歳）。

草間は慶應義塾から招聘された人物であるが、影山（1983）によると、明治初年、福沢諭吉による教育界への影響は顕著なものであった。著書の普及による啓蒙<sup>(11)</sup>、設立した慶應義塾の塾生による全国規模での意欲的な教育活動である。明治5年（1872）から明治7年（1874）にかけて文部省が官立師範学校を設立した際、七校中三校が塾生により創設されたという。明治9年（1876）に東京師範学校に中学師範科が新たに設けられた折にも10名ほどの塾生が出仕しており、当時入学した生徒約60人中の三分の二も実は塾生だったそうだ。慶應義塾から招かれた草間時福の薫陶を受け、当時の科目は英文・漢文・歴史・地理・物理・植物・数学・代数・幾何・三角等であったが、日本語の教科書がなかったため、国語・漢文を除いて英文原書であった。教科書は学校から貸与され、更に『ウェブスター』大辞典、中辞典、英和辞典など貸与されたそうだ。以上の松山藩における教育により、永江正直は英語力を鍛え、更には東京師範学校を目指したのだと考えられる。

### 3. 師範学校・高等女学校教諭時代

東京高等師範学校卒業後、資料1で挙げた履歴書によると師範学校及び高等女学校の教諭や校長を務めた。この時期は先に挙げた『女子教育論』の他、『疑問法ノ秘訣』、『注意把握維持法』、『学芸新書手工篇』、『絵入日本歴史』等の著作物を残した<sup>(12)</sup>。履歴書の職歴とその時期に著した著作物は、次頁の表1にまとめられる。

永江正直の教員としての職は明治17年（1884）、大分県師範学校から始まった。当時の大分県の教育界について池田（1979）は、他府県の場合と同様に大部分が英米の翻訳書で、明治19年（1886）7月7日附文部大臣森有礼の指令により「師範学校、教科書ハ当分左ノ図書中ヨリ撰用スベシ」とあるのを、そのまま大分師範指定教科書としていたという。そのためか、師範学校教員として赴任した大分県において、永江の翻訳書が三件残されている。

明治21年（1888）には、神奈川県師範学校の教諭に任ぜられた。ここでの著書は管見の限り見当たらないが、『神奈川県教育會雑誌 第七號』（明治21年8月28日発行）の教員研究会の項目に「尚次會ニハ講師トシテ永江正直君ヲ聘シ教育學講義ヲ囑托シ九月八日午後一時ヨリ笹下學校ニ於テ開會スル」という永江正直の記述があった<sup>(17)</sup>。当時の神奈川県教育会においても、講師を囑託されたようだ。

表1 任免と著作物対応表

年月日	任 免	著 作 物
明治17年8月3日 (1884年)	大分県師範学校 (3ヶ年)	大分県教育雑誌記事抜書 <sup>(13)</sup> 4号 永江正直, 太田保一郎共訳 ニコルソン氏動物学 10号 永江正直訳 ゼームス・カーリン教育学 24 永江訳 サーレー氏 Outline of Psychology
明治21年9月8日 (1888年)	神奈川県師範学校 (2ヶ年)	
明治23年9月12日 (1890年)	東京府師範学校 (2ヶ年6ヶ月)	『疑問法ノ秘訣』金港堂 (1890年3月25日 <sup>(14)</sup> , 訳) 『注意把捉維持法』金港堂 (1890年12月10日 <sup>(15)</sup> , 訳) 『学芸新書手工篇』文学社 (1892年6月, 編)
明治25年3月31日 (1892年)	東京都府高等女学校 (2ヶ年4ヶ月)	『女子教育論』 <sup>(16)</sup> 博文館 (1892年12月5日, 著)
明治27年7月25日 (1894年)	鹿児島県師範学校 (1ヶ年5ヶ月)	『絵入日本歴史』博文館 (1893年2月, 編)
明治29年4月14日 (1896年)	愛媛県師範学校 (4ヶ年10ヶ月)	
明治34年2月5日 (1901年)	兵庫県高等女学校校長 (1ヶ年11ヶ月)	

明治23年(1890)には、東京府師範学校の教員に任せられる。期間中、小学校実業科施設取調委員を命じられた(資料2<sup>(18)</sup>より)。ここでは、金港堂より『疑問法ノ秘訣』及び『注意把捉維持法』という訳書を、また文学社より編者として『学芸新書手工篇』を編者として出版した。上掲の『学芸新書手工篇』について坂口(1994)にてその内容が詳しく解説されている。

1886年5月の小学校ノ学科及其程度(文部省令第8号)により、日本の高等小学校に趣手工科が登場した。永江正直編の『学芸新書手工篇』は、1文部省編纂『小学校教師用 手工教科書』が出版される1904年までに認可された手工科用検定教科書の4種のうち1つであり、1892年6月8日出版、1892年8月23日検定認可、高等小学校手工科教師用検定教科書である。他の教科書と比べ、「尋常小学校第1学年～高等小学校第2学年の全学年の学習を、木材加工以外の多用な学習諸領域で編成」、「幾何学的な教材を重視する段階がある」、「観察力の発達を基本目的の一部に位置付ける」という点に特徴があるという。更に、高等小学校第3～4学年段階について、女子は男子とは別に手芸と裁縫で編成していることも注目されるという<sup>(19)</sup>。

その後、明治25年(1892)東京都府高等女学校に赴任した。ここでは、博文館より『女子



資料2 施設取調委員任命記事

教育論』、『絵入日本歴史』を出版した。『女子教育論』発売当初資料3<sup>(20)</sup>のように新聞広告に掲載され、近代日本において出版された主要な女子教育文献の1つとして、近代日本女子教育文献集<sup>(21)</sup>にも復刻され収録されている。またこの本は銭単士厘により中国語に訳さ



資料3 『女子教育論』新聞広告

れ<sup>(22)</sup>、当時『教育世界』に1902年12月から1903年1月に連載され、中国の近代教育に影響を与えたともいえる。それが故、中国や台湾の研究者が永江正直を取り上げる例が散見される。『女子教育論』は様々な議論がなされており、明治期の女子教育を語る上で、また中国の近代教育に影響を与えた書といえるだろう。

『絵入日本歴史』<sup>(23)</sup>は幼年全書第一篇として、明治26年(1893)2月5日に永江正直編で発売された<sup>(24)</sup>。この挿絵を担当したのは永峯秀湖であるが、それが故、明治期の浮世絵研究でこの書について言及されることが多い。

東京府高等女学校から鹿児島師範学校へ転任の折り、送別会が日本橋倶楽部にて同窓会を兼ねた会として開かれたという(資料6<sup>(25)</sup>参照)。この記事では教諭ではなく教頭と記されている。

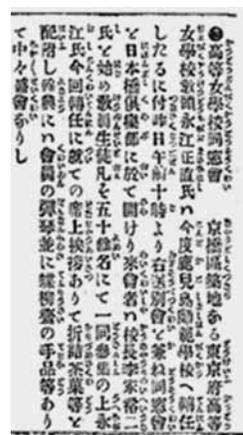
明治27年(1894)、鹿児島県師範学校に赴任した。国立公文書館



資料4 新聞記事



資料5 教科書



資料6 新聞記事

蔵の任免裁可書に「東京府高等女学校教諭永江正直 任鹿児島県尋常師範学校教諭 右謹テ奏ス 明治 27 年 7 月 24 日 内閣総理大臣伯爵伊藤博文」という記録がある<sup>(26)</sup>。

明治 29 年 (1896)、愛媛県師範学校に赴任した。国立公文書館蔵の任免裁可書「愛媛県尋常師範学校教諭児玉鑑三外一名任命ノ件 右謹テ奏ス 明治 29 年 4 月 14 日 内閣総理大臣伯爵伊藤博文」とあり、この他の 1 人として「鹿児島県尋常師範学校教諭永江正直 任愛媛県尋常師範学校教諭」とある<sup>(27)</sup>。

明治 34 年 (1901)、兵庫県高等女学校校長に任ぜられた。国立公文書館蔵の任免裁可書「愛媛県師範学校教諭永江正直以下五名任命ノ件 右謹テ奏ス 明治三十四年二月五日 内閣総理大臣侯爵 伊藤博文」とあり、その内容として「愛媛県師範学校教諭永江正直 兵庫県高等女学校校長ニ任ス」と記述されている<sup>(28)</sup>。この兵庫県高等女学校長時代の特筆すべきこととしては、筒袖着用を奨励したことである。『神戸市教育史第 1 集』には「明治 34 年 (1901) 5 月 1 日に授業を開始したが、同年 6 月 24 日に生徒の服装を筒袖の綿服にえび茶袴と決定し、頭髪を束髪と指定した。これは当時、全国の女学校に大きな反響を呼んだ」(p.418)とある。この筒袖というのは「袖口にヒダをつけ、運動の弊害にならないようゴムでとめられるように工夫した」ものである。校長の永江正直が改良服を奨励したため、明治 34 年 (1901) 7 月の「筒袖」着用率が六割であったのが、10 月には全生徒が着用するようになっている。これは制服という義務化ではなく、生徒から好評を得た結果であり、同校の影響を受けて「筒袖」は県内の小学校にも広がったという<sup>(29)</sup>。また神戸高等女学校時代の足跡として、大野 (1990) によると、英語教授として著名なエリザベス・フィリップス・ヒュースが日本に滞在した折、1901 年 12 月 7 日、頌栄幼稚園で三市聯合保育大会が開かれ、永江正直神戸高等女学校長がヘルバルト氏の教育学説の骨髄を述べ、午後はヒュースから日本の教育について論評があったという<sup>(30)</sup>。

以上、東京府師範学校、東京都府高等女学校、鹿児島県師範学校、愛媛県師範学校、兵庫県高等女学校とわずか 19 年ほどの間で東京から南は鹿児島まで 7 つもの学校を転々とした。またこの教員時代には、数点の著作物を残している。学生時代に身に付けた英語力を生かし翻訳書を、更に女子高等師範学校時代には女子教育について『女子教育論』まとめ、赴任した先で研究会の講師や教育関連の委員、筒袖の綿服にえび茶袴という服装の指定等、様々な課題に取り組んだようだ。

#### 4. 教諭退職

履歴書の記述を見ると、兵庫県高等女学校長在任中の明治 36 年 1 月 28 日に「休職」、そして明治 37 年 2 月には「休職満期 退隠料下賜」とあり、退職したようである。で



資料 7-1 指令書



資料 7-2 稟議



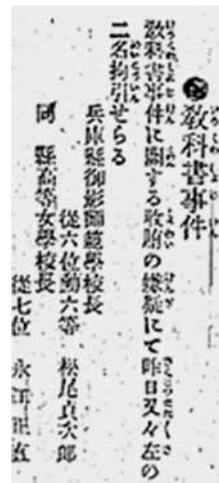
資料 7-3 別紙

は、何故休職したのであろうか。

その手掛かりとして、国立公文書館蔵の「兵庫県立高等女学校長永江正直休職ノ件<sup>(31)</sup>」と題された資料 7-1、資料 7-2、資料 7-3 を順に参考にする。

資料 7-1 によると、「明治三十六年一月二十七日 文部大臣稟議兵庫県立高等女学校長永江正直休職ノ件 指令案 兵庫県立高等女学校長永江正直休職ノ件認可ス 一月二十八日」とある。即ち、事前に提出されていた休職の件は 1 月 28 日に認可されたということになる。この 1 月 28 日という日付は、履歴書とも合致している。

次に休職の稟議案が提出された理由については、資料 7-2 によると「兵庫県立高等女学校長 永江正直 右ハ校務の都合ニ依リ休職命セシメ度此段及稟議候也 明治三十六年一月二十七日 文部大臣理学博士男爵菊地大麓 内閣総理大臣伯爵桂太郎殿」とあり、具体的な内容について、資料 7-3 によると、「別紙永江正直休職稟議相来の處同人ハ収賄事件ニ関シ拘引セラレタル者ニ有之の条至急御披露（取扱）相成候様致度此段及御依頼候也 明治三十六年一月二十七日 文部省総務局人事課長 田所美治（朱印）内閣書記殿 御中」とある。収賄事件により拘引されたため、休職の稟議が提出されたということだ。当時の新聞記事である資料 8 で「教科書事件 教科書事件に関する収賄の嫌疑にて昨日又々左の二名拘引せらる 兵庫県御影師範学校長 従六位勲六等 松尾貞次郎 同 県高等女学校長 従七位 永江正直」とある。ここで言う「教科書事件 教科書に関する収賄の嫌疑」とは「教科書疑獄事件」と知られている事件のことである。



資料 8 新聞記事

教科書疑獄事件とは宮地（1969）によりまとめると、明治35年（1902）12月に摘発された、小学校教科書採定をめぐる全国的な教科書会社と教育関係者との贈収賄事件のことである。従来主張されてきた教科書国定化への動きをして、それまで強硬な反対者だった教科書会社の発言権を消滅させることにより、一挙に現実化させたという。同書では、裁判過程における問題点が多々あったことを指摘している。なお明治36年（1903）1月17日、菊地文相は地方官会議にのぞんで教科書国定化の方針を示し、4月6日枢密院で教科書国定化が議定されるやいなや、同月13日勅令74号をもって小学校令を改正、審査委員会を廃止し、小学校教科書を国定とした。ここに敗戦まで日本国民の思想統制に最も利用された国定教科書の歴史が始まったという。なお、教科書国定化については井出（1988）によると福沢諭吉は強力な反対説<sup>(33)</sup>を提出している。教科書疑獄事件では師範学校を始めとした教員が多く起訴されたため、福沢に連なる系譜の教員も多数拘引された。福沢が松山中学校に推薦した慶應義塾出身の草間時福に、松山中学時代に薰陶を受け翻訳書を発表してきた永江正直もその一人であるといえる。教育界の転換があったと感じざるを得ない。

永江正直の裁判記録をたどると控訴を繰り返し、現時点では「教科書事件 昨日大審院及控訴院に於て左の言渡ありたり 兵庫県高等女学校長 永江正直 原裁判を破毀し名古屋控訴院へ移す<sup>(34)</sup>」（資料9）という記録の確認までできた。この事件に関しては、別稿で改めて述べる。



資料9 新聞記事

## 5. 清国に招聘された教員時代

明治37年（1904）8月、「清国湖南省明德学堂ノ聘ニ応ジ物理化学ヲ教授ス」とある。湖南省の明德学堂にどのような経緯で招聘されたのか。『明德学堂文牘彙存』の「開辦理化専科呈陸中丞立案文」にある。宮原（2003）を参考にまとめると、光緒30（1904）年、胡元倓は上海に赴いた際、同郷に請願し、学堂経費として10,000元の援助を得た。この資金を元に上海で理化学の器具や博物学の標本を購入し、日本人の永江正直と堀井覚太郎を招聘し長沙に戻り、校舎を設立し理科博物専科を開設したという。なお胡元倓とは、湖南省出身、日本の宏文学院速成師範科に留学した。日本滞在中に「日本の維新が成功した一因は教育にある」と考え、福沢諭吉が慶應義塾を設立して人材を育成した功績を慕い、教育で国を救おうと決意する。半年間の就学を終え、光緒29年（1903）、

湖南で最初の私立学堂である明德学堂を開学したという。日本留学時に面識をもった黄興も体育教師として招かれた。

蔭山（1980）によると宏文学院<sup>(35)</sup>は高等師範学校長である嘉納治五郎によって開設された。この教員の中には、当時の東京高等師範学校及び附属小学校での教授経験がある教員が多数存在していたという。更に嘉納は、この宏文学院在職期間の前後、日本人教習教習として清国の諸学堂へ赴任し、中国人教育に従事しているという。以上より、永江正直は東京高等師範学校を卒業し、各師範学校で教員した経験により明德学堂に招かれることとなったのではないかと推測される。

また同時期に明德学堂に招聘された堀井覚太郎について、官報<sup>(36)</sup>や『群馬大学教育学部百年史』によると、次の表2の経歴が確認できる。

表2 堀井覚太郎職歴

明治 31 年 (1898)	秋田県尋常師範学校教諭任命
明治 33 年 (1900)	兵庫県第一師範学校教諭任命
明治 35 年 (1902)	群馬県師範学校長 <sup>(37)</sup> 任命

永江正直は明治 34 年 (1901) から明治 36 年 (1903) に休職になるまで兵庫県高等女学校校長を任じられているため、神戸時代に面識があった可能性が高い。

なお辛亥革命の領袖とされた黄興が明德学堂で革命の準備をしたという記述に、日本人教習に関して言及されている。1 章 1 節で雷 (2009) の記述を紹介したが、また張 (2010) でも、“屈膝募得一萬元、即此款在上海購置理化儀器即博物標本、聘日本人堀井覚太郎為理化教員;永江正直為博物教員。”(跪き 1 万元の寄付を集め、これにより上海で理化学の機器や博物学の標本を購入し、日本人の堀井覚太郎を理化学教員、永江正直を博物学教員として招聘した)、“準備十月初在萬壽宮施放的炸彈、還是在明德學堂的理化實驗室、由日本教員堀井覚太郎指導製造成功。”(10 月初に万壽宮で爆弾を放つ準備のため、依然として明德学堂の理化学実験室において日本人の教員堀井覚太郎の指導の下、製造に成功した。)とある<sup>(38)</sup>。

先行研究における記述は堀井覚太郎の「堀」が「掘」になる等の、誤記が見られる。また担当科目について理化学は堀井覚太郎、博物学は永江正直との記述があるが、永江正直直筆の履歴書においては明德学堂では「物理化学ヲ教授ス」とあるので、記述が矛盾している。なお外務省外交史料館蔵「清国傭聘本邦人名表」において、明治 41 年 1 月から 4 月の調査と明治 42 年 12 月から同 43 年 5 月の調査が確認できる。この調査を参考にすると永江正直はすでに明德学堂から離任してしまっていたが、堀井覚太郎は明德学堂で教授していた。以下、表 3 のようにまとめられる<sup>(39)</sup>。

表3 堀井覚太郎職歴

契 約	司掌事項	期 限
明治41年(1908) 1月	理化及博物教授	満一年
明治42年(1909) 10月	物理, 化学教授	満二年

ここで注目すべき点が、司掌事項について明治41年(1908)では「理化及博物教授」とあるが、明治42年(1909)では「物理, 化学教授」となっていることだ。即ち、堀井覚太郎はもともと「理化学(物理, 化学)」のみの教員ではなく「理化及博物教授」と招聘された可能性も否めない。更に永江正直も黄興在籍時には「理化及博物教授」であり、理科実験室にて爆薬の試作を手伝った可能性もある。

永江正直の明德学堂離任後に関し、明治40年(1907)8月27日、「清国南京官立師範学堂ノ招聘ニ依リ理化学ヲ教授ス」と履歴書に書いてある。ただ当時の清に「南京官立師範学堂」という学堂は管見の限り、見当たらなかった。そこで外務省外交史料館蔵「清国傭聘本邦人名表」の明治41年1月から4月の調査と明治42年12月から同43年5月の調査を閲覧すると、江蘇省の南京に「永井正直」なる次の人物の記述があり、表4のようにまとめられる。

表4 南京の官立師範学堂

姓 名	職 名	契約年月	期 限	貫籍
永井正直	甯属初級師範学堂	明治40年(1907)9月	満一年	愛知県
永井正直	江寧初級師範学堂	明治41年(1908)8月	明治43年(1910)末	愛媛県

姓の「永井」は「永江」、貫籍は甯属初級師範学堂時代の愛知県は愛媛県の誤りではないだろうか。契約年月で異同<sup>(40)</sup>があるが、8月27日に赴き9月から授業開始だったとも考えられる。

蔭山(1988)によると、当時の江蘇省において開明派官僚である張之洞及び端方に招かれて江蘇省に10カ年滞在した、後に東京帝国大学教授となる藤田豊八は、この間中国最初の教育専門雑誌『教育世界』の編集顧問、江蘇学務処<sup>(41)</sup>教育顧問官、江蘇師範学堂総教習を歴任した。なお『教育世界』は(1)論説(2)教育規則(3)翻訳の三部構成とし、(3)翻訳には教育書や教科書類が掲載され、永江正直著の『女子教育論』も1902年12月から1903年1月に連載されている。

20世紀初頭、多くの日本人教習が中国各地に招かれ、最盛期には600名を数えたが、1906年から1907年をピークに、解雇あるいは契約期間の満了により帰国し、漸次その数を減らし、1911年、辛亥革命の政治的・社会的混乱の結果、ほぼ全員が帰国せざるを得なくなった<sup>(42)</sup>。永江正直は、江寧初級師範学堂は明治43年(1910)末、期間満了

により帰国したと考えられる。

## 6. 日本帰国後の私立中学校教員時代

永江正直は日本帰国後<sup>(43)</sup>、私立中学校<sup>(44)</sup>の教員を務めた。履歴書を見ると、「大正9年（1920）9月20日 私立名古屋中学校奉職 理化学担当 四ヶ年」とあるが、次の赴任先が大正5年（1916）であるため、誤記と考えられる。『名古屋学院百年史』によると、大正2年（1913）の記事には「永江正直（理数）が6月に就任」、大正5年（1916）には「教員永江正直（理化）は九月で辞任」とある。就任は大正2年（1913）6月ということになる。ただ、他中学校は「教師ヲ命ス」となっているが、名古屋中学校のみが奉職という書き方である。そのため、非正規雇用として大正元年（1912）9月20日<sup>(45)</sup>から名古屋中学校で教え始めた可能性もある。また就任は「理数」だが辞任時は「理化」となっている。履歴書の記述も「理化学担当」とあるので、「理化」の方を重点的に教授したと考えられる。

大正5年（1916）9月10日、「私立明治学院中学部理化教師ヲ命ス 一年六ヶ月」と履歴書にはある。『明治学院歴史資料館資料集第2集——『明治学院九十年史』のための回想録——』に「明治学院とエレクトロニクス及び放送」と題された安藤博<sup>(46)</sup>の次のような寄稿がある。

明治学院と放送、又明治学院とエレクトロニクスと云うと、あまり縁のないことのように思われるかも知れないけれども、私が明治学院の中学部に在学中に既に財団法人となっている私の研究所はあったのであって、明治学院の自由な学風は私の研究を伸ばす上に非常な助けとなったと思われる。又物理化学担当の長井先生（注で「長井先生」とあるが「永江正直先生のこと」とある）は私の研究を認めて、物理化学専用室に自由出入を許して呉れた。

今や財団法人安藤研究所は日本におけるエレクトロニクス及びこれと不可分の関係にある放送の発祥時以前からのパイオニヤー研究所となった。

物理学担当教員として勤務し、生徒の研究を認め、物理化学専用室への自由な出入りを認可したようだ。

大正7年（1918）4月1日、「私立攻玉社中学校理化教師ニ命ス 一年六ヶ月」と履歴書にある。『攻玉社九十年史』の旧教職員の中に永江正直（p.122）を確認できる。

大正8年（1919）9月5日、「小石川区私立豊山中学校理化学教師ヲ命ス 現二在職中」とある。この豊山中学校とは護国寺に隣接した場所にある、現在の日大豊山のこと



話機」により音楽を流すという趣向である。安藤博といえば、明治学院中学校時代の生徒で、その教え子と時を経て無線通信による音楽会を開催し、記事に取り上げられたようだ。

永江正直は、日本帰国後、主に物理化学の教員として私立中学校にて教鞭を執った。教え子との交流も資料から垣間見られ、65歳でもまだ教授していたようだ。

なお、その人生は昭和8年（1933）、2月14日に幕を閉じる。享年70歳であった。

## 7. おわりに

永江正直は伊予松山藩に生まれ、藩校で学問に励み、東京高等師範学校を卒業し、師範学校教員や女子学校長まで務めた。教科書疑獄事件により退職を余儀なくされ、清国に渡り明德学堂や南京の官立の学校で教え、帰国後は主に私立中学校において理化学（物理化学）を教えた。

以上、本稿では先行研究で不明とされてきた永江正直の経歴を明らかにした。更に、師範学校の教員をしながら時には著作物を出版していた者が、何故、清国に渡り教員として活動したのかについては、教科書疑獄事件として起訴され退職せざるを得なかったためだと考えられる。また清国で教授していた科目は、博物学であるのかもしくは理化学であるのかについては、帰国後の私立中学校において、理化学（物理化学）を教授したという点からは、やはり理化学（物理化学）を教授したのではないかと考えられる。

清国末期に教員として招聘された者の中には、教科書疑獄事件によって退職を余儀なくされた教員が一定数いると考えられる。教科書疑獄事件により日本で起訴された者が、如何なる経緯で清国から招聘されて教員として渡り、辛亥革命に手を貸したと言われるようになったか、その全貌は未だ不明である。なお本稿は主に中国の近代教育の永江正直について取り上げた先行研究で不明な点を、直筆の履歴書を手掛かりにまとめた研究であるため、日本の研究者の著作物を網羅できたとは言えない。また永江正直は清国でも帰国後も理化学（物理化学）を教授したと考えられるが、どこでその知識を学んだのかについて調査しきれなかった。更に『女子教育論』を中国語に翻訳した錢単士厘は1899年から1903年に日本に滞在しており、永江正直とも交流があった可能性がある。以上、今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿執筆の契機となった永江正直の履歴書を送付頂いた永江巖元舞台芸術学院学院長、並びに執筆にあたりご助言や資料をご紹介頂いた保坂芳男氏、関良基氏、宮原佳昭氏、永江方英氏および査読の先生方に心より感謝を申し上げます。

## 《注》

- (1) 本筆者にとって永江正直は曾祖父に当たる。五男である祖父・正之、または親戚の家に残された遺品や戸籍を手掛かりに本稿を著した。
- (2) p. 57。著者翻訳。
- (3) p. 71。著者翻訳。哥老会（かろうかい）とは、清末民国初期の秘密結社の一つ。
- (4) 永江正直の長男・梓氏の妻にあたる八重氏の遺品。梓氏の三男、巖氏より送付頂く。
- (5) 編者である永江為正も第一席であるため、永江正直と同級生だったようだ。
- (6) 第2席以下の名簿に秋山真之の名前がある。
- (7) 藩校明教館は明治5年（1872年）英学舎、明治8年（1875年）英学所、明治9年（1876年）変則中学校、明治10年（1877年）北予変則中学校、明治11年（1878年）松山中学校となった。その後愛媛県立松山東高等学校と改称し、現在に至る。
- (8) 拓殖大学学友会初代会長・門田正経は永江正直と同様、明治9年（1876年）は少年科第五級、明治12年（1879年）は甲科第六級に名があり、同級生だったようだ。
- (9) 在校生には正岡常規（正岡子規）の名もあるが、子規も明治16年（1883年）に中退した。
- (10) 『東京高等師範学校一覧 明治30-32年』（東京高等師範学校出版）
- (11) 永江正直も勝山小学校時代に『学問のすゝめ』、『西洋事情』を学んだという。
- (12) 『女子教育論』、『疑問法ノ秘訣』、『注意把捉維持法』、『学芸新書手工篇』、『絵入日本歴史』はいずれも国会図書館デジタルアーカイブで閲覧可能。
- (13) 池田（1979）による大分県教育会の「共立教育雑誌」を抜粋したものの中から永江（正直）訳出について傍線を引き転載した（p. 696）。なお「サーレー氏 Outline of Psychology」において“Psycholgy”とあったが、誤記と考え“Psychology”に訂正した。
- (14) 日付は東京日日新聞明治23（1890）年3月26日掲載の『普通教育第9冊』（『疑問法ノ秘訣』所収）の広告より（国文学研究資料館明治期出版広告データベース）。
- (15) この日付は東京日日新聞明治23（1890）年12月10日掲載の『普通教育第26号』（『注意把捉維持法』所収）の広告より（国文学研究資料館明治期出版広告データベース）。
- (16) 『女子教育論』は筆者の祖父である正之（永江正直四男）の遺品としても初版本が家に残されていた。
- (17) p. 377より引用。傍線は筆者による。
- (18) 『東京朝日新聞』1890年3月13日より。
- (19) 内容は坂口（1994）を参考にした。
- (20) 『東京朝日新聞』1892年12月4日記事より。
- (21) 中畠（2002）より。
- (22) 京都大学東アジア人文情報学研究中心蔵
- (23) 1893年2月7日 東京朝日新聞記事より
- (24) 資料4の新聞記事では永江正直著となっているが、資料5のように表紙は永江正直編であるため、本稿でも編とする。
- (25) 読売新聞 1894年7月28日
- (26) 「東京府高等女学校教諭永江正直鹿児島県尋常師範学校教諭二松井喜三郎広島県広島尋常中学校教諭二被任ノ件」（任免裁可書・明治二十七年・任免卷十二）国立公文書館蔵
- (27) 「愛媛県尋常師範学校教諭児玉鑑三外一名任命ノ件」（任免裁可書・明治二十九年・任免卷二）国立公文書館蔵
- (28) 「愛媛県師範学校教諭永江正直以下五名任命ノ件」（任免裁可書・明治三十四年・任免卷七）国立公文書館蔵
- (29) 刑部（2018）に詳しい。

- (30) 『婦女新聞第 84 号』明治 34 年 12 月 16 日
- (31) 「兵庫県立高等女学校永江正直休職ノ件」(任免裁可書・明治三十六年・任免卷二) 国立公文書館蔵
- (32) 『東京朝日新聞』1903 年 1 月 26 日より。
- (33) 福沢(1991)では「教科書の検定のごときも、この心得を忘れずして古学者流の著述に係る頑陋苛烈の事を記したるもの、もしくは今人の書にても児童に読まして真実有害と認むるものに限りて之を排斥し、その他は一切看過して自由に選定せしむべし」「もしも文部省がみだりに検定を窮屈にするのみならず、一種の偏見を構えて、その間に私見を調査することこれまでのごとくならんには、ただ教育の発展進歩を妨害するにすぎざるのみ」と説く。
- (34) 『東京朝日新聞』1903 年 10 月 23 日より。
- (35) 清国から日本への留学生は、1896 年に清国政府が 13 人の留学生を官費で派遣したことに始まる。当初、神田三崎町に開設されたが名もなく塾同然であったが、続けて留学生の教育を委託されたため、亦楽書院と命名した。その後、入学希望者が殺到して亦楽書院の校舎が手狭になったため、1902 年、神田三崎町から牛込西五軒町に移転し、学校の名称を改めたという。当初「弘文学院」としたが、乾隆帝の諱が「弘曆」で「弘文」を忌避する者がいたため、1906 年に「宏文」に改めたという。なお黄興も宏文学院で学んだという(阿部(1990)より)。
- (36) 『官報』4390 号(明治 31 年 2 月 23 日)、5122 号(明治 33 年 7 月 30 日)
- (37) 井出(1966)によると、堀井も教科書疑獄事件により検挙されたようだ。
- (38) 引用部分はいずれも p. 321。著者翻訳。
- (39) なお堀井覚太郎の貫籍は愛媛県であり、永江正直と同じである。
- (40) 寧属初級師範學堂の契約年月日は明治 40 年(1907)9 月であるが、履歴書は明治 40 年(1907)8 月 27 日に「清国南京官立師範學堂ノ招聘ニ依り理化学ヲ教授ス」とある。
- (41) この江蘇学務処について最も注目に値するのが初等教育の普及事業だという。永江正直は南京にて初級師範學堂で教授した。その点が関係している可能性がある。
- (42) 阿部(1990)より。
- (43) 永江正直の戸籍では東京市牛込区余丁町(中町)の住所に、明治 45 年(1912)4 月 5 日、愛媛県松山市大字全屋町より転籍届出同日受附入籍とある。そのため、1912 年 4 月には帰国し、東京に居を構えたと考えられる。
- (44) ここでいう中学校とは旧制中学校。1947 年学校教育法施行後の高校を指す。
- (45) 大正元年(1912)の名古屋中学校教員数は有資格教員 15 名、無資格教員 4 名であった。
- (46) 同回想録によると“broadcast”に「放送」という訳語をあてた人物でもある。中学四年の大正 8 年(1919)1 月、完成した多極真空管と二次電子倍增管の特許を出願し、特許が与えられた。今日のエレクトロニクスの心臓部として基本となったものだという。
- (47) p. 39 より。
- (48) 東京市牛込区より転籍届出、昭和 3 年(1928)10 月 25 日受附入籍
- (49) 無電とは、無線のことである。

#### 参考文献

(日本語の文献)

- 阿部洋(1990)『異文化接触と日本の教育⑥ 中国の近代教育と明治日本』福村出版
- 阿部洋・蔭山雅博・稲葉継雄(1982)「東アジアの教育近代化に果した日本人の役割 — お雇い日本人教習と中国・朝鮮 —」『日本比較教育学会紀要第 8 号』pp. 51-58
- 豊山中学校編(1928)『豊山中学校一覽』豊山中学校

- 福沢諭吉著 山住正己編 (1991)『福沢諭吉教育論集』岩波書店
- 群馬大学教育学部百年史編集委員会編 (1979)『群馬大学教育学部百年史』群馬大学教育学部同窓会
- 井出孫六 (1988)『明治民衆史』徳間書店
- 池田哲郎 (1979)『日本英学風土記』篠崎書林
- 蔭山雅博 (1980)「宏文学院における中国人留学生教育 — 清末期留日教育の一端 —」『日本の教育史学 23 卷』教育史学会 pp. 58-79
- 蔭山雅博 (1988)「清末江蘇省の教育改革と日本人教習」『日本の教育史学 31 卷』 pp. 73-92
- 影山昇 (1983)『愛媛県教育史』思文閣出版
- 梶山雅史 (1988)『近代日本教科書視史研究 — 明治期検定制度の成立と崩壊』ミネルヴァ書房
- 韓韡 (2014)『中国近代女子教育における日本受容』名古屋大学提出博士学位論文
- 神戸市教育史編集委員会編 (1966)『神戸市教育史第 1 集』神戸市教育史刊行委員会
- 攻玉社編 (1953)『攻玉社九十年史』攻玉社
- 明治学院資料館編 (安藤博) (2005)『明治学院歴史資料館資料集第 2 集 — 『明治学院九十年史』のための回想録 —』明治学院歴史資料館
- 宮原佳昭 (2003)「清末湖南省長沙における民學学堂設立と新教育界の形成について — 胡元倓と明德學堂を中心に —」『東洋史研究第 62 卷 2 号』東洋史研究会 pp. 1-31
- 宮地正人 (1969)「教科書疑獄事件—教科書国定への過程として—」『日本政治裁判史録 明治・後』第一法規 pp. 351-378
- 中嶋邦 (2002)『近代女子教育文献集』日本図書センター (第 3 卷 永江正直 (1892)『女子教育論』博文館 所収)
- 名古屋学院百年史編集委員会編 (1987)『名古屋学院百年史 1887~1987』名古屋学院
- 永江為正編 (1922)『四十年前之恩師草間先生』草間先生謝恩会 (非売品) 拓殖大学蔵 (門田正経氏寄贈書)
- 大野延胤 (1990)「E. P. Hughes in Japan (1901-1902)」『研究年報 36』学習院大学文学部 pp. 323-346
- 刑部芳則 (2018)「明治時代の高等女学校と服装論議 — 女子生徒の着袴 —」『大倉山論集第 64 輯』公益法人大蔵精神文化研究所 pp. 73-140
- 坂口謙一 (1994)「手技の練習と製図・図形学習を重視する手工教育 — 文部省編纂『小学校教師用 手工教科書』にみる教材観の特徴 —」『産業教育学研究第 24 卷 2 号』日本産業教育学会 pp. 17-24
- 邵艶 船寄俊雄 (2003)「清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究 — 宏文学院と東京高等師範学校を中心に —」『神戸大学発達科学部研究紀要第 10 卷 2 号』神戸大学発達科学部 pp. 383-398
- 吉田昇 (1947)「明治以降に於ける教育論の変遷」『野間教育研究所紀要第 1 輯』野間教育研究所 pp. 135-222

(中国語の文献)

- 黄湘金 (2007)〈三部日译《女子教育(论)》在晚清中国〉《河北师范大学学报 第四期》教育科学版 pp. 56-60
- 雷建军 (2009)〈长沙明德学堂对辛亥革命的贡献〉《书屋》炎黄春秋杂志社 pp. 70-74
- 懐怀民 (1987)〈胡元倓与明德学堂〉《湖南科技大学学报 (社会科学版)》(1) 湖南科技大学 pp. 55-60
- 張家鳳 (2018)『中山先生與國際人士 二版』臺北市：秀威資訊科技股份有限公司
- (張家鳳 (2010)『中山先生與國際人士』秀威資訊科技股份有限公司 初出)

**参考サイト**

国文学研究資料館明治期出版広告データベース [http://base1.nijl.ac.jp/~meiji\\_pa/](http://base1.nijl.ac.jp/~meiji_pa/)  
(最終アクセス日 2018年10月31日)

(原稿受付 2018年10月31日)

# 沈黙の言語

— トニ・モリスンの『ラヴ』の語り

三井美穂

## Language of Silence:

L's Narrative in Toni Morrison's *Love*

Miho MITSUI

### 要 旨

トニ・モリスンの『ラヴ』(*Love* 2003)の語り手は素性を明らかにしないまま語り始め、意図的に時系列を混乱させ、何かを隠し、読者を弄んでいるように見えるのだが、本稿ではこのような語り手を設定した意図と語りの謎に焦点を当てて論じる。語り手Lは沈黙とハミングでその存在感を訴えるが、Lの沈黙にはどのような意味があるのか、また何を隠しているのかを探る。沈黙はモリスンが「ノーベル賞受賞記念講演」で描いた賢者の特質であり、白人家庭を支えてきたマミーの特質でもある。沈黙はまたアフロ・アメリカンの文化に根差したもので、奴隷制時代にまでさかのぼって考察する必要がある。小説の舞台となるホテルは一種のプランテーションで、登場人物はその奴隷になぞらえられる。抑圧された者たちの沈黙は、明確な定義を拒否した「知恵と抵抗のサイン」としての言語と言える。

キーワード：トニ・モリスン、『ラヴ』、賢者、マミー、沈黙

### はじめに

『ラヴ』(*Love* 2003)は『パラダイス』(*Paradise* 1998)に続き、トニ・モリスンの後期の小説独特の、意図的に時系列を混乱させる語りが全編を支配する小説で、いつ何が起こったのかを把握するのが非常に難しい。『パラダイス』では、読者は「最初に殺された白人の女は誰か」というミステリーを解決しようとして読み進めたが、語り手は少しもヒントをくれなかった。モリスンが登場人物の肌の色を隠したからである。同様に『ラヴ』でも「誰がコーギーを殺したか」は最後の最後に曖昧な言葉で告白される。ミステリーは別としても、モリスンの語り手は伏線を張り巡らし、あるいは経緯を後回しにして結果を先行させ、時系列を台無しにして、読者が最後まで読み終えたところでようやく全体像がおぼろげに理解できるようにしかけている。読者はそこに「何か隠

されている」と思わずにはいられない。語り手はなぜ読者をこのように弄ぶのか。

『ラヴ』のストーリー自体ははっきりしている。52歳の黒人ホテル王ビル・コージーが12歳の孫娘クリスティンの親友ヒードを再婚相手に選んだことで、幼い二人の友情に修復できないほどの亀裂が入る。のちにコージーは謎の死を遂げるが、残された不可解な遺言書をめぐって遺産争いをするこの2人の女は、60代半ばの現在まで憎みあいながらも一つ屋根の下で暮らしている、というのが小説の大筋だ。小説の現在は1990年代半ばでコージー家が舞台である。クリスティンとヒードのほか、かつてコージーのホテルで働いていたサンドラーとヴィーダ夫妻、そのふたりの孫でコージー家の雑用をしているローメンの5人が主な登場人物だが、そこへヒードの求人広告を見てやってきたジュニアが加わるところで小説の幕が上がり、クリスティンとヒードの和解で幕が下りる。この6人が3人称の語り手を通じて自由気ままに回想し、意識の流れに任せてエピソードを取り出す。それをつなぎ合わせることで、読者は彼らの過去を再構築していく。物語が進む、というよりも、過去を掘り起こして展開する、と言ったほうが妥当な小説である。

時系列を無視したこの3人称の語り手に交じって、時折もうひとりの語り手が登場する。イタリック体で書かれた部分のこの語り手は全編の語り手にもまして読者に非協力的だ。曖昧な描写、逸脱、省略、沈黙、ハミングなどが頻繁に現れるため、通常の語り手らしい語り方を拒否しているように見える。まず小説冒頭の章分けのない数ページで、このイタリック体の語り手は不埒な女たちの話を始め、とりとめない連想を続けてようやく物語の舞台となるホテルの描写にたどり着く。登場人物の名前はコージー、メイ、ヴィーダ、サンドラーの子が言及されるが、物語での彼らの立ち位置は不明のまま。逆に物語の中心となるクリスティン、ヒード、ジュニアは名前を与えられないまま、人物像が部分的に描かれる。ホテルの盛衰、その周辺地域の災害とその後の開発、コージーの女たちのもとに下着をつけていない娘がやってきたことなど、舞台設定が不完全に紹介される。この冒頭の語りの中で、語り手はどうやらホテルで料理を作っていたことが示唆されるが、第2章のヴィーダの回想でようやくLという名の料理人がホテルにいたことがわかる。第3章の終わりでイタリック体の語り手が再び登場し、自身の生い立ちからコージーとの出会い、Lと呼ばれていることなどを語る。ここでようやく語り手の素性がわかるのだ。さらに小説の最終章第9章で、Lはすでに鬼籍に入っていたことが明らかになり、読者は幽霊の語りを聞かされていたことに驚く。本稿ではこのLの語りについて考えていきたい。

全編にわたる3人称の語り手とは別に、なぜLの語りが必要だったのだろうか。もちろんLは1990年代の現在には存在しないため、全編の語り手はその心情を代弁することはできない。同様のことがコージーにも言えるわけだが、コージーの語りはない。

コージーには語らせず、Lにはどうしても語らせなければならない理由があったはずだ。にもかかわらず、Lの語りは本編の語り手が語ったことをむしろ抽象的に描くにとどまる、あるいは逆説的に何かを隠すために語っているように見えるのだが、それはなぜなのか。Lは最初に名乗ることもない。抽象的でストーリーにもならずエピソードとしても不完全なものを、素性も明らかでない、信頼することもできない語り手が、なぜ読者を混乱させるために語るのか。

このLの語りの謎を解明するにあたり、まずモリスンのエッセイ「ノーベル賞受賞記念講演」(“Nobel Lecture 1993”以下「記念講演」)をよりどころとして分析したい。Wallaceはこの2つの作品を並べて倫理的批評理論から論じている(Wallace 375-376)が、本稿ではコミュニティの中で「知恵を備えていると思われていた」(『ラヴ』3)賢者としてLを捉える。次に賢者の語りとはどのようなものか、Lの語りを具体的に論じる。最後に、歴史的に常に脇役で語り手の役割どころかセリフも与えられてこなかったマミーとしてLを捉え、賢者の語りと重ね合わせてみたい。

## I. 賢者の語り

「記念講演」にはアフロ・アメリカンのコミュニティで語り継がれる年老いた盲目の賢者が登場する。その老女は「奴隷の娘で、黒人で、アメリカ人」であり、「掟であると同時にその掟を破る者」でもある(『記念講演』267)。その老女のもとに若者たちがやってきて、盲目であることにつけこんで、手に隠した鳥の生死について問うのだが、老女は曖昧に「それはあなたの手の中にある」としか答えない(268)。つまりその若者は手の中の鳥の生命に対して責任を持つ必要があり、力を行使する者はその力を示すための道具について責任を持たなければならないと言うのだ。モリスンは、鳥は言語のメタファーで、老女は作家だと言う。言語は「国家によって統制されたり検閲されたり」するため、「死にやすく抹消されやすく、確実に危険にさらされていて、意志の力によってしか救われることがない」(268)。統制され検閲された言語は「性差別主義者の言語、人種差別主義者の言語」、つまり「支配者の治安維持的な言語」であり、「何百万もの人びとの苦しみを沈黙させてしまうように計算された政治と歴史の言語」なのだ(268-269)。しかしそれでも、言語を使う者はその死の責任を負わなければならないとモリスンは言う。この死んでしまった言語に対して、責任をもって使われる言語は、「意味が存在するかもしれない場所に向かって放物線を描く」(270)。支配者の「言語は決して奴隷制や大虐殺や戦争に明確な定義を与えることはできない」からだ(270)。虐殺された人々が言葉で証言することはかなわず、支配者側の言語でそれを描いた「歴史」は完全なものとは言えない。被害者の歴史は語るべきことだけれども「語れない、語られな

かったこと」となる。モリスンはエッセイ「語れない、語られなかったこと」(“Un-speakable Things Unspoken” 以下「語れない」)で、アメリカ文学の中で語られることのなかったアフロ・アメリカンの存在を論じているが、このテーマはモリスンの全作品を貫くものと言える。しかしそれでもその存在を言語で表すしか選択肢がないなら、言語はむしろ「言葉を絶するものに近づこうとすること」のために力を発揮するものでなければならない(「記念講演」270)。これが「明確な定義」を与えない言語、放物線を描く言語、つまり権威的な言語の代替言語としての沈黙やハミングということになる。

『ラヴ』の語り手たちは、抑圧された者の立場から語る。支配者はコージーで、家族を諍いに巻き込んでいる。白人への密告者として同胞を売り財をなした父親を恥じ惜みながらも、コージーはその父の遺産で白人地域のホテルを買い取り、当局に賄賂を渡してビジネスの優遇を図り、成功を収める。またセレスチャルという愛人の他にも、Lやヴィーダとの関係も疑われる(Gallego 98)。コージーは幼児性愛者だった。5歳でコージーを見知り14歳で家の手伝いに駆り出されたLが幼児性愛の対象になったことは想像に難くない。また缶詰工場からホテルに抜擢されたヴィーダもおそらくコージーと関係があっただろう。ヴィーダはホテルの仕事に3枚もドレスを買ってもらったと回想している。頬に釣り針がささった幼い少女は、コージーの愛人として長く見え隠れした娼婦セレスチャルだろう。このような放埒な女性関係、しかも幼児性愛という歪な性癖をもったコージーは、9歳だったヒードに性的接触を行い、ついに結婚する。その結婚が家庭内に波風を立てた結果、孫娘を追い出し、愛情を見せる気配もない。クリスティンが回想する通り、母親メイはコージーのために「奴隷のように働いたのに無視されていた」(『ラヴ』99)し、ヒードは自分がコージーに200ドルで買われたことを知っていた。地元の黒人コミュニティには博愛主義者のように金銭的援助をするが、決してホテルには足を踏み入れさせない。このようにコージーが象徴しているのは単なる家父長制ではなく、いわば奴隷制時代のプランテーションの主人だろう。Humannは『ラヴ』の中心テーマは「ドメスティック・バイオレンスとその影響」(Humann 247)と指摘しているが、「ドメスティック」は家庭内のみならず、プランテーションという、より大きな家の範疇での奴隷に対する暴力ともとれるだろう。だから物語は主人コージーの視点で語られることは一度もなく、支配者側の言語は小説には見られないように綿密に構成されている。もしもこの小説がコージーの視点で書かれていたら、全く異なる家族の歴史になっていたと推測することができよう。モリスンがコージーに語らせなかった理由はここにある。

「記念講演」の老女は、結局若者たちに言語についての説明をすることはなく、沈黙を守る。この沈黙は「彼女が話した言葉の中に読み取れる意味よりも深く」、若者たちは「その場で思いついた言葉でその沈黙を満たす」のだ(「記念講演」271)。若者たち

は語り始める。奴隷制の恐怖にまでさかのぼって、語られることのなかった人生、すなわち歴史を語る。その話を聞き終わった老女は、若者たちがついに鳥を手に入れたと喜び、「なんてすてきなんでしょう、これは私たちが成し遂げたことなんですよ、一緒にね」と言う (273)。

語りには主観が介在し、「支配者の治安維持的な言語」を使って描くことはこれまでのアメリカ小説の中で多くの場合行われてきたことだ。しかし「記念講演」から言えることは、作家は事実を言語で明確に表すことはできないから、その表したい意味に向かって放物線を描くように語るのだということだ。『ラヴ』の語り手は言語による明確な描写を拒否する。事実はわかるようでわからない、曖昧な言葉で語られる。またときに沈黙やハミングが語りの代わりに聞こえてくる。この沈黙はアフロ・アメリカンの文化に深く根差すものだ (Denard 77)。「私たちの人生には前後関係がないのですか。ビタミン豊富な歌も、文学も、詩も、力強くスタートを切れるように手渡してくれる、経験に結びついた歴史もないのですか」と「記念講演」の老女は問うが(「記念講演」272)、モリスンの語り手は曖昧な言葉、ハミング、沈黙といった文化のバトンを読者に託しながら、アフロ・アメリカンの歴史や人生を描き直してもらえることに期待をかける。このリレーは語り手と読者の共同作業となるのだ。

2005年 Vintage 版の『ラヴ』には2003年の初版にはなかった序文が追加された。この序文でモリスンは語り手について書いている。『ジャズ』以降モリスンの語りは初期の作品と比べて大きく変化している。『ジャズ』ではコミュニティの一員に思われる姿の見えない存在、モリスンの言葉で言いかえれば「本そのものがナレーター」だったが、『ラヴ』では「形のある登場人物の声」を使って、登場人物の秘密の多い内なる声の語りを邪魔したかったと言っている。

秘密と部分的な観察だらけの登場人物の内なる語り声は、時間にも空間にも制限されない「私」、つまり生と死の境界線によって、邪魔され観察されることになる。だから「L」と呼ばれる人物には、建設的で破壊的な才能とともに、その名前が表す想像的で変容する性質を提示し象徴させたかった。(『ラヴ』 x-xi)

Roynon はこの Vintage 版の序文については批判的で、「作品の中に L の名前や重要性を示す手掛かりはたっぷりある」のに、なぜ本編を読む前にわずか数ページに収まる要約を読者に提示するのか、と疑問を呈している (Roynon 90)。確かに謎そのものよりも謎解きを優先し読者を導きすぎている感は否めないが、モリスンはそれほどまでに L の存在の重要性を強調したかったのだ。つまり『ラヴ』は「ラヴ」と名付けられた L の物語であり、また Wallace が指摘する通り、言語 (Language) の物語であるとも

言える (Wallace 380)。明確な定義に対抗する曖昧な言語、沈黙やハミングからなる放物線状の言語を、Lは体現しているのだ。Lの語りは、それぞれの人物の主観的な意識/歴史を俯瞰し、一冊の歴史書を校正するような役割を担う。これまでの「歴史」の記述法を破壊し、その中で言葉を与えられなかった人々の歴史を、新たに正しい「曖昧な」言語で描く。歴史を俯瞰するためには時間と空間を超越した存在でなければならない。これまで通常権威的な3人称の語り手が使ってきた「支配者の治安維持的な言語」を拒否する意図を持って、Lは沈黙を提示する。Lは沈黙の言語だ。「死んだ鳥」でも「明確な言語」でもない、沈黙やハミングという言語を使って伝えるのだ。その役割は「ラヴ」と名付けられたLが、愛をもって成し遂げるべきものなのである。

モリスンはさらに「愛は天候、裏切りは雷で、雷があるからこそ天候の存在がわかる」と続ける(『ラヴ』x)。コミュニティに対する裏切りや家族、友人への裏切りを描くことで、その背景にある愛という概念が描かれることになる。これは賢者の放物線が指し示すものだ。Lの名前は聖書中の「コリント人への第1の手紙」第13章のテーマだと小説の後半でようやくLは言う。この手紙のテーマが「愛」で、Lは直接「私の名はラヴ」とは言わず、放物線で語る。「手紙」には続いて「私たちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来るときには、部分的なものはずたれる」(13:9, 10)とあるが、これまで書かれた「歴史」も含め、『ラヴ』の人物たちがそれぞれに意識の内で作ったものは歴史の一部でしかなく、全体を「愛」で俯瞰する者が現れたとき、その真偽が示される。「愛」を体現し、時間も生と死の境界線をも超越したLが、賢者としてその役割を担っていると言えよう。

『ラヴ』は「女たちの両脚は大きく広げられているので、私はハミングする」(『ラヴ』3)で始まる。「語れない」でモリスン自身が自作について述べている通り、モリスンは常に小説の冒頭の文にこだわり続けている。この作品でもやはり作品全体の理解のために冒頭文が重要なキーとなるだろう。ハミングは語りたけれども語る言葉を持たないときにLがすること、つまり語ることとほぼ同じ行為、沈黙ともほぼ同じ行為でもある。「女たちが大っぴらに脚を開く前は、秘密っていうものがあった。守るべき秘密とか、打ち明ける秘密が。今は、どう？ ないわ。あけっぴろげなのが今の風潮。だから私はハミングする」(3)とLは時代を嘆く。秘密とは、打ち明けたり漏らしたりすることによって、言葉が作り出すものでもある。女たちがすべてをさらけ出してしまったら、もう秘密はない。秘密がないということは言葉がないということ、つまり言語は死んでしまった、とLはハミングで示す。しかし死んでしまって必要もなくなった言語をただ無意識に使い、「頭の力を借りずに舌が勝手に動く」ような今の時代、アフロ・アメリカンは「寡黙が意味する重みの美しさを忘れてしまっている」(3)。沈黙はもともと、語るべきことがあるけれど秘密にしている、あるいは語るべきことが語れない、

という心情を内包している。Lは沈黙/ハミングの意味を、埋めてみよ、と「記念講演」の老女のように読者に挑んでいるのだ。

アフロ・アメリカンの文化に深く根差す沈黙については Denard が詳しく述べている。沈黙は文化の違いを表す比喩的表現として使われていると Denard はいう。口承の物語形式と同じく、沈黙は「知恵と抵抗のサインで、アフリカ系アメリカ人の文化では目立って表現力豊かな部分を占めている」(Denard 77)。Lの沈黙は言葉よりも重い、先祖から受け継いだ民族の知恵のサインだ。Harackによれば、Lは「口承文化の中にみられる共通の記憶」を体現しており、その語りは「歴史に対抗する語り」でもある(Harack 271-272)。またこの沈黙は時に「秘密の言語」で表されることもある。ヒードとクリスティンが言葉に困ったときに気持ちを通わせる「ヘイ、セレスチャル」や、大人から秘密を守るための“idagay”を語尾につける、俗に“Pig Latin”と呼ばれる言葉遊びも沈黙の表現といえる。お互いから引き離されたところから始まる2人の波乱万丈の経験は、決して世界史に残るようなものではなく個人的な体験だけれども、「奴隷船に積まれた囚われのアフリカ人の経験に匹敵する」ものであり(Wyatt 95)、「共通の記憶」を表すものでもある。奴隷船の中の人々、プランテーションで労働を強いられる人々の沈黙は、まさに「知恵と抵抗のサイン」であり、これは現代に生きる人々の過去とのつながり、つまり「人生の前後関係」を力強く示すものだろう。

## II. Lの語り

明確さを拒否して放物線を成すLの言語とは曖昧な言葉や沈黙だが、では具体的にどのようなものか、例をいくつかあげてみたい。『ラブ』冒頭のLの語りに、寡黙な自分でも「必要なときには子宮もナイフも止められるくらい強い言葉だって言えた」(『ラブ』3)とある。Lは時間的な制約を受けない語り手であるため、読者はまず「前後関係」が分からず面食らう。それぞれの人物が行う過去の発掘を読み進めるに従って、読者にも徐々に詳細が分かってくる。まず第2章でヴィーダが回想するのが、1971年のコージーの葬儀の場面だ。コージー家の女たちは遺言書をめぐって喧嘩を始め、クリスティンがナイフを持ってヒードに襲いかかろうとしたとき、Lが仲裁に入りわずか2語の言葉で止める。その2語が「言うわよ」(“I’ll tell”)だったことは、第4章のクリスティンの回想でようやく明らかになるが、何を「言うわよ」かが明確に述べられることはない。漏らされたくない秘密は、コージーに起因する性的トラウマが招いた数々の耐え難い経験なのだろうが、最終章でそれぞれが回想するまでヒントもない。

Lは「前後関係」については必ず沈黙する。それはそれぞれの人物の語れない事柄だからであり、その秘密を暴露するのはLの仕事ではない。クリスティンとヒードは子

どものころ、二人にだけわかる符丁“idagay”を使って秘密を共有していたが、「たとえ idagay を使っても決して共有できない恥辱を二人とも抱えていた」ことが、最終章でわかる(190)。廃屋と化したホテルで屋根裏から転落し瀕死の重傷を負ったヒードと、長らく心臓を患っていたクリスティンは、死を目前にして和解に至る。皮肉なことだが、和解のきっかけは、“idagay”で秘密を共有できる友人を持たず、家庭でも社会でも暴力的に扱われてきたジュニアの、無邪気とも思える悪意だった。ヒードは回想する。9歳のヒードは、ホテルでコージーに呼び止められ水着姿の胸を触られる。そのことをクリスティンに話そうとしたが、クリスティンは嘔吐している。嘔吐の原因もコージーに触られたことすらも、ヒードは自分の中にある悪いもののせいだと自分を責める。一方のクリスティンも回想する。ヒードを探してホテルを見上げると、自分の子ども部屋でコージーが自慰をしている。クリスティンが嘔吐したのはこの光景だった。コージーが孫娘である自分を近親相関的な行為に巻き込んでいると感じ、祖父と自分を恥じ、ヒードの顔が見られなかったのだ。“idagay”でも分かち合えない恥辱は2人を自己否定に向かわせる。このような自己否定は、歴史的にアフロ・アメリカンについて回るものだった。民族が共有する過去の経験や、差別をないがしろにする法律が、アフロ・アメリカンのメンタリティを決定づけてしまっていたためだ。幼い2人が抱えた性的トラウマはその象徴であり、その後自己の存在を矮小化し、浮気や愛人関係、放蕩、墮胎など、秘密にしておきたい行為に誘うことになる。「言うわよ」と言われておじけづく要素は、2人にはありすぎた。その言われたくないことの1つが、「子宮を止めた」ことだった。1958年ヒードはホテルの客との浮気で妊娠し、流産する。それを認められずなおもおなかを大きくし続けているとき、Lが「目を覚ましなさい。あなたのオープンは冷えているのよ」(174)と言ったことを、物語の終盤第8章でヒードは回想する。

和解の場面でヒードは浮気については触れるが、回想に見られた詳細は、告白されない。同じく性的トラウマも回想されるのみで、互いへの告白には至らない。2人は「疲れきっていて、おそらく永遠の眠りに向かって漂いながら、罪の誕生については話さない。Idagay を使ってもどうしようもないから」(192)。秘密の符丁すらも役に立たないほどに言葉は死んでいる。しかしその言葉は最終章では一見すると誰の言葉かわからない。2人の会話には引用符がなく、死を前にして、2人の言語は明確な定義を排除し自他の区別をなくす。先祖の「共通の記憶」、連綿と続くアフロ・アメリカンの罪の意識と自己否定が、時間と空間を超えた場所で2人の言葉と溶け合う。2人は共同作業で歴史を書き直しているのだ。そこはLがいる場所でもある。この和解の直後、1人が先に亡くなる。多くの批評家がヒードが先に逝ってしまったと解釈しているし、実際そのように思われるのだが、実は語り手はどちらとも明言していない。モリスンが故意に隠している、という批評家もいる(Li 41)。このように2人の個人的な経験も生死も区別

なく認識され、さらに民族全体の記憶と重ね合わされるとき、Lの役割は完了する。2人の会話の場面には、Lの焼くシナモンパンの匂いが漂う。Schreiberも指摘しているように、Lがハミングしているのだ（Schreiber 155）。Lの「ハミングはみんなを励ます」し、「考えをまとめてあげられる」（『ラヴ』4）。Lの沈黙はその沈黙を聞く者に「前後関係」の構築を促すのだ。

放物線の語りの例をもう1つ挙げてみたい。冒頭でLは、ホテルの海に出没する「ポリスヘッド」なる怪物が、悪さをする者を海に引きずり込んでいくという言い伝えを紹介する。そのポリスヘッドは1942年子どもたちを飲み込んだ。また1958年には花嫁と浮気相手を飲み込み、この年からホテルの衰退が始まったとLは言う。この語りで唯一明確な数字1942年と1958年という年は物語のキーとなる。

1942年に溺れた子どもたちはヒードの兄弟で、その喪も明けないうちにヒードは200ドルでコージーに買われて結婚するが、この結婚はコージー家の人々に軋轢を呼ぶ。近隣のコミュニティの中でも目立って貧乏な家の子もだったヒードを妻にしたのは、コージーの性癖とともに罪悪感と復讐心のためだった。かつてコージーの父親は密告者として仲間を裏切り金を稼いでいた。父が差し出した男が自警団に連行されたとき、幼い少女が泣きながら後を追いかけて、馬の糞に躓いて転んでしまう。大勢の白人に混じって子どもだったコージーもその様子を笑いながら見ていた。この光景は、リンチを笑いながら見ている白人たちの記録写真を読者に思い起こさせるが、コージーにとっても同様だっただろう。ヒードとの結婚はこのときの償いと父親に対する復讐だった。愛情の欠けた結婚に幼いヒードも気づいていたが、ヒードの期待はただクリスティンと一緒に暮らせることにあった。しかしこの結婚でコージー家は外のアメリカ社会と同じ格差社会のミニチュアとなる。コージーの息子と結婚したメイは巡回牧師の娘で、その生活は主に漁師や缶詰工場で働く貧困層に依存していた。しかしホテルで働くメイは夫と子どもよりもコージーの欲望を満たすために奴隷のように働く一方、コージー家に属することで半ばブルジョア化していた。最下層出身のヒードを、ハエを追いかけるように扱うのだ。子育ては放棄したものの、娘のクリスティンを感じ、娘がヒードを邪魔者扱いしたときだけ母親らしく振舞う。クリスティンにとっては祖父の自慰行為とヒードの結婚がオーバーラップし、ヒードを求めながらも許すことができない。新婚旅行から帰って来たヒードが「結婚指輪を貸してあげる」と声をかけたとき、クリスティンは秘密の符丁で「あなたなんか奴隷よ」と侮辱する。後に高校を出たクリスティンは、教養のないヒードの文法間違いを指摘し笑いものにする。クリスティンの肌は明るめだが、ヒードの肌は漆黒だ。一つの中核の中に階層があり、同じ人種の中に格差がある。愛情の欠けた家では格差が広がり、女たちが求めたものはコージーの遺産とブルジョワジーだけだった。親友だった幼い2人に憎しみを植えつけたのが1942年だった。

1958年にポリスヘッドが飲み込んだのは花嫁とその浮気相手で、どうやらこの男はヒードが浮気をした男の兄だったようだ。海の事故で亡くなった兄の遺体を引き取りに来たという男を慰めるうち、「必要とされることと感謝されることの違いを知って」初めて満ち足りた日々を過ごした(172)。だが、約束したはずの駆け落ちもかなわず、おなかに子供だけが残ったが、それも流産してしまう。過去の性的トラウマのせいで自己否定してきたヒードは、妊娠によって「自分は変わっているけれど、孤独ではないし、大切な存在でもある。それを証明する必要なんか無い」と自己を肯定しようとした(173)。だから自己証明のために流産は認められなかったのだ。だが先に述べた通り、Lがヒードの目を覚まし「子宮を止めた」のだった。

このようにLは1942年と1958年の2つの年に「何かがあった」ということを示唆するに留まる。何があったかは、プランテーションたるコージー家で抑圧されていた者たちにそれぞれ語らせるのだ。ポリスヘッドは言語のメタファーとWallaceは言う。死んでしまった言語は「抑圧的なヒエラルキーのために使われるが、それはちょうどポリスヘッドの話が女こどもを抑えるために使われるのと同じ」だからだ(Wallace 383)。ヒエラルキーのための言語は人に有無を言わせない。しかしLの沈黙は人に語らせる。『ラヴ』の枠組みはLの沈黙だ。冒頭の語りは「女たちの両脚は大きく広げられているので、私はハミングする」の一文で始まり、小説の最後もLの語り「そしてハミングする」で終わる(『ラヴ』202)。このハミング/沈黙で囲まれた内容は、コージー家の人々の秘密であり、またコージー家が鏡のように映し出す社会の秘密、あるいはアフロ・アメリカンの「共通の記憶」である。つまりそれは弱者の声が語ることでできなかった歴史で、その書き直しを促すのがLの沈黙の役目なのだ。

1958年という年にはもう1つのしかけがある。女たちが争ったコージーの遺言書は、1958年のホテルのメニューの裏に走り書きされていた。Lが最後によく読者に明かした秘密は、この遺言書を捏造したのはLだったということだ。コージーの本物の遺言書は1964年に書かれ、全財産を愛人のセレスチャルに遺贈するというものだった。コージーの息子に頬に刺さった釣り針を取ってもらった少女が、幼いころのセレスチャルだろう。コージーは馬の糞に躓いて転んだ少女を笑ったことの贖罪としてヒードと結婚したが、セレスチャルもおそらくその贖罪の一部だったのだろう。自分と息子を同一視していたコージーは、セレスチャルを免罪符とし、遺産を残したのだ。Lがコージーの遺言書の内容を知ったのは1971年になってからのことだった。「7年間の自己憐憫と良心の呵責に見えたものは、実は復讐だったのだ」とLは気づく(201)。1958年のヒードの妊娠は浮気によるものとコージーは知っていたのだ。コージーとホテルのために奴隷のように働いた家族も、コージーにとってはホテルを衰退させた原因にすぎない。1960年代は各地で人種暴動が頻発し、コージーのリゾートにもその波が押し寄せてい

た。ブルジョアとなっていたコージーは黒人の裏切り者とみなされ、通りは罵声を浴びせる子どもたちの暴挙や放火事件であふれていた。メイはKKKよりも黒人運動家を恐れ、ホテルの権利書などを浜辺に埋めてしまうほどに狂ってしまった。保安官はホテルをたたむようにコージーを脅した。ホテル衰退の要因は時代だったのだが、コージーは「奴隷」のせいにしたのだ。しかし家族に何一つ残そうとしないのは正しいことではないとLは考え、遺言書の捏造に思い至る。Lが相続人に指定した“sweet Cosey child”は争いの種になる。1958年のメニューに走り書きした「コージーのかわいい子」であれば、ヒードが妊娠した子どもと受け取られるかもしれない。それを知らないクリスティンはコージーの血を引くのは唯一自分だけと言うだろう。妊娠を知られたくないヒードは、自分のことだと主張するはずだ。女たちは虎視眈々と相続人の権利を狙い、敵意をむき出しにしたまま同居を始める。だが逆にそれは「つながったままにいる理由を与えた」とLは思う(201)。2人で共に暮らしていればポリスヘッドが狙う自暴自棄な女やだらしのない子供にならずに済む。つまり家から無一文で放り出され、言語によって支配される弱者になってしまう危険から逃れられる。Lはこうして2人を守ろうとした。

しかしそれよりも大きな秘密は、その遺言書を使って家族を救うためにコージーを毒殺したことである。だがLの告白は曖昧だ。

解決方法は1つしかなかった。もし自分が何をしているかわかっているのなら、ジギタリスはすぐに効くし、そんなに長くは苦しめない。彼は考えることに向いてなかったし、81歳だからこれから良くなることもない。度胸がいることだったけど、葬儀屋がドアをノックするずっと前に、あの悪意あるものを破いたわ。私のメニューはうまくいった。2人がつながったままにいる理由を与えたし、たぶん言葉がどんなに大切かわかったと思うわ。もし言葉が適切に使われれば、自暴自棄な女たちや育て方を間違った聞き分けのない子どもたちを狙う、ポリスヘッドの注意をそらすことができる。難しいことだけど、それをした人を私は少なくとも1人知っている。その人はポリスヘッドのつば広の帽子と水の滴るひげの真下に立ち、追い払ったの、たった一言で——歌だったかしら？(201)

本物の遺言書を破り捨て偽物を使ったこととジギタリスを使った毒殺についての告白の仕方が大きく異なることに読者は気づく。コージー殺しがあまりにも曖昧な表現なのはなぜだろうか。コージーに対する愛情はLの語りに見え隠れしている。だがプランテーションの主人を愛し殺すことは、Lにとって最大の秘密だろう。『ラヴ』はこの点でモリスンの小説『ビラヴィド』(*Beloved* 1987)と対をなすものと言える。『ビラヴィド』の子殺しは『ラヴ』のコージー殺しとして繰り返される。『ビラヴィド』は、娘が奴隷

にされることを拒絶し、娘を愛するがゆえに殺してしまう母親の物語だ。一方Lはクリスティンとヒードを守るために愛する者を殺した。『ビラヴィド』のタイトルは「愛された者」を意味する娘の墓碑銘だが、『ラヴ』は愛するという行為をするLの名前であり、その行為自体を意味する、あるいは「愛せよ」と命令するタイトルでもある。BousonとHarackが指摘するように、『ビラヴィド』の受動的な愛は『ラヴ』の能動的な愛へと引き継がれる。自己否定を繰り返す「共通の記憶」は「抑圧的な言語」によって作り出されたものだ。それに対抗する手段は沈黙の言語であり、その沈黙を聞く者をLは自己肯定へと導く。言葉で愛を明確に描くことは不可能だから、Lはコージーも2人の女たちのことも「愛」という言葉を使って語ることはない。自分の名前すら「ラヴ」だとは明言しない。Lの愛を描けるのは、曖昧な毒殺の告白と、偽の遺言書に書いた「コージーのかわいい子」という表現だけだった。

ポリスヘッドを追い払った女はセレスチャルだとWallaceは言う(Wallace 382)。セレスチャルはモリスンの小説にしばしば登場する孤高の女性の1人だ。『タールベイビー』(Tar Baby 1981)の卵を抱えた黄色いドレスの女性に代表される、セリフはないけれどもその堂々とした姿に登場人物たちが畏怖の念を抱くタイプの女性だ。セレスチャルは娼婦だが、「ハイ、セレスチャル」と冷やかしの声をかける男たちを無視し、決して俯かない。その沈黙と気高さは、抑圧的な言語としてのポリスヘッドの狩りの的にはならなかった。Lも同じく孤高の人だ。能動的に愛し、沈黙で人を誘導する賢者である。わずか一言「言うわよ」で人を動かし、憎みあう者たちをハミングで和解に導くのだ。

『ラヴ』の語り手Lは既存の抑圧的な言語に沈黙で対抗する賢者だった。さらにこの賢者は愛を体現する者でもあった。この愛はどこからくるものだろうか。Harack(271)とBouson(360)はLを先祖的母親たる人物と言っているが、私はマミーと言いたい。賢者の上からの視線ではなく、マミーの底辺から見上げる視点で語られる物語が、『ラヴ』の特徴ではないだろうか。賢者たる者が先祖的母親ならばそこには権威が含まれる可能性があり、言葉の圧力も生じる恐れがある。しかしマミーは常に沈黙をもって抑圧に対抗する者の象徴となる。賢者とマミーという通常相いれないカテゴリーの融解は、明確な定義を拒否する語りを反映していると言えよう。

マミーは古くから様々な小説や映画に登場する。白人家庭で白人の子どもたちの乳母をしながら家事をこなす黒人女性で、自分の子どもよりも白人の子どもを優先し、愛情たっぷりに育てる姿が、アメリカ文化史の中で一般的に受け入れられている。マミーは子どもたちには厳しくマナーを教えたり、率直な物言いをしているようだが、白人家庭の全てを知りながら家族の秘密は口外せず、家族を守るためでなければ意見も言わない。ブルジョア化したコージー家でLは幼い2人を守る。父親を亡くしたクリスティンを

ベッドに入れてやり、ヒードのために、おそらくメイの悪意により結婚式当日まで隠されていたウェディングドレスのサイズを調整する。クリスティンの卒業パーティで侮辱されたヒードを打ったコージーに「どんなことがあっても、二度とあの子に手を上げないでください。もし上げたら、私出ていきます」(『ラヴ』140)と言い、主人を諭す。幼いクリスティンとヒードを助け、大人になっていがみ合うふたりを仲裁する。このように全てを見聞きしながら何も語らずハミングするLは、まさに賢者たるマミーだ。「コージーのかわいい子」に対する口数の少ない言葉の威力は、放物線を描きながらあるべき姿へと2人を誘う。

小説全体の構成を見るとLの語りが何を隠し何を守ろうとしていたかわかる。Lの語りは小説の最初と最後にあり、ハミングで全体を囲みながら、コージー家の秘密を守る。また第4章と第6章の終わりでLは語るが、この2つの章ではクリスティンとヒードが過去を回想している。「コージーのかわいい子」を守るために、Lは語るのだ。またLはプランテーションの子どもたちの世話もする。ヒードとクリスティンの過去をなぞるような貧しく放埒な人物ジュニアにも死後のLは温かいまなざしを向ける。第3章のジュニアの回想の後にも、Lは語っている。ジュニアも、コージーの最初の妻も、セレスチャルも、すべてプランテーションの子として、Lはここで守るのだ。

## おわりに

エッセイ「語れない」でも、モリスンは常に歴史をバックに語る。奴隷制はモリスンの中で永遠に忘れてはならない黒人のルーツの問題だ。この奴隷制という「共通の記憶」を、Lの語りはそれぞれの人物から、さらには読者からも引き出そうとする。小説ではそれをあえて不明瞭に、暗喩で描く。Lの語りは奴隷制の暗喩だ。先に述べたように、モリスンの小説は常に唐突な始まり方をするが、自作の冒頭文についてモリスンは「実際唐突で、しかも唐突に見えなければならない。その場所の情報提供者もいない。読者は捕まえられ、引っ張られ、まったくの見知らぬ環境に投げ込まれる」(「語れない」32)ようにしたかったと言っている。それは「ちょうど奴隷と同じように1つの場所から別の場所へ、どこにしようと別の場所へ、準備も防御もなく引っ立てられる」(32)体験を読者にさせたかったからだ。読者をこのような環境におくことは、決して文学的に行う復讐などではなく、賢者の務めであろう。賢者は沈黙し、読者は「記念講演」の若者のように、それを読みとり、考え、歴史/物語(history/story)を再構築する義務があるのだ。読者の色は関係ない。誰もが暗闇の中に置かれ、まるで盲目の老女のような状態で、賢者のように考えなければならない。歴史の語り手は常に歴史を動かした側から描くが、歴史から抹消された声は、沈黙のハミングの中から読者/現代人が読み取

るしかない。だがそれほど難しいことではないだろう。下から支えてくれるマミーの声が読者に「考えさせて」くれるからだ。コージー殺しと遺言書の謎ときはできたものの、小説には解決されない謎が山ほどある。最後の場面でコージーの墓にやってきたセレスチャルは死んでいるのか、社会の底辺で生きてきたジュニアはこれからどうなるのか、ローメンはジュニアを救えるのか、読後も読者は答えを見つけられない。オープンエンドはLの狙い通りだ。これは読者の協力で埋めなければならない沈黙であろう。

本稿の引用はすべて筆者の拙訳とする。

#### 引用・参考文献

- Bouson, J. Brooks. "Uncovering 'the Beloved' in the Warring and Lawless Women in Toni Morrison's *Love*." *Midwest Quarterly*, 49. 4 (2008), pp. 358-373.
- Denard, Carolyn. "'Some to Hold, Some to Tell': Secrets and the Trope of Silence in *Love*." *Toni Morrison: Paradise, Love, A Mercy*. Lucille P. Fult ed. New York: Bloomsburg, 2013, pp. 77-91.
- Gallego, Mar. "*Love* and the Survival of the Black Community." *The Cambridge Companion to Toni Morrison*. Ed. Justine Tally. New York: Cambridge UP, 2007, pp. 92-100.
- Harack, Katrina. "'Not Even in the Language They Had Invented for Secrets': Trauma, Memory, and Re-Witnessing in Toni Morrison's *Love*." *The Mississippi Quarterly*, 66. 2 (2013), pp. 255-278.
- Humann, Heather Duerre. "Family and Violence in *Love*." *Women's Studies*. 43 (2014), pp. 246-262.
- Li, Stephnie. "Paradise Lost: Reconciling the Semiotic and Symbolic in Toni Morrison's *Love*." *Studies in the Literary Imagination*, 47. 1 (Spring 2014), pp. 27-47.
- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Alfred A. Knopf, 1987.
- \_\_\_\_\_. *Love*. New York: Vintage Books, 2005.
- \_\_\_\_\_. "Nobel Lecture 1993." *Toni Morrison: Critical and Theoretical Approaches*. Ed. Nancy J. Peterson. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1997, pp. 267-273.
- \_\_\_\_\_. *Tar Baby*. New York: Penguin, 1982.
- \_\_\_\_\_. "Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature." *Michigan Quarterly Review*. 28. 1 (1989), pp. 1-34.
- Roynon, Tessa. "Lobbying the Reader: Toni Morrison's recent forewords to her novels." *European Journal of American Culture*. 33. 2 (2014), pp. 85-96.
- Schreiber, Evelyn Jaffe. *Race, Trauma, and Home in the Novels of Toni Morrison*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2013.
- Wallace, Cynthia R. "L as Language: *Love* and Ethics." *African American Review*, 47. 2-3 (2014), pp. 375-390.
- Wyatt, Jean. *Love and Narrative Form in Toni Morrison's Later Novels*. Athens: U of Georgia P, 2017.

# ジョゼフ・コンラッド

## 『西欧人の眼に』における語りの構造について

村瀬 暁 生

### A Study of Narrative Structure in *Under Western Eyes*

Akio MURASE

#### 要 旨

ジョゼフ・コンラッドの小説『西欧人の眼に』の語り手である言語学教師の役割を、語られる内容との関連において考察した。この作品は帝政ロシアというイギリスとは異なる政治体制で起こった出来事を扱っており、語り手は専制政治の下では知られることのなかった主人公ラズーモフの真実の物語を、語ることでできない彼に代わって、その日記を翻訳するという形で明らかにする役割を担っている。また語り手のロシア人に対して抱く距離は、作者コンラッド自身の、ロシアという主題に対して感じる距離でもあり、語り手と作者の立場は重ね合わされていると思われる。さらにこの語り手はラズーモフの日記を読む存在でもあって、ロシア人の物語を読むイギリスの読者が、語り手の形をとって、作品内に組み込まれていると言える。それは、ロシアという異国的な題材を扱ったこの作品が、イギリスの読者に受け入れられるかというコンラッドの不安が反映されたものである。このような構造は、コンラッドがこの作品を書く際の、なじみのないロシア人を描くという困難さがもたらしたものであり、結果として語り手の役割には、作者の立場と読者の立場両方が投影されたものになったという結論に達した。

キーワード：物語の語り手、ロシア、読者、作者

ジョゼフ・コンラッド Joseph Conrad はポーランドに生まれたが、船乗りとしての経験を生かして、英語で小説を書くようになり、海洋小説で人気と評価を得た作家である。その後、海洋小説以外の作品を書くようになり、ここで取り上げる『西欧人の眼に』*Under Western Eyes* は、彼のいわゆる政治小説と呼ばれる『ノストローモ』*Nostromo*、『密偵』*The Secret Agent* に続く三番目の作品となる。この作品では帝政ロシアを舞台に、主人公のラズーモフという青年が、専制政治と、それに対抗する革命運動に意に添わず巻き込まれる顛末が描かれる。話の中心となるのはラズーモフであるが、その物語はイギリス人の老言語学教師（名前は明らかにされない）によって語られる、という形

式になっている。コンラッドの作品においては、語られる内容と語りの方が密接な関係を持っており、この『西欧人の眼に』においても、語り手の設定は、作品の内容と深く関連したものであると思われる。以下、この作品の語りの構造を見ていくことで、語り手の老言語学教師がどのような役割を果たしているのかを見ていきたい。

まず、この作品の内容を見ていこう。大学生のラズーモフは、身寄りのない青年で、政府の懸賞論文を書き、メダルをとることで、立身出世を目指している。そこにハルディンと言う革命思想の持ち主で、ロシア高官の爆殺事件の実行者に、言われのない信頼を押し付けられ、彼をかくまい、さらに逃走を手伝ってくれるように頼まれる。革命の思想には与しないラズーモフは、厄介払いをしようとして、いったんは逃亡の手助けをしようとする。ハルディンに言われるまま、ジーマニッチという馬そりを持つ男に連絡をとろうとするが、彼は酔いつぶれていて、話を通じない。そこでラズーモフは、後見人のK侯爵の助けを借り、専制政治の手先でもあるT將軍のもとに行き、ハルディンを裏切り、密告する。ハルディンは捕まり、処刑されることになる。ラズーモフはハルディンと特に親しかったわけではなく、彼からの一方的な信頼ではあるのだが、其他人から寄せられた信頼を裏切るという行為が、後に彼に重くのしかかることになる。

この事件により、政府側に疑いの眼を向けられているという恐怖に怯えるラズーモフは、顧問官ミクーリンとの面会后、スイスのジュネーブに集まる革命家たちの動静を探るスパイとして送り込まれる。舞台はジュネーブに移り、彼は革命の英雄という触れ込みで、革命家仲間に歓迎されることになる。しかしそこで出会うのは、ハルディンの母親と、妹のナタリアであり、ナタリアに兄の死の真実を教えてほしいと頼まれるラズーモフは、苦悩することになる。語り手となる老言語学教師は、ここで初めて登場し、ハルディンの母親と妹のナタリアと知り合いになり、ジュネーブにやってきたラズーモフとも関わりをもつようになる。ナタリアに対して真実を隠すことに苦しむラズーモフは、最終的に自らの裏切りを革命家たちに告白し、破滅することになる。

以上がこの作品の簡単な要約であるが、コンラッドがこのようなロシアについての題材を取り上げた理由としては、彼がポーランド出身であることが挙げられている。ただし、コンラッドが生まれたときには、彼の祖国はロシアら列強により分割され、地図上からその姿を消していた。父親アポロがロシアに対する抵抗運動に関わっていたこともあり、伝記的に見るとコンラッドにとって、ロシアという国には浅からぬ因縁があると言える。また、この小説は、題名にもあるように、西欧人の眼から見たロシアの専制政治と、ロシア人という構図になっている。これはロシアという専制政治に支配される国での物語を紹介することで、当時のイギリスの読者に対して、イギリスとは違う政治体制や、国民性などを示すことになっている。前作『密偵』では、ロンドンを舞台に、暗躍する革命家の世界をスリラー的に描くことで、イギリスの中に入りこんでくる外国

的要素をとりあげたが、それに続く本作では、舞台を帝政ロシアに移して、革命運動を直接描くことになった。

このように、コンラッドはイギリスの読者が知らない、ヨーロッパとは異なる舞台を描く小説家であった。元々、彼は船乗りであり、その経験を生かした海洋小説の作者として、航海中の船の上での生活、アジアの島々や、アフリカの奥地などを舞台にした物語を語ることで、人気を得て注目されたのである。昔から、遠い国に赴いた旅行者の話が珍重されるように、読者の知らない場所を語れるというのは小説家としての大きな強みのはずである。しかし、それと同時にあまりに話が荒唐無稽になると、かえって読者に話の内容を信じてもらえなくなるという危険性もはらんでいる。そこでコンラッドは、読者の知らない世界を、小説として信じ込ませる手段として、語りの方に工夫をこらした。『闇の奥』*Heart of Darkness*では、語り手にマーロウという人物を設定して、彼がアフリカで体験した話を、仲間に向かって話すという形をとっている。さらに『ロード・ジム』*Lord Jim*でも再びマーロウが登場し、ジムという若い船乗りの悲劇を語る。これらの作品では、マーロウの一人称の語りによって、彼の語れることと、語れないことを区別することができ、また語りの対象と距離をとることで、アイロニカルな効果をあげることに成功している<sup>(1)</sup>。このように過去の作品にも明らかのように、コンラッドにとって話の内容と、語り方や語り手の問題は、密接に絡み合った不可分の問題であると言えよう。

『西欧人の眼に』では、コンラッドはイギリスとは異なったロシアの話を語る際に、全体の語り手として、イギリス人の老言語学教師を採用した。彼はスイスのジュネーブに滞在中、ハルディンの妹に英語を教えるというきっかけから、当地で活動するロシアの革命家たちや、ラズーモフとも知り合い、その物語に関与していくという体裁をとっている。これが題名にもなっている、『西洋人の眼に』映ったロシアとロシア人という作品の大枠の構造になっているのだ。まずコンラッドの頭の中にあっただのは、自らが語る話を、読者にその内容を信じ込ませることであっただけに違いない。そこで西欧とは政治体制も、民族性も異なるロシア人の物語を読者に受け入れやすくするために、ロシアとラズーモフの物語と、西欧人読者との間に挟み込まれたのが、この老言語学教師という存在と言えそうだ。語り手自身も作中で、読者に対する話の信じやすさという点を、度々気にしている。彼が言うところによると、この話は、「西欧人に聞いてもらうためのロシアの物語だからである。すでにどこかで述べたことであるが、シニシズム、残酷さ、倫理の欠如といった話のもとより、倫理的苦悩といった話ですら、もはや西欧人の耳には合わないものになっている。」<sup>(2)</sup>からである。

ゆえに話の真実性を確実にするために、この言語学教師は、ラズーモフ本人が書き記

した文章を翻訳する、という形をとることになる。一連の出来事が終わった後に、彼はラズーモフの書いた日記を手に入れ、その日記をもとにして、ラズーモフについての真実の物語を語っていくことになるのだ。つまり、この物語の出所を整理すると、(1)ジュネーブでの言語学教師が実際にハルディン母娘や革命家連中、そしてラズーモフに会った体験をもとにした内容、(2)ラズーモフが書き残した日記の内容、この二つからこの作品は成り立っている。この日記はラズーモフが誰に読ませるものでもなく書いたものである。これはラズーモフのみが知る内容のことができる内容であって、ハルディンとの邂逅、自らの裏切りと、その死の真相、そしてその時々々のラズーモフの心情などが語られる、この物語のもととなる一次資料である。語り手はこの日記から、他人には知られることのない、ラズーモフのドラマについて知り、それを物語として再構成したという形になっている。彼が言語学教師であるという設定も、ロシア語が理解できるということが必要であったからである。

ただこの語り手は、このように作品中に登場人物として現れる場合によくあるように、もちろん絶対的な語り手というわけではない。一人称の語り手はしばしば、信用できない存在として、小説の中では使われるが、この作品の場合は語られる内容について信頼して読んでいって構わないようである。というのも、この言語学教師は、たびたび自らの能力の限界を口にするからである。自分には物語を作る創造力もないし、ロシア人の民族性や物の考え方には理解しがたい所があると述べる。彼はナタリア・ハルディンと話していても、「あらゆる問題を、何やら神秘的な表現を使う事で、理解可能な地平から引き揚げてしまうこういった傾向は、いかにもロシア的なものだった。」<sup>(4)</sup>と感じてしまう。しかし、このような言い訳にもかかわらず、読者はこの作品を読み進めていくにあたって、話の内容を理解することに関しては、あまり困難を感じることはないのではないか。特にラズーモフの日記に基づいた箇所については、時々挿入される、これが老言語学教師によって語り直された物語だという事実を、読者は意識せずに、話に没入して読んでいくことが十分可能である。ただジュネーブでの、語り手が実際に見聞きした場面に話に移ると、語り手の判断力に対していくらか留保をつけることが必要となる。

例えば、語り手の老言語学教師の抱いている偏見をあえて挙げるとすると、彼は若いナタリアに対して好意を抱いており、彼女に接近していくラズーモフ（彼はハンサムな青年である）に対して、嫉妬の気持ちを抱いているようだ。しかしそれらは語り手が公言するものであり、この作品の語られる内容を隠ぺいしたり、歪めていたりするかといえば、そこまでの効果は意図されていないと思える。ロシア人をアイロニカルに描くという点では、ジュネーブの場面で登場する革命家の中には数人、そのような人物がいる。偉大なフェミニストとして登場する、ピーター・イヴァノヴィッチという人物や、革命家の後ろ盾となるマダム・ド・Sという女性には、皮肉をもって、そして誇張されて描

かれる傾向が強く出ている<sup>(4)</sup>。一方、ラズーモフとハルディン母娘については、語り手は非常に真摯に、そして好意的に取り扱っているように思える。ゆえに語られる内容に関して、語り手が何かを意図的に、あるいは無意識的に隠そうとはしていないと言えるだろう。ラズーモフの日記に記された内容も、その真偽に関しては、何ら疑いがかけられるものではなく、この作品の真実の説明として扱われている。またロシア人についてのわからなさも、語り手本人があらかじめ繰り返し表明している以上、語りによってもたらされる効果とは認められない。つまり、過去のマーロウという語り手を使って成功した『闇の奥』や『ロード・ジム』とは、また違った役割をこの語り手は受け持っているように思われるのだ。

それではこの作品におけるこの老言語学教師の役割とはどんなものであると言えるだろうか。それには言語学教師の語りのもととなるラズーモフについての物語が、どのような性格のものであったかをまず考えてみたい。ラズーモフがハルディンに信頼を寄せられ、それを裏切った経緯に関する真相は、ハルディンが死んでしまった以上、本来誰も知るはずのない内容である。ラズーモフは真実が明るみに出ることを恐れるはするが、専制政治の手先である顧問官ミクーリンも、真実を正確には突き止めることはできないはずである。ただラズーモフは事件の真相や、その時々自分の感情や印象を、日記に克明に書き記している。この日記は誰に読ませるつもりのものでないようで、語り手はこの日記について、「彼がそれを誰かに読んでもらうことを期待していたとは私にはとても信じられない。どうやら、記録を残すという行為には、人間の本性に潜む不可思議な衝動が働いているものらしい。」<sup>(5)</sup>と記している。日記を書くという行為は、直接、それを読む読者を想定した行為ではない。つまり、行き先のない言葉を書きつけるものであり、または自分自身が読むための行為であると言えよう。老言語学教師はラズーモフが日記を書いた理由について、言葉には人の心を慰める力があると述べ、安らぎを得るためであろうと推察している。しかし書いたものとして残しておくことで、他人に読まれる可能性を残すことになり、結局は最終的にこの物語が生まれるものになる。この日記の存在はこの作品を成立させるための便宜的な手法であるとはいえ、疑われることのない真実の説明として、この作品の根底を成していると言えよう。

本来ラズーモフは社交的ではなく、言葉数の少ない青年であったと、度々作品中に記されている。その無口な点が、かえって考え深げに見え、他人から思いがけない信頼を寄せられ、打ち明け話をされる原因となってしまう。ハルディンに助けを求められるのも、そういった理由からである。つまり、元々ラズーモフは他人を相手に語りたがるタイプではない。その代わり彼は自分一人で机に向かって、文字に書くタイプなのである。当初彼はメダルをとるために国家のために論文を書く存在として、この作品に登場して

いた。その彼の性質が、日記を書くという孤独な作業にもつながっていくのであろう。また彼は人間関係も希薄な青年である。彼には親はもとより、家族も身寄りもない、孤独な存在として設定されている。ゆえに彼はロシアと言う国家に身を寄せるしかない存在なのである。彼には親密な友人も登場しないし、苦しみを打ち明けられる人物もない。ジーミアニッチを訪ねた帰り、彼はこう呟く。「おれには何もない。おれには精神的な隠れ家さえない。いったいおれは誰のところへこの話を持っていけるというのか。」彼は誰のところへもいけないのであり、誰かに真実を語ることもできないのである。要するに彼は語る相手もない、語り手となるには不適格な人物であるのだ。またハルディン事件の真相は、それが知られた場合、専制政治の恐怖に彼を巻き込むことになり、将来の出世どころか、身の安全をも脅かすことになる。その点からも彼は、ハルディンとの関わりについての真実の物語を、誰にも語れない人物なのである。ゆえに日記に書くことしかできないのである。

そうすると本来語られないのが、この帝政ロシアで起こったハルディン事件の顛末なのである。つまり、この作品で描かれる専制政治と革命思想が支配するロシアで起こったラズーモフの物語は、本来封殺されるものであったのだ。ここでロシアとは真実の物語を封じ込める場として機能していると考えられよう。専制政治は言論を統制し、自分の思想をおおっぴらには口にできない。ラズーモフが論文を書く動機も、専制政治の気に入るような内容を書くことで、身の安定と、出世の道を計るためのものであった。一方革命家の言葉は理想的、抽象的で、現実にはおよそ実現しそうな空虚なものである。ラズーモフは革命家の言葉には共感しない。ハルディンを密告した後、部屋に帰ったラズーモフは、彼を欺くために、何とかそれらしい会話をつづけなくてはならないが、それは「手当たり次第の言葉」であり、彼にとって何ら真実味を持たない言葉であるのだ。またその後ジュネーブに派遣され、スパイとして働く際の、革命家たち相手の彼の言葉も、本音をそのまま口にはできず、相手に合わせた会話をやりとりするのみである。いったん真実を隠蔽したあとは、彼はもはや真実の言葉を語れなくなるのだ。ただし、彼はその本当の物語を胸に秘めておいて、平気ではいられない人物である。日記を書いたという事がその証拠であり、その行為は真実を客観的なものとして残しておきたいという彼の願いを表していると言えよう。その点が、彼が他人の信頼を裏切った人物であるというだけでなく、状況に否応なく巻き込まれた悲劇的キャラクターであると言える所以である。

しかし、本来は表に出るはずのない真実の物語が、明かされていくというのが、この作品の主な内容である。それではラズーモフはどのようにして話したくない内容を明らかにせざるを得ないようになっていったのか。彼はジュネーブでスパイとして、革命家のサークルの中で、うまく立ち回り、フェミニストの有名作家であるピョートル・イヴァ

ノヴィッチや、女性革命家のソフィア・アントノヴナと革命運動について、会話を繰り広げる。スパイとして嘘の会話をするので、ラズーモフは自らの存在を何とか正当化させる。そんな彼の落ち着きを崩すのが、ナタリア・ハルディンの存在である。彼女は人に信頼をおこさせるような眼をしていると、再三描かれている。つまり、彼女の存在がラズーモフから、話を引き出し、真実を語るように仕向けているのである。本来語るという行為は、誰かに向って行われるものであるが、それが人に明かせないような真実ということになると、その身の危険に見合うぐらいの信頼が相手になければならない。その信頼をもたらす相手がナタリア・ハルディンである。彼女は、孤独のうちに沈潜していた、真実を語ることのできないラズーモフを、他人とのつながりへと導く役割を果たしているのである。

ナタリア・ハルディンの眼が信頼を起こさせるということであるが、この『西欧人の眼に』という作品では、人物の眼が孤独なラズーモフに他人とのつながりを強制する役割を果たしている。その眼は信頼に満ちた女性の眼とは限らない。専制政治がもたらす恐怖も、眼のイメージをもって象徴されている。ハルディンの件で彼が相談に行く、専制政治の無慈悲さを象徴する存在である T 将軍は、その力を彼の「ぎょろ目」によって、ラズーモフに痛感させる。もう一人顧問官ミクーリンの眼も同様である。ミクーリンとの面会の後、自室に帰ったラズーモフは二人の眼を思い出し、次のようにおびえる。「T 将軍とミクーリン顧問官の眼が二つずつ並んで彼をじっと見つめていた。これぞロシア帝国の官僚か！」と。人物の眼の力を通して、専制政治はその力を彼に押し付けてくる。他者の眼が、孤独な存在から彼を引き出す力を及ぼしてくるのだ。この眼の力によって、結局彼は専制政治のスパイとなるしか、生き延びる道を得られなくなるのだし、また最後の場面で革命家達の前で、真相を暴露せざるを得なくなるのである。

結局孤独なラズーモフから真実の語りを引き出すのは、女性であるナタリア・ハルディンの信頼に満ちた眼である。ここで女性に対して真実を告げるというモチーフに関しては、『闇の奥』の最後のシーンが想起されよう。そこでは語り手マーロウはクルツの婚約者に対して、死に際のクルツが残した The horror! The horror! という最後の言葉を告げることはできない。彼は婚約者が望むような答えをして、女性は恐ろしい真実から排除されるという結果にこの作品はなっている。しかし、『西欧人の眼に』では異なる。マーロウとは違い、ラズーモフは事件の当事者であるため、真実を語らざるをえないのだ。日記の最後では、それまで誰にあてたものでもなかったはずの文章が、明らかにナタリアに向かって書かれている。

「あなたの眼のことを、この世で最も信頼に満ちた眼だ、とお兄さんはもはや死者と何ら変わるものなくなったときに、あなたのことに触れて行ったのです。私はあ

なたの眼の中を覗き込みました。そして、それで充分だったのです。』<sup>(6)</sup>

つまり、他者の信頼に応えられるようになったラズーモフは、最後になってついに自らの書くものの読み手を見つけ出したのである。それがナタリア・ハルディンであり、読み手を見つけ出すことで、彼はついに語るできるようになったのである。この作品は語る相手がいないと、語ることはできないという、まっとうな事実を表しているのだ。専制政治のもとにおける孤独な存在というラズーモフの特殊な設定は、語らないし、語ることをできない人間を、極端な状況の中でキャラクター化したものである。この話は、そのような存在が、ついに他人と通じ合い、真実を語るできるようになる物語でもあるのだ。

それではここでまた老言語学教師の役割に戻ろう。ラズーモフが語れるようになるのは、作品の最終盤のことになる。それも当然で、真実を語ることは自らの信用を失墜させ、命の危険まで及ぶことになる。何せラズーモフの告白は聴き手に大きな悲嘆をもたらす（ハルディン母娘の場合）し、あるいは、話を聞いたものからひどい暴力をふるわれることになる（警官殺しのニキータの場合）。彼は後者からの暴力によって、耳が聞こえなくなり、電車で轢かれて廃人同然となる。命は何とかとりとめるが、もはや語り手にはなりえない。真実を語った瞬間に、彼は語り手としての能力を失うのだ。そこでラズーモフの代わりに語り手として登場するのが、イギリス人老言語学教師ということになる。この作品は語ることをできなくなった事件の主人公の代わりに、老言語学教師が語る作品であると言えよう。

そもそも、ジュネーブのロシア人サークルにとって、この言語学教師は、異質であり、余計ともいえる存在である。彼がロシア人革命家達の話に関わる必要性としては、外国人の眼から彼らを見ることによって、アイロニカルな効果を出す目的はコンラッドにはあっただろう。また老言語学教師から見たラズーモフの印象も、日記の中の彼とは違ったものであり、そのような効果も作者のもくろみにあったのだろう。しかし基本的に彼の存在は、彼らロシア人にとってよそ者であり、場違いなものである。そもそも老言語学教師とラズーモフの最初の出会いからして、その場違い感は強い。ハルディン嬢の紹介によって引き合わされた両者は、二人きりで会話することになるが、そこでのラズーモフの反応は次のようである。

「あなたはそんな話を用意して、地から湧いたように私の前に立つわけですか。いったいあなたは何者なのです。こんなことはもう我慢なりません。なぜなんです？ 何のためなんです？（中略）ロシアで起きている忌々しい状況であろうと何であろう

と、そんなことがあなたに、いったいどういう関係があるのですか？」<sup>(7)</sup>

実際、ラズーモフの言う通り、彼にはロシアの状況など関係ないことであり、彼はおせっかいな語り手と言える。もちろんナタリアに対する好意と、ハンサムな若いラズーモフに対する嫉妬があるとはいえ、彼の存在は出しゃばりに映る。最後のラズーモフのナタリアへの劇的な告白の場面でも、「わたしは二人を観察した。それ以外にすることはなかったのだ。私の存在はこの二人から完全に忘れ去られていたので、私としては身動きすることさえはばかられた。」という状況である。最後にはラズーモフは、「どうしてこの老人はこんなところにいるのだろうか？」とまで呟く。やはり彼は場違いな闖入者である語り手なのだ。

コンラッドは後にこの作品につけた Author's Note の中で、このイギリス人言語教師の採用について、こう述べている。この語り手は今までひどく批判されてきたが、「彼は私にとって有用な人物であった。それゆえ読者にとっても、コメンテーターとして、そして物語を進行させる狂言回しとして、有用なはずだと信じている。物語に現実感を出したいと願っていた作者にとって、ジュネーブでの諸事件の目撃者を設定することは不可欠に思われたからである。」つまり話を円滑に進める役割として、そして読者にとって馴染みのない話を読ませるにあたって、「現実感」を演出させる必要があったということである。ゆえに最後のクライマックスとなるラズーモフとハルディン嬢のシーンは、目撃者が必要となる。またジュネーブの町を歩いていくラズーモフを、語り手は度々見かける。ラズーモフと直接会話する機会はなくとも、彼を目撃することで、彼について語る権利を手に入れるのである。ラズーモフの姿をわずかでも実際に眼にすることで、彼はラズーモフが語る権利を持っていた物語を、傍観者として引き継いでいくのである。

このようにラズーモフにしてみれば、老言語学教師はおせっかいな語り手である。彼にしてみれば、自分の物語の真実を語るように頼んだわけでもないからである。しかし彼に代わって真実を伝えてくれるという点では、この語り手はラズーモフにとって大きな助けとなっている。ハルディンの死に関しては、その真相がわからないため、ジュネーブのロシア人革命家らの間では様々な噂話が流通している。このようないろいろなヴァージョンの話が存在する中で、誤りの話を否定し、真実の物語を示すという役割を、語り手は持っているのだ。エドワード・サイドはコンラッドの語り手はライヴアルとなる他の語り手を仮定したものだと言及している<sup>(8)</sup>。対象に関して様々な人が語る、複数の語りの中から、唯一の真実の内容の語りを経験的に作りだしていくのが、老言語学教師の役割なのである。そして、この語り手が、話の対象となるロシアの問題やラズーモフに対して、当事者ではなく、深い関わりを持たないという点こそが、客観的な真実の語り

呈示できることにつながっていると考えられる。

またこのイギリス人教師は自らが語る話の対象や内容について、十分な理解をもっていない。しかし理解していないからこそ、彼は語れるのである。つまり、彼はロシア人についても、ラズーモフの物語についても、理解するというより、紹介する役割のみ受け持っているのである。真剣な悲劇を理解力に欠ける凡庸な眼が語るという、この作品の持つ構成は、専制政治体制下のロシアにおいては、このようなストーリーを語ることができないということに由来している。民主主義の地ではあり、政治的脅威とは縁遠くなったイギリスやスイスにおいて初めてこの物語は語ることができる。つまり、コンラッドにおいては、物語を語るには対象との距離が必要なのだ。ロシアから離れたジュネーブ（専制政治と民主主義）、ラズーモフから離れた言語学教師（若者と老人）、この離れているということが語りを可能にしている。目撃者は目撃の対象から離れていなければならぬ。ロシア人の魂について、語り手が理解していなくとも、話を伝えるうえでは大きな問題ではなく、それらを呈示するのに十分な距離をもたらすことのみが、この語り手が選ばれた理由なのではないか。

またトニー・タナーが指摘するように、このロシアに対する無理解は、同時に西欧側の complacency を浮き彫りにする。タナーは民主主義の地であるジュネーブでさえも、いわばロシア的悲劇から遠く離れてしまった、気楽な場所として描かれていることを明らかにしている<sup>9)</sup>。語る側の老言語学教師と西欧の価値観が、ラズーモフの悲劇と対照されることで、これもまたアイロニックに捉えられているのだ。アイロニーの矛先は、この語り手の存在によって、西欧の側にもはねかえってくる。この作品の読者は、語られる側（ロシア）と語る側（老言語学教師）の間に入り込んで、両者を批判的に理解することになるのである。

さらに老言語学教師は語り手であると同時に、ラズーモフの日記の読者であるとも言える。すでにラズーモフの真実の物語は、彼によってすでに読まれているのである。西欧の目を通した内容が、我々読者にリレーされている。まさしく「西欧人の眼に」によって、濾過された物語が私たちのもとに届けられているのである。ラズーモフの日記の内容は、ほぼそのまま読者に伝えられているようであるが、この作品の構成に関する違和感は、誰かによってすでに読まれた物語を読まされていることに起因するのではないだろうか。老言語学教師がラズーモフに対して、読者の立場であるというのは、例えば、ラズーモフがナタリアに最後に真相を告白する場面において見られる。二人がお互いを思っていたことは明らかなのだから、「必ず彼らを宿命的にひきつけあはずだ。」という彼の見当違いの感想は、まるで恋愛ドラマを見ている観客の期待を、そのまま表しているかのようなのである。我々読者は老言語学教師によるラズーモフら人物や事件の判断や読みとり方をどこまで受け入れてよいのか、何ともいえない障害を感じながら読むことになる。

それはラズーモフもナタリア・ハルディンも、彼の眼を通した姿しか、我々読者には示されないという、居心地の悪さである。この点が、この語り手は必要であったのか、三人称で客観的に書くことも可能であったのではないかという疑問をもたらす理由でもあろう。それではコンラッドはなぜこのような語り手＝読み手を採用したのであろうか。

それは、この『西歐人の眼に』という作品が、いったんイギリス人によって読まれた話を語っているという点に求められる。コンラッドはこの作品をイギリスの読者に提供する前に、あらかじめイギリス人が読んで書いたものを届けたかったのではないか。こうすることで、作品の読者への受け入れに対する、不安を軽減したかったのだと思われる。受け入れられることが不確かな内容を扱ったがゆえに、作品中のイギリス人読者に事前に読ませたのだ。『西歐人の眼に』が『闇の奥』と異なるのは、誰かに対して口で語った話ではなく、書いた物語であるという点である<sup>(10)</sup>。『闇の奥』では、語るマーロウと、その話を聴く聴衆がいて、テムズ川に停泊した船の上という、語り場があった。しかしこの作品はそれとは異なり、書かれたものという形式をとっている。書かれたものには、眼の前の聴き手は存在しない。それは小説を出版して読者の反応を待つ、作者コンラッドも同じ立場である。誰が読むかわからないし、何時読まれるのか、そもそも読まれるかどうかさえはっきりしないのが、書かれたものである。そこでコンラッドはあらかじめ読者を作品内にとりこんでしまったのだ。

この作品は冒頭から、書かれたものであるということを、強く主張している。書き手である言語学教師の才能のなさを強調することで、その事実は一層強められる。この話はラズーモフによる日記という書かれたものを、翻訳したという形で、ロシア語から英語に直されたものである。つまり、この話の内容の大半は、語り手である言語学教師以外の人物が書いた話である。ラズーモフの日記はもとより、作中に登場する偉大なフェミニストと称される、ピーター・イヴァノヴィッチの書いた自伝の内容も、この語り手が、その本を読んで、内容を読者に長々と紹介してくれている。他人の書いたものにその内容を大きく頼っているのが、この作品の特徴であり、コンラッドの意識が、『闇の奥』での「語る＝聴く」の関係から、「書く＝読む」の関係へとシフトしていると言えるだろう。

一方、この言語学教師が実際にその眼で見たことは、作品全体から見ると少ない。第二部の最初にハルディン母娘にあう場面は、実際に彼が体験したことであるが、ラズーモフと実際に会って話をするのは、第二部の終わりのやり取りの場面が主で、そう多いものではない。ラズーモフとナタリアが初めて出会う場面も、ナタリアから伝えられるという形であり、彼は実際には目にしていない。しかし、語り手が、実際にその話の対象をその眼でみることは、少しであったとしても必要なのだ。語り手が、その話を語る正当性を保証するためには、その話の対象であるラズーモフを実際に見ることが必要で、

ゆえにクライマックスの、ラズーモフとナタリアの告白のシーンも、彼がその場に居合わせなければならなかった。先に引用したこの語り手の採用についてのコンラッドの意図が、「現実感を出すため」であったということは、「見たことを語る」という構図に少しでもあてはめたかったからに違いない。しかし、この作品は *Under Western Eyes* という題名であるが、西欧人の眼に触れた内容は、それほど多くない。語り手の見たことと、それについて、語ることのバランスが崩れている。語り手が見たものが少ないので、書かれたものをまた書きなおしたという形をとったのであろう。ではなぜ語り手が実際に見たことを語るという形で、この作品を作れなかったのだろうか。

この語られる全体に比して、見たものの少なさという点では、この作品を書く際のコンラッド自身にもあてはまるのではないか。老言語学教師の存在を、ある程度作者であるコンラッド本人と重ね合わせることは可能であろう。自らの体験を生かした初期の海洋小説とは異なり、作者コンラッド自身はこの作品を書くに際して、直接帝政ロシアに足を踏み入れて、その専制政治を体験したわけではない。彼自身 Author's Note の中で、この物語の登場人物たちは「作者の個人的な経験に基づいて書かれたものではない。彼らはロシアの諸状況、並びに帝政ロシアの無法政治の専政に対するロシア人気質の倫理的情緒的反応についての一般的な知識に基づいて描かれたものである。」と書いている。「一般的な知識」とは、すでに多くの人に知られていること、そして誰かによって語られた内容である、ということである。見なかったこと、体験しなかったことについて、コンラッドは語らなければならなくなった時、そこで頼りとされるのは書かれたものという形式だったのだ。

コンラッド自身にとって、自らの父親や、出自の問題があったとはいえ、ロシアの問題は他人事であったはずだ。1905年に書かれた、エッセイの *Autocracy and War* において、ヨーロッパの政治状況について触れ、ロシアの体制を批判していたコンラッドではあるが、英語で作品を発表するイギリスの作家となった現在では、ロシアに対してコンラッド自身も大きな距離を持っていたはずだ。実際彼自身もロシア人についてはよくわからないと、もらしている<sup>(11)</sup>。ロシアの作家が書いたロシアの話なら、読者はその内容を説得力をもったものとして、受け入れるであろう。しかし、東欧出身とはいえ、英語で書くイギリスの作家が書いたロシアについての物語は、ロシア人について、どれほど真実らしく書くことができるか、またそれが読者にどのように受け入れられるか、コンラッドは悩んだにちがいない。この作品が発表された当時（1911年）には、ドストエフスキーを含むロシア文学の英語への翻訳はすでになされており、多くの同時代の作家に強い影響を与えている<sup>(12)</sup>。その中で、英国の作家が書いたロシアの物語は当時の読者にとって、どのような意味合いがあったのだろうか。当時出たこの作品の評のなかには、ドストエフスキーやツルゲーネフの作品を、西欧人にわかりやすく説明してく

れるものだという評価があった<sup>(13)</sup>。これはまさしくコンラッドの望んでいた結果であっただろうが、一般の読者にまでは伝わらなかった。この作品を書き始めた最初から、コンラッドは、ロシア人のキャラクター、ロシア人の本質、ロシア人の物の感じ方や考え方を描くことを目的としていた<sup>(14)</sup>。しかし、体調が悪かったこともあるが、この作品の完成まで、コンラッドは非常に苦勞し、時間もかかることになる。この苦勞は当初の目的が上手く実現できるかという不安によるものではないだろうか。そこで、ロシア人を理解できないと公言する語り手を採用することで、ロシア人の心理的な特殊性が、読者にうまく理解できなかったとしても、それは語り手によって、作中で先取りされていることになる方法をとったのであろう。語り手の老言語教師の言い訳は、作者コンラッドのものでもあり、また読者の反応を見越したものになっているのだ。

すでに文学的には高く評価されていたコンラッドではあるが、この作品においては金銭的な成功、つまり、より多くの読者に受け入れられることを目指していた。前作の『密偵』を書いた際にも、コンラッドは、そのセンセーショナルな内容から、一般的な人気と、経済的な成功を当てにしていた<sup>(15)</sup>。しかし結果は芳しくなく、本人は自分の中には一般読者にとって unsympathetic な要素があるともらしている。後でその要素を foreignness と言い換えている。それに続く作品として期待された『西欧人の眼に』は、再び金銭的成功を目指したものであり、本人としては読者の関心をより引き付けるような内容の話にしたつもりではあるのだけれど、レビューでは高評価だったが、前作よりもさらに売れなかった。読者が自分の作品を受け入れてくれないという不安感はコンラッドに強く、実際その異国的な題材と政治的内容が、読者に受け入れられなかった点もあるのだろう。語り手の言語学教師の存在は、そのコンラッドの不安に対応するものであり、ロシア的な題材を前にした、書く存在である作者と、読む存在であるイギリス人読者の性質を重ねもったものになった。コンラッドの目論見としては、ロシア人を理解できないと繰り返す語り手を前にして、読者はその語りの限界を意識させられることで、西欧人の恵まれた状況をアイロニックにとらえ、それに対照させられるラズーモフの話に、かえって没入して読んでいけるという効果を目指していたと思われる。その結果、語りの構造は複雑なものとなり、一般読者には、わかりにくいものになった。この言語学教師は全体的な語り手であると同時に、ラズーモフの日記の翻訳者であり、その編集者でもある。さらに誤った噂話を退け、真実の話を明らかにするという役割も持っている。そして語られる事件の関係者の目撃者でもなければならぬ。それらに加え、凡庸な読者＝語り手という役割を果たさせるといって、複雑な構造の上にこの作品の語りは成り立っていると言えるであろう。それはイギリスの読者のみならず、作者自らからも距離のある題材を取り上げたためにこそ作り上げられた語りの構造であるのではないだろうか。

《注》

- (1) 『闇の奥』では、マーロウの語ることのできない、コンゴの奥地でクルツが行ったことは、曖昧にしか読者に伝えられない。また『ロード・ジム』では、ジムのロマンティックさを、一步引いた所から、批判的に伝えると同時に、その悲劇性を高めていると言える。
- (2) ジョゼフ・コンラッド、『西欧人の眼に』(上) 中島賢二訳(岩波書店 1998年) p. 277 引用は日本語訳を参照した。英語では Joseph Conrad, *Under Western Eyes*, with an Introduction and Notes by Boris Ford (Penguin Books, 1985) を参考にした。
- (3) 同書, p. 177
- (4) ピーター・イヴァノビッチは、著書では女性の偉大さを讃えるが、身近にいる付添女のテクラにはひどい扱いをする「フェミニスト」であり、マダム・ド・S はまるで「電気ショックで生き返った死体のような」女性である。
- (5) 『西欧人の眼に』(上) p. 11
- (6) 『西欧人の眼に』(下) p. 276
- (7) 同書, p. 317
- (8) Edward W. Said, *The World, the Text, and the Critic* (Cambridge, Harvard University Press, 1983) p. 95
- (9) Tony Tanner, *Nightmare and Complacency: Razumov and the Western Eye in the Casebook on Heart of Darkness, Nostromo and Under Western Eyes* edited by C. B. Cox (Macmillan, 1981) pp. 166-7 なお、タナーは作中のジュネーブの町の風景や人々の描写にまで、西欧文明の嘘臭さが現れている点も指摘している。
- (10) サイドはコンラッドの作品は語ることに、聞くことがその物語の土台だと言っている。しかし『西欧人の眼に』は口頭では物語が伝えられない例外的な作品であることも指摘している。
- (11) Zdzislaw Najder, *Joseph Conrad, A Chronicle*. (New Brunswick, Rutgers University Press, 1984) p. 373
- (12) コンラッドの友人であるエドワード・ガーネットの妻、コンスタンスはロシア文学の翻訳者であり、ドストエフスキーやツルゲーネフ、トルストイらを英語に翻訳し、当時大きな影響と衝撃を与えた。
- (13) *Westminster Gazette* のレビューから。なお、その中では *Under Western Eyes* はロシアの作家の作品の解説となっていると書かれている。つまり、書かれたものの説明となっていると評されている。
- (14) Najder, p. 333
- (15) 同, p. 332

(原稿受付 2018年10月23日)

# 1870年に実施された米国情勢調査 (Census)

— 日本人留学生情報の分析 —

塩 崎 智

Use of the 1870 United States Census as a source of  
information on Japanese students studying in U.S.A.

Satoshi SHIOZAKI

## 要 旨

幕末維新时期, 米国で学んだ日本人留学生数は200を超える。彼らが「いつ」、「どこで」、「何を」、「誰に」、「どのように」、「どのくらいの期間」学んでいたかは、はっきり分かっていない、あるいは資料で実証されていないケースが多い。留学生が日本の近代化に与えた影響を歴史的に考察する際、このような基本的データは大変重要だ。既存の資料によっては故人の顕彰などの目的で、留学経験が「過大」に表現されている場合もある。本稿では、1870年に米国全土で実施された第9回国勢調査(Census)のデータの中から日本人留学生に関連するものを抽出し、既存の資料との照合を試みた。その結果、新事実、既知の事実の再検討の要、今後の新たな課題などが浮かび上がってきた。

キーワード：米国情勢調査, 日本人留学生, 幕末維新时期

## 1. はじめに

米国では1790年以後、10年ごとに全国規模で国勢調査(Census)が実施され、そのオリジナルの調査票の画像がデータベース上で閲覧可能である<sup>(1)</sup>。筆者の主な研究対象は1860、70年代に米国に滞在していた日本人留学生であり、本稿では1870年に実施された第9回国勢調査の結果を分析し考察を試みた。

調査は主に1870年6月から8月にかけて米国全土で実施され、同年6月1日時点での日本人留学生の所在が明らかになった<sup>(2)</sup>。日本人留学生は米国内での移動が多く、「いつ」、「どこで」、「何を」、「誰と」学んでいたかが不明、あるいは実証されていない場合が多い。渡航時期や帰国時期さえよく分かっていないケースもある。これまでは、公の資料としては、在籍学校が毎年作成、発行する*School Catalogue*という出版物に記載されている生徒名のリストしかなかった。ここに1870年6月1日というピンポイント

ントの時点ではあるが、国勢調査という信頼すべき公の資料が追加されることになる。

筆者は2018年4月から8月まで、米国ニュージャージー州立ラトガーズ大学 (Rutgers University) のアレグザンダー図書館 (Alexander Library) において、同大学及び附属のグラマー・スクール (Rutgers College Grammar School, 以後RGSとする) で、1860年代後半から1870年代にかけて学んでいた日本人留学生の資料収集を行った。RGSに関しては、学校側の記録も、当該期間の *School Catalogue* も発見されておらず、日本人留学生の誰がどの期間在学していたかを示す正式な記録が存在していない<sup>(3)</sup>。

国勢調査結果から、同校の所在地であるニュージャージー州ニューブランズウィック (New Brunswick, 以後NBとする) で、職業が student となっている日本人 (日本生まれの米国住民) を複数名発見した。学校名が明記されていないが、RGSの1870年6月1日時点での日本人留学生を確定するのに有効な公の資料である<sup>(4)</sup>。NB以外にも、ボストン (Boston)、ニューヘイブン (New Haven) などの日本人留学生の所在も明らかになった。

作業は次の順番で実施した。まず、調査票の判読である。調査員の手書きで個人差があるが、概して丁寧な筆跡である。しかし、全て筆記体で記録されており、これに、日本人の英語表記方法という問題が加わり、日本人留学生名の特定が困難なケースがあった<sup>(5)</sup>。

次に、国勢調査の結果と、既存の資料を照合し、事実の確認と情報の統合作業を行った。この際、追加情報として自分が近年集めてきた、現地新聞に掲載された日本人留学生のインタビュー記事等を必要に応じて加えた。この部分を加えると膨大な文字数となるので、「幕末維新期米国日本人史料集成」として、後日、逐次分離掲載することにした。

国勢調査の結果の中で、日本人留学生だけでなく、日本人と関係の深い米国人 (出国前、帰国後の御雇外国人、知日派米国人等) に関する情報も発見した。また、国勢調査の質問事項の一つである人種項目について疑問が生じ、調査、考察を試みた。これらもまたそれぞれ別稿で扱うことにした。本稿は1870年実施の国勢調査結果を存分に活用した研究成果の発表第一弾ということになる。

## 先行研究

本研究は、2018年4月末にニューヨーク公共図書館 (New York Public Library) 内に設置してある端末で、米国情勢調査の結果を扱ったデータベース、*Ancestry.com* の発見がきっかけとなった。1870年の調査結果で、「日本生まれ」、「職業欄 student」で検索すると、30人弱の名前がヒットした。調査票には下宿の大家や同居人、同居使

用人の名前、職業等の情報も記載され、日本人留学生在が生活していた状況を把握するのに有効な興味深い資料であることが分かった<sup>(6)</sup>。

発見された日本人留學生の中に仙台藩留學生の富田鉄之助（後出）がいる。関連論文に、高橋秀悦「幕末維新のアメリカ留学と富田鐵之助——「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助（5）——」（以後「高橋論文」とする）がある。本論文は、本稿で扱う1870年実施の米国情勢調査のデータを積極的に活用し、富田鉄之助を始めとするNB在住の日本人留學生に関して、最新の研究成果を基に詳細な論考を展開している。留學生の下宿先情報にも触れるなど、筆者が進めていた研究方法と共通する点が見られた。

その参考文献リストの中に、菅（七戸）美弥「55名の「ジャパニーズ」——1870年米国人人口センサスの調査票（population schedule）への接近——」がある。注（1）で既に取り上げたこの「菅論文」には、国勢調査で発見された日本人の名前などの情報をまとめたリストが掲載されている。個々の留學生の特定に関しては、「菅論文」でいくつか名前が特定できていないケース、特定人物が明らかに間違っているケースを除くと、ほぼ筆者の調査と同じ結果である。菅はこれまでの研究を見ると移民研究がテーマで、米国情勢調査を扱った論文が複数ある。日本における数少ない研究者と理解した。

以上、2本の論文は、筆者が研究を始める前に読んだものではなく、研究の中盤で発見、読了したものであることを注記しておきたい。

### 1870年実施第9回米国情勢調査の概要

米国情勢調査は実施する度に様々な改定が施されてきた。1870年実施の調査では質問項目は20ある。紙幅の都合上、「菅論文」（p.148）を参照してもらいたい。日本人留學生が答えた欄は年齢、肌の色、職業、出身地、通学の有無などに限られている。下宿の大家の場合、それに不動産価値（Value of real estate）、不動産以外の私有資産の価値（Value of personal estate）等が加わる（資料1）。

*Instructions*によると、調査はAssistant Marshal、あるいはenumeratorと呼ばれる、選ばれた調査員が戸別訪問して結果をペンとインクで記録していく。各戸に調査票を配布して記入してもらい、それを一定期間後に回収して回る方法と比べると、その場での聴き取り調査は、住民不在、その場での回答不可などで、かなり多くの時間と手間がかかったことが容易に想像される<sup>(7)</sup>。

データベースでは、オリジナルの調査票を撮影したものと、手書きの文字を光学文字認識（OCR：Optical Character Recognition Reader）で読み取って情報を整理したものが見られる。OCRは筆記体を自動的に読み取った綴りを示していて、大変参考にはなるが、多くの間違いを含んでいる。

## 照合対象の既存資料

本稿では、国勢調査の結果を報告するだけでなく、必要最小限の既存資料との照合も行った。照合対象資料としては、主に次のものを使用した。

ニュージャージー州 NB に関しては、ラトガーズ大学関係の日本人留学生が写っている写真、彼等のインタビュー記事、彼等が書いた書簡、日記、彼等に関する論文等である<sup>(8)</sup>。

グリフィスが日本人留学生について行った「グリフィス講演」には、ラトガーズ大学と RGS で学んだ日本人留学生の名前が挙がっている<sup>(9)</sup>。ラトガーズ大学の学生新聞 *Targum* にも日本人留学生に触れた記事が散見される<sup>(10)</sup>。今回の調査ではラトガーズ大学アレグザンダー図書館の司書ペロン氏の示唆により、同図書館が所蔵する *New Brunswick Directory* という市販の住所録も参照した<sup>(11)</sup>。

NB 以外、特にマサチューセッツ州、コネチカット州などニューイングランド周辺在住の留学生の住所を示す資料として、ボストン公共図書館 (Boston Public Library) に保存されている住所録がある。日本人留学生の 1871 年から 1876 年にかけての住所録 (以後、「ボストン住所録」とする) で、国勢調査の時期と 1 年かそれ以上ずれるが、下宿先と住所が明記されている重要な照合資料として活用した<sup>(12)</sup>。

## 日本人留学生の名前、大家、同居人、使用人などの詳細情報

今回の調査では、1870 年 6 月 1 日現在で、米国で学んでいた日本人留学生は 21 人 (重複を含めると 25 人、留学生かどうか不明を含めると 27 人) となった。関連情報と合わせて資料 2 にまとめた。国勢調査は世帯ごとに記録されているので、家主ごとに情報を記載した。家主の次の ( ) は日本人の下宿人の人数で、その後の 〈 〉 は調査書の作成日である。

名前に関しては、資料 2 では、オリジナルの調査票の筆記体を OCR が読み取った綴りを最初に書き、特定できた日本人留学生名を付した<sup>(13)</sup>。前に述べたように、OCR の自動判読結果は英語の綴りでかなりの間違いを含んでいる。また、*Instructions* によると、Last Name, First Name の順で書き込むことになっているが、日本人留学生の場合は Last Name しか書かれていない場合が多かった<sup>(14)</sup>。

以下に、個々の調査結果と結果に関する考察を示す。日本人留学生は複数で下宿している場合が多いので、まず、下宿先の大家とその家族の情報を記してから、日本人留学生の記述へと進める。留学生個人に関する諸情報は主に別稿で扱い、今回は必要最小限に留めておく。

留学生の名前は「菅論文」のリストとほとんど一致したので、不一致の場合のみその

旨を記しておく。ここでは、前出の資料2のリストと異なり、OCRの読み取りを筆者が修正した綴りを使った。Last name, First nameの順である。また確定した日本人留学生の名前は、本名、偽名に関わらず、一般に知られている名前を主に使用した。

1. ニュージャージー州 NB 9人（うち1人特定不可。2人は同一人物の可能性あり。2人は他都市と重複の可能性有り。）

国勢調査の結果報告に先立ち、次の点を確認しておきたい。1870年6月1日の時点で、諸資料（本稿注（8）、（9）参照）から判断して、NB在住で、ラトガーズ大学かRGSで学んでいた可能性が最も高い日本人留学生は次の14人である<sup>(15)</sup>。このうち畠山のみがラトガーズ大学の学生で、他の13人がRGSの生徒と考えられる。

畠山義成、富田鉄之助、高木三郎、勝小鹿、児玉淳一郎、島津忠亮、丸岡武郎、橋口宗儀、平山太郎、岩倉具定、岩倉具経、毛利重輔、服部一三、折田彦市

この14人を後に国勢調査結果と照合し、1870年6月1日時点のRGSの日本人在籍学生を割り出してみたい。

#### (1) Case 家

家主はMary D Case。45歳の女性で職業はkeeping house。15歳と9歳の娘がいる。不動産価値は5,000ドルで私有資産は600ドル。Clerk（男、22歳）と使用人（女）2人（1人はアイルランド人）が同居。計7人が住んでいる。

1870-1871年 *New Brunswick Directory* によると、Mrs. Case R. C. という女性がAlbany 通り 55 番に住んでいるが、このMaryと同一人物かどうかは不明。Albany 通り 55 番には、ラトガーズ大学の *School Catalogue* によると、Scientific School の学生、薩摩藩英国留学生の畠山義成（1842-1876）が1868年9月-1869年6月に下宿していた。畠山は翌1869年9月-1870年6月はScientific SchoolをLeft Collegeとなっている。米国在住の研究者村井智恵氏によると、この年度は畠山は経済的理由で大学の授業料が払えず休学したとのことである。翌1870年9月-1871年6月の年度はClassical DepartmentのFreshmanとして復学し、住所は2 French Streetとなっている。

日本人留学生が1人同居している。

- ① Kadoma (23歳) = 児玉淳一郎（長州藩出身、1845-1916）

職業はCollege Studentと書いてあったが横線で消去されている。Attended school within the year 欄は「？」が記入されている。児玉本人に確認が取れていない、あるいは児玉はRGSに通わず個人指導を受け正式には通学していなかったのか。児玉の留

学の経緯、留学中の情報に関しては、別稿で詳細に触れる。

児玉はNB在住候補14人の1人である。単独で渡米し、NBでも単独で下宿していたことが分かる。

## (2) Mayo家

家主は Alfred W Mayo。60歳の男性で職業は school teacher。妻 Matilda と8歳の娘がいる。不動産価値は4,000ドルで私有資産は2,000ドル。Clerk (男, 21歳) 1人, 無職 (女, 18歳) 1人, dress maker (女, 24歳) 1人, 使用人 (女, アイルランド人) 1人が同居。計11人の所帯である。

1870-1871年 *New Brunswick Directory* によると, Mayo Alfred W., teacher and insurance agent, 住所は 49 Schureman となっている。

ラトガーズ大学の *School Catalogue* によると, 1868年9月-1869年6月と, 1869年9月-1870年6月に, Scientific School の薩摩藩英国留学生, 松村淳蔵 (1842-1919) が, この住所に住んでいた。松村は1869年12月8日にメリーランド州アナポリス (Annapolis) にある US Naval Academy に移った。

名古屋藩留学生, 永井久一郎 (1852-1913) も RGS に入学した時, この下宿に一度決めたようだが, より条件の良い下宿をすぐ見つけて辞退したようだ<sup>(16)</sup>。1873年9月-1874年6月にはラトガーズ大学 Scientific Section の原保太郎 (園部藩, 1847-1936) がこの住所に下宿していた。

日本人留学生が継続的に Mayo 家に下宿していた理由の一つとして, 家主が教師で, 家でもプロの教師から英語を教わることができたという利点が考えられる。

日本人留学生4人が同居している。このうち3人は日本から一緒に渡米してきた。

### ② Takaki Samara (22歳) = 高木三郎 (庄内藩出身, 1841-1909)

職業は College Student。Attended school within the year 欄はチェック有り。14人の1人である。高木は当時29歳になっていたはずで, 調査上の年齢と実年齢がかなり異なる。RGSの学生は10代前半から半ばの米国人が多かったので, 実年齢を偽って学んでいた可能性がある<sup>(17)</sup>。

「高橋論文」によると, 1868年1月にボストンからNBに移ってきた富田鉄之助, 高木三郎, 勝小鹿は, 1868年2月19日の時点では Isaac Bartle (58 Church St.) 宅に下宿していた (p.14)。高木と富田は勝をRGSの横井左平太と大平兄弟に預け1868年8月にNYを出航し帰国する。2人は1869年3月にNBに戻って来た (p.30)。高木は帰米後, 以前の Bartle 家から Mayo 家に下宿先を変えたことになる。勝の所在は不明。

### ③ Matusky Sahera (19歳) 名前未確定

職業は College Student。Attended school within the year 欄はチェック有り。

「菅論文」では松井正水と記されている<sup>(18)</sup>。この人物の特定に関しては後述する。

④ Haseguchy Lugoro (20 歳) = 橋口宗儀 (佐土原藩出身)

職業は College Student. Attended school within the year 欄はチェック有り。

「菅論文」では空欄。橋口と思われる名前が他の箇所にも登場し、Lugoro という名前が橋口の名前と一致しない点が、人物特定上の問題として残る。橋口は 14 人の 1 人である。

⑤ Heriamer (20 歳) = 平山太郎 (佐土原藩出身)

職業は College Student. Attended school within the year 欄はチェック有り。

「菅論文」では空欄。平山と思われる名前は他 2 か所で登場する。平山も 14 人の 1 人である。

橋口、平山ら佐土原藩留学生 4 人が、この時期 NB にいたことを示す資料がある<sup>(19)</sup>。佐土原藩留学生の島津忠亮が、1870 年 11 月 8 日に故郷の榎木熊男宛てに書いた手紙で、次のように書かれている。

「僕等四人始めにはニーピランスウイツキと申へ滞留致候得共、三四カ月以前に僕平山とはボストンと申処へ引き移り勉強致居候。」(p. 82)

佐土原藩留学生の 4 人は最初は NB で学び、そのうち島津と平山の 2 人は、1870 年 7 月か 8 月にボストンに移り、1870 年 6 月 1 日現在では 4 人はまだ NB にいたことになる。島津と丸岡の名前は Mayo 家のリストには出てこない。

一行 4 人が NB に来たのは 1869 年 12 月初頭だ。英語も覚束ない状況だったので、4 人一緒に NB 滞在の長い日本人の世話になるのが望ましかっただろう<sup>(20)</sup>。佐土原藩は薩摩藩の支藩であるので、当時ラトガーズ大学で学んでいた畠山義成ら薩摩藩留学生が面倒を見たと推測されるが、国勢調査によると、一緒に下宿していたのは庄内藩出身の高木だった。高木が同じ下宿に住んでいるのは、勝海舟が関係しているのだろう<sup>(21)</sup>。

普通に考えれば、前出の氏名特定不可の③Matusky Sahera が島津か丸岡で、どちらか残りが調査漏れで、佐土原藩留学生 4 人一緒に下宿していたと推測される。Mayo 家が 4 人一緒に収容できず、例えば丸岡 1 人が別の下宿に住まざるをえなかったのか。NB の日本人留学生は、大体お互い徒歩 10 分以内のエリアに住んでいたもので、別宿でもさほど不便は無かっただろう。いずれにせよ、佐土原藩留学生は、島津の 11 月 8 日書簡によれば、島津・平山と丸岡・橋口のコンビでボストンとニューヘイブンに分宿することになる。

## (3) Thomson 家

家主は Lucy Thomson。60歳の女性。職業は boarding house。9歳, 7歳, 5歳の孫の面倒を見ているようだ。不動産価値は未記入で私有資産は5,000ドル。Clerk (男, 31歳), 無職 (女, 28歳), Clergyman (男, 26歳), 無職 (女, 45歳) の女性が同居している。使用人は2人の女性で1人はプロシア人。計13人の所帯。

1870-1871年の *New Brunswick Directory* では, Mrs. Thompson Lucy, h94 1/2 George と書かれているので, 正しくは「トムソン」ではなく「トンプソン」かもしれない。

次の3人の日本人留學生が下宿している。この3人は日本から一緒に渡米してきた。

## ⑥ Yamamota (21歳) = 毛利重輔 (長州藩出身, 山本重輔, 1847-1901)

職業は College student を横線で消去。Attended school within the year 欄は「?」前出の児玉淳一郎と同じケースである。14人の1人である。

## ⑦ Orite (20歳) = 折田彦市 (薩摩藩出身, 権蔵, 1849-1920)

職業は College student を横線で消去。Attended school within the year 欄は「?」。14人の1人である。

折田の研究書を著した板倉, 巖によると, 折田はNBに住まず近郊のミルストンに住んだとされている<sup>(22)</sup>。「グリフィス講演」でも折田について, 1870年10月にNBに来たと書いているだけで, RGSで学んだと書いていない<sup>(23)</sup>。

前出の島津忠亮の1870年11月8日書簡には, 折田は在NBと書かれていて, 在ミルストンとして書かれているのは富田鉄之助だけである。今回の国勢調査の結果と合わせると, 折田は1870年11月まではNB在住だったと確定していいだろう。RGSに関しては1870年9月からの新学期に入学し, 2, 3カ月後にミルストンに移りコーウィンの個人指導についた可能性が高い。

## ⑧ Asahi (19歳) = 岩倉具定 (公家, 旭小太郎, 1851-1910)

職業は College student を横線で消去。Attended school within the year 欄は「?」。14人の1人である。

以上の3人に関しては, 全員, 職業欄は College student を横線で消去してあり, 児玉と同じく, Attended school within the year 欄は「?」が記入されている。

この3人がNBに到着したのは, *Boston Journal* 1870年5月5日によると5月初頭のことである。学年度末であるので, RGSへの入学は1870年9月からの新年度に見送り, 大家の Mayo に個人指導を受けていた可能性が高い。児玉の場合もそうだが, Attended school within the year 欄の「?」とは, 本人に未確認という意味かもしれない。

以上 Thomson 家の3人は, 岩倉のもう一人の息子, 具経 (龍小次郎, 1853-1890),

服部一三（長州藩出身，1851-1929）とともに計5人で渡米した。具経と服部は国勢調査に名前が出てこない。その理由は不明だが，具経と服部も同宿だと5人になってしまうので，分宿した可能性が高い。岩倉の息子2人に，折田，毛利，服部が面倒見役も兼ねて留学に同行しているので，具定・折田・毛利組と具経・服部組に分かれたところ，後者の2人が何らかの理由で調査から漏れたということになりそうだ。

#### (4) Wykoff 家

家主は Peter V Wykoff。61歳の無職の男性。妻 Eliza との間に2人の20代の dress maker の娘がいる。laborer（男，70歳，英国生）が1人同居している。計6人住まい。不動産価値は5,000ドルで私有資産は2,000ドル。このワイコフ家は，後にお雇い外国人として来日する，ラトガーズ大学卒業生 Martin Nevius Wyckoff（1850-1911）の家とは異なる。

1870-1871年の *New Brunswick Directory* では，Wyckoff Peter V, h 45 Schureman と書かれている。職業は雑貨商である。前出の②，③，④，⑤の佐土原藩留学生と高木が住んでいた Mayo 家が同じ通りの49番なので，一軒置いた隣ということになる。

日本人留学生が1人下宿している。

#### ⑨ Hirayama（20歳）＝平山太郎（佐土原藩留学生）

職業は college student。「菅論文」では空欄。Attended school within the year 欄はチェックと「？」が両方とも記入されている。平山は Mayo 家の方ではこの欄はチェックになっていた。

前出の⑤同様，これも平山太郎の可能性が高い。両方とも同じ平山太郎ならば，調査の前後に，平山が単独で Mayo 家から一軒置いて隣の Wykoff 家に，何らかの事情で引っ越したとも考えられる。

## 2. ニュージャージー州ヒルズボロ（Hillsborough）1人

### (1) Corwin 家

家主は Rev. E T Corwin。年齢は36歳，職業は clergyman。妻との間に7歳の娘，1歳の息子がいる。25歳の女性使用人が同居。計6人住まい。不動産価値は1,500ドル，私有資産2,000ドル。Corwin が住んでいた地域はミルストーン（Millstone）と呼ばれる。NBの近隣地区で，当時は鉄道で結ばれていた。

コーウィンは，何人もの日本人留学生の面倒を見た牧師として知られている。「高橋論文」によると，日下部太郎，折田彦市，神田乃武，工藤精一，税所長八などがここに住んでいた（p.31）。

1870年6月の時点では，日本人留学生が1人下宿している。

⑩ Tomita Tetsunoske (31歳) = 富田鉄之助 (仙台藩出身, 1835-1916)

職業は student。Attended school within the year 欄は未確認。「高橋論文」によると、富田は再渡米後、1869年7月からここに住み始めた (p.30)。14人の1人であるが、1870年6月1日の時点では、富田はNBに住んでいないことになる。

以上のニュージャージー州在住日本人留学生に関する調査結果をまとめておく。同州では、NBに、4家族に計9人の日本人留学生が下宿していたこと、またヒルズボロには1家族に1人の日本人留学生が下宿していたことが分かった。計5家族に10人となる。ただし、恐らく同一人物が重複しているので、合計人数は5家族で8人と考えたい。

NBに関しては、在住候補14人の中で、国勢調査でNB在住が確認できたのは、児玉、高木、岩倉具定、山本、折田の5人のみである。これに未確定ではあるが、橋口、平山も加えられる可能性が高い。富田はヒルズボロ在住で14人のNB在住候補から外れる。NB在住候補13人のうち7人が国勢調査ではほぼ確定できたことになる。

確定できなかった6人は、畠山、島津、丸岡、勝、服部、岩倉具経である。彼らがこの時期米国外にいたとは考えにくいので、何らかの理由で調査漏れと考えていだろう。

3. マサチューセッツ州ボストン (Boston) 第14区 (14 ward) 5人 (うち2人は他都市と重複の可能性有り。)

ボストンはNBと並び、多くの日本人留学生が学んでいた都市であるが、日本人留学生が顕著に増えるのは主に1871年後半以降であることが、ここでも確認された<sup>(24)</sup>。

(1) Peck 家

家主は Solomon Peck。70歳で職業は clergyman。妻以外に、アイルランド人の使用人と、school teacher (女, 28歳, Anna Boynton) がいる。不動産価値は10,000ドルで私有資産は2,000ドル。計7人が同居している。NBと比べると不動産の資産価値が高いのは、都市の規模が違うこともあるだろう。

日本人留学生3人が下宿している。彼らは一緒に日本から渡米した。

⑬ Herayama (21歳) = 平山太郎 (佐土原藩出身, 徳太郎, 1849-1891)

職業は Student。Attended school within the year 欄は空欄。平山はNBで2回に続き、3回目の登場である。

⑭ Simadzri (21歳) = 島津忠亮 (佐土原藩出身, 又之進, 1849-1909)

職業は Student。Attended school within the year 欄は空欄。

⑮ Hashegooch (19歳) = 橋口宗儀 (佐土原藩出身, 1849-1881)

職業は Student。Attended school within the year 欄は空欄。橋口はNBに続き、2

回目の登場である。

Peck 家の下宿人は丸岡を除いた佐土原藩留学生 3 人である。NB で「混乱」を引き起こした佐土原藩留学生がボストンにも登場している。

繰り返しになるが、前出の 1870 年 11 月 8 日に島津が書いた手紙によると、4 人はまず NB で学び、島津と平山は 7 月か 8 月にボストンへ移り、丸岡と橋口は引き続き NB にいたが、11 月前後はニューヘイブンにいた。

国勢調査は 1870 年 6 月 1 日時点での住所に基づいて報告することになっている。平山、橋口が異なる 2 都市で登場するということは調査のミスとしか考えられない。

NB の調査票には作成年月日が 7 月 11 日と記されていて、ボストンは 7 月 18 日である。どちらも実際に日本人留学生の下宿を訪問したのは、6 月終わりから 7 月始めにかけてと考えられる。島津の書簡を根拠にするならば、この時点では佐土原藩留学生は NB を出た後だった可能性が高いが、NB の大家は 6 月 1 日時点での情報を答えた。これは正しい。ところが、ボストンの調査員は、「6 月 1 日ルール」を無視して、ボストンに引っ越してきたばかりの島津と平山をボストンの住民として扱ってしまった。これは間違いである。つまり、平山、橋口は NB の調査報告が正しく、ボストンの調査報告が間違いの可能性が高い。

問題は橋口である。7 月頃までは、橋口、丸岡は NB にまだ住んでいたはずだ。恐らく、学校も休みになったので、橋口がボストンの島津、平山を訪問し、一時的に滞在していた時に調査を受けたのだろう。これもボストン調査員のミスである。NB に登場しない丸岡はボストンでも出てこない。丸岡も含めて佐土原藩留学生一行の所在に関しては、別稿で詳細に扱いたい。

佐土原藩留学生一行が、こうしてボストンにやってきたのには理由がある。この 3 人の、Attended school within the year 欄はそろって空欄になっている。彼らはボストンで学校に通っていなかったが、夏前には RGS に通っていたはずなのでこれは事実ではない。それにしても、なぜわざわざ夏休みの早い時期に NB からボストンに移って来たのだろうか。

家主の Peck は日本人留学生縁の人物だったことが判明している<sup>(25)</sup>。彼はバプテスト教会の牧師で、ボストン郊外のロックスベリー (Roxbury) に住んでいた。1867 年から 1 年半ほど、Peck の息子の宣教師スタンガー (Stanger) の家に住んでいたのが、久留米藩留学生の柘植善吾 (1842-1903) と岡山藩留学生の花房義質 (1842-1917) だった。

柘植は帰国中、船上で 1869 年 1 月 17 日付けで Peck 夫人に航海日誌のような内容の手紙を書いている。また帰国後も 1869 年 12 月 13 日付けで東京から Peck 家一同宛てに手紙を出している。

柘植と Peck 夫妻との交流内容は明らかではないが、手紙からかなりキリスト教色の濃い付き合いをしていたことが伺われる。柘植が住んでいたスタンガー家と親の Peck 家は近所で、柘植は足繁くペック家に入出入りしていたのだろう。

また、今回の調査で、ペック家の住人に、Anna Boynton という 28 歳の女性教師がいることが分かった。Boynton という名前と彼女の住所 No 1 Mt Pleasant Place, Roxbury は、「ボストン住所録」で、次のように頻出している。

1. 朝比奈一

Came with Mr. Shimidzu. At Mr Allen, West Newton. Apl 17, 1873.

Removed to No 4 Mt Pleasant Place, Roxbury. Mr Boynton's, Aug 1, 1873.

2. 平岡 熙

At Miss Boynton's, No 1 Mt Pleasant Place, Roxbury

3. 森誠太郎

At Miss Boynton's No 1 Mt Pleasant Place, Roxbury

4. 西川友喜

No 1 Mt Pleasant Place, Roxbury

5. 太田雄寧

At No 1 Mt Pleasant Place, Boston Highland.

Boynton は、たとえば平岡熙 (1856-1934) の伝記に次のように書かれている<sup>(26)</sup>。

「さて翁は一行と共にボストンに赴き、ポイントンと云ふ教育家の家に下宿し、其婦人の保護の下に、先づ小学校に入って勉強し、やがて小学校を終わるや、今度はグランマー・スクール (文典学校) に入り、更に進んでハイスクール (高等学校) に入学した。」

教育家というと教育の大家のように聞こえるが、今回の調査で分かったように、彼女は 30 歳にもならない若い女性教師である。

Boynton に関しては、彼女が島津忠亮に宛てた手紙が 3 通、宮崎県立図書館に保存されている<sup>(27)</sup>。差出人の名前は Anie E. B. となっている。Anie は Anna の略称であるのでこれが Boynton の手紙であることは間違いない。その手紙を読むと、平岡熙、森明善、朝比奈一、清水篤守、目賀田種太郎などの名前が出てくるので、日本人留学生が入替わり立ち代わり彼女のところに出入りしていたことが分かる。島津が彼女とかなり懇意だったことも分かる。ポイントンの住所である、No.1 Mt. Pleasant Place,

Roxbury は、Peck と Boynton が一緒に住んでいたの家の住所だろう。

島津と平山そして橋口も一時的に参加し、このペック家に下宿中、女性教師 Boynton に英語の指導を受け、彼らは私立アカデミーで学ぶのに十分な英語力を磨いていたと推測される。夏休みに入ってすぐにボストンに移ったのは、空き時間ができる彼女の指導を受けるためだったのではないか。

このボストンの Peck 家の情報は、ボストンで柘植とつながりがあった福岡藩留学生（後出）や日本人留学生と親しかった米国人経由で NB の佐土原藩留学生に伝わったのだろう。

## (2) Weston 家

家主は Charlotte L. Weston。45 歳の無職の女性。同居人は、3 人の母子家庭と、バラグアイ出身の学生、68 歳と 65 歳の女性、男性と女性（アイルランド人）の使用人という計 11 人。不動産価値は未記入で私有資産が 1,000 ドル。

一緒に渡米してきた日本人 2 人が下宿している。

### ⑪ Heyaski (23 歳) = 林玄助 (熊本藩出身, 1848?-1885)

職業欄は Student。Attended school within the year 欄はチェック有り。「菅論文」では空欄。

### ⑫ Tenda (19 歳) = 津田静一 (亀太郎, 熊本藩出身, 1852-1909)

職業欄は Student。Attended school within the year 欄はチェック有り。「菅論文」では空欄。津田は OCR が筆記体の頭文字の T を F と判別し間違えたために、分かりにくい。

林と津田は熊本藩が派遣した留学生で、恐らく 1869 年 12 月初頭に横浜から CHINA 号に乗り 1870 年 1 月に NB に着いた<sup>(28)</sup>。イギリスに留学する予定だったが、日本人留学生が集まっている NB を訪れて、まず RGS で学ぶことにした。

この調査員が「6 月 1 日」ルールを守っていたと仮定すると、2 人は、1870 年 5 月末に RGS の授業が終わるか終わらないかのうちに、NB からボストンに移動したことになる。

NB で撮影された写真 (注(8)の②, ③) のうち、4 月 19 日に撮影された②には、二人は写っているが、6 月 23 日撮影の③には写っていないことから、この仮説は裏付けられる。Attended school within the year 欄のチェックは NB の RGS 在籍時代のことだろう。

このボストンの Weston 家もまた日本人留学生縁の家だった。福岡藩が 1867 年にスイスに派遣した松下直美 (1848-1927) は、1869 年 1 月 30 日にフランスのブレスト (Brest) を出て、同じ福岡藩留学生、平賀義質 (後出)、井上良一 (後出)、本間英一郎

(後出) が住むボストンへと向かい、2月3日に着いた。松下は、平賀、井上、本間の留学のスポンサーを探しに、自らの留学に終止符を打ち帰国するのだが、英語修業のためしばらくボストンに滞在する。松下が指導を受けたのが「ウエトン」あるいは「ウエスター」夫妻という米国人である<sup>(29)</sup>。

1869年4月14日にボストンを訪問した久留米藩留学生山田稔養(後出)も「ウエトン」に英語の指導を受けていた<sup>(30)</sup>。当時の米国日本人留学生は、移動性が高く、相互のネットワークがかなり発達していた<sup>(31)</sup>。恐らく福岡藩留学生引率役の平賀の紹介で津田、林はWeston家に下宿し、夫人から英語の指導を受けていたのだろう。

ボストン在住の日本人留学生数は5人とNBよりかなり少ないが、柘植、花房の1867年留学生が帰国した後、1871年後半に続々と日本人留学生がやって来るまでの「端境期」に当たるのでこれが妥当な数字だと思われる。また、ボストンには、柘植、花房とほぼ同時期に学んでいたもう1組の日本人留学生がいた。彼らは次のウースターの調査結果に現れる。

#### 4. マサチューセッツ州ウースター (Worcester) 4人

ウースターはボストンの西約60キロの中都市である。この町には、当時、ハイランド・ミリタリー・アカデミー (Highland Military Academy) という全寮制のミリタリースクールがあり、一時期多くの日本人が学んでいた<sup>(32)</sup>。

##### (1) Highland Military Academy (寮)

同校は1856年に開校した全寮制の3年制の私立学校である。*School Catalogue*を見ると、The prominent object of this Institution is to give young men a business and scientific education と書かれている。ビジネスと科学を重んじた教育が主目的であるので、軍人養成の学校ではない。各学年で必ず実施される軍隊教育や訓練は、学生の品行、身体的健康、そして学問的成長のために最適だと考えられている。大学進学希望者は、古典言語も選択できた。

国勢調査の結果から、同校では3人の日本人が学んでいたことが分かった。これは同校の *School Catalogue* 掲載の学生リストと完全に一致する。

⑩ Yamada Masanoske (19歳) = 山田稔養 (久留米藩, 正之助, 1850-1907)

同校の *School Catalogue* によると、山田は1869年9月に始まる年度に入学し、1871年6月まで同校で2年弱学んだ。

⑪ Enoya Rokusabura (17歳) = 井上良一 (福岡藩, 六三郎, 1852-1879)

井上は同校で1869年9月から1872年6月まで3年間学んだ。

⑫ Hongma Aechira (16歳) = 本間英一郎 (福岡藩, 岩吉, 1853-1927)

本間は、1869年9月-1870年6月の1年間しか学んでいない。1872年9月にマサチュー

セツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology) に入学している。おそらく、同校を離れてから2年間、工科大学入学用の私立アカデミーに通っていたのだろう。

この3人の福岡藩留学生の後見人、引率者としてボストンに来ていた人物も、ウースターに滞在していたことが分かった。福岡藩出身の平賀義質である。

## (2) Thayer 家

家主は Elizabeth Thayer。47歳の無職の女性。彼女の家族計3人以外に、27人が同居している。アイルランド人の使用人が4人もいる。不動産価値、私有資産未記入。今の日本のワン・ルーム・マンションあるいは独身寮のような雰囲気だろうか。日本人が1人住んでいる。

### ① Hiraka (40歳) = 平賀義質 (福岡藩, 磯三郎, 1826-1882)

職業は Translator of the Japanese Language。Attended school within the year 欄は空欄。

平賀は、井上、本間ら福岡藩留学生を引率し、富田・高木・勝一行と同じ COLO-RADO 号で 1867年8月24日に横浜を出航し9月15日にサンフランシスコに着いた。そこからパナマ経由でボストンに着いたのが10月10日である。

この3か月ほど前の1867年7月16日に、前出の柘植と花房がボストンのロックスベリーに到着している。

平賀は当時既に40代であったので、学校には通わず、主にボストンで個人指導を受けていたようだ。最初は、柘植・花房とともに、「ボストン住所録」で触れたチャールズ・ディラウエイの指導を受けていた。平賀も、Weston や Boynton に英語を習っていたかもしれない。マサチューセッツ州ウースターの新聞 *Massachusetts Spy* 1869年11月19日の記事によると、平賀は政治や国際法に関する英文の記事を日本語に翻訳していた。国勢調査の職業欄はこの記事の内容と一致する。

## 5. マサチューセッツ州モンソン (Monson) 1人

モンソンは、マサチューセッツ州西部の町で、ウースターからさらに南西に50キロほど離れたところにある。道にもよるが、ボストンから100キロ弱離れていることになる。この町にある私立アカデミー、モンソン・アカデミー (Monson Academy) は、日本に派遣された宣教師サミュエル・ロビンズ・ブラウン (Samuel Robins Brown, 1810-1880) が卒業した学校で、彼の伝手もあり1867年に薩摩藩米国留学生6人が入学した。1860年代後半、NBのRGSと並んで多くの日本人留学生が学んでいた私立アカデミーである。

1870年6月1日の時点では、薩摩藩留学生の大半は帰国、転校し、それ以外の日本

人留学生はまだ入学していない。ちょうど日本人留学生の数が一旦減った時期だった。同校の *School Catalogue* によると、1870年6月前後の日本人留学生は、種子島敬輔1人である。ちなみに1871年になると、ボストン在住で登場した津田ら3人の日本人が入学してくる<sup>(33)</sup>。

(1) Pomfret 家

家主は Wm J Pomfret。40歳の男性で職業は clergyman, 牧師である。子供3人の5人家族。同じ屋根の下に Welcome Converse という53歳で職業は Book Agent の男性が48歳の妻 Mary と20代の2人の娘とともに住んでいる。この Converse 家の一員に日本人留学生が1人いる。

㊸ Yoshida Hicomara (25歳) = 種子島敬輔 (薩摩藩出身, 吉田彦麿, 伴七郎, 1844-没年不明)

職業は at school。Attended school within the year 欄はチェック有り。「菅論文」では、吉田伴七郎で一致。

種子島は、薩摩藩米国留学生の1人で、1866年9月開始の年度に同校の English Department に入学した。翌1867年9月-1870年6月は Classical Department で学んだ。種子島にとって、モンソン生活最後の月に国勢調査が行われたことになる。

モンソン・アカデミー卒業後は、ハーバード大学入学を目指して勉強していたことが、*NY Sun* 1870年10月30日の記事で分かる (He has graduated at Monson Academy and is preparing to enter Harvard College.)<sup>(34)</sup>。

Converse 家に関しては、熊本藩留学生の岩男三郎がモンソン・アカデミーで学んだ時の下宿が、「ボストン住所録」で、Apl 1872 (Candt Converse) と書かれている。これが同じ家なのかどうかは確認する必要がある。

## 6. マサチューセッツ州アマースト (Amherst) 1人

新島襄、内村鑑三など、日本人クリスチャン縁の大学 Amherst College がある。国勢調査が行われた1870年6月は、新島の卒業の直前だった。同大学の寮に新島の名前が見える。

(1) Amherst College (寮)

㊸ Neijima Joseph (27歳) = 新島襄 (安中藩出身, 1843-1890)

出生地は Yeddo Japan。出生地を江戸まで答えたのは、留学生中で新島だけである。新島に関しては、既に多くの事が知られているので、ここで繰り返す必要は無いだろう。

以上、マサチューセッツ州の状況をまとめておく。ニュージャージー州と並び、日本人留学生が多かった州であり、4都市合計で、3家族と2寮に、11人の日本人留学生が住んでいたことになるが、6月1日というピンポイントで見れば佐土原藩留学生を除く

ので8人となりニュージャージー州と同数である。

ニュージャージー州と異なり、調査漏れの可能性のある留学生はいない。

## 7. ミシガン州ホランド (Holland) 1人

ミシガン州は、1870年代中ごろになると日本人留学生が増えてくるが、1870年6月1日の時点では国勢調査の結果で、Hope Collegeの寮に日本人1人が住んでいたことが分かった。

### (1) Hope College (寮)

国勢調査の結果を見ると、同校の多くの学生は地元ミシガン州、ニューヨーク州、イリノイ州などの出身だが、全寮生61人のうちオランダ生まれの学生が26人もいる。この大学はオランダ人移民のために設立された。

### ㉔ Togawa Liozo (24歳) = 津川良蔵 (長州藩出身、生没年不明)

「グリフィス講演」(p.27)によると、津川はHope Collegeの学部には入学しなかったため、ホランド滞在中、大学附属のグラマー・スクールで学んでいたのだろう。

## 8. コネチカット州ニューヘイブン (New Haven) 1人

ニューヘイブンはイエール大学の所在地として知られている。私立アカデミーもいくつかあり、佐土原藩留学生の丸岡と橋口は、1870年11月頃ここで学んでいた。1870年6月の時点で日本人留学生でイエール大学で学ぶ英語力、学力を身に付けていた日本人留学生はかなり限られていた。

### (1) Newell 家

家主はWilliam E Newell。44歳の男性。職業はbuilder。妻との間に20歳と12歳の娘がいる。不動産資産は18,000ドルで私有資産が3,000ドル。日本人留学生が1人下宿している。

### ㉕ Ohara Reynoski (24歳) = 吉原重俊 (薩摩藩出身、大原令之助、1846-1887)

職業はstudent。Attended school within the year欄はチェック有り。吉原は、種子島と同じ薩摩藩米国留学生で、モンソン・アカデミーに1866年9月開始の年度にEnglish Departmentに入学し、1867年9月開始の年度から2年間、Classical Departmentで学び、1869年7月1日にモンソン・アカデミーを卒業した<sup>(35)</sup>。

同年の9月から、イエール大学で非正規学生として学部の講義を聴講し、1870年9月にイエール大学ロースクールに入学した<sup>(36)</sup>。国勢調査は、学部の聴講生として1年間が終わる頃に実施されたことになる。

イエール大学の1870-1871年のSchool Catalogueには、住所として121 High Street, New Havenと書いてある。これは、吉原の曾孫にあたる吉原重和氏の調査によると、

Newell 家の住所ではなく、その後に住んだ、イエール大学図書館司書アディソン・ヴァン・ネーム (Addison Van Name) の家だった。つまり、吉原は、1870年6月1日までは Newell 家に下宿していたが、それ以降恐らく1870年9月までに、新しい下宿に引っ越したことになる。ヴァン・ネームは知日家で、下宿人の大原から日本語を学んでいたという<sup>(37)</sup>。

この調査の半年ほど後、ロースクールに入学して2カ月ほど経った頃、*Brooklyn Eagle* 1870年11月10日によると、吉原は日本政府から普仏戦争視察団一員としてドイツへの出張を命じられた。

コネチカット州は、1871年以降、同州のマサチューセッツ寄りの地域に散在する私立アカデミーへの留学生が増えるが、1870年6月の時点では、そのような留学生が皆無だったことが分かる。

調査漏れとしては、ミドルタウン (Middletown) のウエズレイアン大学 (Wesleyan University) で1870年3月頃学んでいた、薩摩藩英国留学生の吉田清成 (永井五百助, 1845-1891) が挙げられる。

## 9. ニューヨーク州ポートランド (Portland, Chautauqua 郡) 2人

### (1) T. L. Harris (Clergyman)

薩摩藩留学生の一部が自給自足的共同生活を行っていた、新生社 (The Brotherhood of the New Life) の主催者。このコミュニティは日本ではブロクトン (Brocton) という地名で知られている。ブロクトンはポートランドの一部である。

薩摩藩英国、米国留学生に詳しい犬塚孝明は、ブロクトンのコロニイを次のように説明している<sup>(38)</sup>。

「長さ4キロ、幅2キロにおよぶ広大な土地にあり、葡萄栽培を主な収入源として生活が成り立っていた。コロニイのメンバーには過酷な労働が任務として課せられ、日本人留学生といえども例外ではなかった。彼らは毎朝4時半から5時には起床し、牛の水汲み、木材の伐採、ほし草の梱包など屋外労働から、洗濯、皿洗い、靴磨きなど家内雑用に至るまで数多くの激しい労働に従事していたようである。」

1870年6月には、森有礼、鮫島誠藏などの日本人主要メンバーは脱退か帰国し、ほんの数人しか残っていなかった。

### ④ Hanaye (17歳) = 長沢鼎 (薩摩藩出身, 磯永彦助, 1854-1934)

職業は waiter attended school. Attended school within the year 欄はチェック有り。First Name だけで答えているのは長沢だけである。長沢は薩摩藩英国留学生の最

年少メンバーで、森有礼等ともにイギリスから移って来た。モンソン・アカデミーを経由していない。長沢は1870年10月からコーネル大学に入学したが、それ以前どこの学校で学んでいたかは不明。

㉔ Nomora (31歳) = 野村高文 (一介, 市介, 薩摩藩出身, 1840?-没年不明)

職業は laborer。Attended school within the year 欄は空欄。野村は谷元道之 (1845-1910) とともに、薩摩藩米国留学生の最終渡米組として、1867年8月頃米国東部に到着し、薩摩藩留学生達の影響を受け、ハリスの新生社に参加した<sup>(39)</sup>。

長沢と野村の職業が、waiter, laborer となっているのもうなずける。プロクトンの前身のニューヨーク州アメニア (Amenia) の共同体には薩摩藩留学生等11人の日本人留学生がいたが、メンバーが帰国したり、モンソン・アカデミーやラトガーズ大学に移ったりした。最後まで残ったのが、この長沢と野村の2人である。野村は、薩摩藩米国留学生でありながら、渡米してから一度も学校に通わず、1871年に帰国するまで新生社の共同体で生活し続けていた。

以上25人 (名前が重複しなかった場合) が1870年6月1日の時点で米国の学校で学んでいた留学生ということになる (ウースターの平賀も個人指導留学生と考える)。ここから重複を差し引くと次のようになる。NBは平山の重複を引き、姓名不明を島津と仮定すると8人、ヒルズボロ1人、ボストンはNBと重複する佐土原藩3人を除くと2人、ウースター4人、モンソン1人、アマススト1人、ニューヘイブン1人、ホランド1人、プロクトン2人の計21人である。

このデータベースでは、日本出身というキーワードのみで検索をかけると、他にも日本人の名前が多数ヒットする。彼らの大半は移民で、特にカリフォルニア州の El Dorado 群 Coloma やサンフランシスコにかなりの日本人が住んでいたようだ<sup>(40)</sup>。

ニューヨーク市でも、学生ではない日本人2人がヒットした。

㉕ Hada Roechero (20歳) ニューヨーク市の26 District の19wardに住んでいる。その他未記入。苗字は羽田か原のようだ。

㉖ Matsumoto Taminoski (11歳) 職業は at home となっている。ニューヨーク市の20 District 在住。松本民之助とも読める。英国生まれの Jos Masset の家に同居。他の3人の男性の同居人はアメリカ人男性でいずれも20代の money banker。11歳の日本人の少年がこの環境で一人暮らしをしていることになる。

この2人に関しては、留学生以外の労働移民関係の調査が必要となるだろう。1870年頃は、日本人の労働移民は西部か中西部に限られていたが、ニューヨークのような北東部の大都市にも、どのようなプロセスを経て来たのか分からないが、すでに日本人労働移民がいたことをうかがわせる興味深い情報である。

## おわりに

以上が、1870年実施の米国情勢調査に現れた日本人留学生に関する情報である。この資料調査の成果と問題点を以下にまとめて本稿の結論としたい。

### 1. RGSの学生の確定とボストンの留学生（成果と問題点）

前に述べたように、1860年代後半から1870年代にかけて、多くの日本人が学んでいたRGSは、公の資料が無いため、誰がどの期間在籍していたのか確定することができていない。今回の国勢調査の結果分析により、1870年6月1日時点というピンポイントの情報であるが、NB在住で職業欄でstudent, at schoolと答えた留学生で、Attended school within the year欄がチェックされていれば、ラトガーズ大学かRGSの学生と決定して良いと思われる。

候補は①児玉、②高木、⑥毛利、⑦折田、⑧岩倉の5人と、④橋口、⑤⑨平山の計7人である。彼らは1870年度6月1日の時点で、学年末ではあるが、RGSで学んでいたと確定していいだろう。ただし、これには条件が付く。①児玉、⑥毛利、⑦折田、⑧岩倉の4人は、Attended school within the year欄が「?」となっている。この「?」の意味が判明しない限り条件付き確定は否めない。

児玉は、留学の志望が「法学」と明確に決まっており、長崎での英語学習歴もあるので、NBに住みRGSで集団授業ではなく「法学」を意識した個人指導を受けていた可能性がある。またRGSに入学したのは最初だけで、途中から学校を辞めて個人指導に切り替えたかもしれない。

毛利、折田、岩倉の3人に関しては、NB到着が5月初頭で、この年度末に入学しなくても、9月からの次年度に入学すればよかった。この3人は6月1日にNBに住んでいたことは確実だが、その時点でRGSに在学していた可能性は低い。

そうなると、RGSの学生として確定されるのは、②高木と④橋口、⑤⑨平山の3人という寂しい結果となる。③Matusky Saheraも状況証拠しかないが、かなり高い確率で佐土原藩留学生の島津忠亮ではないかと推測され、彼を入れるとRGS確定は4人となる。

NBと並ぶ日本人留学生のメッカとして知られたボストンは、この時点ではまだ2人と少なかった。これはまだ推測の域を出ないが、日本人留学生の留学先は、1860年代後半から1870年にかけてNBとモンソンが中心で、1871年後半以降、ボストンその他にも広がっていったという見方ができるかもしれない。この件に関しては、大学入学以前の米国中等教育（私立アカデミー等）における日本人留学生の資料を集めた後に分析

したい。

## 2. 留学生の住環境 — 共同下宿人、家主など（成果）

今回の調査で改めて確認できたことがある。日本人留学生たちは、単独で下宿するよりも、集団で下宿するケースが多かった。その仲間は一緒に渡米した留学生である。大学の寮は除外すると、佐土原藩留学生（島津，平山，橋口），岩倉兄弟同時留学組（毛利，岩倉，折田），熊本藩留学生（津田，林）がその例として挙げられる。いずれも着米以降，1年も経っていないので，現地の生活に慣れるまでは同じ屋根の下で暮らしていたのだろう。

単独下宿は，吉田，富田，大原，児玉，平賀で，児玉以外は，米国滞在が3年近くかそれ以上のケースで，最早英語や生活で苦勞することはない。児玉は唯一の例外だ。

住環境としては，使用人も含めると，合計10人以上で暮らしているケースが4件，それ未満が6件だった。最低でも5人住まいで，計6，7人で生活している例が多かった。当時は賄い付きが普通だったので賑やかに食事をしていた様子が想像できる。また，10軒の下宿中，5軒にアイルランド人の使用人がいたことが分かった。

家主の職業は様々だが，牧師が Peck と Corwin, Pomfret（実際には Converse だが，吉田が住むには，Pomfret の許可も必要だっただろう）の3軒，教師が Mayo 家で Peck 家には Boynton という女性教師が住んでいた。Weston 家も元教師が分からないが，日本人留学生に英語の指導をしてくれる家主がいた。教師が同居人にいると，家にいる時でも指導を受けられるので留学生には好都合だ。教師にとっても良い副業となる。この Peck, Corwin, Mayo, Converse（未確認の保留付き），Weston の5軒は，日本人留学生に人気があり，複数の代に渡り日本人留学生が下宿していたことが分かった。

家主の家の経済状況は何とも言えない。まず調査の回答に信憑性の問題がある。自分の家の不動産の価値をよく知らない住民も少なくないだろうし，それ以外の資産の概算など正確に答えようがない。日本人留学生の下宿先の平均値を出してみると，不動産価値は7,250ドル，私有資産は2,200ドルになる。

ラトガーズ大学で発見した，NBの上流階級について調査した論文がある<sup>(41)</sup>。NBの上流階級の一員としてラトガーズ大学のデビッド・マレー教授が挙げられている。彼の持ち家の不動産価値は10,000ドルで私有資産の価値は3,000ドルと算出されている。NBは中流都市（1870年当時，人口約1万5000の新興工業都市）の例だが，マレーと比べると，日本人留学生の下宿先の平均不動産価値7,250ドルと同私有資産2,000ドルは，雑駁な推論ではあるが，中流階級の上と理解してよいのではないだろうか。別稿で，さらに多くの日本人に関係した米国人の国勢調査結果を分析する予定である。その際より母数の多い統計が得られることになるだろう。

### 3. 調査洩れの日本人留学生 (問題点)

1870年6月1日の時点で、米国で学んでいた日本人は21人という結果が出たが、他の諸資料から、付け加えるべき留学生がいる。

NBでは、まず、ラトガーズ大学の学生畠山義成である。RGSの学生では、富田、高木と渡米した勝小鹿、山本や折田と共に渡米した服部一三、そして、岩倉兄弟の岩倉具経、島津の実弟の丸岡武郎である。服部と岩倉は1870年9月以降の入学として、それ以外の学生たちは前出の写真、新聞記事資料などを見れば、1870年6月1日の時点で、NBで学んでいたことはほぼ間違い無い<sup>(42)</sup>。

NB以外では、メリーランド州アナポリスの United States Naval Academy (米国海軍士官学校) で学んでいたはずの松村淳蔵と横井左平太の名前が無い。当時、コネチカット州ミドルタウンのウエズレイアン・カレッジで学んでいた吉田清成も見当たらない。

国勢調査では、カリフォルニア州では、日本人留学生が1人もいないことになっているが、*San Francisco Bulletin* 1870年12月16日によると、過去3年の間に City College で約20人の日本人が学び、発行日現在でも2人の日本人留学生が同大学で学んでいるという。半年のギャップはあるものの、1870年6月1日時点で、サンフランシスコ在住の日本人留学生がゼロという調査結果は不可解である。

このような多くの調査漏れがなぜ生じたのか。調査が実施された時期が6月から7月という点に問題がある。学生達は、転校のため、あるいは避暑のために下宿を留守にしていたケースが多かった。例えば、国勢調査の前年1869年7月初頭、熊本藩留学生横井左平太はRGSの学生だったが、ニューヨーク州北部のストーン・リッジ (Stone Ridge) に滞在していた。ラトガーズ大学の教員アイザック・ハズブルック (Isaac E. Hasbrouck) の実家に避暑と勉強のため滞在し、数学、地理、英文法などを学んでいた<sup>(43)</sup>。

1870年4月に病死した越前藩留学生日下部太郎は、ラトガーズ大学 Scientific School の学生だったが、1869年7月を、ナイアガラ、モンリオールなどを周遊した後、ニューヨーク州北部の East Lake George で過ごしている。避暑と静養を兼ねていたのだろう。この夏は、勝小鹿も日下部と共に過ごしていた時期もあったようで、富田が勝の迎えに行ったりしている<sup>(44)</sup>。

調査員が訪問した時に、留学生本人が不在の場合、年齢や名前 (フルネーム)、その他の質問事項に大家が正確に答えることができたのだろうか。分からないので、答えず調査に未記入というケースもあっただろう。大家自身も避暑等で不在で、調査自体が成り立たなかった家もあったはずだ。

以上で分かるように、6, 7, 更に8月は避暑、静養、転校などで学生や住民の移動が多い時期で、彼らの所在を確認するには、最もふさわしくない時期だった。この調査があと1か月早く、あるいは10月以降に実施されていれば、もっと正確な資料となっていただろう。

#### 4. 調査の不正確さ（問題点）

今回の国勢調査結果を分析して、調査が *Instructions* 通りに実施されていなかったという事実が判明した。

まず、6月1日時点での情報を集めるという「6月1日ルール」がどれほど守られていたのだろうか。NB やボストンでは実際に調査員が日本人留学生の下宿先を訪問したのは、調査書の作成日から、6月末か7月初頭と推測される。*Instructions* を遵守せずに、下宿学生の6月1日時点での所在を確認せず、訪問調査当日の状態を書き込んでしまったという例もあっただろう。調査員が大家に「今、不在でも6月1日にいた下宿人の情報を全部教えてください」、「この住民は6月1日の時点ですでにここ住んでいましたか」ときちんと質問していただろうか。情報が十分でなければ何度でも訪問して質問しなければならなかったので、面倒になり調査員が意図的に調査票に書かなかった、あるいは適当に書き込んだということもありえただろう。

この「6月1日ルール」が徹底されていれば、NB、ボストンでの佐土原藩留学生に関する混乱は起こらなかった。

そして、名前の表記の杜撰さも問題である。*Instructions* によれば、名前は Last name, First name の順に記述することになっていたが、日本人留学生の場合、Last name しか記されていない場合が13件もある。外国人だからといって Last name だけでよいとは *Instructions* には書かれていない。日本人留学生はふだん Last name で呼ばれていて、大家は First name を答えられなかったのだろうか。

要は、現場で調査を担当している Assistant Martial と呼ばれる調査員の資質の問題である。彼らは特に資格が要求されたわけではなく、Martial と呼ばれる人物が独断で選んで決めることができた。前者は後者に調査の経過を定期的に報告する義務があった。

*Instructions* によると、住民が不在の場合は再訪問し、聞き取った調査の結果を住民に確認することになっているが、このような面倒な作業を、酷暑の時期に果たしてどれほどの調査員が真面目に実行していただろうか。

「菅論文」(p. 144, 註 11) によると、全米で Assistant Marshal は 6,530 人いた。1870 年の全米の人口は約 4,000 万人であり、単純計算すると Assistant Martial 1 人が約 6,000 人分を調査したことになる。60 日で調査を終えたとすると、1日 100 人を訪問した計算になる。世帯数にすれば、10 から 20 になる。聴き取り調査であるので、住民不

在、情報の確認など、かなり煩雑な作業だったはずだ。調査がスムーズに進行したとは思えない。

今では検証のしようもないが、ニュージャージー州のこの1870年実施の国勢調査結果を分析した資料集に、1870年調査の結果をデータとして使用する際の次のような注意点が書かれていることを記しておく。

Census enumerators were not necessarily well educated. (中略) The enumerator might not have read his instructions. (*New Jersey 1870 Census Index Vol. 1 A-K*, 1998. p.10)

調査員は、必ずしもきちんと教育を受けた者とは限らないし、*Instructions* に目を通していなかった可能性があり、国勢調査結果は、そのまま鵜呑みにするのではなく、現場での可能性をいろいろ考えながら分析する必要がある、と書かれている。本稿ではこのアドバイスに甘んじて、歴史研究には通常許されない想像力を敢えて駆使したことを断っておく。

いろいろ問題点がある国勢調査だが、価値が全く無い訳ではない。今回は紙幅の関係で取り上げなかったが、この資料を基に、幾つかの更なる分析を試みる予定である。

今回の調査では、NY Public LibraryのGenealogy Roomの職員の方、ラトガーズ大学アレグザンダー図書館のフェルナンダ・ペロン博士を始めとする司書の方々、RGSの後身であるRutgers Preparatory Schoolのティム・コーエン司書に大変お世話になった。また、本稿を書き上げるにあたり、同志社大学名誉教授の北垣宗治氏、日本英学史学会の三好彰会員、米国留学生研究仲間の吉原重和氏、村井智恵氏(シカゴ在住)、容應英元亜細亜大学教授、フルベッキ研究中のジャーナリスト井上篤夫氏から貴重なアドバイスや刺激を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

#### 《注》

煩雑な記述を避けるため、雑誌論文の場合は、論文名のみ記し、参考文献で紀要冊子名、巻号数等を明記した。

- (1) 菅(七戸)美弥「55名の「ジャパニーズ」——1870年米国人人口センサスの調査(population schedule)への接近——」(p.144, 駐2, 以後「菅論文」とする。)

菅は、このような民間データベースの有用性を指摘しながらも、「これらのデータベースでは、スキニング・ミスなどで、キーワード検索した結果が間違っている場合が多く、どうしてもオリジナルの質問票をみての確認作業が必要になる」として、米国立公文書館で入手した1870年質問票のマイクロフィルムを使用している。筆者がデータベースのみ使用した調査結果と菅の結果を比較した限りでは、両者の大きな違いは感じられなかった。

- (2) Census Office, Department of the Interior, *Ninth Census, United States. 1870, Instructions to Assistant Marshals. Act of May 23, 1850.* (Washington, 1870) pp. 8-9 には、調査の仕方が以下のように説明されている。

Names of Individuals — In column 3 will be entered the Name of every person in each family, of whatever age, including the Names of such as were temporarily absent on the 1st day of June, 1870.

住民は、1870年6月1日にその住居に一時的に不在であったとしても、1870年6月1日時点での the house or usual place で記録されることになっている。ただし、学生が下宿、寮住まいの場合は、実家ではなく滞在先で記録されねばならない。これを本稿では「6月1日ルール」と記しておく。この決まりがどこまで守られているかによって調査結果の分析の信憑性が異なってくる。

- (3) 高木不二『幕末維新期の米国留学』(p. 149) 参照。アレグザンダー図書館司書のフェルナンダ・ペロン (Fernanda Perrone) 博士によると、グラマースクールの校舎は火災で焼失し資料も全焼したとのことであった。ところが、筆者の滞在中、ペロン博士が現グラマースクール (Rutgers Preparatory School, ラトガーズ大学から独立して校舎移転) に連絡を取ったところ、Archives は火災の被害を受けておらず、現在、整理が終わり、古文書が閲覧可能ということで訪問した。同校 Archivist の Tim Cohen 氏に Archives を案内していただいた。資料は比較的新しいものが多く、1860年代後半から1870年代前半にかけての資料はほとんど見当たらなかった。最も古いもので1874-1875年の *School Catalogue* が見つかったが、大変薄く小型のもので、在籍生徒リストは掲載されていなかった。

ラトガーズ大学の *School Catalogue* は、*Rutgers College Annual Catalogue 1871-1880* (Newark, 1880) があり、参照した。ここには大学の学生のリストが住所付きで掲載されている。RGS の生徒のリストは載っていない。

- (4) 1870年6月1日という日付は、米国の学年度では1869年9月-1870年6月の年度に含まれる。前掲高木『幕末維新期の米国留学』(p. 95) によると、RGS の学年度が終わるのは例年6月第3週頃である。
- (5) 「菅論文」(p. 140) で、菅も次のように記している。「調査票上の名前については、本人の名乗った音(名前)を調査員が聞いたとおりにアルファベットで記載するため、当然のことながら英語のスペルに関しては程度の差はあれ「間違っ」ている例が圧倒的に多い。」
- (6) Domestic Servant と書かれた使用人は、日本人留学生在が米国に来始めた頃、日本人が住むなら出て行くと言って日本人を恐れていたことを示唆する資料がいくつかある。日本在住の宣教師フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898) の紹介に応じて、ニューヨーク (以後 NY とする) で日本人留學生の下宿先探しに奔走したフェリス (John Mason Ferris, 1825-1911) の回想に次のように書かれている。

It was difficult for some years to find homes for Japanese students. **Other boarders threatened to leave and Irish servants uniformly threatened to leave if they were taken into the house.** (“How the Japanese Came to New Brunswick.” In W. E. Griffis, *The Rutgers Graduates in Japan*, 1916, pp. 33-34. (太字部分は筆者による。なお、グリフィス: William Elliot Griffis, 1843-1928, による当該論文は以後「グリフィス講演」とする。))

日本人留學生は、一般の同居人、特にアイルランド人の使用人に恐れられていたことが分

かる。

フェリス自身の回想によると、日本人は夜起きてきて同居人を殺害するのではないかと、恐れられていたらしい。(フェリスからグリフィス宛の寄稿文、1905年10月11日付、*The Beginning of the Japan of To-Day*, p.2, ラトガーズ大学グリフィス・コレクション所蔵, Group I, Box 19.1)。グリフィスも、当時の無知な米国人は、日本人留学生をネイティブ・アメリカンと混同し、頭皮を剥がされるのではないかと、思っていたらしい、と書いている。 (“The Japanese Students in America”, *The Japanese Student*, Oct., 1916, p.12)

国勢調査の結果から、日本人留学生が住んでいた多くの下宿で、アイルランド人女性が使用人として実際に働いていたことが(逃げ出さずに?)確認できた。

- (7) 1870年6,7月の米国新聞で国勢調査員に関する記事を検索したところ、ある Assistant Marshal からの投書がヒットした。コネチカット州都ハートフォード (Hartford) の *Hartford Courant* の1870年6月6日の紙面である。一般市民の国勢調査への関心が低く非協力的な市民が少なくない、調査員による聴き取りではなく、調査票を住民に記載してもらい回収する方法を取ればどれほど楽だろうか、と実施方法への不満を洩らしている。
- (8) 1870年6月前後のNB在住日本人情報として、幾つかの資料を載せておく。

① ラトガーズ大学学長宛て感謝状：ラトガーズ大学学生新聞 *Targum* 4月号に、4月16日の日付で掲載。NB在住日本人留学生が書いた感謝状で、日下部太郎の葬儀に対して連名で書かれた。M. S. Shimats (島津), L. R. Mauuroka (丸岡), K. Z. Soogiwoora (畠山), K. R. Kats (勝), S. R. Takaki (高木), I. S. Tomita (富田), S. R. Hyrayama (平山), S. G. Hashiguchi (橋口), S. M. Shirane (白峯), K. S. Toda (津田), G. S. Hayashi (林), J. S. Nagai (吉田清成), Z. Y. Kodama (児玉) の13人が署名。

② マレー教授夫妻宛て集合写真：1870年4月19日に撮影された日本人留学生の集合写真。島津、丸岡、畠山、勝、高木、平山、橋口、津田、林、児玉の10人が写っている。

③ 島津忠亮からバラ夫人 (Margaret Tate Kinnear Ballagh, 1841-1909) 宛て集合写真：1870年6月23日にNBで撮影された写真。ラトガーズ大学 Sage Library 所蔵 (村井智恵氏から情報提供)。白峯、丸岡、児玉、平山、島津、橋口、畠山、勝の8人が写っている。②から津田と林が抜けているので、二人はすでにボストンに移動した可能性がある。高木も抜けている。この時点でNBに到着しているはずの岩倉兄弟一行が写っていないのは、バラ夫妻と縁が無かったからだろうか。

④ 1870年6月28日の *Cincinnati Daily Gazette* (オハイオ州) の記事。

There are **about thirteen Japanese connected with Rutgers College or its grammar school**. They are acquiring our language very rapidly, **one who has been in this country only two months conversing with entire accuracy**. They are gentlemanly in their deportment and are received into the best society in this town. (太字は筆者による)

ここでは人数は、大学とRGSを合わせて大体13人となっている。これは中西部の新聞で、東部の新聞の記事の転載と思われる。記事の中で、2カ月前に来て正確な英語を話すと書かれている留学生は、岩倉兄弟とともに5月初頭にNBに来た、毛利が服部だろう。

⑤ 1870年6月23日の *NY Sun* の記事：見出しは、Japanese in college となっていて、ここに主にインタビューされている畠山も含めて14人の日本人留学生の名前が挙げられている。S. Shimato (島津), T. Maru-oka (丸岡), K. Kato (勝), S. Takaki (高木), T. Tomita (富田) T. Hirayama (平山), S. Hashigutchi (橋口), Z. Kodama (児玉), K. Ashi (岩倉具定), K. Tato (岩倉具経), Z. Tamamota (毛利), S. Hattori (服部), G. Orita (折田)。

- (9) 「グリフィス講演」では、NBで学んだ日本人留学生に関する情報が載せられている。グ

リフィスの記憶、記録に基づいたものと思われ、かなり不正確な部分もある。IV. PERSONAL NOTICES という題の章 (pp. 21-27) にまとめられている。平賀のように、明らかに NB で学んでもいないし、住んでもいない日本人は除外した。この中で、ラトガーズ大学に進学しなかった、RGS の学生 (1870 年代前半) と思われる日本人留学生は次の通りである。グリフィスによる関連情報を ( ) に付し、RGS 在学を示唆する部分を太字にした。

- 横井左平太 (He studied at **the grammar school** during a few months and then entered the Naval Academy.)
- 横井大平 (He was **for a short time in New Brunswick**, but in 1870 was obliged to return home on account of ill health.)
- 富田鉄之助 (He made his home for fifteen months with Rev. E. T. Corwin, D. D. After **study at New Brunswick** he entered Whitney's Business College at Newark.)
- 勝小鹿 (He came to New Brunswick, **studying in the Grammar School** two years or more.)
- 毛利重輔 (He was prepared **in the Grammar School at New Brunswick** for the Scientific course, but entered the Rensselaer Polytechnic Institute at Troy, N.Y.)
- 三井兄弟 (They spent some time **at New Brunswick**.)
- 折田彦市 (He **came to New Brunswick in October, 1870**, and was for two years a member of Dr. Corwin's household at Millstone.)
- 岩倉具定 (He came to the United States in 1868. Though in delicate health, **he spent over two years in the Grammar School**.)
- 岩倉具経 (Kotaro と表記) (after **two year's study at New Brunswick**.)
- 高木三郎 (He was **a diligent student at the Grammar School**.)
- 南部英麿 (as he was called **in New Brunswick**, in 1871.)
- 松田晋斎 (He was **at New Brunswick** in 1871.)
- 山川健次郎 (He was **a very diligent student while in New Brunswick**.)
- 川村清雄 (after **leaving New Brunswick**.)

ラトガーズ大学の正式な履修者と在籍期間は *School Catalogue* で分かっている。1869-1870 は Scientific School の First Class に日下部太郎, Second Class に松村淳蔵, 畠山義成, 吉田清成と 4 人在籍していたが, 松村は 12 月に転校, 日下部は 4 月に病死, 吉田清成も転校, 畠山は Left College となっている。つまり, 学年度末の 1870 年 6 月 1 日の時点ではおそらく日本人留学生は 1 人もラトガーズ大学に籍を置いていなかった。

- (10) 前掲高木『幕末維新期の米国留学』(p.93) 参照。RGS は大学の敷地内にあり, RGS の日本人留学生が大学の教員に個人指導を受けることもあった。RGS の卒業生の多くがラトガーズ大学に進学したので, かなり一体感はあったのではないか。*Targum* には, 明らかに大学生ではなく RGS の生徒の日本人留学生も登場している。

アレグザンダー図書館が所蔵するマイクロフィルムで確認したところ, 1870 年代前半では次の日本人留学生の名前が見つかった。*Targum* 掲載号の号数を ( ) 内に記入した。

横井大平 (1872 年 2 月), 岩倉具定 (1872 年 10 月, 1874 年 2 月), 岩倉具経 (1872 年 10 月), 松方 (1872 年 10 月), 三井 (1873 年 1 月), 矢田部 (1873 年 2 月), 児玉 (1873 年 3 月), 高木 (1874 年 3 月), 富田 (1874 年 3 月), 勝 (1874 年 6 月)。

- (11) *THE NEW-BRUNSWICK DIRECTORY, FOR 1870-71*, Babcock & Co. (New

Brunswick, 1870). アレグザンダー図書館は、同書の1868-69年、1874-75年も所蔵していた。日本人留学生の名前で発見できたのは、1874-75年に掲載されていた多久乾一郎 (Taku, K., student, bds. 73 Albany) のみだった。

- (12) *Address Book of Japanese in Boston and other places in the United States. Boston. 1871-76.* Probably Compiled by Charles Knapp Dillaway (1804-89).

この住所録はボストン公共図書館のHPから閲覧可能である。これを翻刻したものに、北垣宗治「BOSTON PUBLIC LIBRARY 所蔵の日本人名簿 (1871-1876)」がある。最新の改訂版は、北垣宗治『複眼の思想 — 新島襄・英学史とリベラル・アーツ論 —』に収録されている。

ディラウエイは、後出する福岡藩留学生や久留米藩留学生柘植善吾、岡山藩留学生花房義質が個人指導を受けた、ボストン郊外ロックスベリー (Roxbury) に住んでいた教育者である。ディラウエイと「ボストン住所録」に関しては、塩崎智『アメリカ知日派の起源』(pp. 155-156) で触れた。

- (13) ここでは、留学生の名前は英語のスペルで書かれた部分のみ記述した。
- (14) *Instructions* によると、Family Name が同じ場合は、Last Name は横線を引き First Name のみで可とされている。それ以外の場合は、名前は両方とも書くことになっているが、この指示は日本人留学生の名前に関してはほとんど守られていない。
- (15) 注(8)の⑤参照。後に判明するが、富田を除いた13人になる。
- (16) 瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学創立者たち — 采原先生遊学日誌」からみるアメリカ留学生の実態について —」(p. 75)。
- (17) 1872年にボストンに留学した金子堅太郎は、ボストンの公立学校であるグラマー・スクールに入学する時、満18歳を16歳と偽って入学した。(高瀬暢彦「初代校長金子堅太郎 (一)」(p. 12)。この場合は公立学校だったのでケースが違うかもしれない。高木の場合は年齢差が大き過ぎるので、単なる調査ミスの可能性もある。「高橋論文」(p. 30)によると、高木よりも更に年上の富田は、15カ月間に渡り牧師コーウィン(後出)の個人指導を受けていた。富田がRGSで学んでいたかどうかは不明。
- (18) 「菅論文」(p. 147)。松井正水は土佐藩派遣英国留学生で、馬場辰猪らと米国経由で渡米した。サンフランシスコの新聞 *Alta* 1870年8月13日によると、松井一行のサンフランシスコ到着が1870年8月12日であるので松井は該当しない。

苗字の Matusky は島津の名前である又之進(またのしん)に音が似ている。名前の Sahera は、1969年12月にNBを去った横井左平太(さへいた)の名前に音が似ている。国勢調査中、この留学生は不在で、家主の Mayo が憶測で名前を答えたのだろうか。*Instructions* によると、調査員には家主が対応することになっている。横井左平太が同じ下宿にいたならば、この混乱もあり得るが、横井が Mayo 家に住んでいたという記録はない。

- (19) 野口逸三郎「時代に生きた人々」(p. 82)。
- (20) *Centinel of Freedom* (ニュージャージー州ニューアーク) 1869年12月14日。記事の詳細は別稿で紹介するが、一行4人が記者と全くコミュニケーションが取れなかった旨が書かれている。
- (21) 勝海舟が長男小鹿の留学を高木と富田に任せたことから分かるように、海舟と高木の関係は深い。海舟は佐土原藩留学生の渡米にも一役買っている。高木は海舟に頼まれて島津一行の面倒を見ていた可能性がある。(野口逸三郎「時代に生きた人々」(p. 72))
- (22) 板倉創造『一枚の肖像画 — 折田彦市先生の研究 —』(p. 31)。板倉は、折田はラトガーズ大学に入学していないと書いているが、折田が入学しなかった理由は明記されていない。「明治四年の日本人留学生十八名の写真にも折田先生の顔が映って居ない」ことが証拠に挙げられている。

この18人の写真の撮影時期は明らかではないが、例えば写真に映っている南部英麿がSFに到着したのは、1870年10月16日でNY着は10月29日である。この写真は1870年11月以降に撮影されたことになる。折田が入っていないのは折田がミルストンに移った後に撮影されたからだろう。

巖平『三高の見果てぬ夢——中等・高等教育成立過程と折田彦市』(pp.24-26)で、巖は、一緒に渡米した岩倉兄弟一行5人のうち、折田だけはミルストンに向かったと述べる。理由としては「下宿先が限定されていたという現実的な困難や彼自身の英語力の不足に加え、グラマースクールの定員の制限などがその一因であったとも考えられる」と述べている。

この下宿不足、英語力不足、RGSの定員という3点は説得力に乏しい。現実には今回の調査結果で折田はNBに下宿していることが判明した。折田は長崎でフルベッキから岩倉兄弟とともに英語を学んでおり、RGSで個人指導を受けることもできただろう。RGSの定員は不明だが、1869年から学生数が増加しRGSの校舎は大規模に改造され建て増しされた。1869年の全学生は120人いたという(高木不二『幕末維新期の米国留学』(p.93))。

- (23) 本稿注(9)の折田彦市に関する情報を参照。
- (24) ポストンの日本人留学生に関しては、塩崎智『アメリカ知日派の起源』を参照。富田、高木、勝は、NBに来る前に一時的にポストンに滞在していたことがあったが、詳細は不明である。岩倉使節団と共に渡米した、福岡藩留学生3人(金子堅太郎、団琢磨、黒田長知)と岩国藩留学生3人(吉川重吉、田中貞吉、土屋静軒)が1872年にポストンにやってきて市内に住んだ。1875年には、第1回文部省貸費留学生の小村寿太郎、斎藤修一郎、菊池武夫らが加わり、日本人留学生のメッカとして賑やかになった。
- (25) 浅野陽吉「柘植善吾傳」(pp.1-29)。
- (26) 高橋義雄『平岡吟舟翁と東明曲』(p.11)。
- (27) 池田哲郎「九州英学史(上)」(p.122)。

1873年12月8日付けのボイントンが書いた島津忠亮宛ての書簡の冒頭部分を紹介する。ペックが出てくる箇所(筆者太字)である。

My dear Mr. Shimadz

When your last letter arrived I was just leaving the house to mail a letter to you urging you to spend at least one day with us and see **Dr. and Mrs. Peck**, but on reading yours and finding you had utterly declined coming I tore it up.

「この前あなたから訪問不可の手紙を受け取った時、私はちょうど、あなたに最低でも1日は私達とペック夫妻と過ごすよう切にお願いした手紙を出すところでした。でもあなたの手紙を読んで来られないことが分かり、私は出そうとしていたその手紙をばらばらに引きちぎりました。」(筆者訳)

文面から、島津とボイントンがかなり親しい関係にあることが分かるが、島津は特にニックネームで呼ばれているわけではないことが、宛名のMr. Shimadzで分かる。当時の日本人留学生が現地の米国人にどのように呼ばれていたかは、興味深いテーマである。

- (28) 西忠温「熊本における幕末・明治初期海外留学生」(pp.76-77)。津田と林はNB到着早々、同胞の横井左平太をアナポリスに訪ねている。そこから3人が連署で熊本藩の元田永孚に宛てた手紙に、当時NB在住の日本人留学生24人の名前が書いてある(p.78)。島津、丸岡、橋口、平山(以上佐土原藩)、日下部(福井藩)、松村、畠山、湯地、吉田、大原、種子島(以上薩摩藩)、高木(庄内藩)、富田(仙台藩)、平賀、井上、本間(以上博多藩)、山田(久留米藩)、勝(静岡藩)、児玉(山口藩)、津川(山口藩)、佐藤(佐倉藩)、白峯(長岡藩)、武藤(庄内藩)、鈴木(同)。大変興味深い資料だが、NBだけでなく、ポストン(平賀、井

- 上, 本間, 山田), サンフランシスコ (佐藤, 武藤, 鈴木), ミシガン州 (津川) の留学生も含まれており, NB在住の留学生だけではなく。当時の日本人留学生間のネットワークを示す貴重な資料である。
- (29) 大熊浅次郎「幕末福岡藩洋行の先駆 松下直美概蹟 (三)」(p. 28, p. 32)。大変貴重な資料だが, 発表年代が古いせいか, 「高橋論文」でも使用されていない。今回の研究で感じたことだが, インターネットで新しい研究成果を探すことに熱中していると, 古い研究成果を見逃してしまう可能性があることを自戒しつつ認識した。
- (30) 同上。
- (31) 田中智子「幕末維新期のアメリカ留学 — 吉田清成を中心に —」(p. 10)。
- (32) 同校のスクール・カタログには次のように書かれている。(Catalogue of the officers and cadets of the Highland Military Academy, Worcester, MA From 1856 To 1875, Worcester, 1875)

Catalogue (JULY, 1870) for the session ending July 1, 1870

Rokusaburau Enouye (井上)  
Aechirau Hongma (本間)  
Masanoske Yamada (山田)

Catalogue (JUNE, 1871) for the session ending June 30, 1871

Rokusaburau Enouye (井上)  
Matanosin Shimatz (島津忠亮)  
Masanoske Yamada (山田)

Catalogue (JUNE, 1872) for the session ending June 28, 1872

Shiro Akabane (赤羽四郎)  
Rokusaburau Enouye (井上)  
Hiroyoshi Erea (入江音次郎?)  
Shonoske Hotta (堀田璋之助)  
Matanosin Shimatz (島津忠亮)  
Teyzo Sirane (白根貞蔵)

- (33) 小林功芳『英学と宣教の諸相』(pp. 46-47)
- (34) 犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新』(pp. 240-242)。日付などは不明だが, 種子島はその後渡英し, ロンドン大学で医学関係の学問を修め, 健康を害して明治五年二月十五日に帰国した。なお, 田中智子「幕末維新期のアメリカ留学 — 吉田清成を中心に —」(p. 15)によると, ハーバード大学 (Harvard College) は, 同じ薩摩藩留学生 (英国) の吉田清成も, 1870年2月頃, 同年9月からの入学を考えていた。
- (35) 吉原重和「新島襄と吉原重俊 (大原令之助) の交流」(p. 9)。
- (36) 吉原重和氏からの情報。
- (37) 小川原正道「初代日銀総裁・吉原重俊の思想形成と政策展開」(pp. 6-7)。
- (38) 犬塚孝明『明治維新対外関係史研究』(pp. 168-169)。
- (39) 同上 (pp. 166-167)。
- (40) 「菅論文」(p. 147)。
- (41) Lasher, Nancy Ilyse, *The power network of the NB Elite, 1870-1905* (p. 38)。
- (42) 本稿, 注(9), (10)参照。
- (43) Judy Yoneoka “Yokoi Saheita’s 1869 Letter to his Brother Daihei: 19 Days in the Life

of an Early Japanese Student at Rutgers College” (pp. 75-76).  
(44) 「高橋論文」 p. 26.

### 【資料 1】

1870 年実施の調査項目 20 項目のうち、本稿で使用したもののみ *Instructions* から以下に抜粋する。

- (1) Dwelling Houses：調査員が訪問した順番に番号がふられている。住所は書かれていない。
- (2) Families：調査員が訪問した順番に番号がふられている。家族の定義は、Under whatever circumstances, and in whatever numbers, people live together under one roof, and are provided for at a common table, there is a family in the meaning of the law. となっている。血縁関係の有無に関わらず、同じ屋根の下で寝食を共にする人員という意味と解した。
- (3) The name of every person whose place of abode on the first day of June, 1870, was in this family：1870 年 6 月 1 日時点で、通常生活する住所にいた家族構成員の名前。
- (4) Age at last birthday：満年齢
- (5) Sex：性別
- (6) Color — White (W), Black (B), Mulatto (M), Chinese (C), Indian (I)：肌の色。データベースの自動読み取り結果ではここが race となっている。
- (7) Profession, Occupation, or Trade of each person, male or female：職業。なるべく具体的に記述することになっている。データベースでは、ここを student で検索した。
- (8) Value of Real Estate：不動産の価値。口頭での返答であるので必ずしも正確とは言えない。
- (9) Value of Personal Estate：不動産以外の資産額。正確に計算するのは難しいだろうし、どこまで正直に申告したかも疑わしい。当時は日本人留学生の 1 年間の米国滞在費用は 800 から 1,000 ドルと見積もられていた。
- (10) Place of Birth：出生地。データベースでは、ここを Japan で検索した。
- (15) Attended school within the year：1870 年 6 月までの 1 年間に学校に通っていた場合はこの欄にチェックする。

### 【資料 2】

データベースで、OCR で読み取られた留学生名に○枠の通し番号を付した。〈 〉は調査員による調査票作成日である。

1. New Brunswick (ニュージャージー州) 9 人
  - (1) Case 家 (1 人) 〈7 月 15 日〉
    - ① Kadoma 児玉
  - (2) Mayo 家 (4 人) 〈7 月 11 日〉
    - ② Lakaki Samara 高木三郎
    - ③ Matsuky Sahera 島津又之進 (?)
    - ④ Haseguchy Lugoro 橋口ルゴロー (?)
    - ⑤ Heriamer 平山
  - (3) Thomson 家 (3 人) 〈7 月 16 日〉
    - ⑥ Zanramota 山本

- ⑦ Orite 折田
  - ⑧ Asahi 旭
  - (4) Wykoff 家 (1人) 〈7月11日〉
  - ⑨ Hirayama 平山
  - 2. Hillsborough (ニュージャージー州) 1人
  - (1) Corwin 家 (1人) 〈7月29日〉
  - ⑩ Tomita Setsnoske 富田鉄之助
  - 3. Boston (マサチューセッツ州) 5人
  - (1) Weston 家 (2人) 〈6月27日〉
  - ⑪ Hyaski 林
  - ⑫ Fenda 津田
  - (2) Peck 家 (3人) 〈7月18日〉
  - ⑬ Herayama 平山
  - ⑭ Simadzri 島津
  - ⑮ Haskegooch 橋口
  - 4. Worcester (マサチューセッツ州) 4人
  - (1) Highland Military Academy (寮 3人) 〈7月2日〉
  - ⑯ Yamada Masanoske 山田正之助
  - ⑰ Enoye Rokusaburad 井上六三郎
  - ⑱ Hongma Aechiran 本間英一郎
  - (2) Thayer 家 (1人) 〈7月2日〉
  - ⑲ Hiraka 平賀
  - 5. Monson (マサチューセッツ州) 1人
  - (1) Converse (Pomfret) 家 (1人) 〈8月5日〉
  - ⑳ Sosheda Hicomara 吉田彦磨
  - 6. Amherst (マサチューセッツ州) 1人
  - (1) Amherst College (寮 1人) 〈6月27日〉
  - ㉑ Nerceina Joseph V 新島襄
  - 7. Holland (ミシガン州) 1人
  - (1) Hope College (寮 1人) 〈7月9日〉
  - ㉒ Togawa Liozo 津川良藏
  - 8. New Haven (コネチカット州) 1人
  - (1) Newell 家 (1人) 〈7月13日〉
  - ㉓ Reynoski Ohara 大原令之介
  - 9. Portland (ニューヨーク州) 2人
  - (1) T. L. Harris (2人) 〈8月11日〉
  - ㉔ Hanage 鼎
  - ㉕ Nomora 野村
  - 10. New York City (ニューヨーク州) 2人 〈不明〉
- 次の2人は、それぞれ別個にニューヨーク市に住んでいる。上記の2人と異なり、留学生の名前が特定できず、留学生かどうか分からない。
- ㉖ Hada Roechew 羽田? 〈12月31日〉
  - ㉗ Mathsemota Taminwaki 松本? 〈6月27日〉

参考文献 (School Catalogue と米国新聞記事は割愛した。)

■使用頻度の高い資料 (「」で略称を使用した。)

- ・菅 (七戸) 美弥「55名の「ジャパニーズ」——1870年米国人口センサスの調査票 (population schedule) への接近——」(『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』(60集, 2009年) pp. 137-151。(「菅論文」として使用。)
- ・高橋秀悦「幕末維新のアメリカ留学と富田鐵之助——「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀総裁」富田鐵之助(5)——」(『東北学院大学経済学論集』(186号, 2016年) pp. 6-91。(「高橋論文」として使用。)
- ・W. E. Griffis, *The Rutgers Graduates in Japan*, 1916, pp. 33-34。(「グリフィス講演」として使用。)
- ・北垣宗治「BOSTON PUBLIC LIBRARY 所蔵の日本人名簿 (1871-1876)」(『英学史研究』(35号, 2002年) pp. 111-132。(オリジナルは, Address Book of Japanese in Boston and other places in the United States. Boston. 1871-76. 45 p. Probably Compiled by Charles Knapp Dillaway) (「ボストン住所録」として使用。)

■その他の参考資料

- ・Census Office, *Department of the Interior, Ninth Census, United States. 1870, Instructions to Assistant Marshals. Act of May 23, 1850*, Washington, 1870.
- ・Hyman Alterman, *COUNTING PEOPLE The Census in History*, Harcourt, Brace & World, Inc., New York, 1969.
- ・Edited by Raeone Christensen Steuart, *New Jersey 1870 Census Index Vol. 1 A-K*, Heritage Quest Bountiful, Utah, 1998.
- ・Lasher, Nancy Ilyse, *The power network of the NB Elite, 1870-1905*, Thesis (B.A.) Rutgers University, 1982.
- ・Judy Yoneoka, "Yokoi Saheita's 1869 Letter to his Brother Daihei: 19 Days in the Life of an Early Japanese Student at Rutgers College" 『海外事情研究』(42巻1号, 2014年) pp. 55-80.
- ・浅野陽吉「柘植善吾傳」『筑後』(4巻12号, 1936年) pp. 1-29.
- ・池田哲郎「九州英学史 上」『英学史研究』(3号, 1971年) pp. 94-124.
- ・板倉創造『一枚の肖像画——折田彦市先生の研究——』(三高同窓会, 1993年)。
- ・犬塚孝明『明治維新対外関係史研究』(吉川弘文館, 1987年)
- ・犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新』(NHK ブックス, 2001年)
- ・大熊浅次郎「幕末福岡藩洋行の先駆 松下直美概蹟 (三)」『筑紫史談』(46集, 1929年) p. 28, p. 32。
- ・小川原正道「初代日銀総裁・吉原重俊の思想形成と政策展開」『法学研究：法律・政治・社会』(第87巻9号) pp. 1-26。
- ・北垣宗治「ボストン公共図書館所蔵の日本人名簿」『英学史研究』(31号, 1981年) pp. 111-132。
- ・北垣宗治『複眼の思想——新島襄・英学史とリベラル・アーツ論——』(晃洋書房, 2018年)
- ・北口由望「明治初期のイエール大学日本人留学生——田尻稲次郎が学んだカリキュラムを中心に——(1)」『専修大学史紀要』(6巻, 2014年) pp. 1-17。
- ・小林功芳『英学と宣教の諸相』(有隣堂, 2000年)。
- ・塩崎智『アメリカ知日派の起源』(平凡社, 2006年)。
- ・瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学創立者たち——采原先生遊学日誌」からみるアメリカ留学生の実態について——」『専修大学史紀要』(3号, 2011年) pp. 55-79。
- ・高木不二「黎明期の日本人留学生——日下部太郎をめぐる」『大妻女子大学紀要』(文系 37

- 号, 2005 年) pp. 233-248。
- 高木不二「横井左平太・大平のアメリカ留学生活—アメリカ側の資料から—」『大妻女子大学紀要』(文系 38 号, 2006 年) pp. 198-218。
  - 高木不二『幕末維新期の米国留学』(慶應義塾出版会, 2015 年)。
  - 高瀬暢彦「初代校長金子堅太郎 (一)」『日本大学史紀要』(4 号, 1998 年) pp. 1-14。
  - 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』(新教出版社, 1978 年)。
  - 高橋義雄『平岡吟舟翁と東明曲』(秋豊園, 1934 年)。
  - 田中智子「幕末維新期のアメリカ留学 — 吉田清成を中心に —」山本四郎編『日本近代国家の形成と展開』(吉川弘文館, 1996 年) pp. 2-36。
  - 西忠温「熊本における幕末・明治初期海外留学生」田中啓介編『熊本英学史』(本邦書籍, 1985 年) pp. 29-84。
  - 野口逸三郎「時代に生きた人々」『宮崎県地方史研究紀要』(5 輯, 1978 年) pp. 71-85。
  - 吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁 — 富田鐵之助傳』(東洋経済新報, 1974 年)。
  - 吉村駿夫「米国ハーバード大学法学部日本人留学生第一号山田稜養のこと」『久留米市郷土研究会誌』(9 号, 1980 年) pp. 27-33。
  - 吉原重和「新島襄と吉原重俊(大原令之助)の交流」『新島研究』(104 号, 2013 年) pp. 3-31。
  - 巖平『三高の見果てぬ夢 中等高等教育成立過程と折田彦市』(思文閣, 2008 年)。

(原稿受付 2018 年 10 月 29 日)

# 京都の番組小学校の英語教育に関する一考察

— 田畑（2017）の分析を中心として —

保 坂 芳 男

## A Study of English Education at *Bangumi* Elementary Schools in Kyoto:

Focusing on analyzing Tabata (2017)

Yoshio HOSAKA

キーワード：番組小学校，京都，明治初期，英語教育，研究倫理

### はじめに

学会での学問上の論争はよくあることである。筆者も以前所属していた日本英語教育史学会で、明治初期に存在していた京都の番組小学校の英語教育の実施の有無について学会内で論争した経験がある。

論争が実りあるものであるためには、学術的進展が伴わないといけない。ところが、筆者の見解に異議を唱えた学会員が、「表2 保坂（2014）において論拠を再考すべき主張（抜粋）」（田畑，2015b, pp. 29-30）として発表し、その内容は一方的な批判であり、実りある論争と言えるものではなかった。その後、私の反論を「田畑（2015）における表2に対する回答」（保坂，2016, pp. 163-171）に掲載させて頂くと同時に学会執行部による建設的な提案（公開シンポジウムの開催等）でこの問題は収束したかに思われた。しかし、その後、さらなる同様の批判（田畑，2017）が行われたので、改めて筆者の見解を整理し論じることにした。ただ、田畑（2017）では、英語教育の実績に対して本人は自ら誤りを認めており、論争の成果として高く評価できる。詳細は後述とする。

事の発端は、明治初期の京都の番組小学校で英語教育が行われたかという問題である。田畑氏は、教育課程（資料1）等を根拠に一貫して「行われていた」という立場であるが筆者は異なった見解を持っている。

## 1. 京都の番組小学校で実際に英語教育は行われていたか

筆者の見解は、以下の4点から京都の番組小学校では、教育課程上には英単語の学習が明記されていても、「確実な証拠をつかむことはできなかったが、ほとんどの状況証拠が、実際に英単語が教えられた可能性は低いことを暗示している」（保坂，2015，p. 65）という結論である。その根拠として以下の4点を挙げた。

- ① 明治4年8月の教育課程がそのまま実施されたとしても、明治7年1月に学制に準じた教育課程に変更するまでの最大2年5か月である。「英語学一百言」に関しては、欧学舎<sup>①</sup>の生徒が実際に教えたかと仮定すると、明治6年2月からわずか11か月間となる。しかし、同時に、文部省から学制に示した教育課程に変更するように強く求めていたのも事実である。11か月以内、2、3か月という可能性すらありえる。
- ② 対象人数は、当時の小学生のわずか0.09%であり、たとえ当初の予定通り欧学舎の生徒が派遣されていたとしてもほぼ個人教授であったと考えられる。
- ③ 周辺状況（『学校必用英語一百言』や『西京伝新記初編』）を分析した結果、実際には英単語等は教えられなかったのではないかと考えられる。
- ④ 進級の重要な条件となる検査では、「英語学一百言」は対象とされていない。ということは、たとえ「英語学一百言」が教えられていたとしても番組小学校では重要な教育内容ではなかった。

そして最後に、「今の段階では、英単語が教えられた可能性は極めて低いとするが、今後、結論が変わる可能性はありうる。ただ、この結論を覆す新たな証拠が発見されても教育史上、それほど重要な意味を持つものではないであろう」（p. 65）とまとめた。

一方、田畑氏は、「小学校の句読師がドイツ語を担当して教えた可能性が高い」<sup>②</sup>「洋語教授実績の高さを示すとも解釈できよう」（田畑，2013a，p. 99）、「少なくとも銅駝小学校では明治初期に英語教育を実施していたのではないかと考える」（田畑，2013a，p. 104）、「銅駝小学校では、明治初期に英語を教授していたと判断できる」（田畑，2013b，p. 95）、「具体的に英語が教授されていたと記載のある京都番組小学校の学校文書の証左となるものである」（田畑，2014，p. 84）（筆者により一部省略）と述べ、番組小学校での英語教育の実施に対して肯定的に捉えている。

これだけであれば、今後お互いが研究を深め、切磋琢磨する中で学問上の真実に近づくことになる可能性があったため、この論争は筆者にとって歓迎すべきものであった。

資料1 小学課業表 明治四年八月（『京都府誌』上，pp.331-332）

	第一等	第二等	第三等	第四等	第五等
句読	日本外史 易知録 万国公法 太政官諸規則	日本政記 五経 真政大意 西洋事情	国史略 孟子 小学 地学事始 生産者案内	職員令 戸籍法 学庸，論語 世界国尽 窮理図解	小学子弟心得章 孝経，市中制法 郡中制法 町役村役心得 府県名
誦	内外国旗章 外国里程 英独語学五百言	内国里程 本邦環海里程 英独語学三百言	帝号 英独語学一百言	年号 国名	五十韻
習字	公用文 既顕手束	世話千字文 諸券状 諸職往来 復文	諸国郡名 商売往来 私用文	受取諸券 名字尽 山城郡村地名 京都町名	五十韻平カナ 五十韻片カナ 数名，干支 三枚御高札 名頭
算術	必要雑問 求積 開平方 開平雑問 開立方 開立雑問	比例法 比例雑問	珠算兼修 諸等諸法 筆算 数諸法	珠算兼修 乘法 除法	珠算兼修 加法 減法

（太字は筆者）

論点を整理しておきたい。京都には明治初期に64の番組小学校（降順五等級制）が設置された。明治4年8月に小学課業表（資料1）が制定された。それには、第三等の誦という教科の中で「英獨語学一百言」という科目が明記されている。それを根拠に教科書等の調査を行った結果、田畑氏は前述のように番組小学校では限定的とは言え英単語の学習は行われていたと結論付けている。一方、筆者は、明治初期の教育事情から判断して、実施計画はあったが、実際には英単語の学習は行われなかった可能性が高いと結論付けた。その詳細は、重複になりかねないので省略する。

## 2. 田畑（2017）への反論

管見の限りでは、田畑（2013a, 2013b）は、番組小学校の英語教育を正面から扱った数少ない論文の一つである。田畑の史料収集能力は極めて優れていると思われる。しかしながら、史料の解釈、論述の進め方には疑問を呈さないわけにはいかない。番組小学校で実際に英語が教えられたかに直接関係する以下の2点を改めて整理しここに紹介したい。

## 2.1 「但シ洋語ハ此限ニアラス」の解釈

田畑（2013a）は、「洋語教師について但し書きがあるということは、洋語教授実績の高さを示すとも解釈できよう」（p. 99）と解釈している。

田畑（2013a）が根拠とした「三教師心得」は、明治3年11月に出されている。この心得は、明治4年8月に新教育課程を実施するに当たり、「毎校三局ヲ設ケ句讀習字算術ノ三教師ヲ置ク誦誦ハ句讀師ノ兼職タルヘシ但シ洋語ハ此限ニアラス」（『京都小学三十年史』, p. 145）と決めている。この時期にはこの新課程は実施されていないのであるから、洋語教授の実績があるはずがない。新課程では、誦誦という教科の中で、「英獨語学一百言」等を教えることになっており、その担当は、句読師ではあるが、洋語だけは他の者が担当しても良いということであろう。少なくとも兼任の句読師は、洋語を教える必要はないということだけを規定しているのであって、洋語の実績には全く言及していない。そもそも新教育課程実施前のことであるから、この時点では番組小学校で洋語教授が実施されているはずがない。

田畑（2017）では、ようやくこの点の解釈の誤りを認めている。「この但し書きによる洋語教授への言及は、明治3年11月時点での洋語教授計画を意味すると解釈している」（p. 238）と自らの過ちを認めている。これは、2015年以來の論争の大きな研究上の成果と言えよう。

## 2.2 「具体的な英語教科書の証言」について

田畑（2013a）は、「西川氏から、今回、具体的な英語教科書の証言を得ることができた。このことにより、少なくとも銅駝小学校では明治初期に英語教育を実施していたのではないかと考える」（p. 104）と述べている。文中の「西川氏」とは、岸田俊子の伝記を著した西川祐子氏のことである。

まず、疑問に思うのは、西川氏からの私信だけで史実として断定してよいのであろうかということである。また、内容的に齟齬が見られる。

田畑（2013a）では、最初に「京都小学課業表の中の「英語学一百言」に相当すると思われる教科書『學校必要（ママ）（筆者注：「必用」の誤り）英語一百言』を発見したことからこの研究を開始した」（一部略）（p. 94）と述べている。次に、岸田俊子の伝記を著した西川祐子氏からの私信を引用し、「これこそ、「明治四年に京都府がつくった小学課業表に記載されている教科書」つまり、英単語を学ぶための教科書であったと思われる」（p. 97）と述べ、「西川氏が実際に目にした教科書は上京三一番小学校で実際に使われた教科書である可能性が非常に高い」（pp. 97-98）と判断している。そして上記に述べたように、「少なくとも銅駝小学校では明治初期に英語教育を実施していたの

ではないかと考える」(p.104)と結論付けている。

しかしながら、西川氏が実際に目にしたと思われる教科書を、『学校必用英語一百言』と仮定すると、矛盾が生じることになる。西川氏は、「英語教育については、英単語、単語の指示物の絵、日本語が並ぶ木版の教科書」(p.96)と証言しているが、実際の『学校必用英語一百言』には、絵は全くないのである。西川氏が見たのは銅駝小学校が購入した別のものである可能性が極めて高いと思われる。

田畑(2017)においては、番組小学校で用いられた教科書についての田畑氏の立場は一貫して以下のように述べている。

西川氏が確認した教科書の特徴が、田畑(2009, 2010, 2013b)で明らかにした『学校必用英語一百言』(1873年刊, 加納陰太郎著)とは異なることについては、この異なることを理由として西川祐子氏が確認した教科書が「教科書ではなかった」とは言えない。(p.239)

では、西川氏が確認した教科書は何であろうか。『学校必用一百言』でないとするれば何なのかを明らかにして初めて論文に記載できるのではないであろうか。

この点に関しては、京都市学校歴史資料館の学芸員で番組小学校の研究の専門家である和崎光太郎氏は、「西川さんは、銅駝に英語の教科書があったかどうか、たいして気に留めていないし良く覚えていないそうです。銅駝史料館は、こちらも初夏ですが、悉皆調査してきました。もちろん現存していませんでした」(2017年10月23日)とメールで筆者に回答している。

田畑(2017)は多くの問題点を含むと考えられるが、ここまで主として京都の番組小学校の英語教育に関する問題についてのみ回答してきた。というのは、論争があくまで個人攻撃ではなく、研究の進展につながることを期待するからである。また、その題目に「番組小学校」とあるので、反論もそれに限定した。ただ、田畑(2017)の内容には、それ以外の問題点も散見される。

### 3. 田畑(2017)のその他の問題点

京都の番組小学校で英語教育が行われかについては、田畑(2017)では納得できないということはすでに述べたとおりである。田畑(2017)は、他にも問題含みの記述が多いので以下、簡単にまとめてみた。

### 3.1 レジューメ分析の危険性

前述したように、論文化されたものがあるにも関わらず、いかようにも解釈できる、学会発表用レジューメを論文と同列に扱って、それを批判することの危険性については、保坂（2016）を参考にして頂きたい。ここでは、一例のみ紹介する。

赤穂小学校の英語教育に関してである。「この赤穂小学校は保坂（2012a, p. 4）において、英語暗誦をも含む「京都小學課業表」の影響が見られると主張している」（p.225）や、「反対の主張をしていたことが判明した」（p.231）と繰り返し述べて筆者が調査結果を変えた<sup>(3)</sup>ように主張している。しかしながら、保坂（2012a）では、「京都の課業表を参考にした府県あり（略）ただし実施には疑問あり」（p. 5）と述べ、さらに保坂（2016）では、「裏付け資料が得られなかったことから私も赤穂小学校では京都の課業表は実施されなかったと考えている」（p. 164）とも述べている。保坂（2016）は、「田畑（2015）における表2に対する回答」（pp. 163-171）であるから、田畑（2017）を著す際に、田畑氏がこれを読んでいないとは考えられない。

本来は研究者であれば、已むを得ない場合を除き、学会レジューメではなく、刊行された論文を分析すべきである。また、上記の保坂（2016）を読んでいないとすれば先行研究分析不足と判断せざるを得ない。「先行研究を十分に調査すると共に、論文執筆にあたって先行研究を適切に参照すること」（『科学の健全な発達のために — 誠実な科学者の心得 —』, pp. 70-71.）は、研究者としての当然の心得であろう。

### 3.2 論点のすり替え

論拠の妥当性の項で田畑（2017）は、『西京伝新記初編』や『心眼の人 山本覚馬』に対して、「小説が新資料であると主張するには引用の方法に問題があり」（p. 229）、「虚構である小説に書かれたものを「証言」と主張するのは無理がある」（同上）と述べている。

これに対して、筆者は、「史料が小説なので根拠が薄いとの意見であるが私も同意見である。この点を批判するのであれば、小学課業表を作成した人物を特定する確実な証拠を発見することではないか」（保坂, 2016, p. 163）と述べている。

『西京伝新記初編』に関しても論点のすり替えが行われている。保坂（2015）では、当時の京都の番組小学校の様子がリアルに描かれているという例を紹介しただけである。その中では、巡講師や化学の授業の記述がある一方で、英語やドイツ語の授業に関しての記述がないと指摘しているだけである。校注担当の小林勇氏は、「「伝新記」が「電信機」の洒落であることもいうまでもない。（略）本書、特に初編は正に京都の新事実を速やかに伝えようとすることに専らである」（『西京伝新記初編』, p. 232）と述べてお

り、その内容は信憑性が高いと思われる。

しかしながら、田畑（2017）では、「記述の一部のみが抽出されているため、同書の著者の意図が変えられている」（p.229）と述べており、具体的に何が言いたいのか全く見当がつかない。『西京伝新記初編』の記述が信用できないものであるなら、どの部分が該当するか詳述すべきである。また、万が一、全くのフィクションであるとしても、番組小学校で英語教育が行われたことの証明にはつながらない。

『西京伝新記初編』に関しては、番組小学校で英語が教えられていたという証拠を見つけることが、その内容に対する正当な反論となる。同様に、『心眼の人 山本覚馬』に関しても、小学課業表（資料1）を作成した人物を特定することが正当な反論となるのではないか。

いずれにしても、番組小学校で英語を教えた証拠には全くならないので、史料が小説であるという議論は、研究上、全く意味をなさないものである。あえて論点をすりかえてまで論争を蒸し返すべきではないと判断する。確かに田畑氏と筆者とは、番組小学校の英語教育に関して結論を異にしている。しかし、論点をずらして批判するのではなく、新たな史料を見つけて論じる方が余程生産的であると思われる。

### 3.3 「小学校」という用語に関する問題

田畑氏の一連の論文を見ると、「明治初期における京都番組小学校」、「明治初期の初等公立教育機関」、「明治初期公立小学校」、「明治初期の小学校英語教育」と言った文言が題目に多く使用されている。

番組小学校の名称は、明治2年5月21日の上京二十七番小学校に始まり、明治5年5月に終了となる。詳細は、保坂（2015, p.66）を参照して欲しい。田畑氏は、番組小学校での英語教育の根拠の一つを、欧学舎の生徒による指導に置いている。しかし、その時期は明治6年2月であり、すでに番組小学校は区学校と改称されている。

公立か私立かを一括りに述べることも無理がある。明治5年頒布の「学制」には、官立・公立・私立と区別して列記した箇所はない（神辺, p.241）。むしろ、学制直後に各府県が開設した小学校は、「私立学校と称されねばならなかった」（神辺, p.277）ようである。当時は、「明治五年から七年前半にいたる官・公・私立学校の名称は時期により府県により、その解釈がまちまちであった」（神辺, p.279）。明治7年8月の「文部省布達二二号」で、官と公とが区別された。この点は、保坂（2014b, p.31）を参照して欲しい。

松村幹男氏は、「学制期に上等小学で外国語の一二を教えた学校はないというのがこれまでの通説」（p.66）と述べている。学制によって規定された上等小学は四年制である。その下に同じく四年制の下等小学が存在する。田畑氏が明治初期に英語教育が行わ

れたと主張する学校はすべてこの上等小学ではない。田畑氏の論述では松村氏のいう通説を覆す事には全くなっていない。

筆者の結論は、「個々の事例研究であれば意味をなすが、定義を曖昧にしたまま、また、実施時期を曖昧にしたまま、明治初期の公立小学校ということで一括りにすることは難しい」（保坂，2014b, p. 31）ということである。

### 3.4 自己剽窃の虞

田畑（2017）を執筆した意図が理解できない。他の論文でもほとんど同じことを論じておられるからである。『APA 論文作成マニュアル』（p. 9）には、以下の記述がある。

他者の業績を自分の業績として発表（剽窃）してはならないと同様に、自分の業績であっても、過去の業績を新しい業績であるかのように発表（自己剽窃）してはならない。

田畑（2017）は、すでに公表されている内容との重複が多く、本マニュアルで言うところの自己剽窃の疑いが懸念される。

小千谷小学校、豊浦小学校の件（pp. 226-227）は、すでに田畑（2015b, p. 29）の指摘に対して、保坂（2016, p. 164）で回答を行っている。

史料が小説である件に関して、田畑氏（pp. 228-231）は再度論述しておられるが、その指摘に関しても保坂（2016, p. 163）で解決済みではないか。筆者の考えは、前項の「論点のすりかえ」で述べたところである。

## 4. まとめ

明治初期の教育、特に英語教育の実態については未だ解明されていない部分が多い。京都の番組小学校に関しても、教育課程は残されているものの、その実施に関しては不明な部分が多い。

先述した和崎光太郎氏は、「外国語は（略）とりあえず課業表に入れて将来教える予定にしていたものの、結果として少なくとも正規の教育としては教えるに至らなかった」（p. 84）と述べている。彼は、番組小学校に関して多くの論文を執筆しており、今のところ、彼の説が学会の定説であると言わざるを得ない。それを覆すには、丁寧に説得力のある検証を行う必要がある。

縁あって同じ研究テーマを選んだのだから、真実追求の観点からお互いの研究成果を真摯に議論し合える機会が来ることを望んで稿を閉じたい。

## 《注》

- (1) 欧学舎とは、明治初期に中学の一分科として京都に存在した、獨逸學校、英學校、佛學校のことである。欧学舎の生徒による小学校での英語教授に関しての保坂の見解は以下の通りである（保坂，2015，pp.60-61）。
- 徐々に上級に進む生徒が増えてきた。そこで、京都府は明治6年2月に市中小学校欧学臨校仮則・欧学生派遣規則を制定し、欧学舎の生徒が小学校で外国語を教えることにした。その時の派遣欧学生一覧と外国語履修生の一覧が残されている。
- 英語担当には、富島三美ら11人、ドイツ語担当には、塩津貫一郎ら3人、フランス語担当には、高木豊三（後に東京帝国大学でフランス法を教授）ら2人がいる。ただ、彼ら数人の自伝等にはこのことが全く言及されていないし、教えた可能性があったとしても1年未満である。それもわずかな生徒に対してのみである。
- (2) 柳池校に関する記述である。当時の柳池校の句読教師であった塩津貫一郎は、欧学舎の生徒でもあった。塩津は欧学舎でドイツ語を学んでいたため、田畑氏は「小学校の句読教師がドイツ語を担当して教えていた可能性が高い」（田畑，2013a，p.99）と判断したようである。しかしながら、筆者は開智学校の例を挙げ、塩津が単に生徒として欧学舎でドイツ語を学んだだけで、それがそのまま柳池校で塩津がドイツ語を教えたと考えるのには無理があると考えられる。
- (3) 「当時の赤穂小学校の校長先生は「立命館大学の保坂教授からの電話に対し『英語教育は無かった』と返答した」と述べている」（田畑，2017，p.260）にもかかわらず、その調査結果を筆者が変えたように田畑氏は主張している。しかしながら筆者の主張は、「赤穂小学校では京都課業表は実施されなかったと考えている」（保坂，2016，p.164）であり、調査結果を変えたとか、「反対の主張をしていた」（田畑，2017，p.231）という田畑氏の指摘は全く当てはまらない。

## 主要参考文献

- アメリカ心理学会（APA）（2013）.『APA論文作成マニュアル』（前田樹海・江藤裕之・田中建彦訳）第2版，医学書院。
- 荒井武（編）（1986）.『近代学校成立過程の研究』御茶の水書房。
- 有賀義人・千原勝美（1965）.『開智学校沿革史』非売品。
- 石川謙（1972）.『日本庶民教育史』玉川大学出版部。
- 小千谷小学校史編纂委員会（編）（1977）.『小千谷小学校史』上巻，東峰書房。
- 海後宗臣（1973）.『明治初年の教育』評論社。
- 海後宗臣（1981）.『海後宗臣著作集』第八巻，日本教育史研究Ⅱ，東京書籍。
- 神辺晴光（1993）.『日本における中学校形成史の研究〔明治初期編〕』多賀出版。
- 倉沢剛（1973）.『学制の研究』講談社。
- 菊池純（1884）.「西京伝新記初編」（『開化風俗誌集』新日本古典文学大系 明治編1，岩波書店 2004年）。
- 京都市小学校創立三十周年記念会（編）（1902）.『京都小学三十年史』京都市。
- 京都府（編）（1915）.『京都府誌』上，似玉堂。
- 田畑きよみ（2012）.「明治初期の初等公立教育機関における英語教育の研究——地方教育史・教科書調査の結果から」『言語教育科学』10，pp.91-107。
- 田畑きよみ（2013a）.「明治初期の京都番組小学校における英語教授計画：他校との比較を通して」『日本英語教育史研究』第28号，pp.93-110。

- 田畑きよみ (2013b). 「明治初期公立小学校における英語教授計画の一考察 — 京都番組小学校の学校所蔵文書の分析を基に」『東京国際大学論叢 国際関係学部編』第 19 号 (通巻第 70 号), pp. 91-101.
- 田畑きよみ (2014). 「明治期の教科書調査から見た公立小学校英語教育の研究 (1) — 『学校必用英語一百言』など英単語集を中心に」『JASTEC 研究紀要』第 33 号, pp. 73-92.
- 田畑きよみ (2015a). 「明治初期の小学校英語教育の研究 — 公立学校における「英語学習者年齢に関する一考察」」『JASTEC 研究紀要』第 34 号, pp. 79-94.
- 田畑きよみ (2015b). 「明治初期における京都番組小学校の課業表を採用した学校の英語教育 (2)」『日本英語教育史研究』第 30 号, pp. 25-43.
- 田畑きよみ (2017). 「明治初期京都番組小学校での英語教授計画の一考察: 英語教授計画に対する所論の分析と回答」『埼玉大学紀要 (教養学部)』第 52 巻第 2 号, pp. 221-262.
- 豊浦小学校百年史編集委員会 (編) (1972). 『豊浦小学校百年史』豊浦小学校創立百周年記念会.
- 仲新 (1962). 『明治初期の教育政策と地方への定着』講談社.
- 西川祐子 (1986). 『花の妹 — 岸田俊子伝』新潮社.
- 日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会 (編) (2015). 『科学者の健全な発展のために — 誠実な科学者の心得 —』丸善出版.
- 日本学術振興会 声明「科学者の行動規範 — 改訂版 —」2013 年 1 月 25 日 Retrieved from <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-s168-1.pdf>
- 保坂芳男 (2011). 「明治初期における小学校英語教育: 京都市番組小学校の例を中心に」(日本英語教育史学会第 27 回全国大会口頭発表資料)
- 保坂芳男 (2012a). 「明治初期の小学校英語教育に関して: 京都市番組小学校の例を中心に」(日本英語教育史学会関西例会口頭発表資料).
- 保坂芳男 (2012b). 「明治初期における小学校英語教育: 京都市番組小学校の場合 (1)」『北陸英学史研究』第 12 輯, pp. 42-47.
- 保坂芳男 (2014a). 「明治初期における小学校英語教育: 京都市番組小学校の例を中心に (3)」(日本英語教育史学会第 30 回全国大会口頭発表資料)
- 保坂芳男 (2014b). 「京都の番組小学校における英語教育に関する一考察: 先行研究の分析から見えてくるもの」『人文・自然・人間科学研究』(拓殖大学論叢) 第 32 号, pp. 25-39.
- 保坂芳男 (2015). 「京都の番組小学校における英語教育: その実態の解明に向けて」『英学史研究』(日本英学史学会紀要) 第 48 号, pp. 55-73.
- 保坂芳男 (2016). 「田畑 (2015) における表 2 に対する回答」『日本英語教育史研究』第 31 号, pp. 163-171.
- 松村幹男 (1992). 「明治初期 (明治 1-9 年) における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第 2 部第 41 号, pp. 61-68.
- 和崎光太郎 (2015). 「京都番組小学校にみる町衆の自治と教育参加」(坪井由美・渡部昭男編著『地方教育行政法の改訂と教育ガバナンス — 地方教育委員会制度のあり方と「共同統治」—』, 三学出版), pp. 74-87.

(原稿受付 2018 年 10 月 31 日)



## お別れのご挨拶

— ワタムシのように —

音 在 謙 介

(政経学部教授)

このたび 2019 年 3 月末日をもって 28 年間奉職いたしました本学を、退職させていただくこととなりました。この場をお借りして、拓殖大学の全ての教職員の皆様にご挨拶と若干の自己反省の弁を申し上げたく存じます。

私は英語教員でしたが、TOEIC 重視という時代の趨勢に押し流されて、豊かな人文的知見を伝えるという英語教育のもう一つの大事な任務を十分に果たせていなかったのではないかと、今忸怩たる思いに駆られております。講義で特に思い出に残っているのは、教養科目の「英語圏の文学」と選択英語科目の「エコノミスト・ウォッチング」です。前者はアメリカ文学の代表的作品の映画化作品の鑑賞と解説です。学生諸君にアメリカ文学を視覚的に受容してもらいました。後者においては日本メディアに対する不信を訴え、世界のメディアに直接接する必要を説き、実際に「エコノミスト」を一緒に読むというワークショップを展開しました。しかし、残念ながらあまり学生が集まらず頓挫してしまいました。

一方、私は人文研委員を務めており、いつごろからか紀要編集長という肩書が与えられ、初めの約束では毎年度交代だったはずが、何となく毎年度自動延長のようなことになってしまい、結果としてかなりの年月その任に当たっておりました。どうも一番ひまそうな者がやるということのようでした。ちょうど私がその任に着いたころ、某大学の紀要論文集が献本先の某図書館から、何らかの理由で送り返され、以後献本不要と申し渡されたという事件がありました。それに危機感を覚えた私たちは、執筆の先生方にますます寄り添って、積極的にご助言ご協力に励むことを申し合わせ、誌面の充実に努めて参りました。この方針は一応の成果を上げたように思われ、嬉しい思い出となっております。

私は、リンゴヤクリなどに寄生して、冬になると木を離れて風花みたいに空中をふわふわ漂っているワタムシという小さな白い虫が好きです。この虫変わっていて、歩いていると何となくふわふわと人のそばに寄って来るのですが、おや可愛いと近づいて行くと、ふわっと逃げてどこかに消えてしまうのです。

みなさんありがとうございました。名残は尽きませんが、私も拓殖大学をふんわりと離れてゆこうと思います — ワタムシのように。

## 音在謙介教授 学歴・著作・学会発表等

### 〈生 年〉

1948年 5月28日

### 〈学 歴〉

1969年 4月 静岡大学人文学部人文学科入学

1974年 3月 静岡大学人文学部人文学科卒業（哲学専攻，文学士）

1981年 4月 早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程入学

1984年 3月 早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了（文学修士）

### 〈職 歴〉

1985年 4月 「ニューズウィーク日本版」翻訳協力員（至1986年10月）

1986年 4月 獨協高等学校教諭（英語）（至1991年3月）

1988年 4月 神奈川大学外国語学部講師（非常勤）（英語）（至1992年3月）

1990年 4月 早稲田大学第二文学部講師（非常勤）（英語）（至1997年3月）

1991年 4月 拓殖大学外国語学部専任講師

1993年 4月 拓殖大学外国語学部助教授

1996年 4月 拓殖大学政経学部助教授

2002年 4月 拓殖大学政経学部教授（至2019年3月）

2003年 4月 東洋大学文学部講師（非常勤）（比較文学）（至2011年3月）

2004年 4月 東京女子大学講師（非常勤）（比較文学）（至2005年3月）

## 主要業績

### 〈共 著〉

1997年 『英語科授業学の現代的課題』（pp. 85-98）「教材としてのヘミングウェイ試論  
— 自己のアイデンティティから捉え直す英語教材 —」（金星堂）

2009年 人文・自然・人間科学研究 No. 21 「英語教育」という思想 — 「英学」パラ  
ダイム転換期の国民的言語文化の形成 —

### 〈論 文〉

1984年 ヘミングウェイ — 不吉の影を追って —

早稲田大学大学院修士課程修士論文

- 1986年 『アフリカの緑の丘』の小説的本質について  
早稲田大学英文学会「英文学」
- 1987年 ヘミングウェイの新刊遺作『エデンの園』について — 紹介と批評  
早稲田大学英文学会「英文学」
- 1989年 ヘミングウェイとイマジズムと俳句について  
早稲田大学英文学会「英文学」
- 1990年 教科書に現れたヘミングウェイ  
日本英語教育史研究 5号
- 1991年 教科書に現れたヘミングウェイ — 『老人と海』の場合 —  
日本英語教育史研究 6号
- 1992年 教科書に現れたヘミングウェイ — その他の作品の場合 —  
日本英語教育史研究 7号
- 1992年 ヘミングウェイの文体における俳句の痕跡  
拓殖大学論集 198号
- 1992年 アイリス・マードック『ユニコーン』におけるゴシック形式の意味  
拓殖大学論集 200号
- 1994年 “A Canary for One”における Hemingway の and の用法について  
拓殖大学語学研究 77号
- 1995年 Hemingway における across の用法  
拓殖大学人文・自然科学 Vol. 3, No. 1
- 1999年 ‘Indian Camp’ における文章構築過程  
拓殖大学語学研究第 92号
- 2000年 Ezra Pound 文献の中に見る Ernest Hemingway  
拓殖大学語学研究第 93号
- 2000年 Hemingway の作品・報道記事等における日本への言及について  
拓殖大学論集 233号
- 2004年 ヘミングウェイにおける海と浪 — カタストロフィーの技巧  
拓殖大学論集 257号
- 2005年 Hemingway and Haiku: The Hidden Structure Beneath the Surface  
拓殖大学論集 198号
- 2005年 The Journeys with Sad Rains — A Parallel Reading of Hemingway and Santōka  
拓殖大学論集 260号
- 2006年 To Whom the Petal Floats — Japonism in *A Farewell to Arms*

お別れのご挨拶

拓殖大学論集 262 号

2009年 現代の視点から見る「隠れキリシタン」現象 —「隠れキリシタン」における「まなざし」—

拓殖大学論集 272 号

2011年 A Study of Crypto-Christians in Nagasaki: Focusing on Thomas Jihyōe, a Priest in 17th Century Japan

拓殖大学論集 282 号

2012年 ヘミングウェイの文体に関する一考察 —ヘミングウェイ文学成立以前と以後の文体比較に焦点を当てて

拓殖大学論集 285 号

2012年 On Excellent Haiku in 'Haiku International'

拓殖大学論集 288 号

2014年 「If — 構文」の教授法に関する一提言

拓殖大学語学研究第 130 号

2016年 「隠れる」という志向性 — その民俗的意義

拓殖大学論集 302 号

#### 学会発表

1989年 日本英語教育史学会月例会研究発表「教科書に現れたヘミングウェイ」

1990年 日本英語教育史学会月例会研究発表「教科書に現れたヘミングウェイ」— 『老人と海』の場合 —

1991年 日本英語教育史学会月例会研究発表「教科書に現れたヘミングウェイ」— その他の作品の場合 —

1992年 日本英語教育史学会全国大会研究発表「英語科文学教材について」

1995年 日本英語教育史学会全国大会研究発表「ヘミングウェイにおける across の使われ方」

1996年 日本英語教育史学会全国大会研究発表「ヘミングウェイにおける文体論的研究について」

2001年 日本英語教育史学会全国大会研究発表 *Barnes's New National Readers* における「文学教材」

2002年 日本比較文学会東京支部例会研究発表「ジャポニズムの作家としてのヘミングウェイ — 文体の下に遺る俳句的構造の発掘 —」

2003年 日本英語教育史学会全国大会, 記念シンポジウム「これからの日本英語教育史」パネリスト



## 感 謝

山 下 萬 里

(商学部教授)

本学に奉職して38年になるようです。ドイツ語の専任講師として着任したとき、八王子キャンパスにはまだ図書館も管理研究棟もなく、研究室は二人部屋で、親元から通っていました。やがて一人暮らしが始まり、結婚し……、そして去年は、母親を100歳で看取りました。研究者としても、教育者としても、非力、非才であるにもかかわらず、ここまで導いてくださいました皆様に、ただ感謝するしかありません。

商学部には自由で民主的な気風があり、第二外国語にはその分野で我が国を代表する方々がおられて、多く教えられました。当初は、映画評論の真似事のようなことしており、各社の試写室にいる時間が長く、なかなか論文を書くことができませんでした。大学、大学院時代からユダヤ系文学を読んでいましたが、あるとき、今はない渋谷宮益坂の古本屋でシュニッツラーの原書を何冊も入手し、このウィーンの作家を対象にすることにしました。彼には、ユダヤ人問題を扱った作品もあるのです。

しかしその後、『舞姫』の舞台がベルリンのユダヤ人の多い地区であることから、森鷗外に深入りしてしまいました。そのころ、鷗外の専門家の方々の書かれるものには、首をかしげざるを得ない記述がまま見かけられました。また副産物として、本学の二代目総長、小松原英太郎が、ベルリンで鷗外と交流していたことも判明しました。小松原が文部大臣となっても交流が続いていたことは、鷗外の日記から見とれます。すべてに中途半端で終わってしまいそうですが、何とかこれから、まとめてみたいとは念じております。

近年は、商学部の第二外国語教育の態勢を整えることに意を注いできました。心残りなのは、古くから本学がその教育を行ってきたヒンディー語の専任教員が、不在のままであることです。各種の機関が予測するところでは、インドはこの5年か10年で、人口で中国を超え、GDP(総額)で日本を追い越すに違いない超大国です。本学の第二外国語教育の発展・充実を祈ります。

最後にもう一度、お世話になった皆様に御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

## 山下萬里教授 学歴・職歴・著作等

### 〈生 年〉

1948年7月26日生

### 〈学 歴〉

1967年3月 成蹊高校卒業

1970年4月 中央大学文学部文学科独文学専攻入学

1974年3月 中央大学文学部文学科独文学専攻卒業

1974年4月 中央大学大学院文学研究科修士課程進学

1977年3月 中央大学大学院文学研究科修士課程修了

1977年4月 中央大学大学院文学研究科博士課程進学

1981年3月 中央大学大学院文学研究科博士課程満期退学

### 〈職 歴〉

1977年4月 東京音楽大学非常勤講師（～1983年3月）

1981年4月 拓殖大学商学部専任講師

1985年4月 拓殖大学商学部助教授

1990年4月 オーストリア・ウィーン大学（ユダヤ学研究所）客員研究員（～1992年3月）

2002年4月 拓殖大学商学部教授（～2019年3月予定）

この間に國學院大學，跡見学園短期大学，東洋大学，法政大学，成蹊大学，日本大学，中央大学で非常勤講師を歴任

## 主要業績

### 〈共編著〉

1999年2月 『世界の博物館——知と技の宝庫を訪ねて』 丸善

2001年5月 『「舞姫」——エリス，ユダヤ人論』 至文堂

2019年近刊 『森鷗外事典』 新曜社（校正済み）

### 〈共訳書〉

1996年9月 アルフレート・ヘスラー 『ミグロの冒険——スイスの暮しを支えるミグロ

- 生協の歩み』 岩波書店
- 2004年9月 フランツ・カフカ『変身・断食芸人』 岩波書店
- 2010年10月 フランツ・カフカ『断食芸人』 ポプラ社
- 2018年6月, 8月 アンナ・ゼーガース『第七の十字架』（訳文校訂と本文中の割注を担当） 岩波書店

〈論文〉

- 1984年12月 「アルトゥール・シュニッツラー覚書（一）——長編小説『自由への道』のことなど」『拓殖大学論集』153号
- 1992年12月 「ベルリンのユダヤ人——「ユダヤ人の様々な生活世界」展を手掛かりに」『拓殖大学論集』200号
- 1993年3月 「森鷗外『舞姫』の舞台——ベルリンのユダヤ人（二）」『拓殖大学論集』202号
- 1993年9月 「イディッシュ語とヘブライ語」『語学研究』73号
- 1994年1月 「森鷗外『舞姫』の舞台・補遺——ベルリンのユダヤ人（三）」『拓殖大学論集』206号
- 1994年2月 「第二外国語としてのドイツ語教育——アンケート調査から」『語学研究』74号
- 1998年3月 「アレックスとローゼンタール広場のあいだ——A. デープリン『ベルリン・アレクサンダー広場』」『人文・自然・人間科学研究』1号
- 2001年1月 「森鷗外『舞姫』の舞台・三説」『鷗外』68号, 森鷗外記念会
- 2002年3月 「ヨーゼフ・ロートと〈ハプスブルク神話〉——『カプチン地下霊廟』と『皇帝の胸像』」『人文・自然・人間科学研究』7号
- 2003年11月 「訂正の訂正二題, その他——『舞姫』の舞台に関して」『鷗外』78号, 森鷗外記念会
- 2006年2月 「『舞姫』の舞台に関する補注」『鷗外』78号, 森鷗外記念会
- 2006年6月 「森鷗外と亀井重明」『月間国語教育』6月号
- 2012年7月 「千賀は『ちが』か『仙賀』か——『舞姫』の二人のモデル（下）」『鷗外』91号（生誕150年記念号）
- 2014年3月 「末は博士か大臣か——森鷗外と千賀鶴太郎と小松原英太郎」『鷗外』94号

〈その他〉

- 1989年3月 「『アルザスのユダヤ人』」（書評）『ドイツ文学』82号, 日本独文学会

- 1994年4月 「森鷗外・ベルリン・ユダヤ人」 『季刊文学』 1994年春号
- 1998年3月 「ヴェルター・ベンヤミン『ドイツ文学におけるユダヤ人』—『ユダイカ百科事典』の大項目」(翻訳) 『人文・自然・人間科学研究』 1号
- 2009年12月 「ドイツ文学の旅—森鷗外とベルリン」 『インゲルハイマー・ドイツゆうゆう』(ウェブマガジン)
- 2011年10月 「『舞姫』の二人のモデル」 『森鷗外記念会通信』 176号
- 2012年6月 「『舞姫』について」(講演) 森鷗外講演会(文京区・中央大学共催)
- 2012年10月 「『小堀四郎展—美の生命の永遠』に出会って」(展覧会評) 『森鷗外記念会通信』 180号
- 2013年11月 「宮芳平展—野の花のように」(展覧会評) 『森鷗外記念会通信』 184号

## 拓殖大学研究所紀要投稿規則

### (目的)

第 1 条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する、経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所、理工学総合研究所及び人文科学研究所（以下、「研究所」という。）が刊行する紀要には、多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し、研究活動の促進に供することを目的とする。

### (紀要他)

第 2 条 研究所の紀要は、次の各号のとおりとする。

- (1) 経営経理研究所紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所紀要『拓殖大学 理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』

2 研究所長は、次の事項について毎年度決定する。

- (1) 紀要の『執筆予定表』の提出日
- (2) 投稿する原稿（以下、「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日
- (3) 投稿原稿の査読等の日程

### (投稿資格)

第 3 条 紀要の投稿者（共著の場合、投稿者のうち少なくとも 1 名）は、原則として研究所の兼任研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

2 研究所の編集委員会が認める場合には、研究所員以外も投稿することができる。

### (著作権)

第 4 条 投稿者は、紀要に掲載された著作物が、本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

2 共同執筆として紀要に掲載する場合には、共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し、投稿代表者に承諾書を提出しなければならない。投稿代表者は、共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

### (執筆要領および投稿原稿)

第 5 条 投稿原稿は、研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

- 2 投稿原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。
- 3 学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、紀要に投稿することはできない（二重投稿の禁止）。

(原稿区分他)

第6条 投稿原稿区分は、次の表1、2のとおり定める。

表1 投稿原稿区分：経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所及び人文科学研究所

(1)論文	研究の課題，方法，結果，含意（考察），技術，表現について明確であり，独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2)研究ノート	研究の中間報告で，将来，論文になりうるもの（論文の形式に準じる）。新しい方法の提示，新しい知見の速報などを含む。
(3)抄録	経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，人文科学研究所の研究助成要領第10項(2)に該当するもの。
(4)その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿（公開講座記録等）については，編集委員会において取り扱いを判断する。また，編集委員会が必要と認めた場合には，新たな種類の原稿を掲載することができる。

表2 投稿原稿区別：理工学総合研究所

(1)論文，(2)研究速報，(3)展望・解説，(4)設計・製図，(5)抄録（発表作品の概要を含む），(6)その他（公開講座記録等）
---

- 2 投稿原稿区分は、投稿者が選定する。ただし、紀要への掲載にあたっては、査読結果に基づいて、編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。
- 3 紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿した原稿のキーワードを3～5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の使用あるいは引用は、認めない。
- 4 研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表（原稿）の投稿原稿区分は、原則として論文とする。
- 5 研究所研究助成を受けた研究所員が、既に学会等で発表した研究成果（原稿）は、抄録として掲載することができる。

(投稿料他)

第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。

- 2 投稿者には、紀要3部を贈呈する。
- 3 投稿者が研究所員の場合には、掲載の抜き刷りを50部まで無料で贈呈する。50部を超えて希望する場合は、超過分について有料とする。

(リポジトリへの公開の停止及び削除)

第8条 投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には、リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

(その他)

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、編集委員会の議を以て決定する。

(改廃)

第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附則

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

## 拓殖大学人文科学研究所紀要

### 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領

#### 1. 発行回数

紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』（以下、「紀要」という）は、原則として年 2 回発行する。原稿提出期日および発行は、次のとおりとする（厳守）。

(1)	原稿は、 6 月末日締切 - 10 月発行
(2)	原稿は、 10 月末日締切 - 3 月発行

#### 2. 執筆予定表

投稿希望者は、研究所が定めた日までに、紀要の執筆予定表に必要な事項を記入・捺印し、学務部研究支援課（以下、「研究支援課」という。）に提出する。

#### 3. 使用言語

使用言語は、日本語又は英語とする。ただし、これら以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に人文科学研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という）に書面にて申し出て、許可を受ける。

許可を受けた原稿は、必ず外国語に通じた人の入念な校閲を受けたものに限る。

#### 4. 様式

投稿する原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿 2 部を、編集委員会に提出する。

- (1) ワープロを使用する際は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、横書きで、1 行 39 文字、1 ページ 34 行で印字する。その際、天地、左右各 30 mm 程度の余白をとっておく。縦書きの場合もこれに準ずる。
- (2) 欧文による原稿の場合は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、天地左右の余白を 30 mm 程度とり、1 行 78 文字、1 ページ 34 行で印字する。外国語の要約の原稿もこれに倣う。
- (3) 原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、A4 縦版・横書で次のとおりとする。なお、日本語以外の言語による原稿の場合もこれに準ずる。
  - ① 日本語および全角文字で記す場合、原則として 24,000 字以内。
  - ② 欧文の場合、原則として 48,000 字以内
- (4) 投稿者は、紀要の複数の号にわたり、同一タイトルで投稿を希望することはできない。ただし、「資料」の場合は、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で、記載原稿の全体像と回数を明示しなければならない。

#### 5. 原稿

- (1) 原稿区分は、「拓殖大学研究所紀要投稿規則」に記載されているとおりするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。
- (2) 原稿の受理日は、研究支援課に到着した日とする。
- (3) 投稿は、完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿する原稿とあわせて、「拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究」投稿原稿表紙に必要な事項を記入、「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し、原稿提出期日までに添付する。

## 6. 本文表記

- (1) 本文の構成を章・節・項のように分ける場合、それぞれの表記の仕方は、例えば、章は I・II……、節は 1・2……、項は 1)・2)……などの表記方法があるが、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの表記方法に準ずること。
- (2) 数字は算用数字を用いる。数字や欧字は、1字のみの場合を除き、半角とする。  
ただし、縦書きの場合に限り、数字は原則として漢数字を用いる。
- (3) 特殊な字体（イタリック・ボールド・ギリシャ文字など）・紛らわしい文字（I〈エル〉・l〈イチ〉・i〈アイ〉・0〈ゼロ〉・O〈オウ〉など）や大文字・小文字（Wとwなど）は、明瞭に区別できるように指定する。また、添え字も、上付き・下付きを明瞭に指定する。
- (4) 本文中に文献・資料を引用・参照する場合は、下記の例のように、文献・資料の著者名（姓のみ）と発表年を示し、必要に応じて関連ページも示す。  
青木（2001）は……、上村（2002：50-61）は……、青木・上村（2003）によれば……、……という説がある（大山 1998：43-52）。……という見解もある（飯田 2003；太田 1999）。青木ほか（2004）は……、など。
- (5) 本文中に文献・資料の一部を引用する場合は、引用部分を、「」でくくる、字下げする、活字ポイントを小さくする、などの方法で表す。

## 7. 図・表・数式の表記および作成

- (1) 図（図には写真も含む）および表は必要最小限にとどめる。とくに、同じデータに関する図と表の重複は避ける。
- (2) 図および表は、各図・各表ごとに別紙とし、それぞれ、図 1・図 2… 表 1・表 2…のように通し番号を明示し、執筆者名を記入する。
- (3) 図および表のタイトル・説明文・出典などの原稿は、別紙にまとめる。外国語の要約をつけた場合は、図・表のタイトルと説明文は、外国語を併記することができる。
- (4) 本文中の図および表の挿入希望位置は、本文原稿の右側余白に記入する。また、図・表の大きさや体裁について希望がある場合は、本文原稿上に枠で指定するか、おおよその大きさなどを右側余白に記入しておく。なお、図・表の大きさや体裁は、編集委員会で決める。したがって執筆者の希望に添えない場合もある。
- (5) 図および表を本文中に引用する際は、「図 1によれば……」「……は表 3に示される」などのように示す。
- (6) 図は、黒インクで明瞭に描いたものか、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して描いたもので、そのまま写真製版が可能なもの（版下原稿）に限る。
- (7) 表は、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して作成する。
- (8) 図中や表中の文字や数字の大きさ、図の表現の細かさについては、刷り上がりの大きさと明瞭に読みとれるよう、縮小率を十分考慮して決める。
- (9) 数式は専用ソフトなどを使用して正確に表現する。数式の上下は 1 行ずつあける。

## 8. 注とその記載方法

- (1) 注は、本文内容の補足説明を行う場合と、引用・参照した文献・資料の出所を明示する場合に用いる。
- (2) 本文中の当該箇所の右肩に（ ）でくくった通し番号をつけ、注の内容は、本文のあとに、通し番号順にまとめて記す。

## 9. 文献・資料の表示方法

本文中で引用・参照した文献・資料を表示する方法としては、本文中には著者の姓と発表年のみを記し（これについては、前ページの本文表記4を参照のこと）、原稿末尾の文献・資料表に詳しく表示する方法と、本文中には記さず、本文のあとの注に詳しく表示する方法の二つが一般的である。

### (1) 文献・資料表に表示する場合

- ① 文献・資料表に、下記の要領で記載する。なお、文献・資料表は、原稿の末尾（注の後ろ）に掲載する。
  - a. 学術雑誌など定期刊行物の場合は、著者名・発表年・文献名・定期刊行物名・巻または号番号・文献の最初と最後のページを明記する。単行本の場合は、著者名・発表年・書名・出版社（出版所）名を明記する。
  - b. 著者が複数の場合も、全著者名（姓名）を列記する。
  - c. 定期刊行物の巻・号番号およびページについては、巻ごとの通しページがある場合は、巻番号（ゴシック）と通しページを記す。巻ごとに通しページがない場合は、巻番号（ゴシック）のあとに号番号を（ ）でくくって示し、号ごとのページを記す。号番号のみの場合は、（ ）でくくった号番号とページを記す。
- ② その他の書式（記載順序や方法）については、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの要領に則って、統一した形式で記すこと。
- ③ 文献・資料の並べ方は、下記の要領による。
  - a. 日本語文献・資料、アジア地域言語文献・資料、欧語文献・資料の順に並べる。
  - b. 日本語文献・資料は、著者名の五十音順に並べる。アジア地域言語文献・資料はそれぞれの著者名の当該言語の固有の配列順（あるいはカタカナ表記の五十音順）に並べる。欧語文献・資料は著者名（姓が先）のアルファベット順に並べる。
  - c. 同じ著者の文献・資料は発表年の順に並べる。同じ発表年のものが複数ある場合は、本文の引用順に、a・b……を発表年のあとにつけて並べる。

### (2) 注に表示する場合

- ① 注の該当箇所に著者名・文献・資料名などを詳しく表示する方式で、この場合は、文献・資料表を省くことができる。
- ② 表示例は、以下の通り。

#### 【日本語文献・資料】

小林政吉『宗教改革の教育史的意義』（創文社 1960）p.12. 《単行本の場合》

林 泰成「ピーターズのコールバーグ批判」（佐野安仁、吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社 1993）p.34. 《単行本所収の論文の場合》

石井雅史「コミュニケーションと規則」（日本哲学会編『哲学』第51号 2000）pp.270-272. 《学術雑誌等の掲載論文の場合》

G. ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳（法政大学出版局 1974）p.25.

《和訳書の場合》

#### 【英文文献・資料】

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145. 《単行本の場合》

A. H. Bullen (ed.), *The Works of Francis Beaumont and John Fletcher* (Variorum ed.;

London London: George Bell and Sons, 1908), pp. 49-53. 《論文集の編者表記の場合》  
G. M. Dutcher et al., *Guide to Historical Literature* (New York: The Macmillan Co., 1931),  
p. 50. 《著者が3名以上の場合》

F. A. Moe, "School Retrenchment," *School Review*, XLII (May 1934), p. 40.

《学術雑誌等の掲載論文の場合》

John Calvin, *The Institutes of the Christian Religion*, trans. Henry Beveridge (2nd ed.;  
Edinburgh: T. & T. Clark, 1895), I, pp. 40-45. 《英訳書の場合》

#### 【欧文文献・資料の略語の用法】

欧文文献・資料の引用・参照の際によく使われる略語（loc. cit., ibid., op. cit.）の用法を、以下に記す。

loc.cit. 同じ文献・資料の同じ箇所を連続して引用する場合に用いる。

ibid. 同じ文献・資料から連続して引用する場合に用いる。その際、前と引用ページが異なる場合には、当該ページを表示する。

op.cit. 前に挙げた文献・資料に、いくつかの注を隔てた後に、再び言及する場合に用いる。したがって、この場合は、著者名（姓のみ）とページ数とを必ず表示する。

上記の略語は、単行本と学術雑誌の場合はイタリック体で、論文の場合はローマン体で表記する。

[ 使用例 ]

(1) T. M. Parrot and R. H. Ball, *A Short View of Elizabethan Drama* (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), p. 190.

(2) *loc. cit.*

(3) *ibid.*, p. 325.

(4) E. H. C. Oliphant, *The Plays of Beaumont and Fletcher* (New Haven: Yale University Press, 1927), p. 67.

(5) Parrot and Ball, *op. cit.*, p. 198.

(6) Oliphant, *op. cit.*, pp. 89-91.

∴

その他のよく用いられるページ表記略号（ただし、英文文献・資料の場合）

p. 5. = page 5 の意味

pp. 17 f. = pp. 17 *et seq.* とも表す。これは page 17 and the following page の意味

pp. 20 ff = pp. 20 *et seq.* とも表す。これは page 20 and the following pages の意味

\* 欧文文献・資料では、注に示す場合と、文献・資料表に示す場合とでは、著者名などの表記の仕方が異なる。これについては、以下の例を参照のこと。

〈 注に示す場合 〉

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.

〈 文献・資料表に示す場合 〉

Judson, Alexander C., *The Life of Edmund Spencer*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945.

\* なお、インターネット上の文献・資料を引用・参照する場合は、文献・資料表あるいは注に、原則として下記の事項を記載する。

執筆者・タイトル・年月日（掲載年月日あるいは更新年月日あるいは取得年月日）・URL

## 10. 原稿の審査

編集委員会が審査し決定する。その手続きは次の通り。

- (1) 原稿の内容に応じて編集委員以外の査読者を選び、査読を依頼する。それとともに編集委員の中から担当委員を選ぶ。査読者および担当委員は、原則として各1名とするが、場合により複数名とすることもある。
- (2) 査読者および担当委員は、論文・研究ノート・抄録・その他については、以下の11項目について原稿を検討し、査読結果（掲載の可否・原稿種類の妥当性についての意見や原稿に対するコメントなど）をまとめ、それを編集委員会に報告する。
  - ① タイトルは内容を的確に示しているか
  - ② 目的・主題は明確か
  - ③ 方法・手法は適切か
  - ④ データは十分か
  - ⑤ 考察は正確かつ十分か
  - ⑥ 先行研究を踏まえているか
  - ⑦ 独創性あるいは学術的価値（資料的価値）が認められるか
  - ⑧ 構成は適切か
  - ⑨ 文章・語句の表現は適切か
  - ⑩ 注や参考文献の表記は、執筆要領に添ったものになっているか
  - ⑪ 図・表の表現は適切か
- (3) 編集委員会は、これらの報告に基づいて、委員の合議により、掲載の可否、原稿種類の妥当性および次項の「審査結果のお知らせ」に添える文書の内容などを決定する。なお、掲載の可否については、①このままで掲載、②多少の修正の上で掲載、③大幅な修正が必要、④掲載見送りの4段階で判定する。③については、執筆者の修正原稿を査読者と担当委員が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が掲載の可否等を決定する。
- (4) 研究会記録および公開講座記録の原稿については、原則として掲載する。ただし、この場合も編集委員の中から担当委員を選び、担当委員は上記項目の9)等を検討する。その結果、執筆者に加筆修正を求めることがある。

## 11. 原稿の審査結果・変更・再提出

- (1) 投稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載を決定する。その際に編集委員会は、原稿区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 編集委員会は、査読に基づき、若干の訂正、あるいは書き直しを要請することができる。

また、上記判定を受けた投稿者は、その趣旨に基づいて、原稿を速やかに修正し、再度、編集委員会に提出する。ただし、査読結果の内容に疑問・異論等がある投稿者は、編集委員会にその旨を申し出ることができる。
- (3) 投稿者は、投稿を許可された原稿（査読済）を、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (4) 査読の結果、大幅な修正がある場合には、投稿者の修正原稿を編集委員会が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載の可否等を決定する。
- (5) 編集委員会が、紀要に掲載しない事を決定した場合は、人文科学研究所長（以下「所長」という）より、その旨を投稿者に通達する。

## 12. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）

にプリントした完成原稿1部と電子媒体を提出する。電子媒体の提出時には、使用OSとソフトウェア名を明記する。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿（データ）を保管しておく。

### 13. 校正

投稿した原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、所長、編集委員長が三校を行う。

この際、投稿者がおこなう校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。また、投稿者は、編集委員会の指示に従い、迅速に校正を行う。

投稿者が、期日までに校正が行われない場合には、紀要への掲載はできない。

### 14. その他

本執領に定められていない事項については、投稿者（執筆者）と協議の上、編集委員会が判断する。

### 15. 改廃

本執筆要領の改正は、編集委員会が原案を作成し、本研究所会議の議を経て、所長が決定する。

#### 附則

この要領は、平成18年4月以降に投稿される原稿から適用する。

#### 附則

この要領は、平成26年4月以降に投稿される原稿から適用する。

#### 附則

この要領は、平成29年4月以降に投稿される原稿から適用する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	研究動向：	ある分野の研究成果を総覧・整理しまとめたもので、研究史・研究の現状・将来への展望などを論じたもの。
②	調査報告：	ある課題についての文献・アンケート・聞き取り調査などの報告で、調査の意義が明確なもの。
③	資料：	文献・統計・写真など、研究にとっての資料的価値があると思われる情報を吟味し、それに解説をつけたもの。
④	討論：	本紀要に掲載された論文等に対する批判・質問および執筆者からの反論・回答。
⑤	研究会記録：	本研究所主催の研究会の講演内容および質疑の概要。
⑥	公開講座記録：	本研究所主催の公開講座の講演内容の詳細な記録あるいは概要。

以上



- language) (そんなことはない!! わが言語における中国語の語彙を考  
えよ)と反論を加えている (Ibid., 188)。人種、民族間の相違を強調する  
ゴビノーの考え方は新渡戸のそれと相容れようもなかった。
- (78) Stoddard, *The Rising Tide of Color against White World-Supremacy*,  
308.
- (79) 『内観外望』一九三三年五月、『全集』六卷、三八〇—三八一頁。
- (80) 『日本文化の講義——日本国民とその文化の発達に関する概説——』(一  
九三二年十月五日から十二月二日までのアメリカ加州大学での講義を集め  
たもので、出版は一九三六年。引用箇所は一九三三年十一月二十八日に述  
べられたもの)『全集』一九卷、三二六頁。
- (81) 『内観外望』一九三三年五月、『全集』六卷、三八一頁。「米国籍民法案修  
正の報を聞きて」『実業之日本』一九三〇年六月十五日『全集』四卷、五  
六四—五六五頁。
- (82) 同右『全集』四卷、五六五—五六六頁。
- (83) 同右、五六六頁。
- (84) 『内観外望』一九三三年五月、『全集』六卷、三八一頁。
- (85) 同右、三九九—四〇一頁。
- (86) 「米国籍民法案修正の報を聞きて」『実業之日本』一九三〇年六月十五日  
『全集』四卷、五七一—五七二頁。
- (87) 「編集余録」英文大阪毎日・東京日日新聞一九三二年八月十一日『全集』  
二〇卷、三二六頁。
- (88) 「米国籍民法案修正の報を聞きて」『実業之日本』一九三〇年六月十五日  
『全集』四卷、五六七—五六八頁。
- (89) 同右、五六六頁。
- (90) 牧野伸顕『回顧録』(中公文庫、一九八七年再版)、九三—九五頁。
- (91) 幣原喜重郎『外交五十年』(中公文庫、一九八九年第三版)、四八—五一  
頁。
- (92) 『日本文化の講義』(引用箇所は一九三三年十二月二十八日)『全集』一  
九卷、三二七頁。
- (93) 『日本文化の講義』(引用箇所は一九三二年、ウィリアムスタウンの政治  
研究所での講演)『全集』一九卷、三七九—三八〇頁。
- (94) 『日本文化の講義』(一九三二年十一月二十八日)『全集』一九卷、三一  
頁。
- (95) John S. Hoyland, *The Race Problem and the Teaching of Jesus Christ*  
(London: The Religious Tract Society, [1925]). 東京女子大学図書館  
新渡戸稲造記念文庫所蔵。
- (96) Ibid., 26. アンダーラインと「✓」の書き込みがある。
- (97) Ibid., 45. 「タスマニア」の文字にアンダーラインが記されている。
- (98) Ibid., 32. サイドラインがある。
- (99) ただし著者のホイランドは人種の違いは意識しており、そこに新渡戸は  
疑問を示している。たとえば、各民族は基本的な概念においてかなり違う  
はずだとした箇所には「?」、民族ごとに義務の観念、名誉の感覚、正と  
不正の判断などは異なるとした部分には「in degree」(程度問題だ)とし  
て疑問を呈している (Ibid., 57-59)。
- (100) Ibid., 109. アンダーラインと余白に「○」のマークが記されている。
- (101) Ibid., 125. 全体にサイドライン、「強力に確信すること」にアンダーラ  
インが引かれている。
- (102) Ibid., 195.

【付記】 本稿の作成にあたっては平成二十九年年度・拓殖大学人文科学研究研  
究助成金を活用させて頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

ド・ジュニア大学で講演されたものである。

- (61) 同右、一七頁。  
(62) 同右、二三頁。  
(63) 同右、三二頁。  
(64) Thomas F. Millard, *The New Far East: An Examination into the New Position of Japan and her Influence upon the Solution of the Far Eastern Question, with Special Reference to the Interests of America and the Future of the Chinese Empire* (New York: Charles Scribner's Sons, 1906), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。最終頁(三〇五頁)に「On board the *Tainan*. VII. 13. 1906」と記されており、新渡戸が一九〇六年七月十三日、台湾への航海中、台南丸船上で読了したことがわかる。  
(65) *Ibid.*, 28. サイドラインがある。  
(66) *Ibid.*, 129, 93.  
(67) *Ibid.*, 92.  
(68) *Ibid.*, 123.  
(69) *Ibid.*, 112.  
(70) *Ibid.*, 252, 296, 140.  
(71) *Ibid.*, 裏表紙見返しの手書き込みである。  
(72) Lothrop Stoddard, *The Rising Tide of Color against White World-Supremacy* (London: Chapman and Hall, 1922), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。最終頁(三二〇頁)に「2. 7. 23」と記されており、新渡戸が一九二三年二月七日に読了したことがわかる。なお同書の日本語訳として、ロスロップ・スタッドワード著、長瀬鳳輔訳『有色人種の勃興』(政教社、一九二二年十一月)がある。  
(73) *Ibid.*, Madison Grant, "Introduction," xxx-xxxi.  
(74) *Ibid.*, 30-31.  
(75) *Ibid.*, 50-53.  
(76) *Ibid.*, 301, 165, 254, 258.  
(77) *Ibid.*, 264, 270. なお新渡戸はやはり人種主義者の古典的な例として有

名なフランス人アルチュール・ド・ゴビノー (Joseph Arthur Comte de Gobineau) の『諸人種の不平等に関する試論』英訳版 (*The Inequality of Human Races*) も読んでみる。Arthur de Gobineau, *The Inequality of Human Races*, trans. Adrian Collins (London: William Heinemann, 1915), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。最終頁(二二二頁)に「1. 23. 1917」と記されており、新渡戸が一九一七年一月二十三日に読了したことがわかる。

この『諸人種の不平等に関する試論』はもともと一八五三年から五五年にかけてフランスで全四巻本として刊行され、西洋における「科学的レイシズム」の初期の代表例、レイシズムの発展と「人種」の理論化を理解する上で欠かせない重要な一次資料とされる(木村浩二「純潔・人種混淆・アメリカ—ゴビノーの『諸人種の不平等に関する試論』—」『関東学院大学文学部紀要』第一二三号、二〇一一年十二月、二頁)。全体で六部からなり、そのうち第一部が理論的な根幹部分で、第二部以下で全文明史がたどられるという構成になっている。それを貫く同書の基本テーゼは「文明の衰退は人種の混血によってもたらされる」というものであった(長谷川一年「アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学(一)—『人種不平等論』を中心に—」『同志社法学』五二巻四号、二〇〇〇年十一月、一一一、一二三頁)。新渡戸が読んだ英語版は同書の第一部のみを翻訳したもので、第二から第六部までは含まれていない。

同書において著者のゴビノーは、二つの完全に異なる人種に由来する文明は表面においては接触できても、決して合体はしないし、一方が他方をつねに締め出すとしているが、新渡戸はそこに「？」と記している。さらにゴビノーが異なる人種、文化間の敵対は歴史が明瞭に証明していると述べる時、「やはり「？」と書き込んでみる (*Ibid.*, 174, 179)」。ちやひひの国家や民族が接触した場合、一方の言語が退くことになる、たとえば一三世紀からフランスのゲルマン語方言はローマ語にその基礎を明け渡し、ケルト語もイタリア人の入植者の前に後退しなくてはならなかったとする記述に対して、新渡戸は「Far fr[om] it!! Think of Chinese words in our

- Melbourne: Cassell & Co., 1890), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。表紙見返しに「Dr. Inazo Nitobe — With kind regards Arthur A. Brigham Sapporo May 6th 1892」の署名があり、当時札幌農学校で新渡戸の同僚であったアーサー・マンバー (Amber) ・ブリガムからの献呈本であることがわかる。
- (36) Ibid., 31.
- (37) Ibid., 92.
- (38) Ibid., 94.
- (39) C. S. Beardstee, *Abraham Lincoln's Cardinal Traits: A Study in Ethics* (Boston: Richard G. Badger The Gorham Press: Toronto: The Copp Clark Co., Copyright 1914), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。
- (40) Ibid., 38. またこの演説全文を掲げたページにおいては、「愛情をこめてわれわれが希望する——熱烈に祈願する——のは、この戦争という強大な天罰がすみやかに過ぎ去ることである」の右余白にサイドラインを引き、「誰にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛をもって接し、神がわれわれに見るように与えたその正義を固く信じ」の左余白に「〇」を記している。  
Ibid., 243-244.
- (41) Ibid., 43, 44, 52.
- (42) 佐藤、藤井『新渡戸稲造事典』五〇六頁。
- (43) Francis Fisher Browne, *The Every-Day Life of Abraham Lincoln* (Chicago: Browne & Howell Co., 1914), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。
- (44) Carl Crow, *America and the Philippines* (Garden City, New York: Doubleday, page & Co., 1914), 北海道大学附属図書館新渡戸稲造文庫所蔵。
- (45) Ibid., 31.
- (46) Ibid., 54, 57.
- (47) Ibid., 228.
- (48) 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、二七—三〇頁。
- (49) 同右、三五頁。
- (50) 同右、七二—七三頁。
- (51) 川西実三「新渡戸先生に関する追憶」『全集』別巻、二四〇頁。
- (52) 秦郁彦『太平洋国際関係史——日米および日露危機の系譜一九〇〇—一九三五——』(福村出版、一九七二年)、六七—七〇頁。
- (53) 拙著『近代日本人のアメリカ観——日露戦争以後を中心に——』(慶應義塾大学出版会、一九九九年)、五二—五三頁。
- (54) 秦『太平洋国際関係史』の第四章「一九一〇年代の日米危機」を参照のこと。
- (55) 拙著『近代日本人のアメリカ観』五四—五五頁。
- (56) 新渡戸は一九一一年から一二年の一年間、第一回日米交換教授として、六つの大学などで合計一六六回、のべ四万人の聴衆に講演を行なったが、そのときの講演をまとめたものが『日本国民——その国土、民衆、生活——合衆国との関係をとくに考慮して』である(佐藤全弘「解説」『全集』一七巻、六〇—八頁)。
- (57) 『日本国民』『全集』一七巻、二五八—二六五頁。
- (58) 新渡戸は日本移民排斥運動の根底に人種偏見があることを十分認識していた。しかしながらその一方で「米国に人種の偏見があると罵る日本人は反つて支那人を排し、朝鮮人を斥けて居る。日本人〔の方〕が西洋人よりも余程他国人に偏見が多い、西洋人には日本人を歓迎する者が甚だ多いが、日本人で西洋人を朋友とする者が何人あるか、外人を見ると、異人だと罵る」と戒めている。『人生雑感』(およそ一九〇六年から一三年頃までの間にフレンド派の集会で述べたもの、出版は一九一五年二月)『全集』一〇巻、六五頁。つまりアメリカ人を一方的に批判するようなことはしなかった。
- (59) この箇所は読みやすさを考慮して若干省略をしつつ現代的な文体に改めた。『日本国民』『全集』一七巻、二六七—二六八頁。
- (60) 同右、二九七頁。この部分は一九一一年九月、ルランド・スタンフォード

(26) 同右、五一―五三頁。

(27) 同右、一二六―一二七頁。

(28) 『自警』一九一六年十月『全集』七卷、五五七―五五九頁。新渡戸はイギリスのリバプールでも類似的体験をしたことがあった。「デモクラシーの根柢的意義」『実業之日本』一九一九年一月一日『全集』四卷、四九九―五〇一頁。

(29) 『自警』一九一六年十月『全集』七卷、五五九頁。

(30) 「デモクラシーの根柢的意義」『実業之日本』一九一九年一月一日『全集』四卷、五〇四―五〇五頁。ちなみにそのように考える彼は、政治的な漸進主義を重視して暴力革命に反対し、フランス革命とそれに影響を与えたルソー (Jean-Jacques Rousseau) の『社会契約論』を自由と民主主義を誤解濫用したものと強く批判した。それとともにマルクス主義について、現在の日本でそれが実行されるならばフランス革命以上の惨害をわが国家および国民に及ぼすと警告した。国体、私有財産制を破壊して人間の幸福が生まれるとは信じられない、かえって人間が墮落すると新渡戸はいう (『デモクラシーの要素』『実業之日本』一九一九年二月一日『全集』四卷、五〇八―五〇九頁。『内観外望』(一九二八年以降約三年間)『全集』六卷、一九五―一九六、二二二頁)。

新渡戸は人の思想はあくまで尊重されるべきであり、官憲がそれを圧迫するのは間違いであって、マルクス主義は学理として大いに研究されるべきだと考えていた。しかしそれを実行に移すことには異議を唱えたのである。そのため一九二八 (昭和三) 年の三・一五事件に際しては、国家の根柢を覆すような行動を取り締まるのは、普通という圧迫とは質を異にし、もっとも至当な国家権力の行使であるとしてそれを肯定した (共産党事件に対する感想) 『実業之日本』一九二八年五月一日『全集』四卷、五五〇、五四五頁。『内観外望』『全集』六卷、二五五頁)。

そうした彼の意見の有力な根拠となっていたのはエドモンド・バーク (Edmund Burke) の『フランス革命の省察』(Reflections on the Revolution in France) だった。新渡戸は同書を非常に高く評価しており、政

治学を学ぶ者はこれを一読二読三読すべきである、政治思想の根本を養うにはバークに限るとまで述べている。新渡戸によれば、フランス革命やロシア革命は宗教を退け、理屈だけでやろうとしたから妙なことになった。

しかしバークによれば、国を治めるには伝統やその国民が信じている昔ばなし、迷信のたぐいも無視できず、イギリスでは理屈に合わないような王道が国を治める根底になっている。日本でも二千年の歴史、国体が続いて、大嘗祭など二千年前の風俗習慣が今日でも伝えられており、西洋の新しいものを取り入れながらも、根底において古から変わらない心棒が一貫している。つまり国というものは古くから蓄積されたものの集積体であり、理屈だけで治めることができないものであるが、バークを読むと、そうした国を治めるとはどういうことかという点がわかってくと新渡戸はいう (『内観外望』『全集』六卷、二〇〇―二〇一、二三〇、二七六―二七八、二八五頁)。このようにバークから影響を受けた新渡戸の考え方は、今日という保守的自由主義の立場に近いものであるといえよう。

(31) 「自由国民の底力」『実業之日本』一九一九年二月十五日『全集』四卷、五二―五二二頁。

(32) 『偉人群像』(一九二九年以来『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』で連載されたもの、出版は一九三二年十一月)『全集』五卷、四九二頁。

(33) 「人物崇拜」(一九〇七年二月)『随想録』同年八月に収録されたもの)『全集』五卷、一四六―一四七頁。新渡戸がこの英語の一節をよく揮毫したことも知られている (佐藤、藤井『新渡戸稲造事典』二七五頁)。

(34) 『一日一言』一九一五年一月『全集』八卷、四二〇頁。『自警』一九一六年十月『全集』七卷、六四二頁、六五二頁。のちにジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc; Joan of Arc) も新渡戸の崇拜の対象に加えられたことはよく知られているとおりである。後年彼は、自分は「リンコンン崇拜者で、私の家の神棚にはキリストとソクラテスとリンコンン、それに十三三年前から女の神としてジャンダーク、この四人が祀つてある」と述べている。『内観外望』(一九二八年以降約三年間)『全集』六卷、四六一頁。

(35) Ernest Foster, *Abraham Lincoln* (London; Paris; New York:

の中で、ハーヴァード大学医学部医学史図書館「カーリン文書」に所蔵されたアメリカ留学中の新渡戸の書簡一通が紹介されている。

またとくにアメリカ観に焦点を絞った研究ではないが、本稿を執筆する上で、長年新渡戸研究に力を注いでこられた佐藤全弘氏の『新渡戸稲造——生涯と思想——』（キリスト教図書出版社、一九八〇年）、新渡戸の生涯の全体像をはじめて明らかにした草原克豪氏の『新渡戸稲造一八六二—一九三三——我、太平洋の橋とならん——』（藤原書店、二〇一二年）が参考となった。さらに佐藤全弘、藤井茂共著『新渡戸稲造事典』（教文館、二〇一三年）は詳細な年譜を収録した新渡戸研究の必読書である。

- (3) 新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第一—三巻・別巻二（教文館、一九六九—七〇年、一九八五—八七年、二〇〇一年）。以下『全集』と略す。

- (4) 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫の所蔵書については、東京女子大学図書館編集・発行『東京女子大学図書館所蔵 新渡戸稲造記念文庫目録』（一九九二年）を参照のこと。

- (5) 「デモクラシーの主張する平等論の本旨」『実業之日本』一九一九年三月十五日『全集』四巻、五三二頁。

- (6) 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、一三三頁。

- (7) 亀井俊介『自由の聖地——日本人のアメリカ——』（研究社出版、一九七八年）など亀井氏の一連の研究を参照のこと。

- (8) 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、二五頁。このとき新渡戸は夢中あまり船からいつの間にか陸に上がってしまい、税関の鉄門前で注意されてはじめて気がついたという。

- (9) 同右、二一一—二二頁。

- (10) 同右、二二頁。

- (11) 三輪『隠されたベリーの「白旗」』四一一—四三三頁。

- (12) 和泉「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究」八七—九〇頁。新渡戸の履修の実態をはじめて詳細に明らかにした注目すべき労作である。また歴史・政治学ゼミナールにおける新渡戸の報告につい

て解明した同氏の「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」もあわせて参照のこと。さらに Furuya, "Nitobe Hazo in Baltimore" は新渡戸の履修状況に加えてクエーカーとしての宗教生活面も検証しており、大いに参考となる。以上三つの論考はいずれもジョンズ・ホプキンス大学の所蔵資料を用いた貴重な研究である。

- (13) 和泉「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究」九三—九四頁。

- (14) 『読書と人生』（一九二九、三〇年頃の早稲田大学での課外講義をまとめたもの、出版は一九三六年二月）『全集』一一巻、四三三—四三四頁。

- (15) 『内観外望』（一九二八年以降約三年間の早稲田大学での講演をまとめたもの、出版は一九三三年五月）『全集』六巻、二四一—二四二頁。

- (16) 『読書と人生』（一九二九、三〇年頃）『全集』一一巻、四三三頁。『内観外望』（一九二八年以降約三年間）『全集』六巻、二三九—二四〇頁。

(17) 新渡戸はイリーからマルクス主義への批判も聞いたという。イリーは、マルキシズムは紙の上で考えた学説である、現実の実際というものを離れて論じたものであるため、純理としては非常に巧みなものであるが、まったくリアリティを没却した説である、と批評したと新渡戸は回想している。『内観外望』『全集』六巻、一三五—一三六頁。

- (18) 『読書と人生』（一九二九、三〇年頃）『全集』六巻、一三九—一四〇頁。

- (19) 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、一三三—一三四頁。

- (20) 同右、一三八—一三九頁。

- (21) 「日本人のクエーカー観」（一九二六年十二月十四日、ジュネーブ大学での講演）『全集』一九巻、四一一—四二二頁。

- (22) この点については先にあげた和泉庫四郎氏、古矢旬氏の研究を参照のこと。

- (23) Furuya, "Nitobe Hazo in Baltimore," 53.

- (24) Ibid., 54. 和泉「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」八六—八七頁。

- (25) 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、八八—八九頁。

権敬史「新渡戸稲造の米國留學時代における農學研究に関する実証的研究——ジョンズ・ホプキンス大学所蔵文書の分析を中心として——」『北海道大学大学院教育學研究紀要』第一〇一号、二〇〇七年三月、小林竜一「新渡戸稲造におけるアメリカ留學の意義——クエーカー主義と内村鑑三——」『比較文化研究』第九八号、二〇一一年九月など。

②アメリカで吸収したクエーカーの影響については、角谷晋次「新渡戸稲造とクエーカーリズム」『比較文化研究年報』第三号、一九九一年九月、寺崎宣昭「新渡戸稲造とアメリカ——新渡戸稲造のクエーカー派キリスト教精神と『アメリカ民主主義』についての覚え書き——」(1)、(2)「国学院大学栃木短期大学紀要」第三二、三四号、一九九八年三月、二〇〇〇年三月、鶴沼裕子「新渡戸稲造のアメリカ観とクエーカー主義」『聖學院大學論叢』一六卷二号、二〇〇四年三月、大山綱夫「内村鑑三と新渡戸(太田)稲造のアメリカ滞在期体験——非制度的聖職者への道とクエーカーへの道——」『キリスト教史學』第六一集、二〇〇七年七月、小林竜一「新渡戸稲造におけるアメリカ留學の意義——クエーカー主義と内村鑑三——」『比較文化研究』第九八号、二〇一一年九月など。

③アメリカン・デモクラシーの摂取に(こ)つは、Kazuhiko Maeshima (前嶋和弘)、「Tocqueville's Democracy and Samurai: Inazo Nitobe's Attempt to Apply American Democracy to the Feudal Tradition of Japan」『敬和学園大學研究紀要』第二三号、二〇〇四年二月など。

④ウィルソンの行動・思想との比較については、奈良昂「國際連盟をめぐる新渡戸とウィルソン——革新の時代におけるアメリカの思想と政治——」『盛岡大學英語英米文學會會報』第六号、一九九五年三月などがある。

- (2) 松下菊人「新渡戸稲造のアメリカ観——満州事變の時代を中心に——」『職業訓練大學校紀要』第三号、一九七四年三月(のち松下「國際人・新渡戸稲造」ニューカレントインタナショナル、一九八七年に収録)、齋藤真「草創期アメリカ研究の目的意識——新渡戸稲造と『米國研究』——」細谷千博、斎藤真編『ワシントン体制と日米關係』(東京大學出版會、一

九七八年)所収、佐々木堂『アメリカの新渡戸稲造——太平洋の橋』取材記——(岩手放送企画・編集、熊谷印刷出版部發行、一九八五年)、奈良昂「新渡戸稲造におけるアメリカ文化の受容」『比較文化研究年報』第三号、一九九一年九月、佐々木堂「新渡戸稲造における『アメリカ』と『日本』、あるいは『西洋』と『東洋』」『比較文化研究年報』第三号、一九九一年九月、阿川尚之「本で読み解く日本人のアメリカ観——國際人新渡戸稲造とアメリカ——」『外交フォーラム』一九九八年八月・九月合併号(通巻第一二二号)、一九九八年九月(のち阿川「アメリカが見つかりましたか——戦前篇——」都市出版、一九九八年に収録)、三輪公忠『隠されたペリーの「白旗」——日米關係のイメージ論的・精神的的研究——』(Sophia University Press 上智大學、一九九九年)、三輪公忠「ソフト・パワー、ハード・パワー——日露戦争前後のアメリカの対日イメージと日本人の自己イメージ、セオドア・ルーズヴェルト、マハン、朝河貫一、新渡戸稲造を中心に——」『軍事史學』四〇卷二・三合併号(通巻第一五八・一五九合併号)、二〇〇四年十二月、小倉和夫「新渡戸稲造の見たアメリカ」『新渡戸稲造研究』第一五号、二〇〇六年九月、拙稿「新渡戸稲造——アメリカ、中国との格闘——」『新日本學』第二六号、二〇一二年九月、

谷口真紀「晩年の新渡戸稲造とアメリカ——満州事變後のアメリカ講演をめぐる評価——」『アメリカ研究』第四七号、二〇一三年三月(のち加筆修正の上、谷口「太平洋の航海者——新渡戸稲造の信仰と実践——」関西學院大學出版會、二〇一五年に収録)などがある。このうち拙稿「新渡戸稲造——アメリカ、中国との格闘——」は學術論文ではなく、脚注を付けないごく短いエッセイであって、本稿において改めて詳しく考察を加えるものである。そのほかに亀井俊介編『日本人のアメリカ論』(研究社出版、一九七七年)、平川祐弘『西欧の衝撃と日本』(講談社學術文庫、一九八五年)などが新渡戸のアメリカ観を紹介している。さらに以上①から⑤の範疇に入らないものとして、津曲裕次「アメリカ・エルウィン知的障害者センターと日本人——田中不二麿、新渡戸稲造、内村鑑三、小西信八、石井筆子・亮一——」『純心人文研究』第一九号、二〇一三年二月がある。そ

以上本章では、一九二四年の排日移民法の成立に衝撃を受けた新渡戸が、良きアメリカと反日的なアメリカの二つのイメージのはざまにあって、どのように対処したかを検証した。排日移民法に憤り、アメリカの地を踏むことを拒否した新渡戸ではあったが、それでも忍耐してアメリカの良き面、すなわち回復力（リカバリー・パワー）を信じ、将来アメリカ人自身が移民法改正を実現することに期待をかけた。またその一方で、人種、民族の衝突はキリスト教の眼目である友愛の精神で解決していくしかないという考えを再確認したのである。

### おわりに

本稿は青年期から六十代にいたる新渡戸のアメリカ観をトータルに検証し、彼がアメリカに対していかなる心理的葛藤を抱き、それをどのように克服しようとしたかという点を考察した。

結論として以下をおさえておきたい。第一に新渡戸は、留学前から学問、宗教の両面において「学ぶべき教師」の国アメリカのイメージを深め、アメリカ留学時には批判的精神をもった学問、ならびにクエーカー教義を受容し、さらにアメリカ人の親切を身をもって体験した。留学を終えた後は円満で常識的なアメリカ人と接し、アメリカ社会の自由と民主主義に対する理解を広げつつ、リンカンを敬愛しつつけた。

第二に新渡戸は、日露戦争後、アメリカで現れた黄禍論的な反日論、排日論の挑戦を受ける形になり、日米両国民に融和と相互理解を訴えた。

ただしアメリカの排日論に対して彼は強い怒りを感じており、その心はアメリカへの親愛の情と憤慨の情の間で揺れ動いていた。

第三に新渡戸は、一九二四年の排日移民法の成立に衝撃を受けたが、アメリカの回復力を信じ、将来アメリカ人自身の手で同法が改正されることを期待した。

ポジティブなアメリカ像とネガティブなアメリカ像の葛藤に苦しんだ新渡戸は、最終的にアメリカ人の自己改革力に期待をかけ、みずからの中で揺れるアンビバレントな心情を整理し、落ち着かせようと試みたのである。このような対処法は人によって異なるものであり、だれもが新渡戸のような態度をとるわけにはいかないであろう。しかしながら日本知識人の一人がアメリカに対してこのような心理的プロセスを示したということは、一つの歴史的遺産として、今後アメリカと日本（あるいはその他の国々）との関係を考える上で何らかの教訓ないしはヒントになるのではないだろうか。

### 《註》

- (1) ①のアメリカ留学時代については、和泉庫四郎「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究——I. 佐藤昌介・新渡戸稲造のアメリカ留学時代の履修記録」『鳥取大学農学部研究報告』第三五号、一九八三年一月、Jun Furuya（古矢旬）、"Nitobe Inazo in Baltimore: A Graduate Student and Quaker," 上智大学国際関係研究所『国際学論集』第一五号、一九八五年七月、和泉庫四郎「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」『鳥取大学農学部研究報告』第三八号、一九八五年十一月、大

が正される唯一の道である連邦議会の同法改正まで、忍耐強く時の経過を待つものである」と述べている。<sup>(92)</sup>

それとともに彼は単に沈黙して我慢を重ねるのではなく、一九三二年四月から翌三三年三月に全米講演旅行を行った際、以下のようにアメリカ人に訴えることも忘れなかった。「人間の平等が完全に認められない限り、誠意ある国際協力の事業が不可能なのは明らかである」、国際協力を成功裡に推進する第一の条件は、よく組織された国家はすべて平等と見なされることである。異なった国民に異なった特徴があるのは否定できない。われわれは相互の相違点を理解し、調整するよう努めねばならない。しかし基本的には人類は精神において一つであり、この基本に向かってわれわれは近づいている。<sup>(93)</sup> 以上のような趣旨を新渡戸はアメリカで唱えたのであった。

最後に以上のような新渡戸の見方、態度の根本には、やはりキリスト教の精神があり、一九二四年の排日移民法成立後、彼がキリスト教の精神を再確認していたことを指摘しておきたい。新渡戸は一九二五年ないしそれ以降、イギリスのクエーカー宣教師ジョン・S・ホイランド(John Somervell Hoyland)の『人種問題とイエス・キリストの教え』(*The Race Problem and the Teaching of Jesus Christ*)を読んだ。<sup>(94)</sup> 同書にはアメリカの排日論とは対照的に、自国(イギリス)の人種偏見や落ち度を率直に認めるといふ著者の態度が示されていた。それによると「残念ながらアングロサクソン民族は有色人種に対する偏見にひどくかられやすい。」<sup>(95)</sup> 極端な例ではオーストラリアのタスマニアで白人移民

がアポリジニを未開で獣のようだとみなして絶滅することを決定、実行した。<sup>(97)</sup> (しかし)一つの民族が自己意識と思考力のある別の民族をどこでも永久に政治的に支配することが許される限り、人類の融和は望み得ない、<sup>(98)</sup> としてイギリス側の問題点を明瞭に指摘する。<sup>(99)</sup> その上で、イエス・キリストが十字架に命を捧げて実現した人間と神との和解の福音により世界は救われ、人種の反目の問題は解決されるのだと主張する。<sup>(100)</sup> 著者のホイランドによれば、神(God)が人類の父であることを強力に確信することによってのみ、人類はみな兄弟なのだという考えに説得力が出て、民族間の障壁を破壊する力になるという。さらに民族衝突の調停者は、イエス・キリストの友愛の精神、東洋であろうと西洋であろうと人類すべてを平等に愛する神への熱意に満ちあふれ、敵意や分裂を滅ぼす雰囲気周囲に広めるだろうとする。<sup>(101)</sup> そのように述べた著者のホイランドは、多くの人々がキリストの理想に従ってその友愛の精神に生きれば生きるほど、人種問題は解決していくだろうと締め括る。要するに西洋人はキリスト教の精神にもとづき有色人種への差別を改め、人類の融和を実現しなければならぬという内容である。今日のように人権が重視され、レイシズムの誤りが当然視される時代においては、このような意見に新鮮味を見出すことはできないものの、約九十年前のまだ人種偏見が根強かった当時において西洋人の側からこのような主張がなされたということに同書の意義があったといえる。新渡戸はこのような書物に目を通して、西洋にも自分と同じような考えの人物がいること、キリスト教による人種間の障壁打破の可能性を再確認したのであろう。

これと似た話を幣原喜重郎も記している。一九一二年ないし一三年、在米日本大使館参事官として幣原がワシントンに駐在していた際に、先述の Panama 運河問題が英米間に生じた。アメリカは自国の船舶の通行税を免除する一方、外国船に相当重い税金をかけようとした。これに対してイギリス側のブライース駐米大使は英米船舶の間に差別待遇を禁ずることを約したヘース・ボンスフット条約にもとづきアメリカに抗議したが、アメリカ上院は Panama 運河の通行税法案を通過させ、イギリスの抗議は水泡に帰した。この上院通過の翌日、幣原は英大使館でブライース大使と会い、「あなたは抗議を続けられるのでしょうか、このまま打ち捨てておくわけにはいかないでしょう」と尋ねたところ、ブライースは次のように答えた。「いいえ、どんな場合でもイギリスはアメリカと戦争をしない国是になっています。戦争をする腹がなくて抗議ばかりを続けて何の役に立つでしょうか。私はもう抗議などという有害無益の交渉は打ち捨てておきます。われわれは区々たる面目や一部分の利害に拘泥して大局の見地を忘れてはなりません。」このように述べたブライースはカリフォルニア州の排日問題に話題を転じ、あなた方の抗議はどうしますかと質問した。やはり抗議を続けるしかないと言った幣原が答えると、ブライースはこれだけのことでアメリカと戦争をして日本の存亡興廃をかけるような問題ではないでしょう、私ならもう思い切りますと述べ、次のように付け加えた。「アメリカ人の歴史を見ると、外国に対して相当不正と思われるような行為を犯した例はあります。しかしその不正は、外国からの抗議とか請求とかによらず、アメリカ人自身の発意でそれを矯正しています。

これはアメリカの歴史が証明するところです。われわれは黙ってその時期の来るのを待つべきです。カリフォルニア州の問題についても、あなた方が私と同じような立場を取られることを忠告します。」その後、第一次世界大戦が始まると、アメリカは Panama 運河の差別的通行税を自発的に撤廃した。幣原は「アメリカは自発的に自己の過失を反省したのである」、自分はブライースの先見の明に敬服せざるを得なかったと記している。

右のようにブライースは、カリフォルニア州の排日問題について Panama 運河通行税問題を引き合いに出しつつ、同盟国日本の牧野外相、幣原在米参事官に、アメリカの自発的反省を待つようにとアドバイスした。このエピソードは比較的知られているが、ここで重要なことは新渡戸が牧野の体談（ブライースのアドバイス）を直接ないしは間接的に聞いていたことである。アメリカはときに他国から見ると理不尽で極端に見えることを行うが、硬直した国家ではなく、やがて自省の上、常識的な線に戻っていく回復力をもっている。そのような見方は新渡戸が長年行ってきたアメリカ観察に沿うものであり、それだからこそブライースの意見は我が意を得たものであるという形で心に残ったのではないか。新渡戸はこのブライース、ひいては自分自身の考えにもとづき、アメリカのリカバリー・パワーを信じつつ、その変化を待ち望んだ。一九三二（昭和七）年一月の第一次上海事変勃発によってアメリカの対日感情がとくに悪化した後、排日移民法の改正は相当の困難が予想されたが、それでも新渡戸は「日本は米国人の全体としての誠実さと名誉感に信を置き、間違ひ

れが実現したのは第二次世界大戦後の一九五二年となった。

次に新渡戸は排日移民法を制定したアメリカに対してどのように対処するべきだと考えたのであろうか。結論を先に述べると、それはアメリカの回復力に期待して、穏やかに、忍耐強く待つということであった。アメリカで排日移民法改正の動きが生じたのは、日本の政府と識者が「穏かなる方法に依て米国人の反省を促すことに努めた」からであると新渡戸はいう。この穏やかな方法こそ実にご当を得たものであって、もし乱暴、無礼な方法に出ていたら、撤廃案など出なかつたであろうというのである。ある米国人によると、この乱暴な法律に対する日本人の態度が米国人の良心を呵責し、米国人自ら恥づるに至つたというが、これが実際の話であつて、米国人の取り柄である。「彼等には確かに日本人よりは是非曲直の判断力があつて、自国の為したことも、是は是、非は非と判断する力は到底吾々の及ぶ処ではない」と新渡戸は指摘している。<sup>88)</sup>

ここで着目しておきたいのは、新渡戸がイギリスの政治家として有名なジェームズ・ブライス (James Bryce) の故事を引いていることである。「曾てブライス卿が牧野伯に云はれたといふ言に、米国を信ぜよ、折々過ち無しとはいはぬも、必ず是は是、非は非の判断を為す国であるから、と。」<sup>89)</sup>アメリカはときどき過ちを犯すが、のちに自分の行ったことに対して必ず是々非々の判断を下すというのである。

このブライスの言葉は牧野伸顕の回顧録にも記されている。一九一三 (大正二) 年二月から翌一四年四月まで第一次山本権兵衛内閣の外務大臣をつとめた牧野は、当時カリフォルニア州で成立した外国人土地法

(いわゆる排日土地法) に悩まされた経験があつた。この問題についてアメリカ側と交渉中、駐日イギリス大使ウィリアム・C・グリーン (William Conyngham Greene) から、現在ジェームズ・ブライス駐米イギリス大使が来日中であるが、彼はワシントンの空気をよく心得ているので話を聞いたらどうかとの好意的な申し出があつた。ブライスはその著書『アメリカン・コモンウェルス』 (The American Commonwealth) を通じて日本の知識人の間でもよく知られていたので、牧野はぜひ会いたいと応じ、イギリス大使館で面会することになった。この席でブライスは、ワシントンで折衝にあたっている珍田捨巳大使を称賛した上で次のように述べた。「アメリカではある事件について一旦輿論が沸き立つと、政府と交渉しても、当局者と冷静に話を進めることはなかなか困難です。」現に自分の経験では、パナマ運河に関する条約の解釈で英米間に意見の相違が生じた際、イギリスはこれを国際航路、アメリカは私海航路とみなし、折衝を重ねたが折り合いがつかず、イギリスは抗議書を提出したまましばらく成り行きを見ることにした。しかし数年してハーヴァード大学のチャールズ・W・エリオット学長 (Charles William Eliot) をはじめ数名の人々がこの問題をとり上げ、国際航路とするのが正しいという意見を発表し、それがきっかけとなってこの見方が大勢を制するにいたつた。このようにブライスは自身の経験を詳しく牧野に説明した。そのときをふりかえって牧野は、確かにこれは場合によっては賢明な態度であり、とくに事態が切迫していないときは当を得た措置であると回想している。<sup>90)</sup>

右のように新渡戸はアメリカ人から率直な意見を聞くことにより、アメリカへの信頼を維持することができた。さらに彼がアメリカに望みを失わなかったもう一つの理由として付け加えたいのは、アメリカとの具体的接触を通じて新渡戸がアメリカ人に共感を抱くようになっていたことである。「私は実際、亜米利加人の氣質に、共鳴する点が少くないのである」と彼はいう。<sup>85</sup> それではここでいうアメリカ人の氣質とはどのようなものをいうのであろうか。

新渡戸によると、アメリカ人は未開の土地に鋤一本、鋤一つで入ったので、俺が俺がという自尊心が強いが、それと同時に「ネイバーフッド・フィーリング」、隣保の感情というものがあるという。広漠たる土地に移り住み、そこで大いに個性を伸ばしたため、良くも悪くも個人主義が発達したが、それとともに、人間は一人で生きていくことができるものではないため、近所の人々と仲良く暮らすことが生活の条件になった。リンカンはその一人で、あのケビンに生まれたからこそ、ああいうのびのびした性格になり、しかもロッキー山の横腹からえぐり出した岩石のように荒っぽいところがある。あのような人間を造る環境がアメリカにはある。すなわち個人的に伸びると同時に、ネイバーフッドがあるというのである。<sup>86</sup> 個人主義を大事にし、しかも近隣の人々への親愛の情もあわせもつ、そうしたアメリカ人の氣質が自分好きなのだというのである。

ここでいう「ネイバーフッド・フィーリング」だけでなく、第一章で見たように新渡戸はさまざまなアメリカへの友好的なイメージを長年に

わたって、実体験を通じて培ってきた。それだからこそアメリカへの好意は排日移民法の試練にあっても消滅することがなく、なお彼に前向きな姿勢をとらせたということができよう。実際に一九二九（昭和四）年から翌三〇年にかけて、アメリカでは排日移民法を改正しようとする動きが生じるようになる。これを聞いた新渡戸は次のように述べた。

今や米国人が此排日移民法案が過れると知つて其過を改めるのに躊躇しないのは大いに見上げたものである。

……若し修正説がお流れになつたら、我輩の米国人礼讃が頗る可笑しいものにならう。然し我輩は茲に断言する、よし今回お流れとなるやうなことがあつても、彼の国に於ては其非を悟り、其修正の為に日夜の食をも忘れて努力する輩の存在する一事である。我国に於て支那人、若しくは朝鮮人に対して折々過れる政策に就て、其改良、或は修正を為さしめんが為努力しつゝある者が幾何かある。寡聞我輩は朝鮮人や支那人に対して正義と同情の心もて努力しつゝある同胞の何処にあるかをいまだ聞かぬ。<sup>87</sup>

このように新渡戸はアメリカに同法修正のため尽力する者がいることに期待をかけ、希望を断念することはなかったのである。さらに一九三一年八月、新聞報道を通じて彼は、排日移民法の改正が有望であることを感じ、喜びをかいま見せていた。<sup>88</sup> ところが翌九月に勃発した満洲事変を契機として日米関係は変転を遂げ、同法の改正は難しくなり、結局そ

徹頭徹尾反対するということだった。なんら修正あるいは撤廃措置もなく一年、一年が過ぎてゆくにつれ、われわれの受けた傷はますます強まり深まって行って、それが今後、なんらかの形で日米両国間の交流に悪影響を及ぼしてくるのは必定である。ある国家が、他の国家に対して心中に疑惑と恨みの種子を蒔くとしたら、どんなに平和や親善を叫んでも無駄である。<sup>80)</sup>

このように排日移民法の制定によって新渡戸が受けた心理的な傷は相当深いものがあつた。一方でアメリカに敬意を抱き、他方でアメリカの反日論に苦しめられてきた新渡戸は、ポジティブなアメリカ像とネガティブなアメリカ像とのさまにあって心理的に格闘してきたわけであるが、この排日移民法という決定的な痛打に対してどのように対処したのであるうか。

まず彼は怒りを感じながらもアメリカ人に対する信頼を持続していた。アメリカの新聞や宗教団体などの中に排日移民法に反対する人が少なからずいたことを認識しており、それが新渡戸にとって慰めとなつていた。<sup>81)</sup>しかしながら彼にとくにインパクトを与えたのは、アメリカ人自身の口からそれを聞いたことであろう。当時、国際連盟勤務のためジュネーブにいた新渡戸は、ホテルで若いアメリカ人の大学講師から「あなたは新渡戸さんですか」と呼びとめられた。「そうです」と答えると、先方はポケットから紹介状を取り出して自己紹介し、近くの木陰でお茶を飲むことになつた。その際、男性はかたわらに立っていた若い女性を自分の

妻であるとして紹介した。新渡戸が握手しようと手を差し伸べると、婦人は彼の手をとりながらほろほろと涙を流し、声をふるわせて、「私はあなたと握手する資格がない」と言い出した。女性がいうには「私は自分の国ながらアメリカの議会が排日的法案を出したことを国辱と思ひます。友邦国である日本にこんな侮辱をするとは、何というやり方でしょう。私は日本人に対してただ恥じ入るばかりです。それに今あなたがわれわれを親切に受け入れたことについて、一層私の心がこの恥を感じるのです」。これを聞いて新渡戸は少なからず「感激」し、次のように答えた。「今度の法案はアメリカ国民の輿論であるとは私は信じません。少数の議員や排日運動家の仕業だと思ひます。……あなたと意を同じくする人がたくさんいるだろうと思ひます。それがまたアメリカの強みであると思ひます。そういう人々の考えが後日力を得て、この法案が撤廃される日もありましょう。」このように述べて新渡戸は二人を案内し、<sup>82)</sup>話題を変えて時を過ごしたという。

さらに彼がジュネーブにいる間、あるアメリカの老婦人が同地に移転してきた。その婦人はかねてから親日家で、ここ数年間ワシントンに住んでいたが、排日法が通過するとこのような無謀なことをする国には愛想がつきるとして、一家を引き払ってジュネーブにやって来たのだとい<sup>83)</sup>う。以上のようにアメリカ人の口から排日移民法への反対を直に聞いた体験は、彼の心に大きな影響を与えたと考えられる。アメリカに絶望する必要はない、将来に望みをつなげることができるかもしれないと彼は考えたのである。

アメリカへの好意的なイメージをもち、日米両国民に融和と相互理解を説く新渡戸であったが、その心はアメリカ人の側から提出された反日論に対する憤りでさいなまれていたのである。

以上、本章では新渡戸が描いたネガティブなアメリカ像を検証した。それをまとめると以下のようになる。アメリカに好意的なイメージをもつ新渡戸は日露戦争後、アメリカで現れた黄禍論的な反日論、排日論の挑戦を受ける形になった。彼は、日本国民にはそれにつられて反米論で応酬しないように自制を訴え、アメリカ国民には排日論者の主張が誤っている旨を説明した。新渡戸は表向きはアメリカの良い面を見ようという方針を維持していたが、内面においてはアメリカの排日論に強い怒りを感じ、その心はアメリカへの親愛の情と憤慨の情の間で揺れ動いていたのである。

そうした中でアメリカの排日論が「排日移民法」という具体的な形と成って結実、立法化される。それまでの新渡戸の人生の中で最大といってもよい挑戦がアメリカからなされたことになるが、これに対して彼はどのように対応したかを次章で見ていくことにする。

### 三 アンビバレンスの克服への試み

一九二四（大正十三年）五月、アメリカで「一九二四年移民法」（いわゆる排日移民法）が成立し、日本人移民は「帰化不能外国人」としてアメリカへの入国が絶対的に禁止された。この法律の背景に人種偏見が

存在したことは日米両国の研究者が指摘しており、周知のとおりである。新渡戸が多くの日本人と同様、排日移民法に衝撃を受けたことはよく知られている。同法に対する思いを彼は次のように述べている。

甚だ感情的で、笑はれるかも知れないが、彼の移民法が出てから、私は、二度と亜米利加の土を踏むまい、といふ決心をしてゐる。あまりに癪に触るから行かないのである。友人達はぜひ出かけて来い、君が来れば大いに歓迎するといふが、俺は嫌だ、自分の同胞を侮辱して、僕一人を歓迎するなどといふのでは、死んでも行かない。妙に旋毛つむじが曲つてしまつて、どんなに招ばれても行かないことにした。

アメリカ人の多くが法案に反対していたことを私は知っているが、「日本人を歓迎しないことを、国法で定めた国である。そんな所へわざわざ出かける必要はない」というのである。<sup>79</sup> また次のようにも述べている。

この立法措置が日本に与えた影響は、甚大なものであった。日本は、あたかも永年の親友から、突然になんの挑発行為もしないのに、頬を打たれたような感じをもった。日本は、アメリカの議員たちの正気を疑った。沈黙しながらも、日本が心中ひそかに決心したことは、法の制定に関する一国の法的「権利」がどうであるにせよ、いわゆる「紳士らしい」態度とはほど遠いやり方で通過させたこの法律に対して、

張した法律家のマディソン・グラント (Madison Grant) が序文を寄せている。グラントは「北方人種」(Nordic race) は危険な外国からの「有色」人種と戦わなければならないとし、もし彼らのアメリカ入国を許しつづければ、われわれは自分自身の土地から追い出されるだろうと警告する。加えて、外国人が南欧、東欧からの移民であろうと、より明白に危険な東洋人であろうと、彼らと北方人種の競争は宿命的であることを知る必要がある、アメリカ人の血統をもった農民や職工がこの危険を認識し、それに対処しなければならぬと主張した。<sup>(16)</sup> これを読んだ新渡戸は「アメリカ人の血統」にアンダーラインを引き、余白に「So little is said of White dispossessing Indians.」(白人がインディアンを追い出したことには触れない)と記してアメリカ人の痛いところを衝いてみせる。

次に同書の本文において著者のストッダードは、日本人が極東モンロー主義を掲げつつ、大規模な征服と世界支配の夢を抱いていると警告する。ここは新渡戸がとくに注目した個所であり、大きく「？」と書き込んで<sup>(17)</sup>いる。さらにストッダードが、一九一六年の秋に書かれたというある日本の帝国主義者による「世界制覇」の「途方もない考え」を紹介し、これは日本全体を代表しているわけではないにせよ、日本における有力分子を代表するもので、白人世界はあらかじめそれを警戒すべきであると述べる<sup>(18)</sup>と、新渡戸は「Far from it. Who is the writer any way?」(決してそんなことはない。いずれにせよ、その「途方もない考えの」筆者とは誰なのだ?)<sup>(19)</sup>として<sup>(20)</sup>いる。

また人種主義者のストッダードは人種の差違を強調し、異人種同士が融合しないとする意見をくり返し展開したが、これは民族間の融和を望み、それが可能であると考える新渡戸の思考とは真っ向から対立するものであった。そのため新渡戸はこうした個所にアンダーラインや「？」のマークを書き込んで注意を払っている。<sup>(21)</sup>皮肉なことに、新渡戸と同様にジョンズ・ホプキンス大学でリチャード・T・イリーから指導を受け、政治経済学の博士号を受けた社会学者のエドワード・A・ロス (Edward Alsworth Ross) の意見も紹介されており、ロス教授は門前の外国人に同情して自分の子供に同情しないような者には耐えられなかった、同教授は平和の鳩のまことの敵はプライドの高い驚、食欲なハゲワシではなく、「赤ん坊を運んでくる」コウノトリ(日本)だとしている、<sup>(22)</sup>といった個所に新渡戸はアンダーラインを引いている。

ストッダードは最終部分で次のように結論づけている。「アジアには次のことがはっきりと言い渡されるべきである。われわれは白人の土地への移民も非白人の熱帯への浸透も許すことができない。これらの問題のためにわれわれは屈服するよりもむしろ最後まで戦うことを選ぶ。——なぜならわれわれの『最後』とはこれらの点についてまさに降伏することを意味するからである。」これを讀んだ新渡戸は「What a threat!」(何という脅し!)との慨嘆を書き込んだ。<sup>(23)</sup>

右に見られるように、新渡戸はアメリカの排日論者の意見を熟読し、その思考や論理をよく認識していた。それと同時にそこに強い怒りを感じており、思わず反論を書き込まざるを得なかったのである。基本的に

殊な国とみなし、そのことを念頭に置かなければアメリカは外交政策上、重大な誤りを犯す危険があると警告する<sup>(85)</sup>。その際ミラードは、日露戦争前に満洲全土を占領したロシアの対満政策について好意を示す一方、戦後の日本のそれを排他的、独占的なものとして批判し、日本に同情を寄せる意見を「ずさんな推論」としたが、新渡戸は「Why does not the author use here such words & phrases as he frequently uses when describing similar things abt [about] Japan?」（なぜ(11)で著者は「ロシヤ(12)」「What reform did Russia institute in Manchuria」(ロシアが満洲でどんな改革を行ったというのか)、「The author himself」(ずさんな推論を行っているのは著者自身だ)と怒りの込められたコメントを綴っている<sup>(86)</sup>。

また日本が韓国を事実上の保護国とした一九〇五年の第二次日韓協約について、ミラードは日本の韓国政府に対する最初の「侵略」(encroachment)としたが、新渡戸はencroachmentの文字を消して「改革」(improvement)に書き改めている<sup>(87)</sup>。むしろミラードが、韓国には商業発展、鉱物資源開発の可能性が間違いなくあるが、(日本の保護下では)順風満帆というわけにはいかないだろうとすると、新渡戸は「Where can you find smooth sailing in the Sea of life?」(人生という海原において君はどこに順風満帆というものを見出せるのか?)と反論を記している<sup>(88)</sup>。そのほかに釜山の工事現場でミラードが目撃したというシーンが登場する。ミラードは日本人労働者の一人が故意に若い韓国

人労働者を肩で押しつけ、他の日本人労働者がそれを見て笑うという場面を紹介し、日本人による韓国侮蔑の悪質なケースとしたが、新渡戸は「Such trivialities are of daily occurrence in California.」(そんなささいなことはカリフォルニア州で(日本人移民に対して)毎日起こっている)と記した<sup>(89)</sup>。日本人を差別するアメリカ人が何をいうかという意味合いなのであろう。

このようにミラードが一貫して日本を批判し続ける中で、新渡戸は「Conjectures only」(憶測にすぎない)、「Superficial」(皮相)、「The author attributes every Jap. action to a sinister motive.」(著者は日本のあらゆる行動を邪悪な動機によるものとする)といった書込みをくり返して、「This book is full of conjectures.」(この本は憶測に満ちている)と結論づけている<sup>(90)</sup>。ここで記憶しておきたいのは、新渡戸がアメリカの排日論者に内心強い怒りを燃やしていたということである。このような態度は公に発表された文章の中には見られないものである。新渡戸はさらに同じく黄禍論者として知られるアメリカのジャーナリスト、ロスロップ・ストッターズ(Theodore Lothrop Stoddard)の『有色人種の勃興』(The Rising Tide of Color against White World-Supremacy)も読んでいた<sup>(91)</sup>。同書は、日本を代表とするアジアの有色人種がそれまでの欧米の白色人種の優越をくつがえすことを警告した、典型的な黄禍論を示すものであった。これについても新渡戸は憤りを覚えながら読み進めている。

まず同書の冒頭に人種主義者として知られ、有色人種の移民規制を主

戦争には何がつきものか、果たして本当に知っているのでしょうか。私自身としては、戦争は弁護できません。私が職にある限り―そして職を去った後でさえ、国事に何か影響力をもっているかぎりは―アメリカとの戦争など無いことを、あなたに保証いたします。

新渡戸は桂首相自身からこのような言質をとり、日本のリーダーがアメリカとの戦争など考えていないことをアメリカ側に伝えたのである。また新渡戸はアメリカの聴衆に次のように訴えている。「日本の子として、またアメリカの幸せを願う者として、これらの戦いの噂は、すべて暁の到来とともに消え去る束の間の夢、恐ろしい夢魔にすぎないと判明することを、私は心から切に望みます。他のどの所で戦雲がこの地を暗くすることがあっても、太平洋上には永続的平和が支配するという目的に向けて、われわれは熱心に祈り、力を尽くして働きましょう。」<sup>(81)</sup>

以上のように新渡戸はアメリカの反日論に接して、日本側にはそれに過剰反応しないよう自制を求め、アメリカ側には日本に対する誤解を解くようにと訴えた。ところでアメリカにおける黄禍論、対日警戒論の根底には一種の人種偏見が存在したことが今日では知られている。この人種偏見という問題については留学以来、新渡戸において重要なテーマであったはずである。

アメリカでの講演において新渡戸はくり返し人種問題に言及している。たとえば、われわれは人種と人種の総体的な相違をやっと認めはじめたばかりであって、次の段階は人種間の「精神的親近性、心理的一体性」

をもっと十分に確認することではないか、すなわち「人類は精神において一つであり」、全世界は一族であるという理解ではないかという。<sup>(82)</sup> また互いにアラ探しをしたり、互いの特異性を大げさに言ったりすることでは、我々は理解と尊重に到達できない。反感ではなく共感、敵意ではなく歓待心、悪意ではなく友好心によってこそ、一民族は他民族の心を知るに至るのであるとする。<sup>(83)</sup> さらに、もしあなたたちの国と私の国とが相手をさらによく知るに至れば、人類の幸福の一般的増進へ向けて、巨大な一歩が踏み出されたことになるだろうともいう。<sup>(84)</sup> このように新渡戸は日米の人種の違いよりも、同じ人間としての共通点を見出し、互いに歩み寄ることが大事であり、ひいてはそれが人類全体にも貢献することになると訴えた。

この両者の違いよりも共通性を強調して対立の克服をめざすという新渡戸の基本的態度は、彼の読書においても明確に表れている。新渡戸は英語の書物を通じてアメリカ人側の態度を研究していた。人種問題に関する書物の中で新渡戸がとくに熱心に読んだものとして、まずあげなければならないのはアメリカの代表的な黄禍論的反日論者の一人として知られるジャーナリスト、トマス・F・ミラーズ (Thomas Franklin Fairfax Millard) の『新しき極東』(The New Far East) である。<sup>(85)</sup> 新渡戸の旧蔵書には強い筆圧による太字の書き込みが随所にあり、彼がいかにこの書を熱を込めて読んでいたかがうかがえる。

同書の全体を通じていえるのは、著者のミラーズが満洲、朝鮮における日本の侵略性を強調していることである。ミラーズは日本を東洋の特

不吉な予言が口にされている。しかし日本には朝鮮、満洲、樺太で行わなければならないことが多々あり、外国と戦争をするような余裕はない。アメリカの民衆は一九〇八年の「高平・ルート」協定を忘れていた。この文書は太平洋における相互の領土保有を尊重することを約束しており、現状に脅威を与える事態が起これば、両国政府は互いに通告の上、取るべき措置について相互理解に達することを保証している。

② 移民問題……アメリカに来る日本人移民は一九〇七年には三万人に達した。これは小さな数ではないが、同年にアメリカに来たあらゆる国籍の移民約一二〇万人の四〇分の一にすぎない。どの年においても日本人移民は移民全体の二パーセントに達したことはなく、その一方でオーストリア・ハンガリー人、イタリア人、ロシア人はいつもその二〇パーセントを超えた。日本人移民の多くはアメリカ人労働者の嫌がる農業に従事し、雇用面でアメリカ人と張り合うことはしていない。また日本政府は紳士協定を厳密に守り、アメリカへの移民を自主的に制限してきた。移民問題は事実上解決されているのである。<sup>58)</sup>

③ 満洲の門戸開放問題……アメリカの新聞や雑誌では、日本が門戸開放の約束に違反して、他国に差別的待遇を与え、満洲に利己的な商業進出を行っている」と報告されているが、このように日本を非難

する者はそれを裏づける具体的事例や正確なデータを決してあげない。しかしたとえばイギリスの搾油業者は満洲の大豆が家畜の飼料として優秀であることに気づき、その需要が増えるにしたがってイギリス商社が大豆を求めて満洲奥地に入り込んでいる。実際には門戸は広々と開かれているのである。メリケン粉や石油は満洲で大きな需要があるから、アメリカの貿易が入れない理由などありはしないのである。

このように新渡戸は日米間に懸案となっている問題をそれぞれ説明し、アメリカ側の議論を批判しつつ、日米親善が決して不可能ではないことを力説した。さらに新渡戸は日本を発つ二週間前、桂太郎首相と数時間会見し、日米戦争の風説について意見を聞いており、このときの桂の言葉をメッセージとしてアメリカ人聴衆に伝えている。その桂の発言とは次のようなものであった。<sup>59)</sup>

十代のとき、私は王政復古の戦いに刀をとりました。長じてドイツでは軍事学を学び、中国との戦争では將軍として陸軍を指揮しました。その後、日露戦争では首相として全国民を率いました。「したがって私は戦争のことはよく知っています。余りにもよく知りすぎています。戦争の恐怖も、その余波の一層ひどい恐怖もみな知っています。戦争のことをベラベラしゃべるのは、主に戦争など一度も見たことのない人々です。戦争について書いている新聞人は、戦争が何を意味し、

る。「ペルリ、ハルリス以来、歴代日本駐節の使臣又は華盛頓<sup>ワシントン</sup>政府の当局者が吾国に対して多大の好意を有せることは疑ふ迄もなし。之れを忘れて、ペルリ提督の書面や、近くはホブソン<sup>ホブソン</sup>少将の言に聞いて、累を日米外交の全般に及ぼさんとするは、思はざるも甚だしと云ふべし。」このように新渡戸はアメリカの日米開戦論につられて、日本側がペリーの砲艦外交の意図を批判するのは間違いであることを説き、自制を訴えた。

また②韓国における宣教師問題については、アメリカのプロテスタントの牧師で政治に容喙する者はほとんど絶無といつてよく、そのような牧師がいたとしても、必ず同輩から排斥され仲間に入れてもらえないだろう。かつて韓国に米人ハルバルト (Homer Bezael Hulbert) という者がおり、「其の心事陋劣にして唾棄するに堪へたり」。韓国宮廷に入りして対日策を案じたが、うまくいかなかった。彼は以前宣教師であったが、一般の宣教師は彼をもって同胞視せず、ほとんど絶交の状態にあった。「故に此等の事を以て、日米の国際関係を害なはむとするは、一二の例外を以て、事物の全般を推さんとすると同様にして、決して有識者の執るべき所の説にあらず。」ここで新渡戸が言及するホーム・B・ハルバルトは韓国で宣教、教育活動を行ったアメリカ人で、反日的な立場をとり、『韓国の消滅』(The Passing of Korea)などの著書を刊行したほか、一九〇七年のハーグ密使事件に関与したことも知られているが、新渡戸はハルバルトのような例外をもって韓国におけるアメリカ人宣教師の反日的傾向を誇張してはならないと訴えたのである。

ただし③の満洲において米国が「日本の既得權益を侵して」勢力の拡

張をはかろうとしているという点については「実に掩ふ可らざるの事実」であると新渡戸はいう。この前年の一九〇九年、ウィリアム・H・タフト (William Howard Taft) が大統領に就任すると、アメリカ政府は「門戸開放」を掲げて満洲における日本の経済活動に抗議するだけでなく、これに積極的に挑戦するようになり、フィランダー・C・ノックス 国務長官 (Phinlender Chase Knox) が「日本を満洲から燻し出す」べく満洲鉄道の中立化を各国に提案していた。そうした状況を念頭に新渡戸は、一度こうした態度を示した以上、アメリカは終始一貫してその主張を続けるだろうとして前途に不安を示し、今後アメリカの態度が平和的であることを希望した。

以上を述べた上で新渡戸は、無理な海軍力拡大を行うことなく、平和的な方法で日本を発展させ、日米関係が損なわれることなく安定することを要望した。しかし翌一九一一年(明治四十四)年になってもアメリカの日米戦争論はやまず、新渡戸の不安はつづいた。同年八月三十日、新渡戸は第一回日米交換教授として横浜を出港するが、この仕事を引き受けたことに日米関係の悪化を改善したいという彼の思いをうかがうことができる。新渡戸はアメリカで講演をくり返し、有識者を中心に日米親善を説いて回った。<sup>(36)</sup> そのうち重要な主張をまとめると以下のようになる。<sup>(37)</sup>

① 日米戦争の風説……日露戦争中、アメリカが日本に惜しめない同情を送ってから六年しか経っていないのに、日米戦争が数年のうち  
に避けがたいものになる、日本はフィリピンを取るだろうといった

ヶ国条約の改正問題に象徴されるように、多くの日本人が「不平等条約」に屈辱を感じていた時期であり、そうした時代の空気を吸って新渡戸も西洋列強の前に愛国心を燃やしていたであろうことが推察される。後年、彼の教え子の一人は「先生の愛国心のお強いこと、殊に外国人より侮りを受けたくないと気張られお気を揉まれたジュネーヴ時代の数々の思い出……」と回想しているが、そうした西洋人から侮られたくないという気持はアメリカ留学の原体験を通じてとくに強くなったと考えられる。

アメリカの良い面を見ようとしつつ、その一方でアメリカ人のアジア人に対する人種偏見を体験していた新渡戸は、一九〇五（明治三十七）年の日露戦争終了後、アメリカで黄禍論的な反日論が顕著に現れるようになる中で、かつての日本を軽侮するとは異なり、ワールドパワーとしての日本の台頭を恐れる別の形での人種偏見に直面することになる。

一九〇六年十月にサンフランシスコ学童隔離問題が生じてから日米紳士協約の交渉が終了した一九〇八年までの期間は「第一次日米危機の時代」とされ、アメリカでイエロー・ジャーナリズムを代表するハースト系の新聞雑誌を中心に黄禍論的な日米開戦論が登場し、米政府や陸海軍首脳も次第に疑心暗鬼の状態となっていた。<sup>(28)</sup>たとえば下院議員で予備海軍大佐のリッチモンド・P・ホブソン (Richmond Pearson Hobson) は、日米開戦になれば最終的な勝利はアメリカにあるものの、太平洋の優越を保持することが戦争を避け、あるいは決定的な勝利を収めるために必要であると説いた。<sup>(29)</sup>

こうした戦争の風説は一九〇八年の終わりには消えたが、一九一〇

(明治四十三)年になるとアメリカで再び日米開戦論がさかんになり、「一九一〇年代の日米危機」の時代を迎えることになる。<sup>(30)</sup>たとえば同年、日米未来戦論の古典的代表作として知られるホーマー・リー (Homer Lea) の『無智の勇氣』(The Valor of Ignorance) は、日米戦争でアメリカが敗北する光景を描き出し、日本への戦争準備が必要である旨を米国民に促した。<sup>(31)</sup>

右のように「第一次日米危機の時代」につづいて「一九一〇年代の日米危機の時代」に入ると、新渡戸はできるだけアメリカの良い面を見ようというこれまでの持論を継続しつつ、まず日本人に向かって次のように説いた。アメリカの黄色紙の議論に日本側が過敏に反応していないのは幸いであるが、日本の中にも日米関係を傷つける意見を説く者がいる。たとえば、①日本の開国時にさかのぼってペリーの心事を疑い、同提督が平和的使命をもって来航したのかどうかを疑う者、②韓国において日本の政策を喜ばない米国宣教師が多いとする者、③満洲において米国の勢力の拡張に努めるのを難する者である。とくに①②はただアメリカ側の感情を害するだけで、根柢が甚だ薄弱の感があるのを免れないという。①のペリー来航については、自分はペリーが来日にあたって大統領に寄せた書面を二十数年前、拙著『日米交際史』『日米関係史』に収めてある。そこには使命を全うすることができないときは干戈に訴えるも可なるかの意を述べた個所がある。しかし大統領以下、みなペリーの書面に同意せず、みだりに武力を用いることに反対して発砲さえも禁止したのであって、こちらのほうが当時の米国の思想感情を代表するものであ

やったという。

男が「どこへ行くのだ、やはり洗濯屋でも開くのか」と聞いたため、「大学で経済学をやる」と答えると、男は汽車の中に入って婦人を三人ほど連れ出し、新渡戸を指さして、あれは日本という国から来た人で大学に行って経済学をするそうだ、日本という国は中国の一部ではなく、その東にある独立国だと物知り顔に説明し、「さながら見世物でも観せる様にして」案内をしたという。できるだけ物事のプラス面を見ようという新渡戸は、アメリカ人には高等教育は偉いものと尊ぶ気持がある、「劣等人種」とは思うだろうが、個人に教育があると知れば見下すこともしないとしている。<sup>48</sup>しかし「見世物」の対象として好奇の目にさらされたことに相当の不快を感じたことは間違いないかった。

また東部に落ち着いてからの新渡戸は、街を散歩していると、「小僧」(年少の男性商店員)などからよく「やあ中国人」などといわれ、からかわれたという。このように軽く見られるのは、当方が言葉がわからな いと思われるからで、それに対して「貴様の国語が分るぞといふことを相手の者に知らせるのが、馬鹿にされない最良の防禦策」であると新渡戸は述べている。あるとき新渡戸が渡米して間もない友人二名と歩いていると、以下のようなことがあった。

……酒屋の脇に六七人生意気そうな若い者等が煙草を吸ってブラ付て居った、十間〔約一八メートル〕許り近くに行くと彼奴等は僕等を見て、何か冷評し相な形勢が見えた。そこで僕は兩人の友を止て、「オ

イ待て、彼奴等は己達を屹度冷評すに違ないから宜いか己が待てと云たら待玉へ、宜いか、言ふことを聴け」と、豫め兩人の承諾を受けて近付て六尺〔約一・八メートル〕許りの処へ行くと、果せるかな「ヤア支那人」「豚尾はどうした」杯始めたから、僕は英語で大きな声をして稍々演説口調で二人の友達に「止めつ」、それから右の手を伸して此奴等を指差し、「両君見玉へ是等は米国合衆国人民の最劣等なる標本である、朝より晩に至る迄煙草を喫み、酒を飲み、無頼の徒である、是が共和政治を誤る徒である」と逆に罵倒すると、彼奴等黙つて仕舞つて、我輩等がユル／＼前を通つても何もせず済んだことがあつた。<sup>49</sup>

この例に見られるようにアメリカ人から軽侮されて悔しい思いをしたことが少なからずあつたのであろう。それだからこそ「貴様の国語が分るぞといふことを相手の者に知らせるのが、馬鹿にされない最良の防禦策」であると身構えたのである。

しかしながら新渡戸は日本人が言葉だけでなく、外見からも侮蔑されがちであることも認めていた。彼によると、日本人は外国で初めは馬鹿にされる気味がある。理由はまず風采にあり、色は黄黒で鼻は低く、頬骨は出ていて、身長は矮く、一言でいえば不恰好であるため、初めから敬意を受けることは難しい。この不恰好に加えて言葉が拙いといかに憐愍な人でも馬鹿に見えるというのである。<sup>50</sup>新渡戸自身もアメリカ社会に入った際、そのような目に遭い、自分の外見に自信をもてなかったのであろう。その一方で、彼が日本で青春期を送った一八八〇年代は安政五

橋梁)の建設、教育と学校の導入、衛生(河川の水質、寄生虫感染などの調査)、通貨制度、貿易と関税、農業などを説明した個所にラインを入れており、日本の台湾統治と比較しながらアメリカのフィリピン統治の実態を参考にしようとしていた形跡をうかがうことができる。「われわれ(アメリカ人)は当然、彼(フィリピン人)からある程度の感謝を期待してもよいだろう。(しかし)その代わりにわれわれはフィリピン人がアメリカ人を憎んでいること気がついたので」との個所には、日本をふり返って思い当たる節があったのであろうか、アンダーラインと「✓」が記されている<sup>(1)</sup>。いずれにしてもアメリカのフィリピン併合と統治は、新渡戸にとってアメリカのマイナス面ではなく、むしろ日本に参考となる教訓として肯定的に受けとめられていたのである。

以上本章では、新渡戸が描いたポジティブなアメリカ像を検証した。それをまとめると以下のようになる。少年期に福沢諭吉の『学問のすゝめ』に出会ったころからアメリカの影響を受けていた新渡戸は、札幌農学校在学中、学問、宗教の両面において「学ぶべき教師としての国」アメリカのイメージを深めた。アメリカの良い面を見ようという方針のもと、留学中の彼は、自分の頭で考える学問、心から納得のできるクエーカー教義を受容するとともに、周囲のアメリカ人の温かい親切を経験した。さらに留学後は円満で常識的なアメリカ人と接し、その基礎をなすアメリカ社会の自由と民主主義、底力を認識するとともに、理想的なフィリピン統治はマイナス要因ではなく、むしろ日本の台湾統治の参考とさ

れた。

要するに新渡戸は基本的に親米派であった。しかしながらその一方で、彼はアメリカ人の人種偏見を体験しなければならなかった。これに対してどう向き合っていたのかを次章で見たい。

## 二 ネガティブなアメリカ像の挑戦

これまで見てきたように新渡戸はアメリカにプラスのイメージを抱いていた。しかしながらその一方で、同国からマイナスの印象を受けていることも少なくなかった。渡米早々、彼は以下のような体験をしている。サンフランシスコに到着し、そこから汽車に乗って東部に向かっている途中のことである。ある駅に着いた際、新渡戸が汽車から降りてプラットホームで休憩していると、ある男が新渡戸を眺めながら「ジョン、ジョン」と呼んだ。アメリカ人は中国人一般を「ジョン・チャイナマン」と侮蔑的に呼ぶことを知っていた新渡戸は、素知らぬ顔をして無視していた。しかし相手が執拗に声をかけるため、自分はジョンという名ではないと答えると、新渡戸の後頭部をのぞいて「お前の豚尾(pigtail)辮髪はどこへやった」という。「私は生れてから豚尾などつけたことはない」、自分は中国人ではないと新渡戸が述べると、どこの人か、日本というのはどこか、中国の一部か、と立て続けに質問してきた。この男はよほど「無学な奴」だと新渡戸は思ったが、日本という国について一人でも多くの人々に知らせたいという気持で、なるべく怒らずに教えて

五年)に言及した個所である。リンカンはこの演説で、神は奴隷制をなくすことを望んで、あえて南部と北部に戦争を与えたのであって、神の裁きと正義を信じるアメリカ国民は「誰にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛をもって」接しなければならぬことを説いている。それについて同書は、リンカンの考えにおいて北部と南部の相反する目的は全能の神の支配の下にこうべを垂れた、人間の政事においてこのようなことはまれであり、それは注目すべき(人間の)懺悔であるとして、リンカンの演説を高く評価した。新渡戸はそうした個所にサイドラインを引くとともに、余白に「○」の印をつけて注目している<sup>(40)</sup>。またリンカンの人間性について記された部分にもくり返し興味を示しており、リンカンの非打算的な寛容性、他者への愛情、および理想主義に触れた個所に「✓」のマークを入れている<sup>(41)</sup>。

このようにリンカンに関する伝記を愛読する新渡戸は、一九一九(大正八)年四月、欧米視察の途中で、大統領になるまで約二十四年にわたってリンカンが住んでいたイリノイ州スプリングフィールドを訪問し、メリー夫人や後藤新平とともにリンカンの墓を詣でるとともに<sup>(42)</sup>、同地で『エイブラハム・リンカンの日常生活』(*The Every-Day Life of Abraham Lincoln*)と題する一書を手に入れ、そこにも随所に「✓」の書き込みを入れている<sup>(43)</sup>。リンカンに対する思いがいかに深いものであったかがうかがえよう。

ところで、当時の日本ではアメリカによるフィリピン植民地化を批判する声があった。アメリカが西太平洋まで膨張して帝国主義を發揮した

国家的野心の発露とされたのであるが、これについてリンカンに代表されるアメリカを敬愛していた新渡戸はどのような見解を抱いていたのであろうか。この点に言及することによって本章を終えることにしたい。結論からいうと、新渡戸はアメリカのフィリピン統治にネガティブなイメージを抱いていなかったようである。一九一三(大正二)年、彼はフィリピンを視察しており、その後、ジャーナリストのカール・クロウ(Carl Crow)著『アメリカとフィリピン』(*America and the Philippines*)に目を通して<sup>(44)</sup>いる。同書は一八九九年から一九〇二年の米比戦争でアメリカ兵が用いた水治療法(water cure: 大量の水を短時間で飲ませる拷問の一つ)、あるいは「誇張された「米兵の」残忍と「不道徳」といったアメリカのマイナス面にも触れており、新渡戸はそこに二重のサイドラインを引いて着目している<sup>(45)</sup>。あるいはアメリカがフィリピン統治を容易にするため、独立革命家のエミリオ・アギナルド(Emilio Aguinaldo y Famy)を上回る英雄(ホセ・リサル Jose Protacio Mercado Rizal Alonzo y Realonda)を人工的に作り出そうとして成功した、それは道路建設や学校創設と同じくらい必要なことだったといった、やはりアメリカのマイナス面をおおせる記述があり、ここにも新渡戸はアンダーラインと「✓」「!」のマークを入れて注目している<sup>(46)</sup>。したがって彼がアメリカのネガティブな一面を認識していたことは確かである。しかし全体を通じて、アメリカがフィリピンの反乱、ゲリラをいかに鎮圧したか、またその後どのようにフィリピン統治を進めていったのかという点に主要な関心を示している。とくに交通路(道路、鉄道、

にいたころ、はじめてリンカンの伝記を読んで「非常に感激」し、それ以来、リンカンを神棚の偶像のように崇めるようになったという。<sup>(33)</sup>その後、新渡戸は文字通りリンカンを神格化し、一九〇七（明治四十）年、第一高等学校の校長時代には、実際に大理石でできたリンカンの半身像を室内に飾り、その第二期大統領就任演説（一八六五年）の一節である「With malice toward none, with charity for all」（誰にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛をもって）を愛誦していた。<sup>(34)</sup>新渡戸のリンカン観の中核は、要するに「一八六二年に奴隷解放宣言を行うことによって決断力と人類愛を示した人格者」というものである。この観点から彼がリンカンに寄せた賛辞には「万民に対して親愛の心持で、公平無私に一生を処した」「世界人類の敬慕に値する大的人格」、「彼の性格を味はへば味はふ程甘味を感じる」、「僕が最も崇拜する人物はキリストの外にソクラテスとリンコルンとである」といった具合に枚挙にいとまがない。<sup>(35)</sup>それは絶賛といつてよいものであった。

こうしたリンカンに対する敬意は新渡戸の晩年においても衰えることがなかったが、ここで新渡戸がリンカンに関する伝記をどのように読み取っているかを見ておきたい。新渡戸の旧蔵書の中でリンカンに関するものは非常に多いが、とくに書き込みが多く、興味をもって読んだことがわかる書物の一つに、アーネスト・フォスター（Ernest Foster）著『エイブラハム・リンカン』（*Abraham Lincoln*, 一八九〇年刊）がある。<sup>(36)</sup>同書の書き入れを見ると、新渡戸がとくにリンカンの奴隷制反対に関する言動に注意を向けていることがわかる（傍線は新渡戸自身によって引

かれたアンダーライン）。

エイブラハムがニューオーリンズにいたとき（一八三二年ごろ）、彼の後の生涯を考える上でもっとも興味深いできごとが起こった。鎖につながれ、鞭でうたれ、その他の虐待を受ける黒人の一団を人生ではじめて目撃したのである。この痛々しい場面はエイブラハムの心に深い印象、悲しみをもたらし、彼はそれを決して忘れなかった。後年、抑圧された黒人の擁護者として前面に立ったとき、エイブラハムは自分が奴隷制度の邪悪性について意見をもつきっかけとなったのはこのニューオーリンズで目撃した光景であることをしばしば語ったのであった。<sup>(37)</sup>

さらに新渡戸は一八六三年一月一日にリンカンが奴隷解放宣言に署名したという箇所にもサイドラインを引き、同年十一月十九日に行われたゲティスバーグ演説の全文を引用しているページでは、演説の出だしである「八十七年前、われわれの父祖は自由の中で生み出され、すべて人は平等に造られているという主張に捧げられた新しい国家をこの大陸に創り出した」に「#」のマークをつけている。<sup>(38)</sup>

それから年月をへて一九一四（大正三）年以降、新渡戸はC・S・ビーズリー（C. S. Beardslee）著『エイブラハム・リンカンの基本的特徴』（*Abraham Lincoln's Cardinal Traits*）を読んでいる。<sup>(39)</sup>その中で新渡戸がとくに着目しているのは、リンカンの第二期大統領就任演説（一八六

「自由の天地は違ふ」と思いながら、そちらに足を運んだ。すると二三百人の人々は二十ないし五十人程度ごとにわかれており、たがいの意見をまじめに落ち着いて語り合っていた。三十分の間、各グループを回って様子をうかがった新渡戸は、「容易に逆上せぬ此国民にして初めて言論の自由も思想の自由も享有すべきものと思つた」という<sup>28)</sup>。

ただし新渡戸は、アメリカでは社会主義者による騒動や政治の腐敗がなく、自治の精神が完全無欠に発達しているというわけではないと釘を刺す。実際に「シカゴの共和党 大会の会場入口で殴り合いが三度あったというし、あらゆる犯罪が多いアメリカのことであるから、数百人の人々が集まったときにはずいぶん不体裁なこともあり得るだろうとする。しかしそういうことを並び立てるのは簡単であるが、「僕は他山の瓦礫を捕へ来たつて、自国の璞玉たまたまに比して自ら快とするの愚なる事を信ずるから、常に他山の石を藉りて自分の玉を磨くの用に供したいと思ふ」という<sup>29)</sup>。

右の例に見られるように、新渡戸は静かに意見を交換する、言葉をかえていえば、相互の人格を尊重するということが民主主義の本質であると考えていた。身分の上下を論じず、男女、職業、教育才能とは関係なく、相互の人格を尊重する態度があつてはじめてデモクラシーの意義が解し得られる。人を人として相互の尊敬を抱くのがデモクラシーの根底的意義であつて、デモクラシーの出発点は「心の態度」であるというのである<sup>30)</sup>。

また新渡戸は、自由と民主主義のさかんな国は「底力」があると考え

ていた。彼によると国家をすばやく進歩させるには政府が干渉し、少数の役人が人民に相談せずに改良を行えばよいが、そういう速成的方法で成り立った国は速成の弱点を免れがたく、ことあるときは脆くも倒れ、底力がはなはだ乏しいという。一九〇二年の欧米視察でパリに滞在した際、新渡戸は経済学者のポール・ルロア＝ポーリユー (Paul Leroy-Beaulieu) に会い、ドイツの勃興は世界を驚かせているものの、その経済的根底は人工的であつて鞏固ではないとの意見を聞いており、その後、第一次世界大戦におけるドイツの敗北はこれを証明するものとなつた。やはり一旦緩急あつてわかるのは、日ごろから自由を重んじ、人民の権利の範囲をなるべく広くし、その能力の發揮を奨励していた国の方が底力があることだと新渡戸はいう。ここでは具体的にはイギリスやフランスを指しているが、新渡戸は自由と民主主義がさかんなアメリカもそうした実力を備えた国と見ていたはずである<sup>31)</sup>。

以上のように留学後の新渡戸は、円満な常識人が見られるアメリカ、そうした人々を生み出す土壌として自由と民主主義の気風が存在するアメリカ、官僚主義的、全体主義的な国よりも底力のあるアメリカというイメージを形成し、そこに敬意と共感を抱いていた。そうした中で新渡戸は、良きアメリカのイメージを体現する人格者としてエイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln) への敬意をますます強めていった。以下、彼のリンカン観に言及しておきたい。

新渡戸がリンカンを終生尊敬していたことは知られている。彼自身の言葉によると、新渡戸は十六歳のとき、日本の田舎の学校〔札幌農学校〕

一九〇二（明治三十五）年六月二十六日より後―八月月上旬より後……

後藤新平と欧米視察

一九一（明治四十四）年九月―一九一二年七月上旬……日米交換教

授

一九一九（大正八）年三月―五月三十一日より後……後藤新平と欧米

視察、アメリカ立後に国際連盟事務次長就任

一九三二（昭和七）年四月―一九三三年三月……講演旅行

右のように留学を含む合計八回のアメリカ滞在をくり返した新渡戸は、当時の日本でも有数の知米家となった。そうした中で新渡戸は、アメリカ人の中に優れた品格の持ち主がいることを現地で身をもって体験した。彼の言に耳を傾けてみたい。

永らく外国に遊んで、如何なる利益があつたらうと顧ると、偉<sup>ママ</sup>らしい人間に逢つた事だ。……僕の偉いと云ふのは天爵の高い、前後左右何れから見ても人並以上に発達した人物を云ふので、帰朝後残念ながら同胞の中に見る事は甚稀だ。……何にも彼にも人並に出来て、其外に何かに付て群を抜く人格は残念ながら未だ同胞中には、世間狭い勢か僕の目には見当らない。斯ふ云ふ僕の注文通りの円満の発達を遂げた人間の多いのは恐らく英米の両国で、何んの極まつた型に入れられずに、自由の空気の中で思ひ存分に育つた国民に一番多からう。

新渡戸はさらにつづけて、専門に長じてなお全般の知識に通じ、事務仕事もできれば音楽や美術、政治にも詳しく、軍人とは軍事、商人とは商業をそれなりに語ることができ、しかも道徳が高く品行方正といった、「一口に云へば大きく常識の伸びた人は、英米に最も多く見られる。是が留学中の最大の賜物だ」という<sup>(27)</sup>。

このように新渡戸は、アメリカ（およびイギリス）では自由な空気の中で能力をおおらかに伸ばした常識人がいることを指摘する。ここで着目しておきたいのは、そうした人物を輩出する土壌としてアメリカ社会の自由と民主主義の気風を見ていたことである。一九一一年から一二年にかけて、日米交換教授としてアメリカを訪ねた際の経験であるが、ある日曜日の夕方、ボストン中心部の公園ボストン・コモンを散歩していた新渡戸は、二三十人の労働者あるいは商店の手代、番頭といった雰囲気の人々が一群をなしている光景に遭遇した。好奇心に駆られて近づいてみると、五十歳くらいの男が中心となって、地球は円形ではなく平面であるという新説を語っていた。演説口調ではなく個人どうしの会話のように「ねえ、そうだろう」、「そりゃ君の説は少し勘定が違うぜ」といった調子であり、それを一方からやりこめる者もいた。この物静かに思想を交換する様に、新渡戸は昔ソクラテスがアテネの市場で道を説いたときはこうであつたらうかなどと想像した。

また同じ公園の向こう側に二三百人ほどの群衆が集まっていたため、かたわらの青年にあれば何かと尋ねると、社会党の人々が日曜のため大勢集まっていると聞き、これが日本であれば嫌疑を受けるであろうが、

中で、彼は金銭面で相当苦慮し、大学院生としてふさわしい研究テーマを見つけないことにも悩んだ<sup>(22)</sup>。そのため彼は人生の中でくり返し悩まされた神経性のうつ病に滞米中も苦しむことになり、一八八六年の春から夏はとくにそれがひどく、セメスターが終わる前に療養のためボルチモアを離れ、フィラデルフィアに移るほどであった<sup>(23)</sup>。留学中の新渡戸の身近には、同じ大学に在籍する同郷の先輩・佐藤昌介がいるなど恵まれた面もあったものの、異国での経済的苦境やうつ病の発症は不安であっただろう。しかしそうした新渡戸に手を差し伸べてくれるアメリカ人がいた。

たとえばアダムズ准教授は新渡戸を励まし、研究テーマについて日米関係史の研究を勧めるなどアドバイスを行うとともに、アメリカ歴史学会誌の編集作業の仕事を手話してくれた<sup>(24)</sup>。またあるアメリカ人の学生が資金の援助を申し出てくれたが、金銭をもらうことに抵抗を感じて断り、そのかわりに大学より新聞切り抜きのアルバイトを得た。これは数十種の新聞に目を通して後日参考になると考えられる記事を取捨選択するという作業で、一時間二円あたりの給金が支給され、学費に充当することができた<sup>(25)</sup>。

病気に関しては、かかりつけの医者が新渡戸の経済状況を考慮して一度の診察料でしばしば検診してくれたほか、転地療養の周旋もしてくれた。その際、見知らぬ学友の家族から「貴君は遠国から来られて病気にかかってお困りだろう、転地療養を勧められたそうだが、私の所は静かな田舎であるから二週間泊りにいらっしやい」、あるいは「私の宅は山の中で大変よいところだから一月位泊ってらっしやい」といった招待を

受け、三四ヶ所を回ったこともあったという<sup>(26)</sup>。このように新渡戸の留学は一面辛いものではあったが、反面少なからぬアメリカ人の親切を身をもって体験することができた貴重な機会でもあった。

以上見たように、留学中の新渡戸は良きアメリカ人、好ましい環境から、第一に学問、第二に宗教を吸収し、第三にアメリカ人の親切、すぐれた人格に触れることができた。こうした原体験が新渡戸のアメリカ観の基礎となり、もともとアメリカの良い面を見ようとしていた彼は、同国への好意をより一層深めたのである。

次に留学後の新渡戸を追ってみたい。青年期に形成したアメリカ観をその後いかに発展させたのであろうか。一八八七(明治二十)年、二十四歳の新渡戸はジョンズ・ホプキンス大学大学院の学位を取得しないままニューヨークを出帆し、ドイツで第二の留学生生活を開始した。最終的にハレ大学で博士号を授与された彼は、一八九〇年七月にアメリカに立ち寄り、翌九一年一月にフィラデルフィアでメリーと結婚式をあげ、同年二月、夫婦で帰国する。その後は札幌農学校教授、台湾総督府勤務、京都帝国大学法科大学教授、第一高等学校教授、東京帝国大学農学部教授など主に教育者、農政学者としての人生を歩むことになるのは周知のとおりである。その間、彼は第三回目から第八回目のアメリカ旅行を経験しているが、その滞在期間と主な目的は左記のとおりである。

一八九二(明治二十五)年七月末頃―九月十日頃……妻の療養

一八九八(明治三十一)年十月下旬―一九〇〇年二月……本人の療養

「敬虔な心持」を語ったところ、トムソンは首を振って、「君、それはいけないことだ、そういうことをしたら君の学問はちっとも進まん。宗教においては無条件の信念を要求する。しかし学者になるには、いつもオーブン・マインドでなければならぬ」とし、「これが唯一の真理だと信ずるのは、君の学問のためによろしくない。のみならずスペンサーの説は三年くらい前にはアメリカにも相当信者があったが、近頃はほとんどなくなっている。第一スペンサーの説には弱みがある」と語った。さらにトムソンは、スペンサーがあの大著述をなして、かえって学問の進歩を妨げたと述べて新渡戸を驚かせた。<sup>18</sup> ここでも新渡戸は批判的精神をもって自分の頭で考えよという学問の基本的態度、批判的思考を教えられたわけである。

第二に宗教について見てみよう。新渡戸にとってアメリカはクエーカー（キリスト友会）と出会った場でもあった。渡米後、各派の教会を訪れ、立派な礼拝堂、華やかな服装の信徒たち、形式的なセレモニーを見た新渡戸は、これは新約聖書にあるキリスト教とは別物のような気がするとの違和感を覚えていた。<sup>19</sup> しかし一八八四（明治十七）年の終わりごろ訪れたボルチモアのクエーカー教会で自分にじっくりとなじむ世界を見出すことができた。

……日曜日にこの会堂へ行ってみた。その建築、内の体裁、設備装飾——否、むしろ無装飾——ことごとく十七世紀の絵で見たよう。中には若い婦人も幾多いたが、華美な着物は一人も見えない。帽子に花

をつけた者などはさらさない。それに説教する演壇もない、讚美歌もない。三百人ばかりの信徒が座禪を組むごとくにただ端然として黙座し、折に聖霊に感じた人があれば、誰でも立って二三分、長いので二十分も感話を述べる。かくすること一時間半くらいでこの静肅なる会合は解散した。……その後もしばしば会堂に行き、またその宗派の人にも交わったが、感服することが多い。……牧師を定めず、……集会は黙座瞑想を主とし、各自直接神霊に交わるをもって礼拝とするごとき、頗る僕の気に入った。<sup>20</sup>

神秘体験を重視し、「内なる光」の存在を信じるというクエーカー主義によって、新渡戸は自分が潜在的に求めていた宗教、キリスト教のあり方を発見することができた。このとき彼は「はじめて、キリスト教と東洋思想とを調和させることができた」と回想している。<sup>21</sup> 一七世紀にジョージ・フォックス（George Fox）によってクエーカーが創始されたのはイングランドであったが、それから約二百四十年後の一九世紀、新渡戸はボルチモアでこれに開眼したのであった。彼の宗教生活にそうした大きな変化をもたらしたのがアメリカであった。さらにこのクエーカーの人脈を通じて新渡戸は将来の伴侶となるメリー・P・エルキントン（Mary Paterson Elkinton）と出会ったが、彼にとってアメリカは生涯の宗教的教養とパートナーをもたらした運命的な国であった。このような国を彼が嫌うわけはなかったであろう。

第三にアメリカ人の人格に触れた点である。アメリカで学業を続ける

りたい」とアピールしているのは、その表れである。

留学中の新渡戸にとってアメリカ人は、第一に学問、第二に宗教、第三に人格の三つの面で恩人というべき存在になった。まず第一の学問について見てみよう。ジョンズ・ホプキンス大学における新渡戸は歴史・政治学科の大学院生として勉学をスタートしたが、同学科を運営する若い三名の専任教員（いずれも教授でなく、准教授またはアソシエイト）を中心として指導を受けた。たとえば歴史学者ハーバート・B・アダムズ准教授（Herbert Baxter Adams）の教会史、政治史、ルネサンス論、ゲルマン制度論、および経済学者リチャード・T・イリー（Richard Theodore Ely）の貨幣・銀行・財政・商業論、財政・行政論、経済学説史、上級経済学、財政論、あるいは歴史学者ジョン・F・ジェームソン（John Franklin Jameson）の歴史批判論などを受講し、毎週金曜日の夜八時から十時にはアダムズ准教授が主宰し、ほかの二人が補佐する歴史・政治学ゼミナールに参加した。当時のジョンズ・ホプキンス大学では、学生を単に「講義を受け入れる容器」として取り扱うのではなく、「自分の力で真理を発見する探究者」であると考える気風が確立されており、そうした学問的雰囲気の中で教員の役割は「学生たちに真理探究の手段と方法について適切な励ましや助言を与える」ことであると理解されていた<sup>18</sup>。

当初新渡戸は日本でもさかんに用いられていたハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）やジョン・S・ミル（John Stuart Mill）の著作がジョンズ・ホプキンス大学の参考書として使われていることを知り、

アメリカの教育レベルは（日本とそれほど差がないため）低いと思ったという<sup>19</sup>。イリーからスペンサーの社会学を読んでくるようにいわれた新渡戸は約二年前にそれを読了しており、内容は大概知っていると言ったところイリーは「スペンサーの考えをどう思うか」と質問し、そのようなことを考えたことのなかった新渡戸が「スペンサーのいう通りです」と答えると、「スペンサーがどういう学説から、どういう根拠によって、あの説を述べたか、君は考察したことはないのか」、スペンサーの学説をそのまま信じるようではいけない、スペンサーの引証した主張がもと間違っており、その上に立てた説も正しいわけではないのだと論された。このとき新渡戸ははじめて「学問とはこんなものかな」と思ったという<sup>20</sup>。それまでの新渡戸は東京大学で、たとえば外山正一教授がスペンサーの社会学を棒読みし、学生がそれをフォロワーしていくといった講義形式に慣れ親しんでいた。それを通じて彼はスペンサーに「すっかりかぶれて」しまい、その組織的哲学で何でも解釈ができると思いつんでい<sup>21</sup>た。しかしながらアメリカへ来て自分の頭を使って考える学問に目を開かされたというわけである<sup>22</sup>。

また新渡戸はクエーカー信徒の人脈から、ボルチモアより約一七〇キロほど離れたフィラデルフィアとその周辺を訪れることが多く（のちのメリー夫人と出会うのもそうしたときであった）、そのような関係から同地のペンシルベニア大学にも足を運び、同大学の社会科学教授をつとめていたロバート・E・トムソン（Robert Ellis Thompson）の下をしばしば訪れた。あるとき新渡戸がトムソン教授にスペンサーに対する

校に入学し、八一年に卒業するまで、十五歳から十九歳の多感な日々を同校で過ごした。札幌農学校はアメリカ人教師を中心に英語で授業が行われ、いわばアメリカンスクールに近い環境にあり、そうした中で翌七八年、十五歳の新渡戸が内村鑑三や宮部金吾らとともにメソジスト監督教会のアメリカ人宣教師メリマン・C・ハリス (Merriman Colbert Harris) から洗礼を受け、同教会に入会したことはよく知られているとおりである。札幌時代の彼はアメリカ人宣教師から「欧米ではいかにも宗教が盛んで、その影響は社会の各方面に行き届いており、国民はあげて善男善女で、キリスト教国は楽園」といったことを聞かされたという<sup>(6)</sup>。

当時の日本知識人がアメリカを「キリスト教の聖地」ととらえがちであったことは先行研究が指摘しているが、新渡戸もまさにその一人であった<sup>(7)</sup>。

右のように若き新渡戸にとって、アメリカは学問、宗教の両面において「学ぶべき教師」の国であった。札幌農学校を卒業後、開拓使御用掛、農商務省御用掛の勤務をへて、東京大学に入学した新渡戸は、同大学の授業にあきたらずに退学し、一八八四(明治十七)年、二十二歳で渡米してペンシルベニア州のアレゲネー大学、ついでメリーランド州ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に大学院生として入学する。サンフランシスコに入港した際は夜間であったため、上陸は翌日となったが、「一刻も早くこの新大陸を見たい」と待ちきれない思いで甲板に上がり、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の『ヴァルヘルム・マイスターの遍歴時代』の一節「ここぞアメリカなる、ここより外にアメリカはなし」(英語の場合、Here or nowhere is America.) をくり返し口

ずきみながら板上を歩き回ったという<sup>(8)</sup>。アメリカはまさしく憧れの地であった。

渡米後の新渡戸にとってアメリカは依然として学ぶべき教師の国であり、その点では他の日本人と変わらないといつてよいが、もし彼の独自性をあげるとすれば、アメリカの欠点ではなく良い面を見ようとする態度を意識的にとっていたことであろう。サンフランシスコ到着の前日、船内で親しくなっていたスコットランド人の老人が新渡戸に次のようなアドバイスを述べた。「いよいよ明日はアメリカの大陸に着く。君はこれから豪い所を見るんだ。西洋の習慣にも悪いことが沢山あって、君の国に劣ることも多い。しかし君は悪いことを研究するため万里の波濤を超えるのではない。御国のためになるようなことにのみ着眼して善きことばかり学んで来なさい」。親が息子に意見するようなこの老人の教えは「深く身に染み込ませ」と新渡戸は回想している<sup>(9)</sup>。もともとアメリカの良いところを学びたいという気持が新渡戸の心の素地にあり、それが老人の言葉に共鳴することによって一層深まったということであろう。上陸後、「彼が長を採ってわが短を補うの材料にしたい」というのが新渡戸の基本姿勢となる<sup>(10)</sup>。

この「アメリカの良い面を見ようとする」姿勢は新渡戸の生涯を通じて一貫する特徴になるので記憶にとどめておきたい。たとえば後年(一九二〇年)、新渡戸は「米國研究の急務」と題する文章を執筆しているが、その中で他国(アメリカ)を研究する者は「虚心平氣」でなければならぬのはもとより、「一步進んで敬愛同情の念を以てそのことに当

戸の旧蔵書も活用し、そこに見られる書き入れも考察対象とする<sup>④</sup>。全集に掲載された新渡戸の文章には公に向けて発信された評論が多いだけにどうしても余所行きの面があるとともに、読者への啓蒙をねらって意図的に書かれた部分が少なくない。しかしながら書物に記された書き込みには他人の目を意識しない本音が記されており、新渡戸の考え方を探究する補助線として活用できると考える。

その際、新渡戸が熱心に読んだ、すなわちインパクトを受けた形跡が明らかかな書物だけを選んだことはいうまでもない。彼の蔵書の中にはほとんど線が引かれていないものも少なくないため、そうしたものは対象から外している。また調査にあたって注意したのは、新渡戸以外の人物の文字が書かれている場合があることである。古書として入手されたものの場合は元の持ち主の書入れがあることもあり得ようし、東京女子大図書館では過去に学生に貸し出しを行っていた時期があるというため、そうした人々が記したと考えられる基本的な単語の意味や日本語訳などの文字が入っていることがある。しかし新渡戸自身の筆跡やライン、印のつけ方には特有の癖があるので、ここでは彼が記したことがわかるものを選定して組上に載せている。

なお本稿は、新渡戸の最晩年でありその人生のクライマックスに相当する満洲事変から、第一次上海事変勃発後までの時期（一九三一—三三年）の言動を説明するための前提作業となる。そのためこの時期のアメリカ像についての言及はできるだけ避けておくこととしたい。

## 一 ポジティブなアメリカ像の形成

本章では新渡戸がアメリカにどのような好意的イメージを形成したかを見ておきたい。そこでまずいえることは、少年期の新渡戸のアメリカ観がとくにユニークなものではなく、同時代の知識人と共通するものであったということである。

新渡戸は一八六二（文久二）年、盛岡藩士の三男として生まれた。明治初年、東京から遠く離れた盛岡にあっても、幼い新渡戸の周辺には西洋化の波が伝わっていた。それに敏感に反応した彼は次兄・道郎とともに叔父の太田時敏を頼って上京し、一八七一（明治四）年、九歳で築地外人英学校に入学した。さらに七三年、官立の東京外国語学校、七五年に同校の英語科が分離した東京英語学校（のち東京大学予備門に改称）に入学して英語の素養を身につける。福沢諭吉の『学問のすゝめ』を読んだのは、この東京外国語学校ないし東京英語学校時代（十二、三歳）であり、同書の冒頭「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」を読んだときの印象は忘れ難く、感動してこの文章をくり返し読んだという<sup>⑤</sup>。このように新渡戸は同時代の向学心のある青年たちと同様に、福沢を媒介としてアメリカ独立宣言の前文に記された「すべての人間は平等に造られている」と共通の精神を受容したわけである。このころが彼とアメリカの精神的な出会いの最初期であったといっていようである。

一八七七（明治十）年、東京大学予備門を退校した新渡戸は札幌農学

だけでなく、国際連盟の事務次長をつとめ、「太平洋の橋」の言葉に象徴されるように日米両国の相互理解のために尽力したことで知られている。

新渡戸はアメリカの大学院で教育を受け、同国出身の女性と結婚し、二度にわたってアメリカで講演活動を行うなど終生アメリカとの縁が深かったため、彼を通じて近代の日米関係史、とくにその精神史の一端に触れることができる。しかしながら新渡戸の言動がさまざまな領域に及び、多彩であったためあって、彼とアメリカの関係に焦点を絞った考察は必ずしも多いとはいえない状況にある。

これまでそうした研究として、①新渡戸のアメリカ留学時代、②アメリカで吸収したクエーカーの影響、③アメリカン・デモクラシーの摂取、④ウッドロー・ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson) の行動・思想との比較などを対象としたものがある<sup>①</sup>。さらに本稿とテーマの重なるものとして、⑤新渡戸のアメリカ観を扱った論稿がある<sup>②</sup>。本稿はこのうち⑤のジャンルに含まれるものであるが、以下の点で先行論考の多くと異なる。第一に、新渡戸のアメリカ像を考察対象の正面に据え、青年期から晩年までトータルに把握することをねらいとする点である。従来の研究では、新渡戸の生涯のある一時期を限定的に眺めるものが多く、そのアメリカ観を大局的につかもうとするアカデミックな研究は、管見の及ぶ限りではまだ十分に行われていない。拙稿ではこうした従来の不足点を補い、長いスパンの中で新渡戸のアメリカ認識の展開を大きく概観するよう努めてみたい。

第二に、新渡戸がアメリカとどのようなように心理的に格闘したかということとを考察の主眼に置く点である。新渡戸は青少年期からアメリカに好意的なイメージを抱いていたが、やや遅れてアメリカにおける人種偏見というマイナス面に悩まされるようになり、同国のプラス・イメージとマイナス・イメージの間を葛藤しながら一九二四(大正十三)年成立の一九二四年移民法(以下、学術書でも用いられている通称の「排日移民法」の語を用いる)の衝撃を受けることになる。そうした心理的相克の中で彼はどのように頭の整理をつけようとしたのか、いかにアメリカの矛盾に対処しようとしたのかという点を追跡してみたい。従来新渡戸についてこのような問題意識にもとづいた研究は、管見の及ぶ限りでは、ほとんど行われていないが、アメリカの「良き面」と「悪しき面」に悩まされて混乱するというのは、現在の日本人(あるいはその他各国の人々)の間でもよく見受けられることである。新渡戸の精神的足跡をたずねることによって、日本人にとってアメリカとはどういう存在なのか、アメリカにはどのように対応したらよいのかという問題を考えてみたい。

第三に、研究方法として新渡戸の旧蔵書(アメリカ、イギリスで発行された洋書)の書き込みを利用する点である。新渡戸研究者が用いる基本文献は『新渡戸稲造全集』全二十三巻、別巻二冊であり、この全集はよく編集された充実した内容であって、それだけにここに収められていない新渡戸の文章を探することは難しい状況にある<sup>③</sup>。そのため本稿では全集を中心に考察を進めつつ、それ以外に東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫、北海道大学附属図書館新渡戸稲造文庫に保管されている新渡

## 新渡戸稲造のアメリカ観

——心理的葛藤とその克服の試み——

澤田次郎

### 要旨

本稿は青年期から六十代にいたる新渡戸稲造のアメリカ観をトータルに検証し、彼がアメリカに対していかなる心理的葛藤を抱き、それをどのように克服しようと試みたかという点を考察するものである。そこで明らかにしたことは以下の三点である。

第一に新渡戸は、早くから学問、宗教の両面において「学ぶべき教師」の国アメリカのイメージを深め、アメリカ留学時は政治経済学や歴史学、クエーカー教義を受容するだけでなく、周囲のアメリカ人の善意を体験した。留学を終えた後は円満で常識的なアメリカ人と接し、アメリカ社会の自由と民主主義に対する理解を広げつつ、かねてから抱くエイブラハム・リンカンへの敬愛を持続した。第二に新渡戸は、日露戦争後、アメリカで現れた黄禍論的な排日論の挑戦を受ける形となり、日米両国民に対して融和と相互理解を訴えた。ただしアメリカの反日論者の主張に対しては強い怒りを感じており、その心はアメリカへの好意と怒りの相反する心情の間を揺れ動いていた。第三に新渡戸は、アメリカで一九二四年移民法（いわゆる排日移民法）が成立したことに衝撃を受けたが、アメリカ人の回復力を信じ、将来アメリカ人自身の手で同法の改正がなされることを期待する

ことによって、アメリカへの怒りを抑え、心理的葛藤を克服しようと試みた。

キーワード…新渡戸稲造、アメリカ、対米態度、対外認識、黄禍論、一九二四年移民法、排日移民法

### 目次

- はじめに
- 一 ポジティブなアメリカ像の形成
  - 二 ネガティブなアメリカ像の挑戦
  - 三 アンビバレンスの克服への試み
- おわりに

### はじめに

新渡戸稲造（一八六二―一九三三年）は教育者、農業経済学者である

Department), 21 February 1928 D. O. No. 111/P. FO371/13216  
F1722/236/10 J. G. Acheson (Foreign and Political Department, New  
Delhi) to Lieutenant Colonel F. M. Bailey, Political Officer in Sikkim,  
22 March 1928 D. O No. 64-X.

(87) FO371/12405 F4278/2/10 Sir John Tilley, Tokyo to Sir Austen  
Chamberlain, 30 March 1927 no. 193.

(88) IOR L/PS/12/2305 Coll 11/18 British Mission, Lhasa to the Political  
Officer in Sikkim, Gangtok, 2 April 1941 no. 3 (1)-L/41/186.

**【付記】** 本稿の作成にあたっては平成二十八年年度・拓殖大学人文科学研究所研  
究助成金を活用させて頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

- 郎であった。これについて別の研究者は、日本人がチベットに武器を供給した、一九二〇年代を通じてかなりの量の武器がモンゴル経由で輸送されたとの報告があるが、そのことはポートには確認がなされていない。Paul Hyer, "Japanese Expansion and Tibetan Independence," in Li Narangoo and Robert Cribb eds, *Imperial Japan and National Identities in Asia, 1895-1945* (London: New York: RoutledgeCurzon, 2003), 79.
- (15) IOR L/PS/11/104 P1087 No. 3038 Major W. L. Gambell, British Trade Agent, Gyantse to the Political Officer in Sikkim, Gangtok, 13 June 1916.
- (16) IOR L/PS/11/104 P1087 No. 3201 The Secretary to the Government of India in the Foreign and Political Department, Simla to the Political Officer in Sikkim, Gangtok, 29 June 1916 no. 338-S.
- (17) Goldstein, *A History of Modern Tibet*, 1913-1951, 83-84.
- (18) IOR L/PS/10/1014 P1420 Major F. M. Bailey, Political Officer in Sikkim to the Secretary to the Government of India in the Foreign and Political Department, Delhi, Dated Gangtok, 24 March 1923.
- (19) FO371/9216 F1436/751/10 Foreign Office to Palareet, Tokyo, 18 May 1923 no. 47.
- (20) FO371/9216 F2638/751/10 Palareet (Tokyo) to the Marguess Curzon of Kedleston, August 3 1923 no. 426. 川の矢島に関する報告書は、Berry, *The Rising Sun in the Land of the Snows*, 159-160 でも取り上げられ、その「その」は外務省からインド省に転送されたコピーである IOR L/PS/10/1014 P3971 が用いられているが、内容は同じである。興味深い資料のため、本稿では全文を引用して紹介する。
- (21) 浅田『世界無銭旅行者 矢島保治郎』一三二―一三六頁。
- (22) FO371/9216 F2348/751/10 Palareet, Tokyo to the Foreign Office, 3 August 1923 no. 116.
- (23) 松浦正孝『大東亜戦争』はなぜ起きたのか——汎アジア主義の政治経緯史——(名古屋大学出版会、二〇一〇年)一三九、九二―一頁。

- (24) FO371/9216 F2136/751/10 Major F. M. Bailey, Political Officer in Sikkim to the Secretary to the Government of India in the Foreign and Political Department, Simla, Dated Gangtok, 9 June 1923.
- (25) そのほか一九二四年、サンスクリット学者の榊亮三郎(京都帝国大学教授)がネパールで学術調査を行ったときのケースがある。カルカッタの警察副長官は榊の真の目的がチベット行であると疑った。それを受けたインド政庁は在カトマンズのヘギリス代表を通じてネパール側に「榊がチベットに入るとかまごちの注意を促すこと」。FO371/10280 F433/433/10 W. G. Neale (Foreign and Political Department, Government of India), Delhi to Lieutenant Colonel W. F. T. O'Connor, British Envoy at the Court of Nepal (British Envoy at Kathmandu), 22 January 1924. FO371/10280 F1150/433/10 His Excellency Supradipta Manyabar General Sir Bhim Shumshere Jung Rana Bahadur, Commander in Chief of Nepal to Lieutenant Colonel W. F. T. O'Connor, British Envoy at the Court of Nepal, 7 February 1924.
- しかしインド政庁側の防衛は完璧ではなく、一九二七(昭和二)年のちに写真家として有名になる長谷川伝次郎が友人のV・S・マサシーとともにインド北部からチベット仏教の聖地カイラス山に旅行したケースがある(長谷川伝次郎『ヒマラヤの旅』中央公論社、昭和七(一九三二)年八月を参照)。このときインド政庁の対応は遅れ、二人の旅行を知ったのは翌年のことであった。シッキムのペイリー政務官はベンガル東国境横断制限法違反にもとづき二人は起訴されるべきで、類似のケースも同様に処理されなければならないと主張した。しかし二人の目的が政治的なものではなく、事件から相当の月日が経っていたため、インド政庁は起訴しないことを決定した。日本人のチベット潜入を警戒していても、シッキムやネパール経由とまったく異なるルートについては監視が手薄であったことがうかがえる。FO371/13216 F1722/236/10 F. M. Bailey (Sikkim Agency Office, Gangtok, Sikkim), Camp Shillong to J. G. Acheson (Deputy Secretary to the Government of India in the Foreign and Political

- (159) 高本『ラサ憧憬』一五三頁。
- (160) 同右、一五三頁。
- (161) IOR L/PS/11/104 P1459 Extract of letter No. C. 2 from British Trade Agent, Yatung, 3 March 1916.
- (162) 高本『ラサ憧憬』一五三―一五五頁。
- (163) 同右、一五六―一五七頁。
- (164) IOR L/PS/11/104 P1087 No. 1549 C. A. Bell, Political Officer in Sikkim to the Secretary to the Government of India in the Foreign and Political Department, Delhi, 7 March 1916 no. 39-T. E.
- (165) 高本『ラサ憧憬』一五七頁。
- (166) 註(164)に同じ。一九一六年一月二十八日發送、チベット諸大臣よりベル宛書簡。
- (167) 註(164)に同じ。一九一六年一月二十八日發送、チベットの諸大臣より大正天皇宛書簡コピー。この書簡はBerry, *The Rising Sun in the Land of the Snows*, 152 において全文紹介されている。大正天皇へのあて名は the great Emperor Dah Nyi Hong (大日本か) となっている。
- (168) 註(164)に同じ。
- (169) IOR L/PS/11/104 P1087 No. 1549 C. A. Bell, Political Officer in Sikkim to the Secretary to the Government of India in the Foreign and Political Department, Delhi, 8 March 1916 no. 40-E. C.
- (170) 青木と多田等観は一九一二年三月、カリンボンでダライ・ラマに拝謁した後、英領インド政府の警戒をいくらかでも避けるためゲームに移動し(高本『ラサ憧憬』八〇頁)、そこからチベットに向けて出発した。しかしインド政府側はそれを監視していったことがうかがわれる。
- (171) 高本『ラサ憧憬』一六一頁。
- (172) IOR L/PS/11/104 P1087 No. 1087 Telegram from Viceroy, 24 March 1916.
- (173) IOR L/PS/11/104 P1087 No. 1328 The Under-Secretary of State, Foreign Office to Under-Secretary of State, India Office, 7 April 1916 no.

61658/F.

- (174) ちなみにその後、日本の武器がモンゴル経由でチベットに流れたという説があることが知られている。たとえばシッキムの政務官を辞めた後、一九二〇年に特別大使としてラサに滞在していたベルは、そのときの体験として次のように回想している。ラサ当局は「イギリス側を説得することが難しかったため」、安くて長持ちする日本製武器・弾薬が氾濫するモンゴルに目を転じた。「機関銃一、小銃数挺、爆弾若干」[A machine-gun, a few rifles, and some bombs] がチベットの北部平原経由で輸入された。それらは私がラサに在る間に到着し、申し分のないものであることがわかった。次にそうした小銃を一万から一万五千挺輸入することが提案された。その際、銃身だけを購入し、台尻はチベットでクルミ材から作ることによって輸送費を節約しようという考えであった。ラクダ一頭に二三十挺の銃身を運搬させ、その賃金は七十から百ルピーになると計算された。ベルは記している。チャールズ・ベル著、田中一呂訳『西藏・過去と現在』(生活社、昭和十五〔一九四〇〕年九月)、三三〇頁、原書 Sir Charles Bell, *Tibet: Past & Present*, Cheap ed. (London: Humphrey Milford: Oxford University Press, 1927), 220-221. この記述によれば、日本製の機関銃、小銃、爆弾の見本がモンゴルからチベットにもたらされた。ただしこの件に日本陸軍が囁んでいたかどうか、またそれに続いて一万から一万五千挺分の日本製ライフル銃身が実際に輸入されたかどうかについては明らかにされていない。
- またある研究者は、一九二一年に参謀本部がインドでチベット政府と契約を結び、チベット防衛のため武器と弾薬を売却することになったことを指摘している。Tieh-Tseng Li, *The Historical Status of Tibet* (Columbia University, New York: King's Crown Press, 1956), 158, 277. 同書の新版 *Tibet: today and yesterday* (New York: Bookman Associates, 1960), 158, 277. (こちらも記述内容は同一。) その根拠とする資料は一九三二年九月二十八日付・在上海総領事サカイよりK・内田(内田康哉外相)宛電報となっているが、当時の上海総領事はサカイなる人物ではなく石射猪太

- (145) その一方で青木の仲介によって、ラサ滞在中の冒険旅行家で陸軍下士官出身の矢島保治郎がチベット軍参謀総長の顧問格となり、チベット軍兵舎の設計を行ったほか、同軍が採用したイギリス、ロシア、日本式の訓練のうち日本式中隊の教練を担当した。またダライ・ラマの信頼を得た矢島は法王直属の親衛隊の指揮を任せられ、ノルブリンカ離宮の警衛にあたった。その際、行幸を護衛するための騎兵隊の編制と訓練も任されている。
- 矢島は第一回目のチベット旅行時（一九〇九年）、北京で公使館付武官の青木宣純少将の下にしばらく居候し、警務学堂監督の川島浪速から激励を受けた。北京のいわゆる青木公館には同地を訪ねる様々な日本人が出入りしていたから、それだけで矢島と陸軍の結びつきを断定するわけにはいかないが、一九一二年三月に帰国した際、矢島は日本力行会本部において川島、軍務局長の田中義一少将らの前でチベット事情を講話している。その直後、矢島は帰国してわずか二日であるのに、再びチベットに向けて第二回目の旅行に出発した。矢島の伝記はこのとき川島らが資金を供給した、あるいは参謀本部が機密費を出した可能性を指摘し、矢島自身の後年の言葉によれば二回目の入蔵が「或ル使命ヲ帯ビテ」いたことに注意を促している。以上、浅田晃彦『世界無銭旅行者 矢島保治郎』（筑摩書房、一九八六年）、一七二―一七八、四四―四五、一一〇―一一二頁。ただし矢島が参謀本部のエージェントであったことを確実に示す証拠は見当たらない。
- (146) Kobayashi, "The Tibet-Japan Relations in the Era of the 1911 Revolution," 113 は「このニイジャンなる人物がカム地方出身の有力な商人 Panda Nyima Gyeltsen であることを特定し、彼が武装した部下とともにダライ・ラマのインド亡命を護衛した経歴のあることを明らかにしている」。
- (147) Ibid., 114. JACAR: B03041187600 明治四十五年五月十四日発、在カルカッタ・柴田要治郎総領事代理より内田康哉外相宛（外務省外交史料館）。
- (148) Ibid. 同右。
- (149) Ibid. JACAR: B03041187600 明治四十五年五月十五日発、内田外相より柴田総領事代理宛（外務省外交史料館）。北京の日本公使館にも以上の経緯が伝えられた。JACAR: B03041187600 明治四十五年五月十七日付、内田外相より伊集院彦吉公使宛（外務省外交史料館）。
- (150) 青木『秘密の国 西藏遊記』一三三頁、青木文教『西藏の民族と文化』（高原社、昭和十七（一九四二）年、慧文社、二〇〇九年復刻）、三九頁。
- (151) Melvyn C. Goldstein, *A History of Modern Tibet, 1913-1951* (Berkeley: Los Angeles: London: University of California Press, 1989), 77-79. シッキムの政務官はインド政庁の下でチベット問題を担当していた（デイヴィッド・スネルグロウ、ヒュー・リチャードソン著、奥山直司訳『チベット文化史』春秋社、一九九八年、三三〇頁）。
- (152) Ibid., 80-81.
- (153) Ibid., 82-83. ちなみにイギリスに断られたツァロン・シャペは、同じく一九一五年、ロシアにも援助を求め、ウルガのロシア総領事に特使を派遣して千挺のライフルをリクエストした。しかしロシア側はこれを断り、インド政庁を通じてイギリス政府に頼むようアドバイスしている。Andreyev, *Soviet Russia and Tibet*, 64-65.
- (154) 高本『ラサ憧憬』一三四頁。
- (155) IOR L/PS/11/104 P2640/15 C. A. Bell, Political Officer in Sikkim to the Secretary to the Government of India in the Foreign and Political Department, 19 May 1915. たゞこの国民会議の決定についてダライ・ラマは「日本に使節を送ることに比べて有効な成果が得られるとは思えない」として反対した。「諸外国政府は互いにニュースを伝え合うから、もしイギリス政府が〔チベット使節の〕日本への派遣を知れば、チベット政府に疑いを起こすかもしれない」と考えたのである。
- (156) IOR L/PS/11/104 P2640/15 Government of India, Foreign and Political Department to the Austen Chamberlain, Secretary of State for India, 24 June 1915.
- (157) 高本『ラサ憧憬』一三四頁。
- (158) 同右、一四六一―一四七、一五二頁。

- る。
- (134) 同右、九七、一〇六、一〇八一—一〇、一二二—一二五頁。
- (135) 青木文教『秘密の国 西蔵遊記』(中公文庫、一九九〇年)、二九三頁。原書は青木『秘密の国 西蔵遊記』(内外出版株式会社、大正九(一九二〇)年十月)。
- (136) 長野泰彦、高本康子校訂、青木文教著『西蔵調査報告』『国立民族学博物館研究報告』三〇巻三号、二〇〇六年二月、三四九—四一九頁。校訂者序言によると、この報告書は青木から中根千枝教授に生前贈与され、現在は国立民族学博物館に保管されているもので、先にあげた高本、三宅「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」と同様に、解説が困難な文字については写真を付すなど細やかな配慮がなされた行き届いた翻刻である。高本『ラサ憧憬』一一五—一二八頁に本稿と異なる角度からの紹介と考察がある。
- (137) 青木『西蔵調査報告』三五一頁。
- (138) 同右、三九二頁。
- (139) 同右、三八六頁。
- (140) 第四項「支那及び英国ニ対スル達頼喇府(麻?)ノ向背ノ真意」においても、青木は次の点を指摘している。「法王はインドでの三年間の滞在以来、親切を受け、英国に対してはきわめて好感を有する。ヤングハズバンド遠征による悪感洗い流された。」その一方でチベット人の中国人に対する感情は非常に悪化しているとする。「先年の駐蔵大臣の威庄、駐屯兵の横暴、侵入兵の残忍無道な蛮行の結果、法王以下、百官、庶民はみなシナ人を見ること蛇蝎のごとく、きわめて悪感を有する。」
- (141) 以上のほかに青木は第二項「西蔵ニ於ケル英兵派遣ノ有無特ニ変装英兵ノ有無等」において、前項であげた勢力地以外に英兵がいることは聞かない。ラサ、シガツェに変装英兵はいない模様だが、キャンツェ、チュンビは有無不明、パリーには存在するという説があると補足している。ただしイギリス、ロシア、日本式の訓練を導入することになったチベット軍は遅くとも一九一五年の時点で、キャンツェ駐留のイギリス護衛隊将校から訓練を受けざるを得なくなった。Alex McKay, *Tibet and the British Raj: The Frontier Cadre 1904-1947* (Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives, 2009), 67. のちに青木も「キャンツェ分営の一隊は純英国式に英人指導の下に英語で教練を受けている」と記すようになっている(青木『秘密の国 西蔵遊記』二五〇頁)。
- (142) ただし一九一二年、ラサに帰還する途中のダライ・ラマとパリーで対面したドルジェフは三人のブリヤート・コサックの護衛者を残していき、彼らは軍事教官として雇われ、ラサに滞在するようになった。そのあとでドルジェフはトランスバイカルのロシア当局に三人を秘密で残してきたことを説明している。Andreyev, *Soviet Russia and Tibet*, 57. 青木はラサにおいてロシア式の教練は「蒙古人の教官が蒙語を以て」行っているとしている(青木『秘密の国 西蔵遊記』二五〇頁)、ここでいうモンゴル人はブリヤート・コサックのロシア人であったということである。また後年青木は、当時ダライ・ラマの側近者の一人としてその身辺を離れなかったブリヤート人の少年が「ロシアの回し者」で、法王に関する政治上の機密(主として支英露三国関係)をロシア本国に通報する役割を果たしていたと回想している。前掲、青木『西蔵問題——青木文教外交調書——』一〇五、一七七頁、青木文教著、日高彪校訂『西蔵文化の新研究』(有光社、昭和十五(一九四〇)年、慧文社、二〇一五年復刻)、一六三頁。
- (143) JACAR: C03022351700 大正三年七月二十一日付、明石元二郎参謀次長より大島健一陸軍次官宛(防衛省防衛研究所)、JACAR: B070904581100 大正三年八月五日付、大島陸軍次官より松井慶四郎外務次官宛(外務省外史料館)。
- (144) 高本『ラサ憧憬』七五—九五頁、青木『秘密の国 西蔵遊記』一一二、一一六頁。なおダライ・ラマが青木に日本軍の教範操典類の取り寄せを命じる一方で、チベット軍総司令官のツァロン・シャベ(Tsarong Shape)は軍人出身の探検家として有名なピョートル・K・コスロフ(Pyotr Kuzmich Kozlov)にロシア軍の教練書と法規を送るよう頼んでいる。Andreyev, *Soviet Russia and Tibet*, 65.

いえば戦略目的を追求する粘り強さが欠けており、とくにイギリスに気兼ねして、チベットに関心をもつこと自体にまで自己規制をかけてしまった面があるように見受けられる。そうでなければ寺本や青木のような人材がその後、長く当局から顧みられなかった理由を説明することはできないであろう。他方、参謀本部も一九一四年に建川大尉のラサ旅行申請がインド政庁に拒否された後、管見の及ぶ限りではチベットに対して目立った動きを示していない。そうした背景として、小村寿太郎（一九一一年八月引退、十一月死去）、福島安正（一九二二年四月に参謀次長から関東都督に転任）のようなチベットに戦略的価値を認める指導者が中央の舞台から退場していったことも見逃せないであろう。

その後、外務省はイギリスの誤解を避けるため、日本がチベットに興味をもたないことを明示した。一九二八（昭和三）年、出淵勝次外務次官がジョン・ティリー駐日イギリス大使（John Tilley）に次のように語ったという記録がある。外モンゴル（モンゴル人民共和国）の独立承認についてティリー大使から問われた出淵次官は、イギリスがチベットに影響力行使して緩衝地帯としているのと同様に、日本はソ連の影響力が強いものの、外モンゴルをソ連に対する緩衝地帯にしたいという意向をほめかした。それと関連して出淵は、日本はチベットが独立を宣言しようとして、インドや中国に併合されようと、そこで起こることに関心がないと述べている。<sup>(132)</sup>

しかし日本はチベット仏教（ラマ教）を利用した大陸工作への関心は持続しており、ソ連の勢力を封じ込めるためにそれを実施していただけ

に、チベット工作から完全に退いたと断定するのは早急であろう。一九四一年、イギリス側は日本のラマ教工作を観察して以下のような報告を行っている。モンゴル最後の君主で化身ラマのジェブツンダンパ・ホクト八世の生まれ変わりがチベットで誕生した。これを知った日本人、内モンゴル人は、この転生ラマを内モンゴルに連れ出し、同じラマ教信者の外モンゴル人を誘惑して日本側に引き入れ、ソ連共産主義に反抗させるつもりだといっているのである。<sup>(133)</sup> その真偽のほどは定かではないが、ここでいわれるモンゴル工作と連動した日本のチベット工作が事実であるとすれば、寺本たちが培った水脈は完全に枯れることなく残存していたことになる。

#### 《註》

(132) 当該期の青木については、高本『ラサ憧憬』などすでに紹介した文献のほかに、佐々木高明「青木文教師とそのチベット将来資料」長野泰彦編『国立民族学博物館蔵 青木文教師将来チベット民族資料目録』（国立民族学博物館研究報告別冊第一号、一九八三年三月）所収、青木文教著、長野泰彦、高本康子校訂「チベット日誌」『国立民族学博物館研究報告』三四卷四号、二〇一〇年三月があり、さらに高本氏による「明治大正期日本におけるチベット画像資料——日本人入藏僧の旅行記を中心に——」印度学宗教学会『論集』第三六号、二〇〇九年十二月、「近代日本仏教における異文化情報を受容と発信——青木文教撮影チベット写真資料を中心に——」『印度学仏教学研究』五八卷一号、二〇〇九年十二月、「日本人入藏僧によるチベット写真資料——青木文教、多田等観、河口慧海を中心に——」『印度学仏教学研究』六〇卷一号、二〇一一年十二月などがある。

(133) この(1)については高本『ラサ憧憬』五九—六八頁に全面的に依拠してい

## おわりに

本稿では一八九〇年代から一九一〇年代までの時期を中心に、日本の諜報工作活動を第一次（外務省と成田安輝）、第二次（参謀本部と寺本婉雅）、第三次（西本願寺と青木文教）の三つの段階としてとらえ、その過程を検証した。それをまとめると以下のようになる。

第一に一八九七年から一九〇二年にかけて、外務省、参謀本部のチベット関与はスタートしたばかりで暗中模索の初歩的な段階にあり、それを反映して成田の諜報活動は質量ともにレベルの高いものであったと言いは難かった。チベットに容易に潜入できず、またチベット語でなく四川語を学んだ彼の情報は間接的で確度の落ちるものにならざるを得なかった。また成田はラサにおいてダライ・ラマへのアプローチを試みたが、それはかなわず、宰相総堪布にも会見できたかどうか確認が見つからない状況であり、基本的に準備不足が目立つものであったといえる。

しかし第二に一九〇六年から〇八年において、右の点は参謀本部の福島安正の支援を受けた寺本によって飛躍的に改善、克服された。寺本はチベット語やチベット仏教を学び、清国西寧郊外のクンプム寺滞在中、ダライ・ラマと側近の中に入り込んでいった。以後彼らの考え方や態度についてディーブな内容の情報を集めることに成功し、それは参謀本部の福島だけでなく、北京の日本公使館を通じて外務省にも伝えられた。また寺本はダライ・ラマと側近に働きかけて五台山会談を実現した上、

日本への使節派遣を確約させるまでに至った。しかし参謀本部と西本願寺の対立という日本側の理由によって派遣計画は中止に終わった。

第三に一九一三年から一六年にかけて、ラサに滞在してダライ・ラマの顧問をつとめた青木の情報収集は、それ以前に寺本が地ならしを行っていたことと彼自身の資質とが相まって、やはり質の高いものとなった。参謀本部の依頼に応えてチベットにおけるイギリス、ロシアの浸透状況などを調査した詳細な報告書はそのことを物語っている。また青木はダライ・ラマの依頼を受けてイギリスまたは日本から機関銃の購入をめざすという協力工作に携わり、特使に付き添いながらインド政庁側に接触したが、結局日本を警戒するイギリス外務省、インド政庁の反対にあって実現できなかった。しかしこの機関銃購入問題を含めてチベットに具体的な行動をもって協力を行ってきた青木は、ダライ・ラマをはじめとするチベット指導層の抱く日本人のイメージ（日本人は忠告提案が巧みだが、一片の実力をもって他を利することがない）を幾分改善する役割を果たしたのではないかと考えられる。

以上を見ると、日本の対チベット諜報工作活動は時を経るにつれて着実に発展をとげたことは明らかである。しかしながら、当初チベットに戦略的意義を認めていた外務省は、一時期成田や寺本の派遣に関わったにもかかわらず、一九一〇年代以降、英清露三国との関係を配慮してチベット関与を控えるようになっていった。その間、イギリス、ロシアが英露協商の存在にもかかわらず、チベットと水面下で何らかのコンタクトをとり続けていたことと比較すると、日本外務省には一貫性、さらに

問した。矢島は肯定的な答えをしたが、いまはとても難しいと付け加えた。インド經由の道はインド政府によって閉ざされ、四川經由の道も同省にはびこる反日感情のため問題外であり、唯一可能なのは甘肅經由である（と彼はいう）。

矢島はチベット帰還の日にちが確定したらすぐに知らせると私の情報提供者に約束した。そのためさらなる情報は、彼もしくは日本に帰ったといわれる多田なる仏僧から、ひょっとしたら入手できるかもしれない。

東京のイギリス大使館から英外務省への報告は以上の通りである。矢島の発言には真偽がとりまぜて織り込まれている。一九〇六年、東亜同文書院を卒業したというが、実際には同年、歩兵軍曹として陸軍戸山学校に入学しており、〇七年十二月に除隊するまで軍務についていた。また一九〇七年、頭山満の影響下に入ったとあるが、管見の及ぶ限りでは頭山との直接的な関係を示す資料は見当たらない。矢島はなじみのない人間の接近に不審を抱いて答えをはぐらかしたため、結局パーレット領事官も、いわれている十一人の男とはこの火薬と窓ガラスを作る専門家かもしれないと、インフォーマーの報告を復唱するしかなかった。

一方、興味深いのは、ツァロン・シャベから矢島の件を知らされたシキムのベイリー政務官が、十一人の日本人と一緒にアフガニスタン国籍のインド独立運動活動家ラージャ・マヘンドラ・プラタープ・シン (Raja Nahendra Pratap Singh) がチベットに向かう恐れがあると懸

念したことである。プラタープは一九二二年から二三年にかけて来日し、各地でインド独立運動やアフガニスタンの状況について講演を行い、『中外日報』でも日本に対し、東洋の盟主としてアフガニスタン、トルコ、ペルシャなどの窮状を救うよう主張していた。ベイリーはツァロン・シャベにあてた返信の中で、ことによるとプラタープが十一人の日本人一行と一緒に来る可能性があるが、その場合これらの日本人はチベットにとって何の益にもならない旨を告げた。怪しげな日本人グループとともに反英アジア主義者のプラタープがチベットに入ることを防ぐため、チベット政府の中でとくに影響力をもつツァロンに警告して予防線を張ったのである。イギリス側にとって日本のチベット浸透はインドの独立運動も刺激しかねないもので、早期の段階で芽を摘んでおく必要があった。以上、本章では西本願寺の大谷光瑞法主の指導下にチベットに関与し、ラサに滞在した青木がどのような諜報工作活動を行ったかを検討した。参謀本部から依頼を受けた青木はイギリス、ロシアのチベット浸透状況について詳細な報告を行った。またダライ・ラマよりイギリスないし日本からの機関銃購入の協力を求められ、ラサ出発からカルカッタ到着後までの間、特使に付き添いながらその実現をめざしたが、日本を警戒するインド政府がこれを阻止したため、青木の工作は挫折するに至った。青木は一九一七年、インドから帰国するが、彼を含む日本人のラサ滞在中によって強まったチベットをめぐるイギリスの対日警戒心は一九二〇年代を通じて解かれることがなかった。

經由でイギリス外務省に伝えられた。そこで英外務省は在東京イギリス大使館のマイケル・パライレット参事官 (Michael Palairre) に、十一人の男のチベット遠征とその目的について、もし可能であればさらなる情報を確かめ、電報で報告するよう指示した。これを受けたイギリス大使館ではハロルド・G・パーレット領事官 (Harold George Parlett) が日本人の「インフォーマント」(情報提供者) を前橋に住む矢島の下に送り込み、矢島自身の口から話を聞くことに成功した。その結果、パーレット領事官がまとめた覚書が英外務本省に送られているが、それは以下のようなものである。<sup>(8)</sup>

機密 矢島保治郎の件に関する覚書 一九三三年八月三日

矢島保次郎……私は秘密の情報源から彼が群馬県前橋市に住んでいることを知った。前橋は彼の父親が紡績業者として働くところである。

以下の情報は同じソースに負っている。それは矢島自身から聞き出したものであるが、その供述の信憑性については保証できない。

彼は一八八二年に生まれ、学校卒業後、上海に行き、そこで一九〇六年、東亜同文書院を卒業した。一九〇七年、頭山満の影響下に入り、その援助でチベットに(四川經由で)旅行した。ラサで彼は仏教僧の河口(慧海)、青木(文教)と生活した。

一九〇八年、彼はかしらである頭山に報告するため日本に戻り、これを行うとすぐにチベットへ再出発し、そのときはインド經由で旅行した。二回目の滞在ではほとんどがラサで過ごし、その間、チベット

人女性と結婚し、一九一九年まで生活した。この妻は昨年日本で亡くなった。

矢島は典型的な「シナ浪人」であり、見たところ非常に怪しく、隠し立てをする傾向があり、まったく話好きではない。しかし彼は私の情報提供者にこう述べた。自分はいつチベットに戻るかわからないが、できるだけ早くそうするつもりである。というのはラサのさる名家にある約束をしたからだ。それはチベット人に火薬と窓ガラスの作り方を教えるため、多くの専門家を連れて帰るということである。これまでに矢島はその務めを果たすことができなかった。現在、遼東半島租借地の長官〔関東長官〕をしている伊集院〔彦吉〕男爵に、昨年支援を求めたが、あまりうまくいかなかった。伊集院男爵はあまりにも用心深く、あるいは臆病すぎるので、そうしたことで何かをなすことはできなかった。

いまラサに日本人がいるかと尋ねると、矢島ははぐらかすような返答をした。彼が去ったとき何人かいたが、多田〔等観〕という名の仏教僧を除いてどんな名前も思い出すことができないらしかった。その他の人々についてはほんの少ししか知らないの、彼らの氏名、人数、仕事は覚えてすらいはないという。その答え方の調子からいって、明らかに彼はうそをついていた。そうした状況のため、〔中略〕十一人の人間がすでにラサにいるのか、彼らが日本で矢島が探しているという「専門家」であるのかは、見きわめることが不可能である。

私の情報提供者はさらにチベットに旅することが可能かどうかを質

の中で、チベット人は恩威をもってすればきわめて制御しやすく、あげてその掌中に帰すだろう、チベットは百人の優れたアドバイザーよりも一挺の兵銃を必要としており、チベットの経営をめざす者はこのことを等閑にできないとしていたことを想起したい。青木はチベットに機関銃を供給する手助けをすることによって日本の「経営」力、影響力を高め、逆にチベットの併呑を狙っているとされた英露の影響力を削ぐうとしたと考えられる。つまりそこには戦略的な思考があった。したがってイギリス外務省、インド政庁のいう「チベットにおける日本の陰謀」は誇大なイメージではあったが、青木の活動に関していえば、確かにチベットに対する一種の浸透工作が行われていたといえるだろう。ただし管見の及ぶ限りでは、その背後に日本当局（外務省、参謀本部）の存在を裏づける資料は見当たらない。

なお、その後もドライ・ラマとチベット政府は中国軍に対する不安を払拭することができず、イギリスに従前の支援を要請し続けた。例えばギャンツェ駐在のキャンベル商務官の下に送られたチベットの使者（近衛騎兵隊長兼ラサ工廠長）は興奮しながら機関銃と弾薬の援助を訴え、キャンベルがロイター電にもづく中国の革命情勢を話して落ちつかせようとしたが、侵略の危険が減じていることを信じようとしなかった。加えて世界大戦に武器を投入しなければならぬイギリスの事情を説明してもそれを言いわけであるときなし、チベット政府はイギリス政府以外に友人がいらない、その関係は父と子のようなものだととして、最後まで機関銃を求めて譲らなかつた。<sup>(16)</sup> インド政庁はこのチベット政府の使者に

対して、「現在、機関銃が手に入らないことを残念に思っているが、この件は覚えておく」と伝えるようベル政務官に命じた。<sup>(17)</sup>

しかしながら翌一九一七年、チベット側の不安は現実のものとなり、カム地方で戦闘がはじまった。ところがチベット人はここで反撃に出て、一年以内にチャムド、デルゲなど揚子江上流の東部地域を奪還した結果、一八年、休戦協定が成立した。チベット軍が優勢に転じる上で一九一四年にイギリスから購入済みの新型ライフル銃五千挺が大きく貢献したが、なおチベットは機関銃の購入をあきらめず、イギリスにそれを求め続けて拒絶された。イギリス側で内々に議論されたその理由は、チベットが機関銃を保有することによって中国よりも強くなり、逆にチベットの侵攻ないし独立につながることを恐れたからであった。<sup>(18)</sup>

以上見たように、イギリスがチベットの機関銃購入要求を退けたのは、第一次大戦で余裕がなかったこと、また後にはチベットが中国を凌駕するのを抑制するためであったが、それ以外にチベットの背後に日本の勢力浸透の影を見て、これを警戒したことも重要な要因となっていた。このイギリスの日本に対する疑惑は一九二三年にも再燃する。そのきっかけとなったのは、シッキムの政務官フレデリック・M・ベイリー（Frederick Marshman Bailey）がツァロン・シャベから受け取った私信にあった。ツァロンによると、以前チベット政府に雇われていた矢島保治郎から手紙が届き、日本から十一名の男がチベットに向けて出発したので彼らを援助してほしいとの依頼がそこに記されていたというのである。<sup>(19)</sup> ベイリーはこの件をインド政庁に報告し、それはロンドンのインド省

右のようにインド総督ハーディングは、緊急の必要がないにもかかわらずチベット政府が機関銃購入を主張する背景には、「日本の陰謀」があると見ていた。日本はまず機関銃をチベットに輸出し、ついでその操作や手入れの仕方を教える教官を送り込み、チベットへの浸透をたくらんでいるというわけである。このように考えるインド総督は、ワンギエル特使をカルカッタの日本総領事館に導こうとする青木の背景に、日本当局の影を見ていたのである。日本を警戒する総督が下した結論は、考えられる三つの選択肢のいずれでもなく、ベル政務官がチベット政府を説得して、機関銃購入の要求を控えさせるというものであった。すでに触れたように、ベルはツァロン・シャベからの要求を聞いてチベットに同情を抱いていただけに、この決定には飽き足らないものがあつたかもしれない。

インド政庁の見解は右のとおりであるが、さらにイギリス外務省の考へは、外務次官がインド省次官にあてた文書に示されている。それはハーディング総督が提案したベルによるチベット政府説得を支持するものである（傍線は本稿執筆者・澤田による）。

エドワード・グレイ外相 (Edward Grey) の意見では、現時点でロシアないし日本の政府と論争的な性質の問題を起こさないことが肝要である。加えて以下を指摘しなければならない。前者ロシアとの関係でなされた表現の中に、もしチベットにおける日本の陰謀に関する状況説明を含めようとすれば、それは必然的に速かれ遅かれ日本政府

に届くことになるだろう。(インド) 総督によって懸念された日本を怒らせる危険がこうして作り出され、しかもベトログレードでも論争的問題を引き起こすという危険を引き起こすだろう。

こうした事情の下、外務省は総督の電報の最終パラグラフに含まれた提案の採用を勧める。すなわちベル氏が手紙を書き、チベット政府がこの件に突き進むのをやめるよう説得する、ただし日本人がこの問題に関係しているという事実と言及することを避けるということである。

英外務省としては、ロシア、日本政府とトラブルを起こしたくない。そこでロシア政府にはチベットでの日本の「陰謀」については説明しないで置き、それが日本側に伝わるのを防ぐ。一方、チベット政府に対しては、インド総督が提案したように、ベル政務官を通じて要求を控えさせるのがよい。ただし日本が絡んでいることには言及しないでおくのが得策だということである。以上のようにイギリス外務省、インド政庁は「チベットにおける日本の陰謀」を念頭に置きつつ、チベットへの機関銃調達を阻止した。かくして青木の機関銃購入支援工作は挫折するに至るのである。

青木は先の参謀本部への報告書で述べているように、カム地方でチベット軍と戦っている中国軍は強大なものではないと見ていた。したがってダライ・ラマの機関銃購入要請に協力したのは、単に中国の脅威に怯えるチベットに同情したからだけではない。彼が同じ参謀本部への報告書

以上のようにベルは、機関銃購入問題でワングェル特使をサポートする青木がどのような人物であるかインド政府に情報を送っている。また青木のチベット潜入ルートとその方法、青木から聞かされたラサの政治状況も合わせて伝えている。さらにカルカッタ到着後の青木の住所や予定も把握し、インド政府が彼をマークしていく上で予備知識も知らせている。ベルはこのように青木との会見でさまざまな情報を引き出していた。

三月十一日、インドのカリンボン滞在中の青木は「英印政府ノ通告ハ英本国ノ回答ヲ待ツマデ定マラズトノ事ナリ」と記してイギリス側の決定を待ったが、結局インド政府はチベット側の要請を断ることになった。二十四日、インド総督チャールズ・ハーディング (Charles Hardinge) は以下のような判断を下している (傍線は本稿執筆者・澤田による)。

最近確かめられた事実、および中国政府が国内問題に心を奪われていることを考慮すると、チベット政府にとってこうした銃を緊急に求める必要性はあり得ない。この取引全体は疑いもなく日本の陰謀の結果である。選択肢としては三つのコースがある。すなわち、(1) われわれ自身が機関銃を供給する、(2) 日本で購入した機関銃のインド通過は残念ながら許可できないとチベット政府に通知する、ただし、しばらく後にわれわれ自身の手で供給することを望む、(3) チベット政府の日本からの機関銃購入とそのインド通過を許可する。この三つのコースはすべてが好ましくないように思われる。(1) についてはわれわれに分

けてやれるだけの機関銃がないという現実的な困難がある。  
(2) のコースは多分それよりもまだましである。しかしわれわれにチベットとの離間をもたらし、日本を怒らせるだろう。

(3) のコースはチベットにおける日本の陰謀を促進する扉を開くもので、まったく好ましくない。日本に銃を求めれば、それは間違いない日本人の教官をも求めることにつながる。その上、もしわれわれがチベットに銃を与えたり、銃の通過を許可すれば、影響を受けやすいネパールが同じような要求をしてくる可能性を考えねばならない。

もしかするとベルがチベット政府に手紙を書き、いまこの件に突き進むのをやめるよう説得することが可能かもしれない。その論拠としては、現在われわれが最大の関心事「世界大戦」に気を奪われているため、外国の武器弾薬のインド通過という、ひょっとしたら先例をまごつかせるような難しい国際問題を十分考えることができない、とでもするかもしれない。またベルは以下のように述べてチベット政府を納得させるだろう。すなわち、インド政府は戦争が終わり次第、武器弾薬を求めるとんな妥当な要求にも同情的に考慮を払うだろう。しかしイギリス政府は、最近確かになった事実や中国政府が国内問題に専心していることから、「チベットの」東部国境地帯で「中国軍による」侵略がもくろまれるのはありそうもないことを確信しているので、もしチベット政府がとくに現下しきりに懇願している「機関銃の」案件を慎んでくれれば感謝するだろう。このように説明することでベルはチベット政府を納得させることだろう。

を学ぶため彼がダーズリン近郊のゲーム寺に滞在していたことが想起されよう。私は当時、ゲームに特別のエージェント〔諜報協力者〕をもつダーズリンの副長官にこのことを知らせておいた。青木はしかしそのエージェントに紙片を渡し、二人の同伴者を伴い、いずれもチベットの托鉢僧に変装してスキア・ポツカリ経由でネパールに入った。スキア・ポツカリからネパールのイラムに行った青木は、それからチベットのオランジョン、さらにシガツェに向かった。変装用の衣類はゲームで購入している。<sup>(10)</sup>

③ 彼のチベット行きは目的はチベット語の口語と文語の両方を学ぶこと、チベットの書籍、とくに歴史と文法に関するものを入手することであった。青木は日本の旅行者によくあるほどにはチベットの国内政治に参加はしていないが、いまは自ら認めているようにチベット人が日本から機関銃を手に入れることを助けようとしている。

④ 彼は次のように考えている。東チベットのチベット軍を指揮するカロン・ラマ (Kalon Lama) は親中で、中国との和解を切望しているが、チベット政府は今までイギリス不在のグループに加わることを辞退してきたし、中国人に対しては一貫してシムラ協定を引き合いに出してきたと青木は考えている。六ヶ月前、ラサ〔政府〕は長引く中国との戦いのためにかなり動揺した状態にあったが、現在は不安を見せていない。

⑤ イギリスが大戦で敗けているとのうわさを、チベットにいる中国人、とくにトルコに同情を抱くイスラム教徒がたえず広めている。

⑥ ツァロン・シャベは昨年キャンツェに私を訪ねてきた大臣だが、彼はいまチベットでもっとも勢力のある人物である。それはダライ・ラマ殿下に非常に大きな影響力をもっているからである。

⑦ 青木はチベット人の中に大きな、あるいは影響力のある親中の党派があるとは思っていない。これは、通常の日本人が中国人に抱きがちな偏見を考慮しなければならぬにせよ、ひょっとしたら正しいかもしれない。

⑧ 青木はいまカリンボンに向かった。そこからダーズリンに行くつもりで、さらにカルカッタに赴き、そこでチベット政府が日本から機関銃を手に入れる可能性について日本総領事に相談するつもりである。カルカッタで青木はラドハ・バザール・ストリート一一番地にある日本の別所株式会社に滞在するであろう。彼はもう二、三年、ダーズリンを本拠地としてインドに滞在しなければならないと考えている。彼の上司である大谷伯が日本帰国前にサンスクリット語を研究するよう指示したからである。青木は私に、大谷伯の妻は二、三年前に亡くなったが、日本の天皇の姉妹であると語った。

ち「チベット陸軍が用いる機関銃を日本政府から調達するという任務」をもって、報告した。また青木がラマ教研究の目的でチベットを訪問し、ラサで三年間チベット語を習い、「なかなか上手」にチベット語を話すこと、ラサで多くの写真を撮影したこと、ダライ・ラマとタシ・ラマ（バンチェン・ラマ）に会見していることなども伝えた。

青木はインド、チベットの国境であるゼレップ峠を越え、三月二日、シッキムの首都ガントクに到着し、翌三日にベル政務官もガントクに帰着する。四日、ベルはまずワンギエル特使を、ついで時間をずらして青木を招いて打合せを行った。このとき青木はもしインドから機関銃を手に入れることができるかわれば、日本の「カルカッタ」総領事とともにチベット政府を助けることを約束したとベルに語っている。他方、ベルは青木に武器購入が可能かどうか即答は難しいので、二、三日の余裕が欲しいと返事をした。青木は翌日市内見物を行った上で、六日ガントクを出發してインドのカリンポンに向かった。

七日、ベル政務官はインド政庁に対してワンギエル特使、青木の要望を伝える報告書を送った。またそこには、①チベットの諸大臣よりベルにあてた書簡、②チベットの諸大臣より日本の天皇にあてた書簡のコピー、③ツァロン・シャベからベルにあてた書簡が添付されていた。ここで①、②を紹介しておく、①のチベットの諸大臣からベルにあてた書簡は、中国軍の脅威を強調し、今回チベット政府がワンギエル秘書官を派遣したのは、カルカッタのリヨン&リヨン社に機関銃を供給してもらえないかどうかを確認するためであり、もし供給が可能であればイギリスに銃の

購入・輸送通行許可証を認めて頂きたいし、もし不可能であればカルカッタの日本総領事を通じて日本の天皇にお願いして日本で機関銃を購入し、イギリスにその輸送許可証を要請したいと説明するものである。また②のチベットの諸大臣から日本の天皇にあてた書簡コピーは、チベットの領土を守るため日本に機関銃を供給してもらおう必要に迫られている旨を訴え、今回日本に使節一名を派遣しようとしており、かつイギリス政府に機関銃の購入・輸送通行許可証を要請しているというもので、「チベットは仏教の中心地として聖なる土地と考えられており、仏教はわれわれ共通の宗教です」、このことを考慮に入れて頂きたいとして、日本に同じ仏教徒としての支援を求めるものである。

右のような書簡を報告書に添付したベルは、「従来の慣行からいって、残念ながらインド政庁はチベット政府に日本からインド経由で機関銃を輸入する許可は出せないことを、私はチベット政府に知らせるべきかどうか」指示してほしいとインド政庁に請訓した。またベルは青木個人についても詳しい報告を行っている。そのポイントを摘記すれば以下のようになるが、ベルが青木と話す中でどのような情報を引き出しているかわかる。

① 私と青木はチベット語で会話したが、それは彼が英語で自分を表現するのが難しいと思ったからである。

② 青木はネパール経由でチベットに入ったようである。チベット語

リス政府と同様、チベット問題を解決するため中国政府に影響力を行使することを要請している。」さらにインド政庁はラサに四人の日本人〔河口慧海、矢島保治郎、青木、多田等観〕が滞在していたことを把握しており、それに言及して以下のように指摘する。「チベットにおける日本の影響と関連して、我々が受け取った様々なレポートから見えてくるのは、この影響力が四人の日本人を通じて行使されているということである。彼らはネパールないしブータンからチベットに入ること成功し、ダライ・ラマと大臣たちに密に接触しているようである。ここでいう日本人とは、ちょうどインドに戻ったばかりの僧侶・学者の河口慧海、セラ寺の学僧T・多田、大谷伯（天皇の義兄弟）の私設秘書でいまは名目上チベットの古い経典を研究中の青木、現在とくにチベット軍の訓練に従事している陸軍将校の矢島ヤソジロウである。チベットに対する日本の関心は、日本の対中政策の必然的な結果として増大するに違いない。」このようにインド政庁は警告するとともに、「日本の活動がイギリスとチベット両政府の関係にすぐに影響をもたらすような危険性はない。しかし状況を嚴重に監視していく必要がある」と結論づけた。<sup>(8)</sup>

右のようにインド政庁は、ラサ在住の日本人たちによってチベットにおける日本の影響力が急増していると注意を喚起した。一九一六年一月、青木がラサを出立したとき、ベル政務官は本音ではチベットの機関統購入を助けたいという気持を抱いていたが、インド政庁自体は日本（および青木）に強い不信感をもっていったことを押さえておきたい。そうした中で青木とダライ・ラマの特使（インド省文書IORでは、名前はイェー

シェー・ワンギェル Yishe Wangyal となっている）はどのような行動をとったのであろうか。

チベット出発にあたって青木は事前にシッキムのベル政務官にチベット、インド国境通行の了承を求めて承諾されていた。<sup>(9)</sup>二月二十三日、ヤートンに着いた青木はデイヴィッド・マクドナルド商務官 (David MacDonald) を官舎に訪ねて非常に歓迎され、翌二十四日、マクドナルド、新任のキャンツェ駐在商務官ウィリアム・L・キャンベル (William Lachlan Campbell)、青木、ワンギェル特使、「西藏政府のチュンビ総督」ヘデンの五名の間で、イギリスからの武器購入について話し合いがもたれた。マクドナルドはこの集まりを「三国小会議」と呼んだが、結局、まずはシッキムのベル政務官に直接相談するのが第一ということになり、早速打電して彼の所在を問い合わせることから始めることに決まった。<sup>(10)</sup>

右の五人は二十五、二十六日にも会食し、青木一行はマクドナルド商務官からこの先の旅程、シッキムの首都ガントクまでのバンガロー（イギリス駐在員用の官舎）の使用と無料宿泊を内許された。青木はこうしたインド政庁側の対応について、「英官ハ吾等一行ヲ能ク厚遇セリ」と記述している。<sup>(11)</sup>マクドナルドがこうした便宜をはかったのは、ワンギェル特使と青木の動向を監視し、かつチベット内部の情報を得るためで、青木もそれを承知の上で行動していたことはいうまでもない。二月二十七日、青木は宿泊していたヤートン近くのチェマを出発したが、マクドナルドはインド政庁に青木とワンギェル特使が特別ミッション、すなわ

きないならば、チベットが日本またはその他の国から購入することを許可すべきである、さもなければチベットに真の友情を示すことができないと請願した。<sup>(8)</sup>しかしこれに対するインド政庁の反応は「ほとんど侮辱的」なもので、ヨーロッパの主戦場で機関銃が深刻に不足しているため、またインド政庁自体も自身の必要性を十分満たすことができないため、「現在チベット政府のためにその購入をしつくり考えてやることなど問題外である」と返答した。要するに英本国もインド政庁もチベットのことに関わっている余裕はないというわけである。<sup>(9)</sup>

ベルがツァロン・シャベに不可能である旨を告げると、ツァロンはカム地方の中国軍が大砲、機関銃を擁して戦闘準備を進めていることを強調し、「中国人は大変狡猾で突然進撃してくるかもしれない」、「われわれには機関銃がすぐに必要である」、カルカッタのリヨン&リヨン社における機関銃の購入とそこからの輸送を認める許可証を得るため申請をしてほしい、「チベットの望みは大英政府にしかないのだ。われわれは早く銃を手に入れたい、さもなければ何が起るかわからない」と切実な調子で訴えた。<sup>(10)</sup>

他方、チベット側はベル政務官だけでなく日本にも機関銃購入の協力を要請した。右に述べた経緯は一九一五年九月から十一月にかけてのことであったが、青木がラサを出発してインドに向かったのはその直後の一九一六年一月二十六日である。先行研究によると、このとき青木の出蔵に合わせてダライ・ラマはインドに特使を派遣し、イギリス政府から武器を購入することを考えており、もしイギリス側がそれに応じない場

合は、同国の同意を得た上で日本政府と交渉することが計画されていた。青木にはダライ・ラマの特使の活動全般に対する支援が依頼され、イギリス当局の了承が得られれば、その特使を伴って日本に帰国する可能性があり、青木は出蔵にあたって西本願寺から七百円の帰朝費を支給されたが、これは単なる帰国費用ではなく、以上のインドでの当面の活動費用を含んでいたと考えられるという。<sup>(11)</sup>

しかしここで注意しておくべきことは、青木が武器購入に協力する前の時期から、インド政庁が日本のチベット浸透に警戒を強めていたことである。一九一五年一月、日本が対華二十一ヶ条要求を行い、袁世凱がこの事件を用いて国内世論を沸騰させ、日中関係は決定的に悪化していくことになる。これを見たチベットの国民会議（国会に相当）は、第一次大戦で余裕のないイギリスに代わって日本側に接近し、中国を抑えてもらおうと考えた。翌二月、国民会議は次のような決定を行っている。日英両政府は友好関係にあるが、日中両政府は緊張関係にある。そのため日本通のツァトゥル・リンポチェ（ツァワ・ティトゥル）と第四ランク官吏の二名を代表者として日本政府に派遣し、同政府がイギリス政府と同様にチベット問題を解決するため中国政府に影響力を行使するよう要請するというのである。<sup>(12)</sup>

しかしこの決定を知ったインド政庁はチベットと日本の接近を警戒してロンドンのインド省に次のように報告した。「チベットにおける日本の影響は最近著しく増加した。それは国民会議が代表団を日本政府に送るべきだと提案したことから立証される。その提案は、日本政府がイギ

伝えるドライ・ラマからのメッセージは次のようなものであった。①日本がチベットを保護下に置くのは可能か。大臣会議において清国兵をチベットより駆逐し、できればモンゴルと同様に独立を布告することが決定されたが、清がもし優勢の援軍を派遣すれば独力で抵抗することはできないので、「日本ハ同種ノ好ヲ以テ援助ヲ西藏ニ致シ場合ニ依リテハ之ヲ其保護ノ下ニ置クノ意嚮ヲユウセサルヘキカ」②日本からチベットへの武器弾薬輸出を黙認してくれないか。武器弾薬の不足がチベット防御上の最大弱点なので外国より輸入を行いたい、イギリスはロシアとの協約〔英露協約〕を重んじて厳正中立を守り、軍需品のインド国境通過を許さない。ロシアはイギリスに気兼ねしているので、唯一の方法は日本より購入し、モンゴル経由で運搬することである。ウラジオストク経由でモンゴルに鉄道で入れるのがもっとも便利だが、ロシアの容認を得られなければ、日本の黙諾の下に満洲のある地点よりモンゴルに入りたい。なお希望する武器は小銃三千ないし五千挺とそれに伴う弾薬である。以上二点についてこの使者は柴田総領事代理に可否を尋ねた。<sup>(16)</sup>

それに対して柴田は、①のチベット軍援助、チベット保護化については事が重大で自分は言明する地位にないが、私見をもって見れば、日本政府は清の事変に非干渉主義を声明し、またイギリスとは同盟関係にあるため、西藏独立運動に援助を与え、甚だしきはこれを日本の保護下に置くような意向があるとは解することができない。②の日本からチベットへの武器弾薬輸出の黙認については、日本政府は中立の態度をとるため、それを黙許することは甚だ難しい。もっともこの点については、私

立会社で武器の取引をなす者があるので、本官個人の資格で便宜をはかることができるか否か考慮しておく。とりあえず柴田総領事代理はこのような返答するとともに、外務本省に訓電を要請した。<sup>(17)</sup>これに対して内田康哉外相は「先方申出ノ二点何レニ対シテモ何等援助ヲ与ヘ得ベキ限ニアラザルニ付其意味ニテ程能ク挨拶セラルベシ」と返電した。<sup>(18)</sup>このように当時の外務省は国際関係上、チベットへの政治的関与、軍事的支援は行わない方針であった。チベットと政治的な関係をもとうとしない外務省の姿勢について、のちに青木は「日本は絶対に西藏に関係することを忌避している」、「とにかくいかなる種類の問題であろうとも、チベットに関する限り断然手を触れまいとする」のが日本当局の堅き方針であったと嘆きを交えながら述べている。<sup>(19)</sup>

一九一四年に第一次世界大戦がはじまると、チベット政府はイギリスがヨーロッパに気を取られている間に、中国がチベットに新たな軍事行動を起こすのではないかと恐れた。そこでイギリスに援助を要請した結果、同年イギリスは、チベット政府の求めに応じて五千挺のライフル銃と五十万発の弾薬を売り渡した。これはチベットにとって大きな助けとなったが、中国の全面的な攻撃から防衛するには足りないと考えられ、翌一九一五年、チベット軍総司令官ツァロン・シャペはチベット問題を担当するシッキムの政務官チャールズ・A・ベル (Charles Alfred Bell) にチベット軍を近代化するため、山砲、機関銃を供給するよう要請した。状況を理解していたベルはインド政庁に対してチベットの希望をかなえるよう勧め、もしイギリス側の備蓄からそうした武器を売却で

際に発掘、採集して実用に供する人)であるという。このようにチベットのために実利をはかる篤志家がもっとも畏敬、感謝されるのであって、その有志家がチベット人と同種・同教であればチベットの経営者として最適であり、「恩と威」をもって臨むことができる」と青木は強調する。

以上のように青木は参謀本部の要望に応じてチベット情報を収集して報告した。参謀本部はさらに調査の必要があると判断したのか、あるいは青木と直接コンタクトをとろうとしたのか、報告書が作成されてから半年余り後、インド駐在武官の建川美次大尉をラサに派遣しようとした。しかしインド政庁は建川によるラサ地方への旅行申請を「許可スルヲ得ス」として却下したため、このもくろみは実現しなかった。インド政庁の拒絶を知った参謀次長・明石元二郎中将は「此際強テ該旅行ヲ実施スルノ必要ヲ認メス」として計画を取り止め、参考までに外務省にもこの結果を通報することにした。<sup>(18)</sup>

右に見たようにチベットで情報収集を行った青木は、それとともにダライ・ラマ、チベット政府を支援する活動も行っている。一九二二年十月、青木がダライ・ラマの行在所が置かれたチュンコルヤンツェに着いたとき、ダライ・ラマが青木に「最も切に」希望したのは、チベットの新制軍を訓練すべき教官を日本より招聘することであった。これに対して青木は、日本政府がただちにその要求に応ずるか否かは疑問であるが、法王の希望を「その筋」に報告することは差支えない旨を述べた。すると法王から日本の陸軍で使用している各種の教範操典類を全部そろえて寄贈せよとの依頼があった。そこで青木はすぐに「某方面」に注文を発

したところ、約五ヵ月後、それらがすべて法王の手許に達し、そのうち歩兵操典の翻訳が真先に始められたという。しかしながら教官の派遣は行われなかった。さらにダライ・ラマは一般国民教育の新制度を定める際、日本の制度に範をとるため、青木に日本で採用された普通教育に関する書籍と小中学校の教科書全部の取り寄せを依頼した。青木はこの件についても「その筋」に交渉したが、これもまた無効に帰したので、カルカッタに滞在中の西本願寺派遣僧・藤谷晃道の尽力を得て入手し、五ヶ月余りですべてが法王の下に到着し、青木はラサ滞在中に初等学制創設の任に当たった。<sup>(19)</sup>

先に青木が参謀本部を「ある筋」と呼んでいたことから類推できるように、ここでいう「その筋」「某方面」もやはり参謀本部を指すのではないかと考えられる。そうであるならば、青木はダライ・ラマの希望を参謀本部に伝え、それに対して参謀本部は教範操典類の送付は承諾したが、教官の派遣と小中学校教科書の送付は行わなかったということになる。教官派遣を避けたということは、国際関係の機微に触れるチベット支援を少なくとも人目に触れる形では行わないということであろう。<sup>(20)</sup>

つづいて(3)チベット政府の機関銃購入支援工作(一九一六年)を見てみたい。一九〇五年の四川軍によるカム地方進撃、一〇年のラサ侵攻以来、軍事力の脆弱なチベットにとって、チベット軍の近代化、優秀な武器の入手は不可欠であった。そのため一九二二年五月の時点で「ニイジャン」と名のるチベット人がカルカッタの日本総領事館に対して援助を求めてきた。<sup>(21)</sup>柴田要治郎総領事代理は内密にこの人物と会見したが、彼の

万五千人の出兵実力を有する。

・新式ライフル銃は単発または五連発で、合計二、三千に達する。新式銃には清露独英米の古い銃や日本の三十年式歩兵銃と騎兵銃もあるが、新品はきわめて少数である。

・政府の銃工場で毎月平均一挺の割合で兵銃を作っているが、火力は強いものではない。新式の弾薬は外国から密輸し、またはチベットで模造したものである。

・教官不足のため中隊以上の兵員を養成することができず、教練は日本の小学生のように幼稚である。戦闘法は統一ある指揮の下に行われるのではなく各個人の戦闘であり、戦略、戦術もきわめて幼稚でほとんど児童に類する。

・中央チベットのシナ兵が駆逐されたのはチベット人が強いためではなく、シナ人の無能と補給杜絶のためである。チベット東部のカムでは約千人のシナ兵とほぼ同数のチベット軍が戦闘中であるが、勝敗がつかない状況からいってシナ軍は強大なものではない。

右の記述からイギリス、ロシアに対してチベットの防衛力がいかに貧弱なものであるかが浮かび上がってくる。周辺大国が攻め込めば簡単に

占領できるであろう。しかしチベットは四方を高山に囲まれた要害の地であった。それでも侵略は可能であるかという点、青木は第七項「西藏内道路ノ状況等」において、チベットは天険に恵まれ、道路河川に難があるにせよ、侵攻は可能であると結論づけている。

以上のように青木の報告書は以下のような有様を描き出している。すなわち、①イギリス、ロシアは現時点ではチベットに勢力を拡大してはいない、②しかしいずれチベットを併呑するであろう、③それなのにチベット人は利己的で自分の国を守ろうという精神をもたず、④軍隊は小規模で訓練、戦闘法もきわめて幼稚であり、⑤天険の利を生かしても外部からの侵略を防ぐことはできないという状況である。

そうした中でチベット人は日本をどのように見ているのであろうか。第十項「西藏人ノ外人ニ対スル意向、殊ニ日本人ニ対スル感情等詳細」によると、ダライ・ラマをはじめチベット上流社会の見方は、日本人は温良で才智に富み、勤勉清潔だが、個人主義でチベットの国利のために事業を起こす勇志がないのは遺憾である。忠告提案ともに巧みであるが、一片の実力をもって他を利することがない、というものであった。日本は口先だけで具体的な行動を伴わず、真にチベットを助けようとしていないというのである。それでは彼らは日本に何を望むのかというと、①日本政府の代表者派遣、②軍事一切および最新式の武器に関する留學生の養成、文明武器の輸出、同武器をチベットでつくるための設備、およびその種の教師派遣、所要資材の輸出などに関する日本政府または私人の援助、③工業、鉱業、農業に関する実力的援助（鉱山調査家でなく実

・これを要するに英露両国ともに自国の発展防衛上、チベットを併呑しようとすることは明らかで、チベットはアジアにおける英露両国の勢力防衛上の一分銅（おもり、比較の基準）である。

・ロシアは法王に金銭、宝玉類を、イギリスは文明の実用品を献上するのを常とするが、チベット政府は利のほかに目がなく、利をもつてすればいかんともなし得る。チベット人は恩威をもってすればきわめて制御しやすい民であり、恩威を並べて行えば、チベットはあげてその掌中に帰すだろう。

・ダライ法王の侍従の一人によれば、目下チベットは百人の良好なアドバイザーを得るよりも、一挺の兵銃を要する時代であるという。チベットを経営しようとする者にとって、この言を等閑にすることはできないと信ずる。

右のように青木は結論づける。先に英露の目立った進出はないとしておきながら、両国ともにチベット併呑をめざすのは明らかだというのは唐突の感があり、論理的に矛盾している。現状はどうであれ、いずれ二国はチベット併合をめざすという点が大前提となっていることがわかる。チベットを取る、取らないによってアジアにおける英露の勢力バランスが決定される、しかも利につられやすいチベット政府は英露の買収によってその支配下に落ちる可能性があるというのである。しかしその一方で

チベットは兵銃を求めており、この点はチベット経営をめざす者にとつて見過ごすことができないという。青木は暗に、チベットをコントロールしたければ彼らが必要としている兵銃を援助すべきだと注意を促しているわけである。

青木は自己の利益を優先しがちなチベット人が他国に影響されやすい点を説くが、このチベット人の私利私欲性は報告書の中でくり返し指摘される。すなわち、チベット人には死を顧みない仏教的精神、忠君愛国の精神が認められない（第三項）、政・官界では賄賂が横行し、政務官は他利ということをまったく解さない（第五項）、上は怠惰放逸に安んじ、下は奮闘向上の精神がなく、上下不一致で愛国尊王の心は露もない（第十一項）というのである。

チベットでは公のために尽くす精神が見られないだけでなく、軍隊も脆弱であるとされた。チベットの兵力状況は以下のように報告されている。

#### 第六項 西藏軍隊ノ状況殊ニ蕃兵ノ価値及支那軍隊ノ状況

・徴集兵約三千人（ラサ千人、シガツェ千人、ギャンツェ五百人、テングリ五百人）が年一回検閲点呼を受ける。不足の場合は僧兵を召集するが、定数はない。

・右以外に「十八六十」兵がある。下流民男子は十八歳から六十歳まで出兵にしたがう義務があり、現在、新式兵約二千人、旧式兵約一

・ラサにおいて具体的な勢力の存在は認められない。英人または英国の代表者で駐在する者はなく、チベット政府に正式に指導政治を行っている形跡も見られない。

・ただし英国の潜在力を示すものとしてチベット政府の諸官はことごとく親英派で英国の指導を仰ごうとする傾向がある。親露、親日、親支派は消滅した。しかしダライ法王の態度は比較的慎重で、英国にのみ盲頼するというわけではない。

#### (B) 地方ニ於ケル英国ノ近況

・英国の勢力地で以下のように極力設備を施した形跡が見られる。ギャンツェに約百名収容可能な兵営を新築し、将校一名、軍医一名、英印兵約五十名、商務官一名が駐在する。パリーに商務官一名、チュンビに商務官一名、将校一名、軍医一名、英印兵約五十名が駐在する。他方、シガツェには英人、英国の具体的勢力は見られない。

・〔ヤングハズバンド遠征の際〕兵站基地となったインドのシリグリから国境ヤートンを経て、チュンビ、パリー、ギャンツェまでの道路を改築し、車道の全通する日も遠くはないだろう。

・インド北東国境のアーポール地方、ミリ地方において、英国の勢力範囲内で道路、鉄道、兵舎の新築が盛んに行われている。ことに国境は従来のチベット国内に著しく食い込んでいる模様である。

#### 第二 露国ノ対蔵計画ノ近況及勢力扶植ノ近況

#### (A) 中央（拉薩）ニ於ケル露国

・具体的に表に現れたものはない。ロシア人、ロシア代表者の公然駐在する者はいない。英国とともに英露協商を執行しているのは明らかである。

・かつてはドルジェフなどがいたが、今はダライ・ラマが個人として彼らを媒介者に露帝と親交を結び、ときどき秘密の往復があるほかは、チベット政府に対するロシアの勢力はほとんど認める理由がない。

・チベット政府が英化した結果、露の勢力も英の次位に下り、チベットに対する英露の暗闘は速やかに決定されるものではないようである。

#### (B) 地方ニ於ケル露国

・特筆すべきものを認めない。英露協商のため、シベリアからチベットへの道路および鉄道計画の実施は遠い未来のことであり、イギリスのチュンビ鉄道計画に比べて望みはなお遠いようである。

右のように青木はラサにおいてイギリス、ロシアが目立った進出をしていないこと、また地方においてはイギリスが利権のある地域に施設を整備する一方、ロシアは浸透の形跡を示していないとした。以上を述べた上で青木は次のように結論づけている。

し、十月にダライ・ラマの行在所がおかれたチュンコルヤンツェに到着し、さらに一九一三（大正二）年一月、ダライ・ラマとその行列とともにラサに入った。ツァワ・ティトゥルを送り届けた青木は、今度は自身が留学生となり、以後三年間を当地で過ごすことになる。

次に(2)ラサにおける情報収集とチベット政府への支援（一九一三—一六年）である。まず情報収集について見ておく。ラサで青木は日課の勉強以外に、上流社会に身を置き、社交の世界で頻繁に行われる様々な行事に参加し、ラサの活きた社会を实地に学ぶことができた。そうした中で青木は「予はある期間ある筋の秘密任務にも従事しておった」と回想している。この「ある筋」とは参謀本部であり、秘密任務とは諜報活動であった。これまで青木の集めたチベット情報の一端は『秘密の国西蔵遊記』の中に散見されたが、さらに彼が参謀本部の依頼を受けて作成した報告書を先学が発見、翻刻している。これは「調査事項報告第壹号」（大正三年二月一日）、「調査報告第貳号」（年月日記載なし）の二部から成り、ラサに入ってから一年間のうちに青木が集めた情報の内容を具体的に明らかにする貴重な資料である。『秘密の国西蔵遊記』の記述と一部重なっているところもあるが、それよりもはるかに詳細であり、何よりもまず参謀本部への報告であることが明らかで重要な点である。ただし青木はそのためにチベット全土を踏査したというわけではない。情報源はチベット政府の調査公報、当局者談、一般の説、青木自身の観測推測によるものであった。報告書を作成した時点で彼はラサ、シガツェの二都市以外の各地を巡り歩いたことがなかったため、未踏査の地域に

ついてはそれらを旅行した経験のある商人などからのヒアリングに依存した。「調査事項報告第壹号」は「調査報告第貳号」と合わせて「第一回調査」とされており、その後新たに発生する事件の調査、第一回を補足するもの、および未完了のものはすべてこれを「再調査」において報告申し上げるとの断り書きが第貳号に記されている。

この二つにわたる調査報告書の内容は、イギリス、ロシアの動向にはじまり、宗教、行政、軍隊、道路河川、通信、日本人への感情、風俗習慣、各都市の状況、新疆方面に対するロシアの動向、中国官憲の近況、資源とその将来性、添付写真など多岐にわたっている。このうち本稿の問題意識からいってもっとも重要であるのは「調査事項報告第壹号」の冒頭第一項に掲げられた「英露両国対蔵計画の近況及び其勢力扶植ノ情況等」である。イギリス、ロシアがチベットに対していかなる計画もち、どれくらい勢力を扶植しているかということであり、これが参謀本部の知りたい最優先事項であったことがわかる。この件について参謀本部は青木に「成ル可ク具体的ニ事実ヲ摘記セラレシコトヲ希望ス」と指示している。そこで青木の報告のポイントを以下に摘記するが、読みやすさを考慮して小見出し以外はできるだけ現代語に改め、カッコをつけて文意を補足した。

第一項 英露両国対蔵計画の近況及び其勢力扶植ノ情況等

第一 英国対蔵計画ノ近況及び其勢力扶植ノ状況

(A) 中央（拉萨）ニ於ケル英国

青木は一九一三(大正二)年一月より三年間ラサに滞在し、ダライ・ラマの教学顧問(教学参謀部部員)をつとめながら現地での社会を实地に観察し、帰国後もチベット研究を続け、一九四〇年代は外務省、陸軍への協力を行い(四一年より外務省調査部員、四四年より陸軍専任嘱託)、第二次世界大戦後は連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)民間情報教育局(CIE: Civil Information and Educational Section)に勤務したほか、東京大学講師をつとめた。一九一〇年代、青木は西本願寺の大谷光瑞法主の指導下に、基本的にはチベット研究に従事したが、そのかわらチベットに関する諜報工作活動にも携わっている。それを大別すると以下のようになる。(1)チベット留学生ツァワ・ティトゥル(Tsawa Triuml)の送迎(一九一一年—一九二二年)、(2)ラサにおける情報収集とチベット政府への支援(一九一三年—一九一六年)、(3)チベット政府の機関銃購入支援工作(一九一六年)である。このいずれについても高本康子氏の優れた研究が言及しており、拙稿は同氏の成果を大いに参考としつつ、諜報と工作という別の角度から検討を加え、とくに(3)の機関銃購入支援工作についてはイギリスの資料を合わせみながら、そこに新たな光を当ててみたい。

まず(1)チベット留学生ツァワ・ティトゥルの送迎(一九一一年—一九二二年)である。青木は光瑞の命によりインド仏教史蹟調査に従事した際、一九一〇年三月にダーズリンでダライ・ラマに謁見して光瑞の意向を伝え、五台山における合意事項であった留学生交換を具体的な計画にすること成功した。以来、青木はたびたび法王に面会し、世界の大勢を説き、

日本が信頼できること、また高僧を日本に留学させるべきことを告げた。その結果、ダライ・ラマの寵臣で学僧としても最上級の榮譽を得た高位ラマのツァワ・ティトゥルが日本に派遣されることになった。一九二一年、青木はティトゥルとその従者二名を引率して日本へ向かったが、その際イギリス、ロシア、清の三国の思惑をはばかり、チベット人たちはシンガポールまで日本人に変装し、シンガポールで日本船に乗り換えてからはモンゴル人名を名乗った。同年五月、日本に到着した彼らはまず西本願寺、ついで光瑞の六甲の別邸・二楽荘に入り、留学生世話係としてつけられた多田等観の支援を受けながら日本語を学び、翌年まで滞在した。ティトゥルと光瑞は日本や辛亥革命などの情報をダライ・ラマに頻繁に送っている。

このように日本、チベット間で年来の課題であった留学生、使節の日本派遣計画は、ツァワ・ティトゥルの来日という形で一挙に実現したのである。寺本の挫折から約二年半後、その時いた種が西本願寺の光瑞、青木、多田によって開花することになった。ちなみにツァワ・ティトゥルの滞日中、福島中将は参謀次長であったが、この件にどの程度関与したかどうかは不明である。なお福島は翌一九二二年に関東都督となり、一四年に大将に昇進するとともに後備役となったため、チベット工作から遠ざかっていったと考えられる。

その後、辛亥革命にともなうチベットの情勢変化にともないツァワ・ティトゥルに召喚命令が届いたため、一九二二年一月、青木(および多田)はツァワ・ティトゥル一行に付添い、神戸からインドに向けて出航

# チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作

——一八九〇年代から一九一〇年代を中心に——（二・完）

澤田次郎

## 要旨

本稿は前号掲載分と合わせて一八九〇年代から一九一〇年代を中心に、チベットをめぐる日本の諜報工作活動の実態を検証するものである。前回明らかにしたのは、①一八九七年から一九〇二年にかけて外務省、参謀本部のチベット関与は初歩的段階にあり、それを反映して成田安輝の活動は質量ともにレベルの高いものであったと言いつたが、②この点は一九〇六年から〇八年において参謀本部の福島安正の支援を受けた寺本婉雅によって飛躍的に改善、克服されたという点である。今回は③として、一九一三年から一六年にかけてラサに滞在し、ダライ・ラマ十三世の顧問をつとめた青木の情報収集は、それ以前に寺本が地ならしを行っていただけにやはり質の高いものとなったこと、ただしダライ・ラマの依頼を受けてイギリスまたは日本から機関銃の購入をめざすという青木の協力工作は日本を警戒するイギリス外務省、インド政庁の反対にあつて成功しなかつたことを明らかにした。

キーワード…チベット、日本、情報、成田安輝、寺本婉雅、青木文教、福

島安正、青木宣純、矢島保治郎

## 目次

- はじめに
- 一 チベットの国際的位置関係
  - 二 第一次諜報工作与成田安輝
  - 三 第二次諜報工作与寺本婉雅……………以上前号掲載
  - 四 第三次諜報工作与青木文教  
おわりに

## 四 第三次諜報工作与青木文教

前章で述べたように、一九〇八（明治四十一年）十二月、寺本が進めてきたダライ・ラマの使節を日本に派遣する計画は中止された。代わつて類似の工作を引き継ぐような形になったのは、西本願寺の学僧である青木文教（一八八六一―一九五六年）であつた。<sup>(註)</sup>

## 執筆者および専門分野の紹介（目次掲載順）

田野 武夫（た の・たけお）	政 経 学 部 教 授	ドイツ文学，ドイツ近代思想
永江 貴子（ながえ・たかこ）	外 国 語 学 部 准 教 授	中国語教育，中国語学
三井 美穂（みつゐ・み ほ）	商 学 部 准 教 授	アメリカ文学，アメリカ文化
村瀬 暁生（むらせ・あきお）	外 国 語 学 部 講 師（非常勤）	イギリス文学，イギリス文化
澤田 次郎（さわだ・じろう）	政 経 学 部 教 授	近代日本政治史，近代日本政治思想史
塩崎 智（しおざき・さとし）	外 国 語 学 部 教 授	比較文化，日米交流史
保坂 芳男（ほさか・よしお）	外 国 語 学 部 教 授	英語教育，英語教育史

表紙ロゴ『拓殖大学論集』は，西東書房，二玄社のご協力をいただきました。  
2社に感謝申し上げます。

- (1) 「拓」 次の2項目を合成  
手偏 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.12の「持」より）  
石 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.15）
- (2) 「殖」 西嶽華山廟碑（二玄社刊，p.90）
- (3) 「大」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.9）
- (4) 「學」 史晨後碑（二玄社刊，p.52）
- (5) 「論」 尹宙碑（西東書房刊，p.36）
- (6) 「集」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.11）

人文・自然・人間科学研究 第41号 ISSN 1344-6622（拓殖大学論集314） ISSN 0288-6650

2019年（平成31年）3月8日 印刷

2019年（平成31年）3月15日 発行

---

編 集 拓殖大学人文科学研究所編集委員会

編集委員 犬竹 正幸 長尾 素子 田野 武夫 海口 浩芳 小林 敏宏 関 良基  
村上 祐紀 佐野 正俊 松下 直弘 大森 裕二

発 行 者 拓殖大学人文科学研究所長 犬竹 正幸

発 行 所 拓殖大学人文科学研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4番14号

Tel. 03-3947-7595

印 刷 所 (株) 外為印刷

---

# THE JOURNAL OF HUMANITIES AND SCIENCES

---

Number 41

March 2019

---

## CONTENTS

### Articles:

- Takeo TANO Die Zweckmäßigkeit der Natur bei Hölderlin  
– Im Zusammenhang mit Kant ( 1 )
- Takako NAGAE Japanese Modernizers of East Asian Education  
Following Masanao NAGAE ( 12 )
- Miho MITSUI Language of Silence:  
L's Narrative in Toni Morrison's *Love* ( 32 )
- Akio MURASE A Study of Narrative Structure in *Under Western Eyes* ( 46 )
- Jiro SAWADA Japanese Intelligence Activities and Covert  
Operations concerning Tibet:  
From the 1890s to the 1910s (Part II) ( 1 )
- Jiro SAWADA Inazo Nitobe's Views of America:  
His Attempt to Resolve the Ambivalence ( 25 )

### Report:

- Satoshi SHIOZAKI Use of the 1870 United States Census as a source  
of information on Japanese students studying  
in U.S.A. ( 60 )

### Debate:

- Yoshio HOSAKA A Study of English Education at *Bangumi*  
Elementary Schools in Kyoto:  
Focusing on analyzing Tabata (2017) ( 94 )

---

Profiles and Works of Retiring Professor: Kensuke OTOZAI (104)

Profiles and Works of Retiring Professor: Banri YAMASHITA (108)

Instructions to Authors (112)

---

Edited and Published by  
**INSTITUTE FOR RESEARCH IN THE HUMANITIES**  
**TAKUSHOKU UNIVERSITY**  
Kohinata, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8585, JAPAN